

もし、宝物殿の一部が
別の場所に転移してい
たら？

水城大地

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、ナザリック地下大墳墓が異世界に転移する時、宝物殿の一部が欠落し、そのまま同じ世界の別の場所に転移していたら？

その場合、その別の場所に転移してしまったかの領域守護者は、一体何を考え、どういった行動のするのだろうか？

pixivで連載している【もし、宝物殿の一部が……】の、分岐別ルートになります。

連載開始してすぐに、アンケートを取った分岐ルートの一つ。

最初から数話は、加筆修正程度になりますが、分岐ルートに入り次第、pixivと

は別の展開をしていく予定です。

なので `pixiv` をご覧になる方は、ご注意ください。

あちらは、少々腐向けです。

書籍版の九巻までと `web` 版をベースに、独自設定を混ぜて独自展開して話を構築しています。

原作を重視する方は、読まれる前にその点をご了承ください。

現在のウルベルト氏はこんな姿です。

パンドラズ・アクターの人間の姿はこんな感じですよ

更に、ウルベルト氏の現在の人間の姿はこんな感じですよ

5月20日の投稿は、23時30分に 第二章 パンドラズ・アクター&ウルベルト視点 「パンドラ、吟遊詩人として街角で謡う（ウルベルト視点）」 になります。

目次

第一章 パンドラズ・アクター 視点

分断されて、別の場所に落ちてしまい

ました | 1

出発するまでに、きちんと確認してお

きましょう | 17

初めて見る外の世界と、第一村人発見

です | 42

初めて見た美しい光景と、初めてのお

仕事 | 55

初めての旅路と状況確認、だったんで

すけど…… | 68

初めての戦闘で、何が出来るか把握し

ましょう | 81

初めての街と、初めてのお別れです

95

面倒な事は、纏めてやってくるようで

す | 109

出立、そしてかの方との再会しました

! | 133

ウルベルト様と色々な確認をしてみました

した | 148

第一章 ナザリック 視点

異世界に転移したら、宝物殿の一部が

欠けてしまっていた | 178

守護者たちと対面してみたんだが

その場に残った守護者の会話 —

208

一体、何でこうなったんだ……

セバスとシクスののお蔭で確認出来た

自分の状況を考えてみた —

314

デミウルゴスト、情報を擦り合わせて

リアルで何が起きたかのか、思い出してみた —

322

みた

一つの出来事と、大切な思い出の記憶

今の現実を確認したら、予想以上のムリゲーを押し付けられていた —

336

衝撃と絶望と、そして……アインズの

自分の持ち物の確認と、合流出来そうな相手を探してみた —

347

慟哭 前編

269

衝撃と絶望と、そして……アインズの

一先ず、パンドラと話をしてみた【ウルベルト様と色々な確認をしてみましたの

慟哭 後編

286

ウルベルト視点】

359

第一章 ウルベルト視点

お腹が空いたら、お茶と茶菓子が用意

された【ウルベルト様と色々な確認をし
てみましたのウルベルト視点2】

375

今後の方針の確定後に、予想外のアイ

テムが提供された！【ウルベルト様と

色々な確認をしてみましたのウルベルト

視点3】

396

どんな事も簡単にはいかないらしい

417

憂氷と凍結の女帝フリーズ戦 前半

431

憂氷と凍結の女帝フリーズ戦 中盤

443

憂氷と氷結の女帝フリーズ 後半戦

1

458

憂氷と凍結の女帝フリーズ 後半戦

2

481

憂氷と凍結の女帝フリーズ 後半戦

その結末

505

次章までの幕間

戦闘後のブレイクタイム

529

食後の話し合い

551

第二章 パンドラズ・アクター&ウルベ

ルト視点

翌朝的一幕と、ウルベルトの装備の見

直し（パンドラズ・アクター視点）

レベルダウンと、パンドラズ・アクターの
 装備の見直し（パンドラズ・アクター視

点）

———
 589

盗賊との遭遇（パンドラズ・アクター視

点）

———
 605

盗賊の罅（ねぐら）までの道程（パ

ンドラズ・アクター視点）

———
 620

盗賊の罅（ねぐら）での戦闘（パンドラ

ズ・アクター視点）

———
 637

ウルベルトによる、現状への考察（ウル

ベルト視点）

———
 654

街へ到着、まずは冒険者組合へ（ウルベ

ルト視点）

———

パンドラ、吟遊詩人として街角で謡う
 （ウルベルト視点）

第一章 パンドラズ・アクター 視点

分断されて、別の場所に落ちてしまいました

ふと、どこか遠くで何か知らない音が鳴り響き、なにかが崩壊する音を聞いた気がした。

気付けば、のっぺりとした己の頬を涼やかな風が擦り、耳には草原を風が渡るざわめきの音が鳴り響いゆている。

だが……それは、あり得ない事だった。

彼が、常に守護者として居ることを義務付けられている場所は、こんな風に肌に直接風を感じる事など有り得ないような、どこにも繋がる事が無い封鎖された空間である。

己の守護する場所は、己の所属するギルドの中でも特別な方法でしか移動出来ない筈で。

そもそも、この場にこの様な異常が起きた時点で、ギルドの根幹部分で異常が起きた証だと言つて良いだろう。

そう、それ位に今の状況は有り得ない事態だった。

自身が置かれた状況に対し、冷静かつ速やかな思考を巡らせて対処作を練り上げ。

そして、実際にそれに沿って実際に行動しようとした所で、はたと我に返る。

今までなら、己の創造主に与えられた優れた頭脳で思考を巡らせ策を練り上げることが出来たとしても、それ以上の事は出来なかった。

そう……あくまでもそれは思考を巡らせるだけ。

己が幾ら対応策を練ったところで、主である創造主から指示された事以上の行動には全て制限が掛かり、実際には動く事など出来なかった筈なのだ。

なのに、今の自分は何をしようとしていた？

自分の意思の下、自分のいる場所を含むギルド内で何が起きたのか確認した上で、その対策を練ろうとしてはいなかったか？

そこまで考えたところで、再度頬を擦る涼やかな風と、その風によるだろうざわめきの音が伝わり、いよいよ放置が出来なくなってきたことに気付く。

この奥には、主たる創造主にとって大切な仲間の残した神器級ゴッズと言われる彼らの主装備と、それよりも貴重で重要な世界を揺るがすことすら可能な宝物が幾つも眠っているのだ。

その守護を果たせなくて、主から見放され棄てられたりしたら……そう考えるだけで、身を切るような痛みを幻視しかけ。

慌てて首を軽く横に振る事で否定すると、私―パンドラズ・アクター―は、現在の状況を正確に把握するべく行動を起こす事にした。

「……今のままでは、埒が明きませんからね。」

いつの間にか、己の口から小さく零れ出た言葉は、どこか頼りなげなものだった。

まず、今の己のままでは何を調べるにしても、不足している部分が発生するだろう。

これに関しては、今まで宝物殿内しか知らない己の知識不足や認識不足、戦闘に関する経験値不足が理由に上げられた。

そもそも、己が司る領域である宝物殿は、絶対的に訪れる者が少ない場所だ。

ここに来るには、ギルドメンバーの証である〔リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン〕が必要であり、それを持つのは僅かに四十一人のみ。

所有者が少なければ、自動的に来るものも少なくなるのは当たり前であり、さらに引退者等によってその分母が減れば、宝物殿を来訪する者が減るのも当然だろう。

その上、己は本当の意味で完成するまでにかなり時間が掛かり過ぎた事もあって。

多分、制作中の己を知るだろう至高の方々が居たとしても、今の状態にまで完成した時にはログインする者は殆ど居らず、きちんと顔を合わせたことはない。

だからこそ、パンドラズ・アクターはちゃんと理解していた。

己が、主の設定によりこのギルドに属するNPC の中では頭は良くても、人とともに接していない部分を鑑みれば、十二分に「世間知らず」と評されても仕方がない事を。

だが、それを理由にして全く動かない訳にはいかないだろう。

むしろ、今、このギルド内でまともに動けるものは、自分以外にないのかもしれない。もし、こうして自分が動けずにいる内に、己の創造主である主の身に何かあったのだとしたら……それこそ、後悔するだけでは済まないだろう。

だからこそ、まずはこの場で出来る対策を全て済ませて上で、情報収集を迅速にする事にした。

「……私が、定められた役目を超えて勝手に動く事に対する叱責は、無事にモモンガ様にお会いする事が出来た時にいたたくといたしましよう。

全ては、モモンガ様とモモンガ様が愛するナザリック現状を把握して、ナザリックの財政担当者として対策を取る必要がある為の行動です。

モモンガ様は、私が宝物殿から出なくともそのような形で他の階層に対して干渉するのは、宝物殿の防衛面も含めてお望みはない様ですが、仕方がありません。

……今は非常事態ですので、聡明なモモンガ様ならご理解いただけるでしょうし。」
そう、自分を納得させるように言葉を口にする事で、自分の行動を一時的に正当化し

ておく。

無意識の内に、手がモモンガから与えられた、己にとって最高の装備である軍服の胸元を強く握りしめていたが……そんな事に気付くだけの余裕は、今のパンドラス・アクターにはない。

最初から、モモンガからの叱責される事を前提に動くのだ。

やはり、微妙に迷いが生まれそうになるのは当たり前で。

自分で自分の行動を口にするのには、それを振り切る意味もあった。

覚悟さえ決まれば、実力的にいつでも行動するのはそう難しくない。

まさか、それによって自分が予想外の状況にある事を知ることとなるとは、欠片も思わ

ずに。

「フェイク・カパー 偽りの情報、デイトイクト・マジック 魔法探知、カウンター・デイトイクト 探知対策………

一先ず、対策魔法はこれ位でいいでしょう。

では、次に……クリスタル・モニター 水晶の画面、クレアボヤンス 千里眼。」

偉大なる主の姿を借り、幾つもの防御対策を魔法によって――本当は、勝手に己の創造主の姿を借りる事に躊躇はあったが、スクロール等のアイテムを独自の判断で消耗するのは、財政担当者としてもつと許容し難かった為――施した後で、先ずはこの宝物殿内の

状況を探知魔法を使い、少しずつ範囲を広げながら確認する。

相応の対策を取った上で、丁寧魔法を使用していくにも関わらず、一気に周囲の情報を確認せず少しずつその効果範囲を広げたのは、何らかの罠を仕掛けられている事を用心したからだ。

あくまでも、自分が知るのはある程度までの魔法でしかない。

もし、自分が知らない魔法を使用されていて、対策魔法が通用しなかったら……結果を考えるだけで恐ろしい事になるだろう。

用心に用心を重ねる事は、決して悪い事ではなかった。

そうして、丁寧に調査していったのだが……

すると、驚きの事実が判明した。

己がいる場所である、待合室も兼ねている宝物殿の開けた場所と、その奥に通じる霊廟とさらに奥にあるアイテム保管庫は、異常事態が発生する前と何ら変わらなかった。

これは、常に己の意識を傾けている守護しているのだから問題ない。

寧ろ、このエリア内で異常が判明したら、己は慌てるなんてレベルでは済まなかっただろう。

問題は、それよりも手前のエリアに起きていたのである。

今まで、自分が守護すべき宝物殿はそれだけで独立し、直接的にはどこにも繋がっていない場所として存在していた。

これは、ナザリック地下大墳墓を「ギルド・アイنز・ウール・ゴウン」が攻略し、拠点としてから変わる事がない事実である。

しかし、だ。

今、己がいる待合室から幾重にも伸びた通路状の種類別の保管展示庫から、宝物殿の表層部分と言うべき大量の金貨やナザリックに住む者から見て、価値が低い財宝や装備品等が纏めて乱雑に置かれていた大広間に、異変が起きていたのである。

そう、手前の通路状の武器庫、防具庫、装飾品庫の一部だけを除いて抉り取られた様に切り取られ、そこから先にある表層部の大広間とは別の場所に繋がっていたのだから。

「そんな……まさか……あり得ません！」

思わず、否定の言葉が己の口から漏れるが、それでも現状は変わる事はない。

余りの状況に、暫く頭を掻き回して取り乱したものの、何とか頭の中で思考を切り替え何とか冷静さを取り戻すと、再度確認していく。

凸凹とした岩壁に、天井から水を滴らせる先の尖った岩。

幾重にも枝分かれして、細い通路上の迷宮の様に外へ向かって伸びる細い通路。

クリスタル・モニター

水晶の画面で確認できたのは、この宝物殿がこの辺り一帯の最深部にあり、そこから地上へ延びる複雑な地形だった。

宝物殿内より、少し湿り気を帯びた空気等を見れば、そこが洞窟の中だと頭の中にある知識から推察する事が出来る。

しかし、だ。

本来の宝物殿ならば、やはりあり得ない事態だと言つて良いだろう。

どことも繋がらない筈の、この偉大なるナザリック地下大墳墓の宝物殿が、まるで最重要部分を抉り取るように切り離され、いつの間にかどこか外に繋がつてしまつてい

る。その状態が、どれだけ異常事態なのか理解出来ない程、己はーパンドラズ・アクターは愚鈍ではない。

そもそも、ナザリック地下大墳墓はどうなつてしまつたのだろうか？

間違いなく、自分がいる宝物殿の最重要部分が切り離されているが、ナザリックを維持管理する部分はこちら側に来ていない。

もし、何らかの事情によつて自分がいた場所を含めた最深部が、ここにある一部を除いて分断されてしまったのだとしても、ナザリックそのものの運営には暫くの間なら問

題は起きないだろう。

宝物殿管理者であり、財政面を任されている私、パンドラズ・アクターがいなくても、ある程度はまでは自動運行がされる筈だからだ。

勿論、それだけではいずれ破綻を招くだろうが、偉大なる私の創造主たる御方が放置するとは思えない。

モモンガ様なら……何らかの手を必ず打たれる筈だ。

その結果として、私の存在が不要になるかも知れないと言う不安が頭の端を過るが、それもまた必要なことならば仕方がないとも思う。

ただ、私がいた場所よりも奥にある「霊廟」に納められていた、全て神器級アイテムである「至高の方々の装備一式」や、更にその奥にある「世界級アイテム」の数々等を失ったままにもなされないだろうという事は、かの方の性格やナザリツクへの思い入れを考えれば、簡単に予測出来た。

「……」の様に容易く、無様にもその事態が引き起こされるまで気付く事ないなど、有っては為らない事だと言うのになんと言う体たらくでしょう。

まして、この様な形で宝物殿を半壊させた挙げ句、モモンガ様にとって重要度から言えば大切な宝の大半と言っただけの品々を、そのお手元から失わせてしまった筈は、宝物殿守護者として失格だと断罪されても仕方がないもの。

どの様に、その事に対しての贖罪をしたとしても、償いきれるものではないでしょう。そもそも、与えられた役目を果たせなかったと言う点でどれだけ罪深い事なのか、私自身が一番良く理解しております。

ですが……このままモモンガ様がこの場を見付けて下さるまで何もせず、ただ安穩とこの場に座して待ち続けているだけでは、尚一層愚鈍過ぎると言っていいでしよう。」
多少、物言いは大袈裟なものではあったが、その口からつらつらと零れ出る言葉は、どれもパンドラズ・アクター自身の本音だった。

今の自分は、己の創造主であるモモンガから与えられた役目を全う出来ず、損害を与えてしまった可能性がある役立たずである。

特に、ナザリックからの世界級アイテムワールドの損失は、間違いなく今後のナザリックの運営に悪影響を与えるだろう。

少なくとも、確実にナザリック地下大墳墓の総戦力をレベルダウンしてしまった筈。

それを、ナザリックに住まう僕たちの中で宝物殿管理者として一番理解している自分があるからこそ、現状に対して焦りを感じて動く事を決意したのだ。

だが………それでも。

創造主たる御方の指示を受けず、全て己の意思で情報を精査し判断して動く。

それが、どれだけ御方の為に創造された僕にとって恐ろしい行為なのか、パンドラズ・

アクターとして理解していない訳ではない。

しかし、だ。

それ以上に恐ろしいのは、このまま何もせずに無為に時を過ごす事で、創造主である主に再会する事が叶わなくなってしまう時だろう。

今、己がいる場所がどのような世界なのか、現時点では何も判っていない。

それこそ、どこにどうやって転移させられたのかすら、今の段階では全く判って居ないのだ。

もしかしたら……モンガ様やこの場にある以外のナザリック地下大墳墓はあのままあの場にあり、同じ世界にきていないかもしれない。

逆に、同じ様にナザリック地下大墳墓があつた場所から転移させられ、その拍子にこの宝物殿の一部だけが更に別の場所に分断されてしまっただけで、案外近くに存在しているかもしれない。

それ以外の可能性も数多の数あり、実際にはどうなのか判らない。

むしろ、一人だけナザリックの誇る数多の秘宝の数々と共に、こちらに来てしまった可能性が一番高いのだろう。

そんな中で……それでも自ら動く事を決めたのは、ただもう一度己の創造主であるモンガに逢いたかったからだ。

この状況になる以前、最後にモモンガが宝物殿の自分がいる場所まで訪ねて来たのは、何年前の事だっただろうか？

最後に御会いたした時のモモンガは、己を見る度にどこかとても辛そうな表情をしていた覚えがある。

その理由を、最後まで教えていただく事が出来なかつた情けがない僕だが、それでもモモンガの事を慕い忠誠を誓う思いは誰にも負けるつもりはない。

「やはり、私が自分の手で大切なこの宝物殿に眠る秘宝の数々を、モモンガ様にお届けするのが一番でしょう。

何があつても、これだけは絶対にやり遂げなければなりません。

……しかし、それを見事に為し遂げるまでの間、私、パンドラズ・アクターは、モモンガ様から与えられた言動の一部を封印する事にしましょう。

確か、モモンガ様から与えられた本の中に『何か一つ、己の中で大切なものを絶つ事で、満願成就する事を願う』と言う、呪法があると書かれていたのを見た事があります。

ならば、私はモモンガ様から与えられた『格好がいい言動』を絶つ事で、満願成就を願うと致しましょう！」

バツと、右手を振り上げつつ身に付けていたロングコートの裾を翻す事で、見事にポーズを決め。

次の瞬間、パンドラズ・アクターはふるふると緩く首を振った。

「……はあ。」

正直、見ている人がいない場所でもこのテンションを続けるのって、周囲が思っている以上に疲れるんですよねえ。

モモンガ様が見ていて下さるなら、幾らでもこのテンションが続けられるんですが。

まあ、無い物ねだりをしていても始まりませんし、モモンガ様にお会いするまでは願掛けとして封印すると致しましょうか。」

幾ら言っても、今はどうする事も出来ないのだから、この点に関してはスッパリと割り切る事にした。

下手に拘る方が、何となく後から問題を生みそうな気がしたからだ。

それよりも、考えなければならぬ事が幾つもある。

例えば、自分がここから外へ出るとすると、宝物殿内部に納められている至高の方々からお預かりしている神器級ゴツゴツアイテムや世界級ワールドアイテムなどをどうするのか。

それ以外にも、外の世界の情報を集めてから動くべきかどうか等々。

とにかく、考えなければならぬ問題は山積みなのである。

「まあ……多分ですが、この姿のままでは駄目でしょうねえ。」

私の今の姿は、という種族そのものですから、あまり一般的ではないでしょうし。

やはり、ここは人間種に擬態しておくべきでしょう。

異種族が大半を占めるナザリックでは、人間種の姿でいるのはあまり歓迎される事ではありません。

ありませんが、これからモモンガ様やナザリックを見付けるまでのトラブル回避の為に言えば、背に腹は代えられません。

むしろ、余計な騒動を持ち込む火種となりえるのならば、人間種への擬態も已む無しといった所でしょうね。

さて……ここで問題になるのは、どうやって人間種に擬態するかと言う事でしょうか。

私の持つ外装には、残念な事に「使用可能」な人間種のものはありませんし……

一応、参考に来るものさえあれば、持ち前の能力で人間種の外装を維持することも可能ですし、何か良いデータベースはないでしょうか……」

そんな事を呟きつつ、パンドラズ・アクターは自室内にある書棚や収納箱へ足を向けた。

目的の場所に辿り着くと、早速中にある品々をガサガサ漁っていく。

何故そんな事しているのかと言うと、そこにはかつてモモンガが様々な物をパンドラズ・アクターの為に用意したり、自分の私物の中でも人前に出したくないもの等を取

納していた事を覚えていたからだ。

もしかしたら、そこに人間種の外装データとして参考になる物が有るかも知れないと、僅かな期待を持って探して探してみたのだが……

「……ほう？」

これは、とても興味深いものが見つかりましたね。

『悟、6歳小学校入学式』とあるこの映像データは、もしや……以前、モモンガ様が仰っていた「リアル」のものでしょうか？

ほう……ほう！

これはとても愛らしい！

このお声、確かに今のものよりも幾分高い子供特有のものですが、間違いなくモモンガ様のもの。

つまり、これはモモンガ様の「リアル」のご幼少の頃のお姿と見て、間違いありません。う。」

チェストの引き出しの奥に、まるで隠すように仕舞われていたデータキューブを確認したパンドラズ・アクターは、思わずため息を漏らしながらデータの内容を確認する。

なぜ、こんなものがこの部屋のチェストの奥に隠されていたのか、モモンガ自身が何も言わずに隠していた以上、パンドラズ・アクターには全く理由が判らないが、それで

も今の自分にとっては何より有り難いものであった。

「……これ程貴重な物を、こうして勝手に拝見させていただいてしまった事も、モモンガ様に再会が叶った時にお詫びしないと行けませんね。

ですが……お陰で私の人間種への外装のヒントは十分に得られました。

このまま、この年齢では流石に問題があるでしょうが、ある程度まで……そう、十代半ばまで成長させた姿を構築してそれを使えば問題は解消する筈です。

あくまでも、私がこのデータを元に仮想のものでですから、モモンガ様本人の「リアル」の実際の姿とは微妙にことなるでしょうし。

そちらを構築する間に、もう少し周囲を始めとした外の情報を集める事にいたしますしよう。

どんな僅かな情報でも、時として思わぬ影響を与えますからね。」

サクサクと、自分のするべき事を決めたパンドラズ・アクターの行動はとても早かったのだった。

出発するまでに、きちんと確認しておきましょう

その場合は、まるで物取りに入られたかの様に、雑然と散らかっていた。

散らかっている場所は、パンドラズ・アクター自身の私室である。

本来なら、もつときちんとアイテム種類別に整理整頓されているのだが、今は違う。

先程、人間種への擬態を作るための参考資料がないかと、散々部屋の中を探し回った際に散らかしたままになっているからだ。

もちろん、本当はパンドラズ・アクター自身だつてきちんと片付けたいとは思っている。

しかし、この宝物殿を出てモモンガとナザリツクを探す決めた以上、ここを出るまでにパンドラズ・アクターがやるべき事は多かつた。

なんとと言っても、創造されてから初めて宝物殿以外の場所に出るのだ。

この場所から出るのに、その経緯が普通じやない状況下では、それ相応の準備が必要なのは当たり前だった。

それに、この世界の知らない知識をある程度まで集めてからじゃないと、安心して外に出るなんて事は出来ないだろう。

自分の持つ、漠然とした「ユグドラシル」の知識だけでは、到底不安だったのだ。

その為、優先事項から片付けている事もあって、最初に散らかしたそれらは手が回らず、放置したままになっているのである。

「……さて、これ位の年齢まで成長させれば、普通に外の世界で国々を旅をしても問題は無さそうですね。

一先ず、これに必要な人間種の外装の準備はできました。

装備は……今のこのままと言う訳にはいかないでしょう。

先程から、調べている外の様子を見る限り、あまりレベルの高いものは見受けられませんでしたし。

何より、この外装にこの服装は余り似合っているとは言いがたいですから。」

完成させたデータと、今現在身に付けている装備を見比べながら、パンドラズ・アクターは小さく呟いた。

確かに、言動は「格好が良い」ものを断つと決めたが、装備を含めた服装までそれを適用するつもりはない。

もちろん、モモンガやナザリックを見付けるまで旅をする都合上、ある程度まで質を落とす必要があるだろう。

そうになると、手持ちの中でも華美なものは人目を引く事を考えると無理だろうが、そ

れなりに似合う物にしたいと思うのは当然だった。

そこで、モモンガから与えられた私物の装備品等が納められているクロークの扉を開けると、ガサガサと中にあるものを漁っていく。

既にこれだけ散らかっているので、部屋が更に散らかる事など気にならなかったのだ。

元々、モモンガが収集家に近い貧乏性だっただけあり、幾つも主装備候補となる物を作っていた為、それら全てが取り置きしてあるパンドラズ・アクターのクロークは、装備をや装飾品でかなり充実している。

その中から、最低でも聖遺物級の物を探し出すのは、存外骨のおれる作業だった。

それでも、幾つか候補となりそうな装備一式を複数見繕った所で、ふと見覚えのない箱を一つ発見した。パンドラズ・アクターは首を傾げる。

本当に、見覚えの無い箱だったからだ。

「……おや、これは何でしょうか？」

モモンガ様が、私の部屋の中でも私の身の回りの物が入っている荷物の中に置いていった以上、私に下さった物だと思おうのですが……」

自分に見覚えがなくても、この部屋のクロークの中にある以上、この場に持ち込んだのはモモンガであり、自分に与えられた物だと判断して、ほぼ間違いないだろう。

モモンガ個人の私物は、この部屋の別の場所に纏めて置かれておるし、そもそも他の至高の方々は、この部屋の存在すら知らないから、まず間違いがない筈だ。

しかし、自分の預かり知らない物だけに、その確認は申し訳ないが後回しにする事にした。

「……時間があれば、ゆっくりと中身を調べるのですが。」

今は、まだまだここを出る前にやらなくてはいけない事が、それこそ沢山ありますしね。

こんな風に、他のものの中に紛れ込ませる様に収納してあったのですし、それほど重要視しなくても大丈夫でしょう。」

さっくりと、後回しにすると言う決断すると、それを避けて荷物を纏めていく。

そう、異常事態に冷静さを欠いていたパンドラズ・アクターは、ついつつかり未確認の品の確認を先送りにしてしまったのだ。

この時、なぜきちんとその場で中身を確認しなかったのか、数分後に後悔する羽目になるとは思わずに。

自分の私物を、荷物としてある程度纏めると、パンドラズ・アクターは次に霊廟に足を向けた。

その中に保管されている、ナザリツクから姿を消した【至高の方々】の装備一式が、モ

モンガ様の手によって納められているからだ。

全て神器級ゴッズのそれらに関して、どう取り扱うべきなのか幾つか考えてみたものの、一番安全かつ確実な保管方法は、やはりこの手で持ち運ぶ事だった。

モモンガ達を捜す間、どうしてもここを留守にしなくてはならない以上、不在時の品々の保管に不安が残るからだ。

もしかしたら、自分が不在となつている間に、この場に侵入者が入り込まないとも限らない。

侵入者が、これらの素晴らしい品々を目の前にして、略奪せずに帰ると言う選択肢は、まず存在していないだろう。

そんな事になれば、己が預かった品々が無造作に奪われ、手元に取り戻すまでどれだけの時間が掛かるか、想像もつかない状況になるのは間違いなかった。

それを防ぐ為にも、やはり自分が持ち歩くのが一番安全だと考えたのである。

もちろん、これらの品々を持ち出したとしても、まだ残していく事になるアイテムは多数出るだろう。

その対策として、今の自分に可能な限りの侵入防止の罫などは仕掛けておくが、万が一つとと言う可能性がないとは言えないのだから。

その更に奥にある、世界級ワールドアイテムも全て持っていく必要があるだろう。

こちらは数は少ないが、その稀少性は世界に干渉出来る時点で極めつけの品々であり、失うなどと言う事態になれば、パンドラズ・アクターの命一つでは購いきれないだろう。

ただ、今の段階ではどの様に持ち運ぶのか、決め手となる手段が無いのだが。

「……いつそ、私が【至高の方々】に変化した状態でそれぞれの装備を身に付けたら、私の中に一時的に封印の出来るなんて能力があったら良かったのですけどね。」

封印の条件は、お一方につき一レベルダウンと封印中の外装の使用不可能と言った所でしようか。

その条件なら、世界級アイテムも一緒に封印する場合は、三レベルダウン位ですかね。あくまでも、私のレベルダウンは封印中だけで、封印さえ解けばレベル元に戻らなくては困りますけど。

封印の解除条件は、モモンガ様にお会いして【全てお返しいたします】と、その手の甲にキスをするなんて言うのだと良いかもしれせん。

なんて……まあ、無理なんですけどね。」

もちろん、パンドラズ・アクターには出来もしない事だが、【出来たら本当に便利なのに】等と思いつつ、つらつらその【出来たら良い能力】を言い連ね、霊廟に足を踏み入れようとした瞬間である。

パンドラズ・アクターの背後で、突如それが発現したのは。

《世界級アイテム―ワールド道化師の誓願―バウ・オブ・クラウンが発動しました。

使用者名は、パンドラズ・アクターです。

これより先、―バウ・オブ・クラウン道化師の誓願―は使用者の中に同化され分離出来なくなります。

これで、貴方は自分のレベルと引き換えにして、世界級アイテムを含む全てのアイテムを自分の中に封印し、収納する事が出来るようになります。

引き換えにしたレベルは、封印を正しく解除した時に戻ります。

ご安心下さい。

封印の条件や解除方法は、アイテム封印時にそれぞれ設定する事ができます。

ただし、封印し過ぎて本来のレベルの四割以下になった場合、能力制限ペナルティが発生して、封印を解除してもレベルは元に戻らなくなります。

なので、忘れず注意しましょう。

以上、使用説明を終了します。

あなたの願いが、無事に叶えられますように。》

先程、確認を先送りにした箱がいきなり輝きを放ったかと思うと、中から虹色のオーブのようなものが飛び出し、パンドラズ・アクターの身体の中に、強引に入ってくる。

それと同時に、パンドラズ・アクターの頭の中に響いた声は、先程まで自分が考えていた能力とほぼ同じもので。

ただ、自分では考えていなかったペナルティ等が追加されているので、そこはちゃんと気を付けなければならないだろう。

まあ、実際に封印してみないと、どんな状況になるか解らないので、それに関して今の段階では特に気にならなかつた。

むしろ、今のパンドラズ・アクターが気にしている点はただ一つ。

「……失態です……まさか、あれが世界級アイテムだったなんて……」

やはり、見つけた時点で中身を最後まで確認するべきでした。

申し訳ありません、モモンガ様。

せっかくの世界級アイテムを、この様な形で使ってしまうなど、僕としてあつてはならない事態だというのに、それを止める事が出来ませんでした。」

たとえ、主から与えられた物だとしても、世界級アイテムを勝手に使用するなどあつてはならない失態に、血の気が引く思いを抱くパンドラズ・アクター。

だが、既に自分の中に同化してしまっている以上、起きてしまった状況を今更無かつた事にも出来ない。

「……こうなった以上、きちんと正しくその効力を把握して、現状の打破に利用するしか

ありませんね。

先程の《声》を聞く限り、汎用性はかなり高く思えましたし。

封印条件と解除方法も、その都度決められると言うのでしたら、装備一式を一つの封印と纏められそうですしね。

とにかく、もう一度きちんとその能力を確認しましょうか。」

分離不可能だというなら、有効利用した方が早いとすっぱり割りきったパンドラズ・アクターは、サクサクとその能力を確認し始める。

その結果、解つたのは次に挙げている事だった。

一つ、この世界級アイテム《ワールド道化師の誓願バウ・オブ・クラウン》はNPCにのみ反応し、プレイヤーのみではその存在を認識する事が出来ない。

一つ、使用出来るのはNPCだけであり、発現するのはプレイヤーからNPCに手渡された時、もしくはアイテムボックスに収納しているアイテムをNPCが直接取り出して願いを口にした時のみである。

一つ、NPCが使用する場合、使用したい能力を最初に宣言して願う必要があり、それが確認出来た時点でそのNPCに同化して分離不可能になるかわり、その能力が固定化される。

一つ、固定された能力には使用制限はないが、どんな能力を設定しても使用時に使用

するNPCのレベルが代価として必要となる。

一つ、能力設定時に代価に使用するレベルを戻す条件をつける事も可能。

ただし、その設定を付ける場合は厳しい制約を特定条件として加える必要がある。

また、特定条件を満たす事でレベルを戻す設定した場合、それが可能なのはNPCのレベル総合計のうち六割未満の使用まで。

それ以上の使用も可能だが、その場合はペナルティが発生し代償として使用したレベルは戻す事が出来ない。

一つ、この世界級アイテムワールドで設定した能力は後からも変更可能だが、その場合にも同化しているNPCのレベルを代価に使用する。

一つ、一度同化させた《道化師の誓願》バウ・オブ・クローンを分離不可能だが、使用していたNPCが死亡した場合は、NPCが死亡した場所にドロップする。

その場合、次に使用出来るようになるまで、ある一定期間が必要である。

使用可能になるまでに掛かる期間は、それまでの使用期間と使用した能力によって異なる。

以上が、世界級アイテムワールドである《道化師の誓願》バウ・オブ・クローンそのものの能力である。

流石、世界級アイテムワールドと。

予想通りの壊れ性能だと、パンドラズ・アクターは思う。

その中でも、パンドラズ・アクターが、特に注意すべきだと考えたのは、プレイヤーのみだと認識すら出来ないと言う事と、世界級アイテム使用出来るのがNPC 限定である事、更に使用時の条件だった。

まず、プレイヤーのみだと認識すら出来ないと言う時点で、発見が困難なタイプの世界級アイテムだと言っていていいだろう。

これでは、確かにモモンガ様がこのアイテムを世界級アイテムだと気付く事が出来ない筈だと、あっさり納得した。

だから、あの様に幾つもの日用品の中に紛れ込ませたまま、正体不明の低ランクアイテムとして、私に下さったのだろう、とも。

自分の手元にあった理由に納得した分、次の注目すべき点の条件に意識が向かった。

正直、NPC しか使えないと言う時点で、存外意地が悪いアイテムかもしれない。発現条件が、プレイヤーからNPC に直接手渡された時、もしくはNPC が所持している状態で願いを口にした時と言うのが、殊更そう思わせた。

少なくとも、フィールド上ではそれが世界級アイテムなのかどうか、そうそう判断が付かない点だろう。

そもそも、「ユグドラシル」時点でNPC が自分の意志で話すなんて事は出来なかつ

たのだから、どうやって使用しろと言うのだろうか？

その為に、一々NPCに台詞をプログラムするなど、手間を掛けるのだとしたら、面倒極まりない話だ。

もしかしたら、この転移によって何か仕様が変化したのかもしれない。

それはそれとして、だ。

更に意地が悪いのは、この世界級アイテムの使用条件がNPCのレベルを代価に支払うと言う点だろうか。

当然、世界級アイテムを使用し続ければ、最終的にNPCのレベルがゼロになって消滅する事になるだろう。

もちろん、抜け道として特定条件を加える事で一時的なダウンで済ませる事も可能みたいだが、それにもペナルティがない訳じゃない。

ネットとなるのが、「総合計レベルの六割未満まで」と言う部分だ。

例えば、パンドラズ・アクターは総合計レベル百のNPCだから、実際に代償として使えるレベルは五九まで。

言葉の微妙な差だが、勘違いしてうっかり六十まで使用した場合、その時点でペナルティが発生して、それまでの代償として使用したレベルも戻せなくなるのである。

幾ら世界級アイテムを使う目的だとしても、「拠点NPCを使い潰す事も辞さない」

と言う選択肢を取れるプレイヤーは、中々居ないのではないだろうか。

使い潰せば、その段階で復活させられない仕様だと言う点からも、拠点の防衛を弱体化させる可能性もあるのだから。

逆に、レベルの低いNPC に使用させて、ドンドン色々な条件で使用させた上で、このアイテムを手放さずにいると言う選択肢もない訳じゃない。

だが、それは外道の取る手段であり、少なくともモモンガ様はその選択をしないだろうと、パンドラズ・アクターは心から思う。

あれだけ、ナザリツクを愛して止まない方が、僕と言えど犠牲に出来る筈がないのだ。他の点も注意が必要だが、それよりも現時点で確認すべきは、うっかり《誓願》扱ひされて設定し、自分の中に同化してしまった現在の能力の方だろう。

自分の迂闊さ加減に、痛くなりそうな頭を押さえつつ、更に確認を始めて解ったのは次の事だった。

判明した現時点で能力は、全部で四点。

一つ目は、この能力に対して一切の例外なく、ありとあらゆるアイテムを自分の中に封印して取り込み、解除して取り出すことが出来る事が判明した。

これは、予想よりもこちらに都合が良い能力である。

今、パンドラズ・アクターが抱えている「どうやって宝物殿最奥部の世界級アイテム

や、靈廟に納められた装備一式を運ぶか」と言う点が、一気に解消出来るからだ。

もちろん、自分の中に封印している最中のレベル低下は、あまり良い事ではない。

しかし、だ。

先程、外装の仮想データを構築する間にパンドラス・アクターが「遠隔視の鏡」ミラー・オブ・リキート・ビューイングを利用し、ここから一番近い人の街の様子や、その住人のレベル測定をした結果、この世界の住人のレベルは基本的に低いものばかりだと判明している。

確かに、例外的な存在も居ない訳ではないが、その辺りは接触しないように気を付ければ済む話である。

「……要は、私自身が目立たないように気を配れば良い話でしょう。」

アイテムを使用した上で、魔力遮断は勿論ですが能力と気配を誤認するようにするのは確定として……後は、装備は遺産級アイテムまで下げた方が良いかもしれまん。

正直、あまり気は乗りませんが、この世界の何時一般的なアイテムレベルだと、それでも十分高価な物のようですし、聖遺物級だと王公貴族や冒険者の最高レベルクラスの持ち物と言うのが、ここの常識のようですからね。

……はあ、本当に気鬱ですよ。

モモンガ様と再会した時に、あまりにみすばらしい装備を纏う姿を見られ、その様を嘆かれたりでもしたら、恥ずかしくて……今から死にたくなりそうです。」

この先、ナザリックかモモンガを見付けるまで、隠密行動が必須なのは間違いない。とはいえ、自分を目立たなくする為に装備ランクを落とすと言うことは、当然だがモモンガとの再会もその装備のままという可能性がある訳で。

普段、身に纏っている装備のランクを考えれば、かなり貧弱な守りしか持たないものになるのだ。

到底、モモンガに目通りを願うには、相応しいものではないだろう。

出来れば、再会が叶う時には普段の装備に着替える余裕があれば良いのですが、等と思いつつ、溜め息が溢れるのを止められなかった。

二つ目に判明したのは、使用する際に代償として差し出すレベルが、世界級アイテムで最大で二レベルとし、そこからアイテムのランクに合わせたレベルが必要であると言う事だった。

これに関しても、それほど都合が悪い能力ではない。

むしろ、自分で口にしていたよりも低いレベルでの封印が可能と言う点では、ありがたいと言つていいだろう。

だから、これはまあ問題ないと流して良いとして、よく考える必要があるとパンドラズ・アクターが感じたのは、次の三つ目の事だ。

それは、封印するのが装備アイテムの場合、もし特定の外装に対する専用装備なら、装

備一式を一レベルの代償で封印出来ると言う内容だった。

補足条件に、「ただし、その際は専用装備の外装に直接身に付け、外装ごと全て使用出来ないように封印する必要がある。」と付いている点だが、実は要注意なのである。

確かに、あの時自分から言い出した事だったが、この条件は考えてみれば中々に厳しい内容だ。

グレイター・ドゥベルゲンガー
上位二重の影である自分にとつて、外装を含めて封じると言う事は、その能力を使えなくするのは同意語だからである。

ただでさえ、封印中は最低でも五十レベルのダウンが確定しているのに、外装によつて今まで使えていた能力まで封じると言うのは、実際のところかなり痛い。

救いがあるとすれば、封印に差し出すレベルの種類がある程度までこちらの任意で指定出来る所だろうか。

「……ただ、至高の方々の外装は、種族レベルによるものですから、お預りしていない方々の分と私自身の外装部分のみで残せる種族レベルは最大で八レベルですか……」

やはり、世界級アイテムの封印に使用するレベルは、職業レベルの方にしておきましよう。

どれを使うか、こちらについても正直悩みどころ、といった状況ですね。」
今後の事も考えると、やはり残すべき種族レベルは上位二重の影だろう。グレイター・ドゥベルゲンガー

とつさの際に、外装の変化が可能な上に使い慣れている能力だけに、出来るだけ手放したくない。

それに、先程作成した外装も、状況によっては破棄して別のものにする必要が出てくる可能性だつてない訳じゃない。

その際に、その場を切り抜けるのに必要になるのは、グレイター・ドッベルゲンガー上位二重の影としての変身能力だろう。

だから、こちらは可能な限り残したかった。

職業レベルに関しても、出来るだけ満遍なく網羅する方が良いだろう。

特に、物を作るスキルや料理スキルなど、生産系に直結するレベルは、一人で旅をする事を考えるならば残しておいた方がいい。

この辺りは、調整次第と言った所だろうか。

四つ目は、封印解除の条件についてだ。

これは、最初から固定されたものではなく、封印時に自分の意思で自由に設定出来るようなので、それほど面倒はない。

それこそ、実行するのに恥ずかしい内容が固定条件だったら、使用することに躊躇いを持っただろうが……まあ使い勝手が良いと思えるものだった。

「まあ……これなら何とかかなりそうですね。」

割と「壊れ性能」に見合う、無茶な使用条件が有るものが多いと言われる世界級アイテムにしては、むしろ扱い易い方ではないでしょうか。

あくまでも、私がこれから必要としている能力は、絶対にモモンガ様にお届けする必要がある品々を護れるものですからね。

合流後、何らかの咎めを受けるでしょうが、私自身が世界級アイテムと同化したと知れば、死を賜わる事はないでしょうし。

その後は、私自身を世界級アイテムの一つと認めた上で、また宝物殿の守護者に戻る事になるでしょうから、態々レベルを犠牲にして能力設定を変更する必要は無い筈です。

後は、私次第と言ったところでしよう。」

そう、後はパンドラズ・アクター自身がきちんとペナルティに引つ掛からないように注意さえすれば、繰返し使える便利さの上に、代価は一時的なレベルダウンだけ。

封印を解除さえすれば、また本来のレベルに戻る事が可能な利便性の高い能力でもある。

完全消滅による分離以外、取り外す事が出来ないなら、そう割り切つて使いこなす位にならないと、モモンガに対して申し訳が立たないだろう。

そんな事を思いつつ、パンドラズ・アクターは改めて解除条件を考える。

封印する際に、きちんとそれを口に出して宣言する必要がある、絶対にそれを達成しなければ解除出来ないのだから、出来るだけ下手な条件は付けたくない。

「そうですね……装備一式は、モモンガ様のお手を取り、私自身の額に押し当てて、それぞれの方の名前と共に【お返しいたします】と宣言する事にしましょう。

世界級アイテムは、それぞれの名前を挙げて個別に封印しますが、神器級以下の物は纏めて封印した上で、【お預かりした品々をお返しいたします】で解除出来る事にした方が面倒はないでしょうか？

まあ、モモンガ様達から私自身に与えられたものは、アイテムボックスにしまう予定ですし……何もかも封印しては、後でレベルの方が足りなくなりそうですからね。

やはり、幾つかはここから持ち出せないものが出てしまうでしょう。

何せ、幾ら分断されて残り少ないとはいえ、ナザリック自慢の宝物殿。

稀少なアイテムならば事欠きませんし。

持ち出せないものは、全て現在の飾り棚から外した上で、私の私室の奥にある収納専用ボックスにしまっておきましょう。

元々、私の部屋は魔法による入室制限が掛けてありますし、更に二重の隠し扉の奥にありますから、発見され難いでしょうからね。

その上で、きちんと封印と罫を仕掛けておけばより安全度が増しますし。

さて……それでは準備に掛かるといたしましうか。」

これで後顧の憂いは無くなったと、晴々とした様子でパンドラズ・アクターはやるべき事に手を付け始めた。

それから数時間後、宝物殿内の全てのやるべき事を終え、世界級アイテムを始めとしたアイテムの数々を封印し終えたパンドラズ・アクターは、ぐったりとその場にあつたソファに座り込んでいた。

元々、パンドラズ・アクター自身のMPはそれなりに高いのだが、レベルダウンに合わせてMPが減少した結果、ここに残していくアイテムのある自室の封印や、魔法による罫設置に予想以上のMPを使い過ぎてしまい、軽いMP不足に陥ってしまったのである。

この辺り、慣れるまでは同じような事を引き起こしそうだと、ボンヤリしながらパンドラズ・アクターは背凭れに身を預けた。

「……これでは、暫く動けそうにありませんね……」

すいません、モモンガ様。

これでは、出立が一日遅れてしまいそうです。

あなた様の元まで、辿り着くんですが遅れてしまいますが……慈悲深いあなた様なら赦していただけますよね……」

そう呟くと、最後の力を振り絞って自分がいる場所を中心に隠蔽魔法を掛ける。

手元にあるMP回復のアイテムの数が少ない以上、まだ精神的に安心感があるこの場で、限界近くまで使用したMP 回復のための休息を、少しでも取っておきたかったからだ。

そのまま、力尽きたかの様に意識を飛ばしたパンドラズ・アクターは、全く気付かなかった。

聞こえるか聞こえないか、微かな音でメッセージ伝言が届いていた事に。

翌朝、漸くMP がある程度まで回復したパンドラズ・アクターは、最後の支度をしてここを出る事にした。

それは、昨日手間をかけて完成させた外装データを読み込み、人の姿になることだ。

これから先は、モモンガの元に辿り着き己の中に封じたものを無事に渡すまで、出来る限り気を配り己が異形種だと知られないようにしなければならぬ。

人は、異形種や亜人種を恐れ嫌う傾向にあるらしい事を、知識の一つとして知っているからだ。

だからこそその外装であり、現時点まで続けた可能な限りの情報収集なのだが。

そう、パンドラズ・アクターは半ば昏倒するように眠りに付く前、幾つか自分用に与えられていたアイテムを使って自動的に情報収集を行っていたのだ。

もちろん、何も対策せずに行つた訳じゃない。

自分があるこの宝物殿の位置から、一番近く発見探知と探知対策の防壁が張られていないか、街を隈無く確認した上で仕掛けたのではあるが。

その結果、得た情報を元に自分の立場などがある程度決めたのは、つい先程だった。

これから、パンドラズ・アクターが変化するのは、十五才の人間の少年。

名前は、モデルとなったデータの悟を一部変えて、「サーティ・ルウ」と名乗る事にした。

それ以外にも、故郷や家族の事など、人と接する際に必要だろうと、幾つか既に決めた事柄があつたが、それは割愛するとして。

現時点で、全てやり終えたのを最後にもう一度だけ確認したパンドラズ・アクターは、緊張する気持ちを和らげるために大きく深呼吸した。

ここからは、絶対に失敗する事が出来ないからだ。

そして、覚悟が決まった所でこれから使う装備一式を横に置いてそれに向き直った。唯一、残せた種族である上位二重の影グレート・ドベルンガーとしてのスキルを使い、用意した外装データを写し取っていく。

数分後、黒髪黒目のまだ幼さを残した少年がその場に立っていた。

柔和な顔立ちは、大人しげで余り目立つ印象を与えないが、瞳の奥には強い意思が見え隠れしている。

とは言え、長い前髪で中々瞳は見えないのだが。

後ろ髪は、軽く背中の中程を覆う程度まで伸ばし、横に流して麻紐で一纏めに括る形にしたのは、髪を切らずに願掛けをしたまま、長く旅をしている風を装う為だ。

用意した装備一式は、全て遺産級のもの。

見た目は、どこにでもありそうなシャツとズボン、フード付きの外套と肩掛けタイプの鞆である。

シャツとズボンには、裾やら袖口等に細かな刺繍を施されており、遺産級の様々な耐性を上げてある品だし、小型の鞆の正体は無限の背負い袋だ。

もちろん、今の姿でもアイテムボックスは使えるが、その存在はあまり知られるべきじゃないし、他人の目を誤魔化すには目に見える形で荷物を持つ必要があった。

「まあ……こんなところでしょね。」

顔立ちは、前髪のお陰で目立たなくなつたと思えますし。

後は、これからとうやうやって収入を得るかと言う点ですが……まあ街まで辿り着けば、何とかなるでしょう。

どちらにせよ、身分証の代わりに冒険者としての登録はする予定ですからね。

それまでに必要な費用は、探索の際にこの付近で見付けた、冒険者とおぼしきご遺体の所持金から、埋葬代としていただきましようか。

野ざらしのままではなく、きちんと埋葬しておくのですから、文句は言わせません。

さて、当面の生活費も確保出来そうですし、そろそろここを出立するとしましよう。

私がここを出たら、隠蔽と魔力遮断、魔力封じの結果が発動するように仕掛け済みですし、あらゆる種類の罠も十分仕掛けてあります。

もし、ここを発見する者がいたとしても、早々簡単に全てを突破するのは無理な筈。

では……名残惜しいですが、ここを出るとしましよう。」

つい離れ難いものを感じつつ、それでも何時までもここに残っている訳にはいかない
と、ゆつくり外に続く道へと歩き始め。

外に出る直前、その足を止めて振り返る。

そこから見えた、広い空間の中にポツンと置かれたソファセットと、その奥に見える
霊廟への入り口。

それらを、忘れないように強く目に焼き付けつつ、パンドラズ・アクターは心の中で誓う。

次に戻る時は、絶対にモモンガと共に来るのだと。

初めて見る外の世界と、第一村人発見です

初めて見る外の世界は、光が色を纏って氾濫していると、本気で思える位に眩しかった。

パンドラズ・アクターは、外の世界を知識としてしか知らない。

これは、他の僕にも言えることかもしれない。

だが、それでも他の階層には様々な世界があるので、創造主に連れられて自分の階層の外に出た事がありさえすれば、自然を全く知らないと言う事はないのだ。

だが、パンドラズ・アクターは違った。

宝物殿の守護者として、完成するのも遅かった事もあるが、そもそも創造主であるモンガがパンドラズ・アクターを外に出すのを「良し」としなかったと言う理由もある。

結果として、初めてその目にする自然が、異世界へ転移した後の、この世界の山脈地帯の森の中となったのだ。

「……凄い、ですね……」

これが、自然の溢れた外の世界ですか……

初めて目にしますが、これは素晴らしい。

いつも、宝物殿と言う人工の光の中で過ごしてしましてから、この天然の光も様々な植物が溢れる銚の木々も、どれを取っても本当に素晴らしいものばかりです。

モモンガ様も、この素晴らしい世界をご覧になつていたのでしょいか？」

一歩歩く度に、足元の草や落ち葉の混じった土の臭い。

風に香る、草花の匂いや森の中にある様々な木々の香りに、感嘆の声を漏らしながら今は離れてしまつてゐる創造主の事を思う。

自分と同じ様に、一人きりこちらの世界に飛ばされてしまつていたらと、心配と不安で胸が痛くなるが、何となくあの方は大丈夫のような予感もしていた。

それよりも、今のパンドラズ・アクターには真つ先にやらなくてはならない事がある。今は、感傷に浸つてゐる余裕はなかった。

数十分後、宝物殿を出る前に確認してあつた場所で、冒険者とおぼしき者達の遺体の埋葬を終えた。パンドラズ・アクターは、漸く一息付いていた。

この場で亡くなつてゐた者達は、それなりに実力がある者達だつたらしい。

身に付けていた装備は、上級レベル程度と低いものの、割と所持金を持つていたからだ。

これで、暫く路銀には困らないだろうと、パンドラズ・アクターは安堵の息を吐く。

元々、莫大な維持費の掛かるナザリック地下大墳墓の財政担当だけあり、例えば箱入りで世間知らずな部分があっても、様々な経費の大切さに関してだけは、誰よりも良く理解して居る自負があるのだと、はつきり断言できた。

「さて、これで本当に最後の準備が出来ました。

ここから少し先にある、人里に向けて山を降りるとしましょうか。

飛行は……あまり使わない方が良いでしょうが、まともに道の無い山の中を闇雲に歩くのは、【罨】と言う点では危険ですからね。

まあ……この辺りにそんなものが必要な場所は、魔法探知に引つ掛からなかったの
で、大丈夫だとは思いますが……やはり、見知らぬ地です。

それこそ、私の知らない罨や魔法が存在しているかどうか、まだ判りませんし。

やはり、足元の悪い森の中を歩くよりも、麓近くまで飛行を使うことにいたしまし
う。

何事にも、安全が第一ですからね。」

一先ず、ここから先の移動手段を決めた。パンドラス・アクターは、素早く飛行を唱え
た。

最初にいた場所から、北上すること三十分。

そろそろ、麓に近付いたかと飛行を解除したパンドラズ・アクターは、ふと視界の端に人影を発見した。

視界の端と言っても、普通の人には捉えられない程度の距離は開いているのだが。

加速を唱え、視界に捉えた人影の方に向かえば、木の根元にある何かを採取しているらしい、二人組の少年少女の姿が目に入った。

耳を濟ませば、彼らの会話が耳に入ってくる。

どうやら、彼等はここでしか採れない素材を採取しているらしい。

彼らの服装を見る限り、必要最低限の武装しかしていないし、冒険者の証であるプレートを身に付けている様子はない。

その二つの点から考えて、彼等は冒険者ではなく、この山の麓に住む村人なのだろう。彼らなら、山の中で道に迷った旅人として接触したとしても、それほど問題はない筈だ。

宝物殿で確認した情報を鑑みる限り、この辺りの山の中を北側に移動するなら、どうしても目指す村はこの先にある麓の村になるからである。

もちろん、山の中で道に迷っていたにしては、今の自分の姿は綺麗すぎるかもしれない

い。

自分の服装を見直し、直ぐにそう考える。

実際、汚れ一つない姿でそんな事を言われても、違和感を感じさせるだろう。

そう判断したパンドラズ・アクターは、少しだけ溜め息を付くと外套の端を摘まみ上げた。

「……やはり、少しだけ外套を汚した方が良いでしょうねえ。

正直言つて、あまり気は進まないのですが。

これらは全て、モモンガ様からの頂き物。

出来れば、汚したくなどありません。

そもそも、これを普通に汚せるのか微妙な所ですし。

……どうしましょうかね。」

摘まみ上げた裾を覗みつつ、偽装対策を考えるパンドラズ・アクター。

【ユグドラシル】産の装備の場合、ある一定ランク以上になると、装備そのものに自己修復機能が付いている場合も多いからだ。

もしそうだった場合、これを汚すことは不可能に近いだろう。

しかし、この世界ではそんな機能が付いている装備など、王公貴族ですら持っている可能性が低くて。

そんな装備を身に付けていると知られたら、それこそ色々な意味で狙われてしまいうである。

一応、確認すれば汚すことは可能だと判明したものの、やはり気乗りはしない。

自分の装備は、ほぼモモンガから与えられたものだし、一部の例外も至高の方々からの頂き物だ。

それを思えば、汚すのに躊躇いを覚えるのは当然だろう。

しかし、現状を考えればどうしても遭難に近い状況だった偽装は必要で。

「……はあ。

そうですね、仕方がありません。

この状況ですし、多少の見映えの悪さについては、この際、諦めるといたしましょう。

私が優先するべきは、モモンガ様の元へ無事に辿り着くことなのですから。」

溜め息と共に、パンドラズ・アクターは適当な草木を掴み取ると、外套の端など擦れて汚れてもおかしくない場所に擦り付け、それらしい汚れを付けていく。

本人的には、かなり不本意のだが……必要な事だから仕方がないと思いつつ、どうしても不機嫌さは拭えなかった。

彼等に話し掛けて合流し、無事に村に案内して貰い今夜の宿を確保して落ち着いたら、速攻で汚れを落とそう。

そんな事を考えつつ、パンドラズ・アクターは少女少女の居る方へと足を進めていく。出来るだけ、足音を立てて移動してたのだが、それでもこちらの様子に気付いた素振りには無くて。

数分掛からず、彼らの元に近付いた所で、パンドラズ・アクターはゆつくりと口を開いた。

「……そこに居るのは、この辺りに詳しい方達でしょうか？」

静かに、だが、彼等に対してもどこことなく警戒を滲ませているのが解るように見せる。その理由は、遭難中の自分が相手を山賊などの関係者ではないか、疑っているように見せるためだ。

もちろん、普通の村人なのだろう彼らに対して、ここまでの偽装は不要なのだろう。だが、情報の足りない現時点での念の為の偽装は、それこそ幾らしても足りないだろうと、パンドラズ・アクターは考えている。

万が一、自分が集めた情報に偽装されたデータでも混じっていたら、油断した時点で罠に掛けられるのは自分自身だからだ。

まさか、そんな事をパンドラズ・アクターが考えているとは露程も思わず、今までその気配に気付かなかった、自分たちに声を掛けてきた人物を捜すように視線を巡らせる少女少女たち。

「どうやら、彼らの不意を突いた形になった事で、余計な驚きを誘ってしまったらしい。暫く捜して、漸く木の蔭に隠れるこちらに気付いたらしく、少しだけあちらも警戒を見せながら、それでも首を縦に振った。」

「……あんたは、誰だ？」

この近辺のモンじゃねえな。

この辺り一帯は、うちの村の人間以外が薬草を採取しねえ場所だ。そこに入り込んでる時点で、密猟者か遭難者のどつちかしかねえ。

んで、さっきの反応だと、遭難者だろ、あんた。

違うか？」

目の前にいるのは、パンドラズ・アクターの予想よりも聡明な少年らしい。

こちらの状況を察し、念を押すように確認してくる辺りは、物怖じしない少年らしいと思いつつ、パンドラズ・アクターは頷いて木陰から身を乗り出した。

「……その、おっしゃる通り、この辺りの国に来るのは初めてのせいなのか、途中で道に迷って遭難中ですか。」

出来れば、安全な山の麓まで連れて行っていただけると、とても助かるのですが……道案内をお願い出来ませんか？」

出来るだけ、申し訳なさそうに頭を下げつつお願いしてみる事にした。

一応、今のこちらの外見は彼らとそんなに年は変わらないから、こちらが本当に困っている様子を見せれば、警戒心は低くなるだろう。

「どうやら、その予想は外れなかったらしい。」

暫く間を置いた後、少年と少女はお互いに顔を見合せ、小さく頷き合う。

そして、にこやかに笑いながらこちらに問い掛けてきた。

「丁度、必要な分の薬草も集まったから、私達今から村に戻るところなの。」

だから、道案内をしてあげても良いけど、その代わりお駄賃みたいなものを貰えるかしら?」

少女の方から、予想以上にストレートな要求の言葉を伝えられ、どう答えるべきか返答に困る。

こんな風に、はつきりと要求を伝えてくるのも、まだ子供と言える年齢だからなのだろう。

さて……普通の旅人なら、遭難したままよりも路銀を使つてでも安心出来そうな道案内を望むものだろうか、選択肢に思案を巡らせていければ、慌てた様子で彼女は訂正してきた。

「その、あのね、違うの!」

別に、お駄賃と言ってもお金が欲しいとかじゃなくて、あなたが見てきた国のお話と

かを聞かせて欲しいの。

私達の村は、あまり人とか来ないから娯楽も少なく、旅人から旅のお話を聞かせてもらうのが、一番の楽しみなのよ。

……ねえ、駄目かしら？」

こちらの様子を窺うような姿に、パンドラズ・アクターはちよつとだけ苦笑を浮かべた。

そんな風に言い出さなくても、旅の話を聞かせる位なら幾らでも構わないのに。

もつとも、実際に彼らに何か話して聞かせるなら、パンドラズ・アクターの中に知識としてある物語になってしまふのだが。

そんな事を思いつつ、パンドラズ・アクターは少し考える素振りを見せる。

「あの……もし宜しければ、旅の途中で見聞きした出来事ではなく、私を知る様々な物語をお話しすると言うのはいけませんか？」

私、実は見習い吟遊詩人バードでもあるのです。

まだまだ拙い身ですが、師に習った物語でよければお聞かせする事が出来ると思います。

……それで、いかがでしょうか？」

丁寧な口調で問えば、彼らの目はキラキラと輝き出す。

どうやら、こちらの提案を気に入っていただけたらしい。

ホツとしつつ、パンドラズ・アクターは彼らの方に向けて一步踏み出す。

一先ず合流し、そこから移動した方が良いと判断したからだ。

そんなパンドラズ・アクターに合わせるように、彼らもこちらに向けて近付いてくる。数分と経たずに合流すると、改めて自己紹介をする事になった。

「改めて、初めまして。」

私は、旅の吟遊詩人見習いでサーティ・ルウと申します。

実は……旅の途中で何者かに襲われて師とはぐれてしまい、その師を捜して国々を旅をしております。」

軽く頭を下げながらそう言えば、少年の方が元氣良く名乗り返してきた。

「俺は、この山の麓のラグラン村のフレット・レオニール、よろしくな！」

ラグラン村で、この辺りの薬草の採取を受け持つてんだ。

んで、こいつは村長の娘で俺から薬草採取を学んでる、ファラ・タスファートで言うんだ。」

ニツと、少年らしい笑顔で胸を張るように名乗るフレットに、先程までの勢いはどこへ行つたのか、少し恥じらうような素振りでちょこんと軽く頭を下げるファラ。

そんな二人に、パンドラズ・アクターはにこにこ笑みを絶やさず再度軽く頭を下げ

る。

「フレット殿に、フアラ嬢ですね。」

それでは、よろしくお願い致します。」

そんなパンドラズ・アクターの言葉に、慌てて手を振り否定する二人。

「殿とか、柄じゃないし呼び捨てで良いって!」

「そうよ、私もその方がいいわ、ルウさん。」

二人から口々に言われ、慣れた呼び方を断られた事に困ったように眉を寄せる。

だが、普通の村人ならばこの反応が当たり前なのかも知れないと、すぐに考え直して。やはり、呼び捨てには抵抗があったので、少しだけ砕けた呼び方を提案することにした。

「……それでは、フレットくんとフアラさんではいかががでしょうか?」

それと、私の事はルウではなくサティとお呼びください。」

どうやら、このパンドラズ・アクターの提案は受け入れられたらしい。

特に、反対する言葉も上がらなかったからだ。

反対意見がない以上、この件に関してはそれで終わりとすることに、三人揃って山を降りる事になった。

この時、パンドラズ・アクターはフレット達の間で、「物腰の柔らかさや服装などから

考えて、異国の貴族だろう』と思われ、それで納得されているなどと、思いもしていなかった。

初めて見た美しい光景と、初めてのお仕事

山を下ること、一時間。

漸く、麓に到着することが出来た三人は、道のすぐ近くを流れる小川の側で、休憩を取ることにした。

パンドラズ・アクター自身は、この程度の移動では疲れたりしないので問題ない。しかし、ごく普通の村育ちの少女であるフアラはもちろん、薬草を取る為に山道に慣れているフレットも、少し疲れた様子だったからだ。

多分、慣れない道案内をしながらの下山に、予想以上の緊張を強いられた結果、精神的な疲れしてしまったのだろう。

その彼の気持ちは、パンドラズ・アクターも解らなくはない。

と言うよりも、現在進行形で似た立ち位置にいて言ってもいい位だった。

そう……パンドラズ・アクターとて、モモンガ以外の相手とこうして共に行動する事が、これ程の緊張を強いられる代物だとは、それこそ予想していなかったのだ。

これが、モモンガやナザリックのバックアップがある状態ならば、まだ精神的な余裕があっただろう。

余裕があり過ぎて、うっかり役者の立ち位置としての大仰な態度を見せ、返って警戒を招きかねない気もしたが。

あくまでも、この場に必要なのは遭難して憔悴した旅人である。

普通に考えて、そんな余裕や元気など無い存在なのだから、それでは失敗だと言ってもいいだろう。

なので、この状態は間違いではないのだが。

いや……そもそもモモンガとナザリックが、パンドラズ・アクターと一緒に移動していたなら、こんな事態にはなっていないかった。

少なくとも、モモンガがパンドラズ・アクターを単独で外に出す可能性の方が、あり得ないと言ってもいいだろう。

元々、宝物殿という特殊な場を守護する関係で、ナザリックの中すらまともに歩いた事がない身の上である。

他にも色々な要因を鑑みれば、それ位の事は簡単に予想出来る内容だった。

なぜなら、モモンガにとってパンドラズ・アクターは、「大切なギルドの仲間達」の存在とその能力を形に残すための、大切な人形なのだから。

その立場に関して、パンドラズ・アクターはなにも不満に思っていない。

むしろ、その存在意義を与えられたからこそ、今の自分はこうして存在しているのだから、不満に思うはずがなかった。

と、そこまで考えた所で、自分の思考がずれていた事に気付く。

どうやら、休憩と言うことで少し気を緩めた結果、思考が現状から外れてしまったらしい。

ゆつたりと流れる山間の麓の空気も、気を緩める手助けをしていたようだ。

現状では、あまり良いことではないのだが、ただぼんやりと思考を停滞させるよりはマシだろうと思いい直し、小さく溜め息を吐く。

それに……正直、今の自分は自分の事以外に思考を回せるほど、この世界の常識を知らないのだ。

確かに、宝物殿を出る前に事前調査としてはあるものの、それはあくまでも周辺地域の魔法やアイテムなど、必要最低限の知識だけしか集められなかった。

準備期間が、たった半日程度しかなかったのだから、それこそ細かな一般常識までは、時間的にも収集する事は出来なかったのである。

これに関しては、自分の意思でわざと情報よりも時間をとった。もちろん、それにはちゃんとした理由がある。

こればかりは、集めた情報を頭に詰め込むより、実際にその場で経験してみた方が、身に付く類いだからだ。

それに、下手に知ったかぶりをするよりも、素直に「遠い国から来たので知らない」と、はっきり言った方が好印象だと、パンドラズ・アクターは判断したのである。

「そろそろ一休みはおしまいにして、村を目指そうか。」

急がないと、村に着く前に日暮れの時間になる。

この辺りは、それ位の時間から獣とか色々出て危険だし、急いだ方がいい。」
スタツと、音をたてて座っていた切り株から立ち上がったのは、フレット少年。

何度もこの道程を歩き来している分、どういう状況が危険を招くのか解っていて、こうして促してくれているのだろう。

それは、フアラにもちゃんと伝わっていて、素直にフレット少年の指示に従って同じように切り株から立ち騰がり、動くための準備をいる。

パンドラズ・アクターも、同じ様に手早く準備を済ませると、三人はそのまま村へ向けて出発した。

暫く、灌木の雑木林によって周囲の視界が悪かったが、人が通るには不便の無い程度の小道は通っていたので、フレット少年を先頭に先へと進む。

通い慣れている筈のフレット少年も、先程から警戒を緩める様子がないので、この辺

りは雑木林から獣が襲撃してくる可能性が高い場所なのだろう。

一応、魔法とアイテムによる事前調査の結果では、レベルダウンしていてもパンドラズ・アクターなら余裕で倒せる程度の相手だと判明しているが、目の前を歩く少年少女達にはかなり厳しい相手かもしれない。

だから、もし獣の襲撃を受けるような状況になったら、サクツと倒してしまつて安心させてやろうと、パンドラズ・アクターは密かに思っていた。

もつとも、そんな彼の思惑など関係がなく、なんの危険も訪れないままに安全地帯へ辿り着いてしまったのだが。

初めて見る草原は、パンドラズ・アクターに先程とは別の感動を与えるだけの、美しい光景だった。

遠くに望む山々と、日が傾きオレンジ色を帯びた空の、美しいコントラスト。

渡る風に揺られ、ざわざわと音を立てながらたなびく草花。

すこし先に、小さく見える木造の柵とその合間から見える幾つもの家屋は、これから向かう村だろうか？

どれも、パンドラズ・アクターにとっては初めて見る物であり、新鮮なものばかりだった。

もちろん、同行する少年少女達の前では、そんな事はおくびにも出したりしないが。

旅をしている人間ならば、それこそこれに似た光景を何度も見ている筈だからだ。

そんなパンドラズ・アクターに、ファアラがニコニコと笑いながら山々のある方を指す。
「ねえ、サティ。」

ここから、この時間に見る空と山々の姿つて、すごく綺麗でしょう？

この光景は、私達の村から見るとまた違うものなんだよ。

だからね、たまに村の人もここまで見に来る位なの。

何にもない村だけど、この光景だけは自慢なんだ。

だから、サティもこの光景を覚えておいて欲しいな。」

笑顔で告げられた言葉に、パンドラズ・アクターは抵抗を覚えなかった。

こんなに素晴らしい光景を、今と同じように割と穏やかな気持ちで見られる機会が、この旅を終えた後に与えられるとは限らないからだ。

いや、多分……与えられる可能性は少ないだろう。

己の立場を考えれば、それも仕方がないと解っている。

だからこそ、この僅かな時間に見聞きした光景で素晴らしいものは、忘れたくないと思うのだ。

「……そう、ですな。」

もし、またこの地を訪れる事が出来たら、もう一度見たいと……我が偉大なる師と共に

に見たいと、本当に思います。

ですから、この素晴らしい光景の事を、私は忘れません。」

本当に、この素晴らしい光景を、許されるならばモモンガと二人で見たい。

そんな事を思いながら、パンドラズ・アクターが答えれば、ファラもフレットも満足そうに頷く。

どうやら、パンドラズ・アクターの返答が嬉しかったらしい。

そこで、日暮れに近い事を思い出したフレットに改めて促され、三人はすこし離れた場所に見える村へと、足を向けたのだった。

「ようこそ、この村においでくださいました、吟遊詩人サーティ・ルウ殿。

何もない村ですが、私の家にお泊める事は出来ます。

ですので、是非ごゆるりとお過ごしください。

その代わりと言ってはなんです、娘がお願いした【珍しい物語】をお聞かせいただけますでしょうか。」

村に辿り着き、ファラによって村長宅まで案内されたパンドラズ・アクターは、村長

であるキース・タスファートから予想よりも寛大な態度での歓迎を受けていた。

どうやら、本当に娯楽な少ない村の為に、吟遊詩人パトの訪問を喜んでいるらしい。

こんな風に歓迎されて、それをおぎなりの態度や物語で返すのは失礼だろう。

ならば、自分の知る物語の中でも最高のものを歌い上げよう。

そう思う位、パンドラズ・アクターは初めて接した時から、素朴で親切な人間である彼らに対して好感を抱いていた。

元々、カルマ値に多少のマイナスがついていても、属性が中立のパンドラズ・アクターは、人への対応は基本的に柔らかい。

役者の名を持つ分、感情の赴くままの言動をとるより、笑顔の仮面を被ることも得意だからだ。

そんな彼が、初めて接した人たちから親切な対応を受ければ、同じ様に返そうとするのは当然の結果だった。

彼らに聞かせる、最高の物語として相應しい話とは、一体どんな内容がいいだろうか。かつて、偉大なる悪の魔法使いたるあの方に教えられた、竜に纏わる冒険の物語だろうか？

それとも、博識な軍師殿が残した書物に出てくる、最後の幻想に纏わる冒険の物語だろうか？

いや、やはりこの場で語るな相應しいのは、己の創造主に纏わる始まりの物語だろう。吟遊詩人が村に訪れた事を知らされ、夜の広場に篝火が掲げられて村人が次々と集まってくる。

舞台と観客の準備が整えられ、後は己がその舞台に上がるのみ。

ならば、この手で最高の舞台にして見せよう。

スルリと身を踊らせ、吟遊詩人としての装備を身に纏い、弾き語る為に用意したリユートを片手に舞台上に上がる。

スツと胸に手を当てて、優雅かつ丁寧なお辞儀を一つ披露すると、朗々とした声で観客である村人たちに語り掛けた。

「皆様、今宵は私の拙い話を聞くためにこの場にお集まりいただき、大変ありがとうございます。います。」

まだまだ未熟なこの身の為に、このような場を設けていただき、感謝の言葉しかございません。

それでは、私もこの場に相應しい物語を精一杯語らせていただきますので、ぜひとも最後までお楽しみくださいませ。」

片手を挙げ、今一度お辞儀をして見せると、手にしていたリユートを緩やかに爪弾き始める。

最初は緩やかに、次第に軽やかな曲調を暫く奏でた後、静かな曲調にまた変化したかと思うと、パンドラズ・アクターは静かでありながら広場の端まで届く、高すぎず低すぎず穏和な声で語り始めた。

それは、まだ見習い魔術師だったとある青年が、賊に襲われていた所をとある正義の心を持つ騎士に救われた事から始まる、偉大な冒険者たちの物語。

見習いとして、始めはとても弱かった青年が、様々な仲間と出会い一人前の魔術師として成長する物語。

世界一の魔術師の紳士や、気さくで明るい弓使いの青年との友情を、楽しく時に笑いを交えた話を語り紡ぎ。

かと思えば、女性でありながら粘り強い護りで壁役を果たす女戦士に、影すら掴ませぬ最速を誇る凄腕の忍者達の素晴らしき戦いを勇ましく語る。

そんな彼らが集い、集団クランを立ち上げて弱者救済の旅を続ける、そんな素晴らしい者達の物語を、パンドラズ・アクターは、唄うような朗々とした声で語り続けた。

彼らの素晴らしい活躍の物語を。

「……そうして、同じ志を持つ沢山の同士が彼らの元に集まりました。

沢山の同士を得た彼らは、その絆を高めるべくそれまでの集団クランを解散し、新たにギルドを立ち上げる事となったのです。

彼らは、この先も素晴らしい活躍を続けるのですが……今宵、私が語る物語はここま
で。

この後のお話は、またの機会にいたしましょう。

皆様、長らくのご静聴、ありがとうございました。」

それまで爪弾いていたリユートから手を離し、始める前よりも深々とお辞儀をし終え
ると、パンドラズ・アクターは舞台の上からゆっくりと降りる。

途端に上がる、村人からの拍手喝采の声。

ここから先の話も、その気になれば幾らだつて出来るのだが、それは止めておいた方
がいいと判断したのだ。

パンドラズ・アクターは、ちゃんと理解していた。

この国の隣国が、「プレイヤー」の気配が濃厚な「スレイン法国」と呼ばれる国である
という事を。

幾ら、今の話がモモンガ達を人に例えて語つたものだとしても、吟遊詩人^バとして人々
に対して語り聞かせることが出来るのは、ここまでだろう。

この先は、本拠地を得るための初見攻略の物語や、千五百人相手の本拠地防衛戦など
といった、黄金期のナザリックに関わる重要な話ばかりなのだ。

物語としても、ここからの話の方が盛り上がるのだろうが、この話が【スレイン法国】

の関係者の耳に入った時、どんな影響が出るのか解らない以上、下手にここから先の話が続ける事は出来なかった。

自分がした話一つで、モモンガやナザリックに危険を招く可能性があるのだから、仕方がない話である。

それなら、最初から話さなければいいと言われるかもしれないが、やはり人前で一番の話をするとなれば、モモンガ達の活躍を語りたかったのだ。

パンドラズ・アクターの語った物語は、村人達にとっても喜ばれた。

娯楽の無い村にとって、これ程の物語が聞けるとは思っていなかったらしい。

暫く村に滞在して、先程の話の続きを筆頭に様々な物語を語って欲しいとねだる声は多かったのだが、村長に「人を探す旅なのだ」と先に断りをいれておいたので、何とか諦めて貰う事が出来た。

一応、「この先の話は、まだ師に【人前で語れるレベルではない】と許しを得てない」とも言ったので、許して貰えた様でもあったが。

その後は、村人達が総出での宴となった。

好奇心一杯の人々に、様々な質問攻めに会うものの、穏やかな物腰と煙に巻くような物言いでのらりくらりと交わり、代わりに知らない常識などを仕入れていくパンドラズ・アクター。

人と接した事はなくても、何となく話している相手の言いたい事を察してやるだけで、会話を続けられるだけの社交性を、役者として与えられていたのが幸いしてのだろう。

そうして、様々な人達と語り明かして夜も更け……漸く、村長の家に戻れたのは夜更け過ぎだった。

初めての旅路と状況確認、だっただんですけど……

パンドラズ・アクターの旅は、割と穏やかで順調な滑り出しだった。

基本的に、移動にはこの国の人々が一般的に使用している街道を使っているのだから、危険が少ないのは当然ではある。

しかし、パンドラズ・アクターの事前調査と、初めて接触した村の人々の話では、盗賊や現在この国へ侵略を繰り返している、ビーストマンに襲われる危険が全くないという訳ではない。

特に、一人などは盗賊に「襲ってくれ」と言っているのと同じ意味だと、フレットやフアラたちから散々止められた。

その結果が、フレットとフアラが同行し、三人でこの辺りで一番大きな街まで向かう事になったのである。

元々、彼ら自身も山で採取した薬の材料を卸す為に街に出る予定があつたので、パンドラズ・アクターの為だけではないと言われてしまえば、その申し出を無理に断る訳にもいかなかったとも言える。

とにかく、一緒に旅をする事に関して言えば、まだ不足している知識を補ってもらえ

る分、助かるので文句はなかった。

一人旅の方が、戦闘になった際にやり過ぎたとしても、相応の対処が可能だろうという点だけがメリットだった事もある。

こうして、彼らと三人で旅をしてみると、やはり自分はあまり一般常識が足りない【箱入り息子】だと、本気で思う事が多い。

生活基盤が、宝物殿の中のみに限られていたという点から考えれば、ある意味では仕方がないと思いつけるしかないのだが、それでも知らない事が沢山あった。

旅の途中で夜を迎えた時の夜営の仕方とか、実際に経験してみなければ得られない知識が山ほどあり、それを一つずつ教えてくれたのが彼らだからだ。

おかげで、旅を長くしているという割に、かなり旅人としての知識が不足している事になってしまった。

それに関しては、二人から指摘されてしまった際に、「今まで、ほぼ師に言われることを断片的にしか行っていないかった」と説明し、一応納得して貰ったのだが。

どうやら、パンドラズ・アクターの物腰や身に着けている品々は、やはり一般人では到底身に着ける事が出来ないレベルの品物らしい。

その結果、そんな品々を自然に着こなしている姿は、彼らから見てパンドラズ・アクターを貴族の子息だと思わせているようだった。

そういう思い込みから、自分ではまだ何もできない時点で師と逸れて遭難していたところを、自分たちと遭遇したのだと結論付けてくれたのだろう。

全部、彼らの勘違いと思いつき込みではあるが、そのまま勘違いしてもらった方が色々都合がいいので、状況を把握した後もパンドラズ・アクターはそれを訂正しないままだった。

正直、貴族の箱入り息子と思われても仕方がない位、自分はこの世界の常識を把握していないのだから。

それに、今の状況なら自分が知らない事を知らないと断言し、それに関して尋ねたとしても彼らからは別段おかしいと思われぬ点がないが、なかなか楽な立ち位置だと思う。

下手に知ったかぶりをしなくていい分、後から取り繕う必要がないからだ。

「……まあ、このまま彼らとの縁が切れてしまう可能性を思えば、そこまで気にする必要もない気もしますが、ね。

それでも、偉大なるモモンガ様の被創造物として、あまり行く先々で禍根を残すような真似は出来ませんし。

この時点では、様々なこのあたりの国々での共通知識を吸収して、今後の旅に役立つ方を優先すべきでしょう。

そういう点でも、まだ年若い外見を外装として選んだ訳ですし。」

夜営する事になり、昨夜のように最初に火の番を請け負ったパンドラズ・アクターは、眠っている彼らを起こさないように気を付けながら小さく呟く。

正直、モモンガから与えられたアイテムがあるから、パンドラズ・アクター自身は全く休まなくても大丈夫なのだが、それだと共に旅をしている二人に不信を抱かせるだろう。

それが判っているから、おとなしく彼らの言い分を聞いて先に火の番を引き受け、こうして時間まで起きていて、交代したら休む振りをする予定なのだ。

幾ら面倒でも、それが人の中に紛れて過ごす為の手段なのだから、一つ残さず学んでこなす必要があるだろう。

少なくとも、モモンガやナザリツクを見付け出すまでは。

それにしても……とパンドラズ・アクターは自分の置かれている現状を顧みる。

現在位置は、竜王国の首都から徒歩で約七日程度掛かる、かなりの山奥の街道筋の夜営場所。

ただし、それはあくまでも早飛脚。最初からそれ相応の準備を済ませた上で、首都に着くまでどの街にも寄らず、ひたすら一番大きな街道を突き進んだ場合なのだが。

とにかく、だ。

元々の出発点が、竜王国でも一番首都から外れた国境近くの山の中にある洞窟であ

り、そこから数時間山を下りた場所にある村からだと思えば、数日でそれなりの移動が出来たと思うべきだろう。

特に、同行者が自分の見た目と同じ位の少年少女で、馬車が使えない起伏の多い山間の街道で大荷物を抱えた徒歩の移動だと思えば、これ位の時間は許容範囲内だと思うべきだった。

彼らが同行するのは、今のペースで進めば明日の昼過ぎには到着出来る予定の街まで。

そこから先は、自分一人での旅路となる。

ここまでの道中で、彼らが知っているだろう知識は可能な限り聞いたし、明日の昼に街に到着した際に、この国の人間ではない者が街に出入りする際の手続きを、実践で教えて貰える事になっていた。

後は、明日着く街でなら【冒険者】としての登録が可能らしいので、それもしておいた方がいいとも教えて貰っている。

なんでも、【冒険者】となった時点で身分が証明される上に、仕事によつては国境を越えて移動する事もあるので、人を探しながら旅をするなら是非なっておくべきだと思うだ。

一応、宝物殿から出る前に【冒険者】に関しても、事前に情報を集めているのである

程度は知っているが、あまり夢がある仕事とは思えなかった。

そういう点では、あまり魅力を感じないのだが……これから先、国々を移動する可能性が高い事を考えれば、なっておいた方がいいのだろう。

銅^{カッパ}程度のランクで、あちこちの国を移動していると余り良い顔をされないだろうが、ある程度のランクになるまで一つの街に腰を据えていられる程、時間に余裕がある訳じゃない。

そんな事をしている位なら、モモンガを探す時間に充てたいと思う。

むしろ、そんな自分にとって大して意味もない事に手間を掛ける位なら、もつと手っ取り早く簡単な方法をとった方がいい。

「そうですね……いつそ、旅の途中で盗賊やビーストマンの襲撃を受けたら、率先して刈り取っていきましようか。

予定では、出来るだけ面倒は避けるつもりでしたが、「冒険者」となった上で国を移動する予定がある以上、「冒険者」としてある程度のランクを得て、それなりに立場をしっかりとしたものにしておいた方が良さそうですね。」

現時点で、一応それなりの路銀は所持しているものの、今後の事を考えれば稼げる方は幾らあっても困らないだろう。

当初の予定では、それほど目立たない様に行動するつもりでいたのだが、「冒険者」と

しての足場を固めるためにある程度の実力を見せるとなると、人目を引いてしまいかもしれない。

現状を考えれば、出来れば最初の予定通り人目を引くのは避けたいところではある。

特に、スレイン法国辺りに目を付けられるような状況は、絶対に避けたかった。

下手に彼らに目を付けられ、こちらの正体を探られるのも困るが、封印してあるとは言え所持しているものがモノだけに、接触したくない国ナンバーワンだと言っている以上、下ろす。

この国には、ビーストマン関連で出入りしている事もはっきりと判っている以上、下手に目立てば接触してくる可能性はそれなりに有つて。

もちろん、その辺りも考えた上でこなす仕事を調整していけば、彼らに目を付けられないギリギリのランクである金^{ゴールド}程度までで留める事も可能だとは思いますが、この国の状況だと難しいかもしれない。

「はあ……どちらにせよ、これからの行動に支障をきたさなければ良い訳ですし。」

現状では、ある程度まで妥協するような事態が起きるものだと、それなりに覚悟しておく必要があるかもしれませんね。

本当に、頭が痛い事ばかりで困ってしまいます。」

確かに、この国の住人との初めての接触は上手くいったし、状況的に旅の滑り出しと

して考えれば悪くはないのだろう。

それでも、モモンガたちに関する情報は現時点では皆無で、あまり良いとは言えない。まあ……それに関しては、宝物殿を出て旅に出る事を決めた時から、そう簡単に情報が集まると思っていなければ、見付け出せるとも思っていなかったので、その点に関してはそれ程焦っていない。

むしろ気長に搜していればいずれ何らかの情報が入るだろうと思っっている為、いずれ何とかなるだろうと腹を括っている。

それより、下手に焦って檻樓を出した挙句、スレイン法国に付け狙われる事の方が、余程恐ろしいと言っ方がいいだろう。

今の段階で、何を考えても机上の空論でしか無い事は判りきっているので、一旦そこでこの事に関する思考を打ち切ると、現時点での自分のレベルと能力を再度確認する事にした。

今の自分のレベルは、種族レベル八の職業レベル四十一で、合計四十九レベル。

種族レベルとして残っているのは、上位二重の影のみでそれ以外は【道化師の請願】グレート・ドットベルゲンガーによって封印の為に一時的に使用されてしまっている状態だ。

職業レベルとして残っているものも大半も、クラフトマンなどの生産系のものばかりで、戦闘系に属していると言えそうなのが、吟遊詩人_ドだけ。

モモンガを含め、ギルドを引退していない至高の方々の外装と能力は使用可能なので、上手く一瞬だけその能力を引き出せば、戦闘面では問題がないと思うのだが、こればかりは実際に戦闘してみないと、はつきりと大丈夫だとは断言できないだろう。

流石に、人がいる前で御方々の外装を纏う訳にはいかないし、どこまで微調整出来るのが少々不安なところだ。

いつそ、習得している職業の中の一つである【錬金術師】で、戦闘系のアイテムを何か作成した方が早い気もしなくはないが、レベルがそこまで高くない事を考えると、低レベルのアイテムしか作成できないだろう。

「……問題は、この先何らかの形で【パウ・オブ・クラウン道化師の請願】を使用する必要があるらしいアイテムを入手した場合、ですね。

現時点でも、私のレベルは総合で四十九しかありません。

そこから、更にレベルが下がると言う事は、当然ですが旅路の危険度も跳ね上がる事になりますし。

とは言っても、入手したものが^{ワールド}世界級アイテムだとすれば、問答無用で封印を選択せざるを得ません。

もちろん、私として^{ワールド}世界級アイテムのようなものが道端に転がっているとは考えていませんが、何らかの戦闘時に手に入る可能性がない訳ではありませんからね。」

正直、レベルがこれ以上下がるのはあまり宜しくない。

現時点でも、もし他の「プレイヤー」や「NPC」と接触して、何らかの理由でそのまま戦闘になった場合、確実に逃げ切れるか微妙なラインだろう。

もちろん、最初からそんな事態にならないよう最上のものを考え、それに合わせて幾つもの偽装をしている訳なのだが、見破る事が出来る能力を持っているものには、通用しない可能性もあった。

そこまで考えた時である。

パンドラズ・アクターが幾重にも張り巡らせていた、索敵・防御系結界に何者かが侵入してきたのは。

「……数は、全部で二十五。

距離は、最初の索敵結界に引っかかったのを考えれば、ざっと八百程度でしょうか。はつきりと断言できませんが、レベルは最高でも15程度といった所ですね。

移動速度や包囲網の展開の仕方、所持している武器の種類から考えても、人間種で間違いないでしょう。

この山の街道脇で、夜営をしている私たちを包囲しつつ、武器を手にしてゆつくりと様子を窺うように近付いてくる事などを踏まえると、山賊の類といった所でしょうか。

一応、念の為に遠隔視^{リモート・ビューイング}を使って相手の姿の確認を……ああ、これは山賊で間違いな

いですね。

フレットたちのラグラン村は、高ランクのポジションを生成するために必要な薬草を、定期的に街へと運んでいるという話ですから、それを狙われたと考えた方が良さそうですね。

多分、何度かフレットたちの行動パターンを確認し、そのうえで一番狙い易そうなこの辺りを襲撃地点に選んだのでしょう。

確かに、徒歩でこの夜営地点から街まで助けを呼びに行くのは、少々距離が離れ過ぎていますから、逃げ切る前に捕まる可能性の方が高いでしょうし。

この移動速度だと、ここに山賊達が到着するまでの所要時間は、約二十分足らずといった所ですね。」

ざっくりと、状況を判断した上で魔法を使用し、確認と分析するまでにかけた時間は約三十秒。

その間に、インファイニティ・ハザード無限の背負い袋に手をつ込み、武器やアイテムで使用出来そうなものを探してみる。

一応、吟遊詩人パトを名乗っている以上、あまり変な武器を使用する訳にはいかないものの、適当に探って使用出来そうなもので出てきたのは、弓と短剣、そしてレイピアの三種類だった。

「どうやら、『至高の方々』の外装自体は装備と共に封印はされているもの、全く武器装備や戦闘能力が使えない訳ではないらしい。」

「……使用出来る能力とスキルは、最大値が二割弱といった所でしようか。」

まあ、手持ちの武器がこの三種類なのは、宝物殿から出る際に使用出来ないものだと思いついてはほぼ封印してしまっているからなのですけど。

それよりも、フレットたちをどうしましょうか……

下手に起こして、騒ぎ立てられたり無理に戦闘に参加しようとされたりする方が、面倒な事を引き起こしそうですね、フレッド君の場合。

そう……山賊達相手に実力差を考えずに突っ込んで行つた揚げ句、人質など足手纏いになったりしそうです。

フアラさんは、その点に関しては安心なのですが……逆に怖がってしがみ付くなど、こちらの動きを邪魔しそうな気配がしていますし。

仕方がありません、睡眠スリープを掛けた上で生命拒否アンティライフ・コクーンの繭で保護しておきましょう。」

サクサクと方針を決めると、手際よく彼らに対して睡眠スリープを掛けてその上に生命拒否アンティライフ・コクーンの繭を掛ける。

その上に、更に防御系結界アイテムを幾つか配置し、こちらが使用した魔法がうつかり彼らの方に向かつて、それで弾く様にしておいた。

これで、こちらの戦闘準備は十分出来たと言っていいたいだろう。

「敵がこちらに到着するまで、残り数分程度……」

正直、ここでただ待つのも面倒ですし、現時点での戦闘能力の確認の為に打って出た方が早そうですね。」

きつちりフレット達の守りも固めた事で、行動の自由度が上がったパンドラズ・アクターは、速攻で全員を刈り取る事を選択した。

初めての戦闘で、何が出来るか把握しましょう

パンドラズ・アクターが最初に選択した武器は、弓。

先程、リモート・ビューイング 遠 隔 視で状況を確認した時、山賊達は二人一組で等間隔に包囲網を構築していた。

ならば、まずはその数を的確に減らしていくべきだと判断し、その手段として選んだのが弓だったのである。

森の中だと、遮蔽物が多くて標的までの視界の確保が難しい代物だが、逆にそれは相手側もこちらを認識しにくい状況であり、使用してくると予想出来ない武器だと言う事だ。

リモート・ビューイング 遠 隔 視の魔法により、標的までの正確な距離と射るべき位置を把握出来る分、むしろ状況はパンドラズ・アクターの方がかなり有利と言つていいだろう。

まず、最初の一分で一番近い射撃ポイントまで移動すると、遠隔視を展開した。

素早く矢を番え、展開中のリモート・ビューイング 遠 隔 視で獲物となる山賊の位置と距離を把握すると、相手の移動速度を踏まえて射るまでの間を数える。

「……三、二、一、一！」

狙い通り、心臓を一発で射抜いたのを目視しつつ次の矢を番えると、射抜いた標的の横でこの状況に狼狽している相手を狙った。

今度は、一発必中ではなく連続で縦に額と喉と心臓の三連射で打ち込み、周囲に知らせる為に騒ぎ立てるのを防いでおく。

ここまでの所要時間、約三十秒。

「……これで、後は二十三人。」

現在地で、弓で正確に狙える相手はいない。

もう暫く弓を使うにしても、射撃ポイントを移動するべきだろう。

獲物を狩り終えた時点で即座に判断すると、リモート・ビューイング遠隔視を切る前に次の射撃ポイント

を割り出して、素早くそこを目指す。

移動の際、足音を消しつつ素早く移動する為にパンドラス・アクターが使用したのは、ギルドメンバーでも最速を誇る式式炎雷の隠密系スキルだ。

かつて、ナザリツク地下大墳墓を発見した際に使用したという、彼が極限まで高めたこの隠密系スキルは、森の中の移動にも適していると言っただろう。

このスキルが使えるかどうかだけで、かなり現状での戦い方に差が出る為、パンドラズ・アクターにとってこのスキルが使用出来る事は、とてもありがたかった。

とにかく、現時点では敵の数を減らす事が最優先だったからだ。

正直に言うと、パンドラズ・アクターと山賊達とのレベル差を考えれば、直接正面から当たっても十二分に殲滅する事は可能だっただろう。

ただし、これがパンドラズ・アクターにとつての初陣であり、お荷物を二つも抱えている状況でなければ、だ。

もちろん、その状況下で戦闘になったとしても、お荷物に生命拒否の繭と防御結界を付与しておけば、普通に戦っても余裕で勝てるというのが、敵の戦力を分析した上でのパンドラズ・アクター自身の結論ではあった。

だが、その上でこんな風に打って出る事を選択したのは、宝物殿の中で過ごして一度も戦った事のない自身の戦闘経験を増やす為だ。

そう……様々な能力を使用出来る万能の個として生まれながら、パンドラズ・アクターが与えられた役割は、宝物殿の奥深くに鎮座する領域守護者として位置付けられていた。

つまり、ナザリック地下大墳墓が壊滅状態になるまで、出番が存在していないのだ。故に、どれだけ万能な能力を与えられていたとしても、その能力を実際に戦闘に使った事などない訳で。

つまり、パンドラズ・アクターには実戦経験が全くないのである。

どんな能力も、全て知識の中に納まっているものばかりで、一部の御方の能力を除い

て使用した事がないのだ。

だからこそ、こうしてレベルの低い相手で知識と実戦の差を把握し、能力を使いこなす為の実習の機会に利用する事にしたのである。

いきなり強敵とあたり、使おうと思つたスキルが使用出来なくて負けたという状況になつては、モモンガに顔向け出来なくなつてしまふ。

パンドラズ・アクターが守っているのは、ただの財宝ではないのだから。

するりと身を滑らせるように移動しながら、パンドラズ・アクターは手にしていた弓に矢を番えておく。

最初の狙撃と同じ動作を、既に四つのポイントで繰り返した結果、敵の約半数を削つていた。

だが、そろそろ弓での不意打ちは距離的に限界が来ているだろう。

実際に、リモート・ビューイング遠隔視で確認した敵の中には、弓による長距離射撃を警戒し始めている者もいたのだ。

なので、これが敵に放つ最後の一射と定め、次の武器をすぐに取り出せるように腰の鞆に手を当てた。

中に手を入れないのは、今の段階で取り出しても弓を射る邪魔になるからだ。

今度ばかりは、リモート・ビューイング遠隔視を使用した長距離狙撃ではなく、肉眼で視界に捉えた相手

を獲物に選ぶ。

相手がこちらに気付く前に、素早く矢を射掛けて仕留めると、アイテムボックスに弓を放り込み鞆から用意しておいた短剣を二振り取り出した。

多少、音がするのを覚悟で一気に敵に向かって踏み込むと、喉元に向けて鋭く切り掛かる。

その攻撃を、紙一重で剣の鐔で受けたのを視界に収めるや否や、それを軸にクルリと身を反転させてもう片方の手に握っていた短剣で心臓を貫き、一気に止めを刺した。

「……これで、残り十三。」

そろそろ、接近戦に切り替えるべき……いや、まだ背後から忍び寄って刈り取れるなら、そちらを選択すべきでしょう。

雑魚ばかりですが、乱戦になると今の私では脇が甘いかもしれませんからね。」
ここまで掛けた時間は、約九分。

一応、最初に設定した予定時間内ではあるが、もう少し余裕が欲しいところだと思う。身を沈め、踏み込む足に力を入れると、一気にその場から一番近い敵の場所へ向けて地を滑るように駆け出した。

一步一步、歩幅を大きくスライドさせることで、跳ねるように駆けて速度を上げていく。

標的を視界に捉えた所で一旦足を止めると、ある程度距離を置いたまま身を木陰に滑り込ませた。

ここから先は、それこそ音を立てないように移動する必要がある。

精神を統一するために、小さく息を吸い込み一拍間を置いて緩やかに息を吐くと、そのまま隠密系スキルを発動した。

空気に溶けるように気配を消し、こちらへ向かつて警戒しつつ近付いてくる敵の一人の背後へ回り込むと、一瞬のうちに口を抑え込み、返り血を浴びない様に気を配りながら横に喉を切り裂いて、抑えていた手を放す。

いきなり足を止め、崩れ落ちるように倒れた仲間の姿に動揺した相手の背後に、たった一歩で体を滑りこませて回り込むと、同じように口を塞いで手にしていた短刀を喉元に押し当てスラリと横に一閃。

ほぼ音を立てずに、返り血を浴びない様に注意しながら、その喉を切り裂いた。

手を放し、既に命を刈り取った相手を地面に落とすと、ゆらりと体を揺らめかせてその場から離れ、次の獲物の位置を確認するために遠隔視^{リモートビューイング}を展開する。

この戦闘スタイルは、戦闘に慣れないこの身には一撃必殺の手段であり……相手に味方の数が一気に減っている事を知らせない為のもの。

つまり、文字通り時間と勝負するために選んだものだったからだ。

それ程離れていない場所に、次の獲物の存在を確認したパンドラズ・アクターは、再び空気に溶けるように気配を消しつつ、敵へと接近していった。

残りの敵を七人になるまで、隠密行動と一撃必殺の暗殺という手段で削りきつたところで、パンドラズ・アクターは武器を別のものに切り替える事にした。

そろそろ、相手側にもこちらの行動が察知される頃合いだと、そう判断したからだ。

これだけ接近すれば、同士討ちを避けるために味方の存在が判るような何かを、山賊達が持っていないもおかしくない。

パンドラズ・アクター自身、彼らの所持品のそんなアイテムがある事も想定していたのだが、倒した山賊達の所持品を漁る為に時間を使うよりも、出来るだけ数を潰す方を優先した為に放置したことだった。

既に、包囲網を構築していた山賊達は彼ら横並びで移動している七人以外は、パンドラズ・アクターが潰してしまったのだが、流石にここまで味方の数が削り取られれば、アイテムが無くて不完全な包囲網の状態に気付くだろう。

ここからは、直接剣を交える接近戦だ。

きちんと、攻撃に対する防御も固めておかななくては拙いだろう。

防御魔法として盾壁を唱えた上で、最後の武器として残しておいたレイピアを取り出し、他にもいくつかのアイテムをすぐに使用可能な状態で準備すると、鞆をアイテムボックスの中に放り込む。

そうして、準備を整え終えたところで、今度は出来るだけ相手の目を引くように夜営地点よりかなり手前に降り立った。

片手にレイピアを携え、夜営地への道を塞ぐように仁王立ちして見せれば、警戒しつつも山賊達が闇夜の中から姿を現してくる。

パンドラズ・アクターのいる場所を迂回して、直接夜営地を狙うことも可能だったが、わざわざこちらの前に出てきたと言う事は、彼らの狙う獲物の一つとしてパンドラズ・アクター自身も含まれていたのだろう。

まあ、身に着けている装備やアイテムの価値を考えれば、山賊達が狙わずに放置するなどあり得ないのだが。

それに、現時点でも一対七の数の有利さが、直接戦闘によって捕らえる事を選択させたのかもしれない。

山賊達の予定していた包囲網は、既にパンドラズ・アクターの手によって崩壊しているのだが、その事実を正確に把握していなかった事も、彼らのその選択をさせたのだら

うが。

どちらにせよ、この段階で山賊達がパンドラズ・アクターを放置するという選択肢を選ばなかった事だけは間違いなかった。

「……てめえか、吟遊^バ詩^ト人。」

せつかく、男受けしそうなかわいい顔をしている癖に、のこのこ出てきやがって。」

「馬鹿じゃねえか、てめえ。」

てめえらみたいに、人前での媚びるような仕種と歌で囀る事で金をせしめるような、そんな輩が一丁前にそんな不似合いな物を持ち出して、振り回そうとするんじゃないよ！

どうせ、見せ掛けだけで使いこなせやしねえんだからな！」

馬鹿にするように、外見だけで判断して見下した声を上げる山賊達に、パンドラズ・アクターは小さく嘆息した。

どうやら、自分が予想していたよりも彼らの戦闘レベルはかなり低く、相手の実力を見抜く事が出来ないらしい。

まあ、現時点で自分の実力を確認するための腕試し状態なので、強者としての気配など欠片も出ていないのだから、察知出来ないは仕方がないかもしれないのだが。

「……確かに、私は吟遊^バ詩^ト人です。」

ですが……吟遊詩人が戦えないと、誰が決めた？
ええ、そうです。

この私を目の前にして、それでも吟遊詩人が戦えないなどと言う戯言を吐いていては、あなたたちの実力もその程度のレベルだと、自白しているようなものなのですよ！」
ニイツと口の端を上げるように笑うと、パンドラズ・アクターは鞆からレイピアを抜き放った。

その行動に、盗賊たちが「無駄な抵抗を」と、嘲りの笑みを浮かべながら武器に手を掛ける。

だが……次の瞬間、たった一步の踏み込みで一氣に間合いを詰めると、パンドラズ・アクターは目の前にいた山賊の心臓目掛けて三連突きを放っていた。

そのあまりの速度に、反応出来ずに一瞬のうちに心臓を貫かれた山賊からレイピアを抜くと、一旦後ろへ飛び退き距離を取り直す。

瞬き一つ程度の間しか置かず、仲間の一人をあつさり倒された事に動揺している今が、パンドラズ・アクターにとって最も攻撃のチャンスと言っているだろう。

素早く、大外に構えていた山賊を次の標的に決め、レイピアの地面に向けていた先端を切り返すと、腰を落として一氣に踏み込み加速する。

加速による勢いのまま、心臓から喉へ目掛けての三連突きを放ち、回避行動も執らせ

ずに仕留めると、相手を蹴り倒しながら一気に前方へ駆け抜けた。

漸く、こちらの行動に反応した山賊達が、囲い込むように迫ってくるが、その場でクルリと反転して左手に一気に魔力を溜めると、呪文を口にする。

「魔法の矢！」
マジック・アロー

途端に宙に浮かび上がる、六つの光球。

宙に浮かぶその数を見て、仰天する山賊達へと光球は一気に襲い掛かる。

追尾するそれに、山賊達の殆どは逃げ惑うものの、結局、武技を使ったのか魔法の矢を切り払った一人を除いて逃げ切れずに打ち抜かれ、あっさり命を刈り取られていく。

「……貴様、魔法詠唱者だったのか！」
マジックキャスター

苦々しげにこちらを睨み付ける最後の一人は、山賊の中で群を抜いてレベルが高いようだった。

彼の装備から見ても、この山賊達の頭だったのだろう。

見た感じ、レベルは十五以上二十以下といった所だろうか。

手にしている武器は、割と一般的なロングソードだが、を回避し切り裂いた武技を考えると、この場でパンドラズ・アクターが使える一般的な攻撃魔法は、牽制程度の役割しか果たせそうになかった。

「別に、レイピアを使用出来るからと言って、魔法が使えないとは言っていないから

ね。

レイピアなら、鞘に入れた状態で杖剣としての役割を果たせますし。

勝手に勘違いなさったのは、そちらでしよう？」

ニヤリと笑う事で、更に挑発するような仕種を見せれば、山賊の頭はギリギリと怒りと苛立ちを募らせているようだった。

実は、パンドラズ・アクターにとつてこれが初めての实战だと知ったら、目の前の相手はどう反応するのだろうか？

そんな事を頭の端でチラリと考えるが、わざわざ言う必要性も感じられなかったので、ただ笑みを深めるだけに留めておく。

戦闘中において、苛立ちを募らせ冷静さを失うと言う事は、当然隙を生むと言う事で。左手に魔力を集中させ、再び魔法の矢マジックアロー魔法の矢を放つ素振りを見せると、あっさりそちらに釣られて反応を示す。

そんな相手に、嫣然とした笑みを浮かべてみせると、パンドラズ・アクターはその呪文を口にした。

グラスブ・ハット
「心臓掌握」

呪文を口にした瞬間、胸を押えて倒れ伏す山賊の頭。

それは、今のパンドラズ・アクターが一日にたった二度だけ行使出来る、モモンガが

よく使う攻撃魔法だった。

姿をモモンガのものに変化させずに使える代わり、使用制限が一日二度という厳しきがあるが、使い処を間違えなければ十分問題がないと言っていていいだろう。

「戦闘開始から終了までの時間が、約二十分ですか。

……初めての实战経験として考えれば、まあ、こんなものでしょうね。

一応、私と彼らの間のレベル差は、三十近くあった訳ですし。

これで、攻撃魔法も直接戦闘に関する能力も、問題が無い事は十分確認が取れました。そうですね……少なくとも、人間種が相手だと仮定すれば、ほぼ問題がないと判断して大丈夫そうですね。

一部の例外は居ますが、それらとは可能な限り接触しない様に気を付ければ良い訳ですし。

そうそう、このまま彼らの死体を放置しておく訳には行けませんね。

少なくとも、人目につかない場所まで運んで放置しておけば、森の獣たちの餌になるか、土に還ると思われれますし。

さて、後片付けをさくさく済ませて、フレット達に掛けた魔法を解除しなくてはいいけませんね。

約束通りに火の番を交代しないと、彼らから明日の朝に文句を言われてしまいますか

ら。」

さくさく段取りを決めたパンドラズ・アクターは、それまで使用していたレイピアの血を拭い、鞘に戻してアイテムボックスから鞘を取り出すと、そこへしまう。

次に、使用した短剣二つを取り出して、同じように血を拭うと鞘の中にいつでも取り出せるようにしまい込んだ。

戦闘に使用した武器の簡単な手入れが済めば、後は死体の始末だけで。

このまま移動させたら、あちこちに血の跡が残りそうだったので、遺体を一か所に纏めた上で大きめの布を取り出し包むと、それを片手に飛行の呪文を唱え森へと運んで行ったのだった。

初めての街と、初めてのお別れです

初めての戦闘を経験した翌日の昼少し前、パンドラズ・アクター達は漸く目的地であるそれなりの大きさの街に到着した。

流石に、ピーストマンの侵攻を受けている国らしく、この規模の街には堅牢な城壁を備えていて、しっかりとした守りが伺える。

冒険者の数も、それなりに多いだろうし、様々な品々が取引られているのも、街の門の前に並ぶ商隊の数から簡単に推測出来た。

そして、こういう人が行き交う街だからこそ、効力の高いポーションの材料となる薬草が、高値で取引されているのだろう。

これなら、わざわざ危険を冒してまでフレット達がこの街を訪れる理由にも、納得がいつていた。

「……一応、それなりに活気がある街のようですね。

人の往来も多いのだと、なんとなく判りますし。

少々荒くれ者が多いのも、冒険者と言う方々が多いと考えれば、許容範囲内だと思いません。」

小さな声で、街の中の様子を見た感想を呟いていると、前を歩いていたフアラが目的の場所を見付けたのか、勢いよく走っていく。

初めて来る訳ではないのに、少しはしゃいでいるらしい彼女の様子に、少しだけ苦笑しながらフレットが振り返った。

「サティ、あそここの店が、この街で俺たちが薬草を卸している薬品店。

これからあそここの店で、持ってきた薬草の買取りをして貰うんだ。

今回の薬草は、これが最後の収穫になる種類のものだから、向こうも結構良い値で買収してくれると思う。

それが終わったら、サティの目的地である冒険者組合まで案内するよ。

この街、見た感じよりも結構入り組んでいるから、初めて来たサティは口で説明しただけじゃ迷子になると思うからさ。」

どうやら、この街についてからのパンドラズ・アクターの様子から、こちらが余り人の多い場所に慣れていない事を、どうやらフレットは気が付いていたらしい。

その辺りも、今まで吟遊詩人としての技量を上げるための修業が厳しく、人前に余り出る事が無かったからだろうと、勝手に推測してくれているので、わざわざ自分から訂正することなくそのままにしてあった。

理由はどうあれ、実際に自分が「箱入り息子」なのは間違いないのだから。

辿り着いた薬品店で、フレット達が交渉している間に店内の商品や客の様子などを観察してくと、幾つか自分の知らない事実気付く。

まず、この店で一般的に売られているポーションの色と、その品質である。

どう見ても、自分の知る赤のポーションよりも質の悪い青のポーションが、とても貴重品の様に取り扱われているのだ。

余りの質の悪さに、ナザリックの基準では到底使用されないようなレベルである。

それに関しては、アイテム管理もしていた身として断言出来るだけに、この世界が今までいた「ユグドラシル」よりも相当レベルの低い世界だと、本当に実感させられていた。

《多分……全体的にレベルが低いのでしよう。

技術面でも、能力面でも……戦闘やその他諸々の能力面でも。

その反面、私たちがいた「ユグドラシル」にはなかった、武技やタレントなどと言う能力も存在している。

やはり、ある程度直接関わらないと判らない部分が、多々あると思うべきでしょうね。

》

心の中でそう呟くと、続いて客層とそのレベルをざっくりと見定めていく事にした。もちろん、人のレベルに関して言うなら、ざっくりとしか判断できない。

だが、装備品に関しては見れば、ほぼ正確に判断出来る自信がある。

その辺りは、伊達にナザリックの宝物殿を預かっている訳ではないのだ。

例え、現時点ではナザリックから逸れてしまった迷子だとしても。

頭の端でそんな事を考えつつ、不自然にならない様に視線を巡らせて、この店の客の身に付けている装備や様子を伺ってみる。

やはり、街の通りで感じた最初の印象通り、荒くれ者が目立つ割に、装備のレベルはかなり低い。

彼らの装備を基準に考えると、ギリギリ許容範囲内の遺産級レガシィに収め、目立たないようにした筈の自分の装備ですら、かなり上等な代物と言う扱いになってしまいうだろう。

これに関しては、あまりのレベルの低さに溜息しか出てこなかった。

一応、現時点で身に着けている装備は、全て遺産級レガシィで纏めてある。

これより低い装備は、実は手元に宝物殿に納めるレベルではないと看なされ、存在していなかったのだ。

もちろん、パツと見ただけではそんな風には思えないだろう。

最初の村に滞在した夜に、装備にクラフトマンのスキルで手を加え、解り難いようにしたのだ。

その結果、この世界でかなり高級品に類するものなのだが、一見ただけでは判別す

るのが難しい様に細工出来ただろう。

しかし、様々な細工は施してあるものの、最初の段階を知るフレット達の様子はそんなに変わらなかった。

どうやら、彼らの自分への対応から考えても、貴族か富豪の子息だと思われるのだろう。

「……まあ、そんな彼らの勘違いを、私自身が好都合だと否定せずに放置した結果なのですけれど、ね……」

実際は、身に着けている装備だけじゃなく、自分の言動や人当たりなどの物腰の柔らかさも、貴族などの子息だと思わせていると言う事に、こうして旅を始めて数日たっていても気付いていない、「箱入り息子」のバンドラズ・アクターである。

事実、フレット達を待ちながら薬品店の中のものをも物珍し気に見ている様子は、周囲から見ても世間知らずのお坊ちやまにしか見えなかったらしい。

端の方で、何やらコソコソと耳打ちしあっている荒くれ者たちがいる事に、バンドラズ・アクター自身も気付いていたが、特に注意を払う事はしなかった。

今の段階では、相手から特に何かされた訳ではないし、下手にこちらが警戒する素振りを見せる方が、危険だと判断したからだ。

昨夜の山賊相手の戦闘によって、ある程度までは自分だけで何とか出来る力量がある

事は判っている。

だからこそ、注意を払っている様子を見せるよりも、気付かない振りをする事にしたのだ。

正直、この場にいる面々のレベルは精々十前後までしかなく、そんな雑魚相手に一々気を張る方が面倒だったからである。

暫くそんな視線に晒されつつ、パンドラズ・アクター側も観察すると言う状況が続いていた所に、フレット達がやってきた。

漸く、採取してきた薬草の卸値に関する商談が成立したらしい。

少しだけ、不満そうな顔をしているところを見ると、予想していたよりも薬草が安く買い叩かれたのだろう。

まあ……今年の方は、今回が最後の収穫だと言う事からなのか、パンドラズ・アクターの目から見ても多少質の落ちた物も混ざっていたから、ある意味では当然の結果だった。

フレット達には厳しい言い方かもしれないが、ポーションの質の良し悪し一つで命に係わる可能性もあるのだ。

その素材となる薬草の質が悪ければ、良いポーションを作るのは難しいだろう。

例え、今年の方として最後の収穫の薬草だとしても、質が悪いものを持ち込んでおい

て高価格で買い取って貰えると思う方が、はつきり言つて間違つてゐるのだ。

《……今回の事で、少しでもフレット君がそれを学ぶと良いんですけどね。》

もし、彼が今後もこの家業を続けていくならば、これは絶対に学習するべき事だった。これからも、似たような事を続けていけば、そのうちこの店で取引する事も出来なくなるだろう。

職人側からすれば、ポジションを作る為に必要な薬草が手に入らば、別に彼と取引を続ける必要はないのだ。

それこそ、他から質の良い薬草が持ち込まれるようになれば、むしろ相手にされなくなるのは質の悪い品を持ち込み続けるフレットの方なのだから。

《まあ、そうなつたとしても、それはあくまでも彼や彼の村の人たちの自業自得でしょう。

自分たちが側に住んでいる山でしか採れない薬草だからと、品質保持を考えないでいる方が悪いのです。

それこそ、他所の山で発見されていないだけかもしれないのですから。》

受け取つた代金を手に、少しばかり不機嫌そうな様子を隠そうともしないフレットに対し、パンドラズ・アクターはそんな事を思う。

だが、わざわざその事を自分から指摘してやるつもりはなかった。

確かに、フレットやフアラに対して感謝している部分はそれなりにあるが、あくまでもそれなりでしかない。

そもそも、この場限りの縁だと判っている相手に対して、そこまでしてやる義理を感じなかったのだ。

《……ですが、まあ……【袖すり合うも多生の縁】と言いますからね。

どうやらあの様子では、本当にこの場で自由に出来る金額はほとんどなさそうな気配ですし。

フアラ嬢など、予定と違って涙目になっていますよ。

あれでは、今日の昼食はまともに食べられなさそうな感じですか。

一応、色々とお世話にもなりましたからね。

……仕方がありません、今日の昼食は奢ってあげる事にしましょう。》

ちよつとだけ、フレット達に気付かれないように苦笑を浮かべると、すぐにそれを引つ込めて声を掛けた。

「もう、この店での用件は終わったようですね。

それでは、そろそろ冒険者組合まで案内をお願いしたいところなのですが……少し、おなががいましてしまいました。

もし宜しければ、冒険者組合まで案内していただく前に、一緒に昼食を取りませんか

?

村からこの街まで、長い道程を案内していただいたお礼として、今日の昼食は私が奢らせていただきます。

なに、遠慮はいりませんよ？

あなた方に出会わなければ、そもそもこの街まで辿り着くまでもっと時間が掛かっていたのは間違いないのですから。」

ニコニコと、人当たりがいい笑顔を浮かべながらそう誘えば、途端にパツと笑顔を浮かべるフアラと、どこか不満げな顔のままのフレット。

どうやら、フレットのにはフアラにテキパキ交渉して、颯爽と高収入を手にする様を見せようと思っていたらしい。

だが、実際は交渉はもたついて昼過ぎまで掛かるわ、予定していた高収入が手に入る処か村に持ち帰る分を確保するのがやっとの有様。

彼女の前で格好を付け損なった所へ、パンドラズ・アクターから「昼食を奢る」と言われ、ますます立場がなくなってしまうのだろう。

とは言え、先程からのフレットの様子では、この申し出を断らない筈だ。

ここで、パンドラズ・アクターからの申し出を断ると、今度はこの街の中で昼食を取れなくなるだろう。

元々、小さな村は物々交換が基本であり、金銭のやり取りは殆どない。

そんな彼らにとつて、この街で普通にやり取りされている食事代すら、そう簡単に手に入るものではないのだろう。

だからこそ、山で収穫した薬草による収入は貴重な物であり、危険を冒して街まで運ぶ役を請け負っているフレットは、予定額よりも多く得た場合の金額の一部を、自分の自由に使える立場だったと推測出来た。

《……その予定が外れば、自分の自由に来れるお金も無くなりますからね。

当然、ファラ嬢に対して格好を付けて、この街で美味しい昼食に誘う事も出来ないでしょう。

男の立場としては、面目丸潰れなんでしょうが……これもまた良い経験だと諦めていただきます。

そもそも、あなたたちは私が同行していなければ、こうしてこの街に辿り着く事すら出来なかつた身の上なんですよ？

まあ……彼らの中では、そんな事実は存在していない事ですし、わざわざ説明するつもりもありませんけどね。》

つらつらと思考を滑らせつつ、パンドラズ・アクターはフレットの返事を待つ。

どうやら、彼の中で様々な折り合いをつけるのに、予想以上に時間が掛かっているら

しい。

お年頃の少年としては、気になる女性の前で格好が付けられない事が、余程悔しいよ
うだ。

それが終わるまで、パンドラズ・アクターは急かす事無くのんびりと待っていたの
だった。

それから、揉める事無く昼食を三人で済ませた所で、予定通りフレット達の案内で冒
険者組合までゆつくりとした足取りで歩いていた。

この街には、フレットの親戚が済んでいるらしく、今日はこれから要なものを買い出
しした上で、この街に泊まる予定らしい。

流石に、これから買い出しをした後に街を出るのは、通い慣れた彼らでも躊躇するか
らだそうだ。

そんな話を交わしつつ、のんびりとした足取りで街の中を進んでいく。

背後に、あの店からずっと付け回している輩がいるのだが、フレット達は気付いてい
ない様子だし、わざわざそれを彼らに言う理由も思い付かなかった。

多分、彼らにそれを教えて場大騒ぎして、かえって大事に発展してしまうだろう。

こちらは、相手にしないと決めている以上、それでは困るのだ。

出来るだけ、彼らにはこの件に関わらせないまま別れなくてはいけない。

面倒事を引き起こして、目立つのは困るのだから。

そうして、予想よりも街の入り組んだ道を進んだ所で、漸く目的の場所が見えてきた。

ここまで来れば、もう彼らに道案内して貰う必要はないだろう。

フレット達もそのつもりらしく、分かれ道の所で立ち止まった。

「……それじゃ、ここで別れだなサティ。」

もし、村の近くに来るような事があつたら、また顔を出してくれよ？」

「さようなら、サティ。」

短い間だったけど、とても楽しかったわ。

あなたの素晴らしい物語が聞けて、とても嬉しかった。

本当にありがとう。」

口々に別れの言葉を告げる二人に、パンドラズ・アクターも別れの言葉を告げる。

「フレット君、ファアラさん。」

この数日間、大変お世話になりました。

また、縁があればお会いしましょう。」

スツと、軽く頭を下げるパンドラズ・アクターに、彼らは笑顔で手を振るとその場を

立ち去って行った。

暫くその場で彼らを見送りつつ、自分たちの後を付けまわしていた相手が彼らの方に行っていないか、気配を辿って確認する。

どうやら、目的は自分だけで二人は対象外らしい。

それを確認し、「面倒が一つ減った」とホッとすると、パンドラズ・アクターはゆつくりと冒険者組合の方へ向けて歩き始めた。

付けまわしている相手が、何を目的としているのかはつきりと判っていない以上、これから先も暫くは気付かない振りで放置でいいだろう。

もし、昨夜よりも大人数で取り囲まれそうになったら、「ゲイト転移門」を発動させて昨夜の夜営地の側まで逃げればいい。

それなら、早々簡単に追ってくる事は出来ないだろう。

この世界において、「ゲイト転移門」を使えるレベルの魔法詠唱者は、まずいない。

使える者がいたとしたら、それは「ユグドラシル」関係者だと判断していいだろう。

そんな低レベルだ。

もし、「ゲイト転移門」で逃げた先に何らかの手段を使って追ってきたとしても、あそこなら幾らでも戦い方がある事を、昨夜の盗賊相手に十分学んでいる。

人目につかない場所さえ確保出来れば、この程度の相手を殲滅する事など、今の自分

でも造作の無い事だった。

まあ……殲滅はあくまでも最終手段でしかない。

むしろ、この程度の事で手間取っているようなら、モモンガの元に自力で辿り着くなど、夢のまた夢のような気がするのだ。

この程度の事など、困難などではないと簡単にやり過ごせなければいけない。

そう思っていたのに……

数十分後……パンドラズ・アクターは、言い様の無い苛立ちを抱えながら、冒険者組合の受付カウンターの前に立っていた。

面倒な事は、纏めてやってくるようです

目の前で、深々と頭を下げる受け受けの女性を目の前に、パンドラズ・アクターは苛立ちを募らせていた。

本来なら、女性相手ならば持ち前の紳士ぶりを発揮して、さらりと流していただろう、彼らしくない態度になったのには、それなりに理由がある。

それは……

パンドラズ・アクターが、女性に対して紳士ぶりを発揮出来なかった理由は、フレットたちと別れた直後から始まっていた。

最初は、妙な違和感から始まり、微妙な体臭が鼻について吐き気を伴うようになってかと思うと、くらくらと目眩までしてくるようになって。

フレットたちと別れて、わずか数分で発生した症状は、確実にパンドラズ・アクターの精神を削いでいく。

もちろん、これからは一人で旅をする予定な上に、先程から誰かにつけられている以上、弱つているところを見せれば付け入られるのは間違いないので、その不調を表に出

したりしてはいないが。

さて、なぜ急にパンドラズ・アクターは急に体調を崩したのだろうか？

その理由を一言で言うなら、パンドラズ・アクターは「人酔い」してしまったのだ。高レベルのNPCでありながら、「人酔い」などあり得ないと思うかもしれないが、そもそも「人酔い」は病気ではなく、人混みになど慣れない環境に対して精神的なストレスから発生する症状である。

つまり、パンドラズ・アクターの場合は、いつ発症してもおかしくない症状なのだ。

元々、彼は人と殆ど接する事がない宝物殿の領域守護者である。

当然だが、街を歩き交う沢山の人々の中に来るなど、初めての事で。

ナザリックと共に来ていたのなら、多少のストレスを感じたとしても特に問題なかったのだ。

だが、今のパンドラズ・アクターには仲間は一人も居ない上に、自分のレベルを犠牲にしてまで守るべき秘宝を抱え込んでいる。

そのストレスは、本人が考えていたよりも遥かに強いものだったのだろう。

また、レベルダウンと外装を人間種にした事も、それに拍車を掛けていた。

異形種であれば、種族特性などで精神面に關する補正もかかっていたのだろう。

だが、外装を人間種にした上に種族レベルの大半をレベルダウンで失った事により、

その補正効果がほぼなくなっていったのだ。

その結果、小さな村程度の人数なら全く問題無くて気付かなかったのだが……この規模になって、初めて「人酔い」の症状が出てきたのである。

パンドラズ・アクター本人がその事に無自覚だったのは、街の中に入ってから今までフレットとファアラの二人が一緒にいたからだ。

この世界に来て、初めて接した相手がずっと側に居たことで、精神的に安定していたのである。

その為、二人と完全に別れた事で表面化したのだ。

残念なことに、こんな事になるのは当然だが初めての為、何が起きているのか良く判っていないくて。

まさか、街の中で一人になった途端、こんな自分でも訳が分からない症状が出るとは全く予想していなかっただけに、どう対処していいのか戸惑いが隠せなかった。

それでも、原因は漠然と街に入って一人になったからだとは、気付いているのだ。

まあ……フレット達と別れてすぐに症状が出れば、それ以外に思い付かないだろう。

念の為、異常耐性の腕輪を服の下に身に着けているのだから、毒などの異常が起きているとは思えなかった。

だが、ナザリックを捜して一人で旅を続けるならば、街を避けていては情報を集める

事は出来ない。

その為、これは慣れるしか無いとパンドラズ・アクターは気分がこれ以上悪くならない様に気を付けつつ、ゆっくりと目的地に向かって歩き始めた。

そうして、出来る限り気分が悪くならない様に、できるだけ人混みを避けるように時間を掛けて冒険者組合まで辿り着いたパンドラズ・アクターだったのだが。

冒険者登録に為に、組合の建物の中に入るとすぐに視線を巡らせ、目的の場所は見つかったのだ。

そこに向かうべく、ゆっくりとした足取りで冒険者登録受付をしているカウンターへ歩き出した途端、面倒事に巻き込まれたのである。

一応、銀級^{シルバー}先輩になるだろうの冒険者に、いきなり絡まれると言う形で。

絡んできた冒険者曰く、

【装備は大層な品の様だが、お子様には分不相応の代物じゃないか。

親が金持ちだと、子供でも良い装備が買って貰えるみたいで……ホント、良い身分だねえ。

親の金を、自分の実力だと勘違いしているような、お前のような年端もいかない子供が冒険者など、周囲の足を引っ張るだけだ！

それとも、冒険者が金持ちの道楽だと思っているのか？

これだから、ガキはどうしようもねえな！」

と言うものだった。

確かに、パンドラズ・アクターの今の外見は、フレット達と変わらない位の少年だと
言っつていいだろう。

装備品などが、通常よりも立派な物であり、パツと見た感じが貴族などの裕福な存在
に見える事も承知している。

しかし、だ。

実際の自分の實力は、目の前で絡んできた相手よりも数段上である。

その事を、昨夜の経験から自負している身としては、この罵倒は納得がいかなかった。
そもそも、何をもってこちらの實力を判断しているというのだろうか、この相手は。

言われない罵倒に対し、正直言っつて酷く苛立ちを感じて仕方がない。

ないのだが、ここで相手の挑発に乗っつて、腹を立てるのも馬鹿らしい。

それに、余り体調も良くない状態で、こんな面倒事に自分から乗っつてやる必要もない
だろう。

素早く思考を巡らせ、そう判断した。パンドラズ・アクターは、につこりと笑っつて見せ
ると、するりと相手を避ける。

「忠告、わざわざどうもありがとうございます。」

一応、これでも第三位階の攻撃魔法と支援魔法、後は弓と剣が自分を守る程度までは使えますので、ご心配なく。

それと、この装備は全て自作の物ですので、別に大した代物ではありませんよ。」

チヨイツと、自分が着ている服を指先で摘んで見せながらさらりと言って退けると、パンドラズ・アクターの言葉に驚いて目を見開いている相手を避けて、受付カウンターへと足を進める。

事実、今、パンドラズ・アクターが身に着けている物は、全て自作の物だ。

これは、「ユグドラシル」時代に、あまのひとつ達生産系ギルドメンバーの構成の重なる部分を踏まえ、全て生産系スキルが問題なく使用出来るかどうかの確認の為に、モモンガから与えられた素材を使ってパンドラズ・アクターが自作した遺産級レガシーの装備一式である。

これなら、他の手元にある装備に比べて安価なものだし、多少ダメージを与えたとしてもある程度の素材さえあれば自力で修復可能だった。

自分の手で、どの様に作り出したのか覚えているのだから。

何より、万が一壊してしまっただとしても、モモンガに対してそれ程罪悪感を覚えなくて済む。

そういう判断から、幾つもあった候補からこれを選んだのだが。

これは、あくまでもパンドラズ・アクターの主観であり、周囲から見ればとんでもない話だった。

そもそも、この世界の生産レベルでは一般的に出回るのは上級アイテムまでであり、特級ですら余程の事が無いと出回らない、冒険者でもミスリル以上のものが装備する上級装備である。

聖遺物級ともなれば、王侯貴族でもなかなか手が出ない伝説級の装備として扱われている事を考えれば、遺産級の装備を自作している時点で、鍛冶師などの生産系職業側からすれば、喉から手が出るほど欲しい人材と言っている。

そんな、出来れば後方で生産系職業として技量を揮って欲しい相手が、冒険者として登録するなどと言う状況を、素直に受け入れるのは流石に冒険者組合側としても難しいというのが、彼らの主張だったのだろう。

「すいません、冒険者の登録をお願いしたいのですが、こちらで宜しいでしょうか？」

丁寧な口調で問えば、受付カウンターの女性はにっこりとした笑顔を浮かべた。

「はい、冒険者の登録はこちらで承っております。」

ただ……その前に、一つ確認をさせていただいても宜しいでしょうか？」

一旦間を置いて、こちらの装備一式を確認するように覗き込んでくる。

数回視線が上下した後、彼女は改めて口を開いた。

「そちらの装備は自作と言う声が、私共の元にも聞こえてまいりました。

なので、念の為に確認させていただくのですが、登録は本当に冒険者で間違いありませんか？

冒険者ではなく、鍛冶師等の生産系の職業が希望の場合、こちらでの受付ではなく生産者組合の方になりますので、ご案内させていただきますが。」

是非、そうであつて欲しいという色を滲ませながらの言葉に、パンドラズ・アクターは眉を潜めた。

こうして、わざわざ冒険者組合まできて「冒険者の登録を」と明言しているのに、何で間違えていると思うのだろうか。

確かに、全て装備は自前の作品だ、

だが、装備を自作したからと言って、別に鍛冶師を名乗ったつもりもなければ錬金術師を名乗ったつもりもない。

それなのに、まるでそれが当たり前といったようなこの対応をされた事に、苛立ちを覚えるのは当然だった。

普段なら、それでも感情を表に出すことなく、上手く言葉を紡いでやり過ごしていただろう。

【人酔い】で体調不良でさえなければ。

体調不良は、パンドラズ・アクターに余裕ある対応をする事をさせなかった。

故に、気付けば不快さを全面に出して口を開いていたのである。

「……確かに、これは自作で間違いありませんが、私は冒険者の登録をお願いしたいと申し上げた筈です。

もし、私がこの装備一式を作る事が出来るという理由で、冒険者としての登録が出来ないとおっしゃるなら、別にこちらで登録しなくても結構です。

すぐにこの街から出立し、別の街で改めて冒険者としての登録を希望するだけです。ら。

「どうも、お邪魔いたしました。」

そもそも、冒険者には素性を問う事無く誰でも簡単になれるものと、フレットたちから聞いている。

だから、冒険者組合があるこの街で登録しようと考えただけで、別に急いで冒険者になる必要はないのだ。

路銀の都合もあるし、フレット達とも先程この冒険者組合の手前の道で無事に分かれた今、先を急いでも構わないだろう。

それこそ、移動手段に飛行フライを使えばかなり時間は短縮できるはずだ。

何より、先程からしつこいほど自分に向かう不愉快な視線達から、離れられるだろう。情報収集が出来ないのは少し痛い、この体調不良と不快な視線の中で無理に続けても、ろくなものは得られない可能性が高い。

そう、頭の中で既に今後の方針をさくさくと決めたパンドラズ・アクターは、迷う事無く受付カウンターの前から移動しようと、身を翻そうとして……受付嬢から引き留められたのである。

「あの……お待ちください！」

今の対応は、全てこちらの間違いです。

そちらのおっしゃる通り、どなたでもこちらのカウンターで申請をされれば、冒険者に登録する事が可能です。

「ご不快な思いをさせてしまい、大変申し訳ございませんでした！」
彼女が、自分に出来る最大限の謝罪の意を示しながら。

そして……話は冒頭へと戻る。

席を立ち、深く頭を下げながらそうパンドラズ・アクターに向けて、精一杯の謝罪の

言葉を述べる受付嬢。

なぜ、彼女がここまでするのか、その対応を不思議に思う者も多いだろうし、別に気にしなくても冒険者のなり手などそれこそ掃いて捨てるほどにいますと云う者もいるだろう。

しかし、だ。

問題なのはそこではない。

どう考えても、今回は受付の言動に明らかにミスがあった。

彼女の立場に立てば、あくまでも「間違えていたら大変だから」と言う思いがあったのかもしれない。

それでも、何も詮索する事無く「冒険者になりたい」と申し出た相手を受け付けるのが、彼女の役目だ。

例えば、自分がどう思ったとしても、それを口に出して問いただすような真似はするべきではなかったのである。

だからこそ、彼女は自分が役職に外れた行動をとった事を、パンドラス・アクターに謝罪しているのだ。

あくまでも非は彼女にあり、パンドラス・アクターでなくても同じように詮索して、勝手に大丈夫なのかと確認を取られたら、不愉快になって同じ様な事をするだろう。

それなのに、何故か大声で謝罪を口にした彼女の行動によって、周囲からの視線が非常に痛く感じられた。

興味本意で向けられているだろう視線が、パンドラズ・アクターの中の体調不良と結び付いて不快さを増していく。

正直……彼女の謝罪を無視してこのまま出て行っても構わなかったのだ。

だが、それをするそのまま面倒な事になりそうな気がしたので、仕方なくそれを受け入れる。

「……判りました。

そこまでおっしゃるなら、今回は水に流してここでの冒険者としての登録をお願いします。

ですが、私は人捜し中ですので、この街はもちろんですがこの国にもそれ程長く滞在出来ないかもしれません。

それでも、冒険者としての登録をここで行っても大丈夫なのですよね？」

念を押すように、パンドラズ・アクターは静かな口調で問い掛ければ、受付嬢は当然だというように頷いて同意する。

「もちろん、大丈夫です。

冒険者は、自分の意志で所属する国を選ぶ事が出来ますから。

それでは……登録の手続きの説明に入りたいと思いますので、登録されるお名前を教えてくださいいただけますか？」

「では、サーティ・ルウでお願いします。」

パンドラズ・アクターとしては、きちんと登録受付さえしてもらえれば文句がない。多少の不快さは残るが、ここで揉めるよりも素直に名前を名乗り、手続きを済ませる方が面倒がないと名前を口にした。

あちらも、これ以上こちらを怒らせたくないのだろう。

素早く手続きを済ませていく。

そうして、冒険者となる為に必要な手続きと講習を、無事に終了させたのだが……

面倒事とは、一度起きると立て続けに起きるものらしい。

多少揉めはしたものの、この街で冒険者として登録出来たので、一先ず宿を取って今日もう休みたいと、本気でパンドラズ・アクターは思っていた。

それ位、思わぬ気疲れをってしまったのだ。

冒険者組合までの道すがら、フレットからこの街の宿屋でも比較的安くて安心して泊まれる場所を教えられていたので、そちらへ足を向ける。

宿屋は、表通りから一本奥に入っただけの場所だ。

そんな場所で、バカな真似をする者は居ないだろうと思っていたのだが……道を曲がった途端、レベル十五前後の集団に取り囲まれてしまったのである。

その中に、先程絡んできた銀級の冒険者や薬品店から付け回していた相手がいる事から考えて、こちらの装備を横取りしようと言う所だろうか。

一応、こちらの実力は伝えたものの、相手が本気にしていないのかもしれない。

もしくは、街の中での魔法行使が有事以外では法に抵触する事から、集団で取り囲めば抵抗出来ないだろうと判断したのだろうか？

魔法が使えなければ、身を守る程度の剣と弓の腕前など、それなりに仕えたとしても子供と大人の対格差を考えれば、特に問題ないと思ったのかもしれない。

どちらにしても、不愉快極まりない行為を受けている事は、間違いなかった。

「……なあ、坊や。」

装備を自作する位腕の良い鍛冶師なんだってなあ。

確かに、坊やが身に着けている装備は一級品だ。

そんな腕がいい鍛冶師の坊やが、一人で旅しようなんて危ねえぜ？

人捜しするのだって、人手がなけりや時間ばかりかかって仕方がねえもんだしよ。

だから、物は相談だ。

うちのチームに入らねえか？」

パンドラズ・アクターを取り囲んだ集団の中で、一際装備がいい男が声を掛けてくる。装備は見た所上級で固められていて、本人のレベルは二十前後といった所だろうか。なるほど、この男がこの集団のリーダーなのだろう。

《……薬品店で目を付けられたのかと思っていました、もしかしたらこの街に到着した辺りから付け狙われていたのかもしれませんがね。

装備だけなら、鑑定スキル持ちが見れば直にレベルが判明してしまいますし。

そこで、貴族の子供だと思つてちよつかいを掛けたら予想外の付加価値が判明して、こうして直接声を掛けてきたといった所でしようか。》

先程、自分に絡んだ男がこのチームの斥候役といった所なのだろう。

自分たちにとって、様々な意味で味方に引き入れたら有益そうな新人に目星をつけ、こうして勧誘するための試金石の役割を請け負っていたからこそ、あんな風に絡んできたのかもしれない。

貴族の子弟で、高価な装備を平然と着こなしている時点で、実家からの支援があると思つたのだろう。

絡まれた理由には納得したものの、別の意味で不愉快に感じた。

実力が段違いの劣る相手に、こんな風に試されて気分が良い訳がないのだ。

元々、体調不良だったところに大勢で囲まれた事も、不愉快さに拍車を掛けていく。

しかし、相手はパンドラズ・アクターの機嫌が悪くなっている事など欠片も察することなく、自分たちの都合だけで勝手に話を進めていた。

「なに、それほど話は難しいもんじゃない。

坊やが、俺たちのチームに入って装備を全員の分作り続けてくれるなら、これからの坊やの護衛と人捜しの手伝いをしてやろうって事さ。

それだけの装備を俺たち全員に作ってくれるなら、むしろ坊やの人捜しが終わるまで面倒見てやってもお釣りがくる位だしな。

そっちだって、人手があれば人捜しも早く終わるだろう？

どうだ、お互いにとって悪い話じゃねえだろうし、坊やさえ良ければ今からでも冒険者組合に戻って登録を追加してくれねえか。」

こちらの意見などまるで聞かず、一方的に話を進めて決定事項の様に冒険者組合へ行くと言い出す男と、同意する様に頷いている取り巻きたち。

その、あまりにも身勝手に不愉快すぎる言動に、パンドラズ・アクターは小さく溜息を吐いた。

お互いにとってなどと言うが、正直言ってパンドラズ・アクターにはメリットなど殆どない。

パンドラズ・アクターがしているのは、単純な人捜しではないのだから。

モモンガやナザリックの特異性を考えれば、むしろこの手の男たちの手を借りるのは最悪の方法だと言っているだろう。

それが判っていて、こんな身勝手極まりない提案をパンドラス・アクターが受ける筈がなかった。

「……勝手に話を進めないでください。

申し訳ありませんが、そのお話はお断りさせていただきます。

確かに、私は人を捜しておりますが、これは私自身の師から与えられた課題のようなもの。

少なくとも、あなたたちのような方々の手を借りていては、例え師を見付けたとしてもその課題を終了させたというお許しをいただく事は出来ないでしょう。

そう、これは私自身が自分の足で師を見付け出すという、そう言う類の課題なのですから。

後、この装備と同じレベルのものをあなたたち程度の者の為に「制作しろ」などと、随分と欲深い事を言い出すものですね。

そもそも、あなたたちはこれを作り出す為に必要な素材を、どの様に捻出するつもりなんですか？

先に言っておきますが……このレベルの装備を作る為には、それに応じたレベルの素

材が必要なのですよ？

この辺りなら……そうですね、鉾石ならミスリル銀は最低でも必要ですし、他にも飛龍フイロンの爪と牙など、あなたたちでは高レベル過ぎて手が出ない様な、様々なモンスターが素材になっています。

装備に必要な素材の確保から、私にすべて任せると言う話なら、最初からお話にならないレベルですね。

以上の理由から、改めてお断りさせていただきます。

……宜しいですね？」

相手に合わせ、口を挟む隙を与えずにつらつら断る理由を連ねてやれば、顔を強張らせて怒りを耐えている様子の男達。

まさか、自分たちの提案が断られると置いていなかったのだろう。

これだけの集団相手に、見た目に弱そうな鍛冶師であり魔法詠唱者である少年が、こんな啖呵を切ると思わなかったのかもしれない。

そんなもの、相手の勝手な思い込みでしかなく、パンドラズ・アクターには関係がないので、あつさりとは放置する事を決定して、彼らの脇をすり抜けようと一歩足を踏み出した瞬間である。

自分との実力差も判らず、パンドラズ・アクター物言いには腹を立てたらしい、取り囲

んでいた男の一人が既に抜き身で持っていた剣で切り掛かってきたのは。

誰もが、このタイミングでは避けられないと思って見ていたのだろう。

取り囲んでいた人垣で、剣を上手く隠していた上で背後から一気に切り掛かったのだから、周囲の反応は当然の反応かもしれない。

むしろ、彼らにとってこれは常套手段の一つであり、失敗した事が無い攻撃だったのだ。

先制攻撃が成功し、相手の心を恐怖で折るまでが一連の流れであり、今回もそうなる筈だったのだ。

しかし、今回ばかりは相手が悪かったと言っているだろう。

何故なら、パンドラズ・アクターは冒険者組合で自己申請した以外の戦闘手段を山ほど持ち、それこそ彼ら程度の相手なら片手で捻る事が出来るだけの実力者だったのだから。

そう、この彼らにとって常套手段である不意打ちの先制攻撃も、最初の段階で抜き身の剣の存在とその位置を把握されており、彼にとっては別に不意打ちですらなかったのである。

最初から、断れば即座に攻撃が来ると判っていれば、パンドラズ・アクターにとって避けるのはそれほど難しくはない。

体調不良も手伝って、暴漢相手に手加減などしてやる余裕はなかったので、パンドラズ・アクターは背後から切り掛かってくるのを感じた瞬間、大きく一步踏み出して距離を取る事で剣を避け。

次の瞬間には、一旦開けた間合いを更に大きく一步踏み込む事で一気に詰める。

相手がその素早い動きに怯んだ瞬間、剣を握る手を掴んでその鳩尾に一撃、全身の体重を乗せた掌底を放つと、その衝撃に相手の身体が前のめりになり、そのままぐらりと体が揺れて。

掌底を食らい、その衝撃に膝から崩れ落ちる相手に対して、更に首筋に手刀で追い打ちをかけて完全に意識を刈り取ると、パンドラズ・アクターはこの集団のリーダーに対して視線を向けた。

静かに、周囲を威圧するような鋭い視線を向けられ、思わず怯む相手の様子を気にする事無く、パンドラズ・アクターはゆっくりと口を開く。

「……自分たちに従わなければ、実力行使という訳ですか。

まるで、盗賊と変わらない行動をするのですね、あなたたちは。

これでは、胸元の銀級のプレートが泣きますよ？

後、自己申告したのは特に私が得意な分野だけで、一応武芸一般は師から仕込まれていますのであしからず。

では、これで失礼させていただきます。

もう……二度と絡んでこないで下さいね。」

につこりと笑みを浮かべながら、体調不良など欠片も悟らせない様にゆるりと殺気を放って威圧すると、その場にいた全員が一気に震え上がり、恐怖で腰を抜かすように崩れ落ちていく。

その様子を一瞥しただけで、何の興味もないかのように身を翻すと、パンドラズ・アクターはそのままその場を立ち去った。

これ以上、彼らに関わり合いになりたくなかつたからである。

結局、パンドラズ・アクターがこの街の宿屋を取ったのは、一泊だ。

フレットに勧められた宿屋は、比較的安価で安全なだけではなく、宿屋の亭主も人が良く色々と気遣いが出る人だったから、その場で宿を取ることを決められたもの、もしそうでなければそのまま街を出ていただろう。

それ位には、嫌な事が重なり過ぎてこの街の住人に対して良い感情を抱けなかつたのだ。

この宿は、どちらかと言うと冒険者たちよりも商人たちが利用する事が多いらしく、下手に絡んでくるものもいなくてとても気が楽だった事も、その宿屋で一泊お世話になる決め手になったと言っていていいだろう。

用意された食事も、値段と比較して十分満足いくものだった。

これならば、確かにフレットが進めてくれるだけはあると思いつつ、疲れが溜まっていた昨夜は早々に部屋に引き上げたのである。

とにかく、一晩ゆっくりと過ごす事が出来たのは、今のパンドラズ・アクターにはありがたかった。

ゆっくり休めたお陰なのか、昨日程体調が悪くないからだ。

今日は、半日掛けて街の中を急いで見て回りながら簡単に情報を集め、ついでに普通の冒険者として必要最低限の品を揃えて偽装する必要がある。

そう、偽装。

正直言つて、モモンガから与えられたアイテムのおかげで、パンドラズ・アクターは飲食などの必要がない。

だが、普通の人間は食事をしないなんて事はありえない訳で。

そう考えると、本来なら必要のない携帯食などを買い集めないと、例え数日間の移動でもそれが何回も重なれば不自然に思われるだろう。

昨日の一連の出来事で、自分には大した装備ではないと思って自作したと言った事も、この世界ではとんでもないレベルの技術に当たる為にトラブルを招き入れる事を目の当たりにさせられたのだ。

出来るだけ、周囲から目立たない様に行動する必要性を、この一件で思い知らされたと言っているだろう。

故に、誰の目から見ても不自然な行動は、どうしても避ける必要があった。

こんな事から、この国に出入りしているというスレイン法国の関係者に目を付けられたら、それこそモモンガ様たちを捜すのに余計な手間が掛かるからだ。

「……本当に煩わしい事ばかりですが、仕方がありませんね。」

全て、モモンガ様の元に辿り着く為に必要な事だと思つて、割り切る事に致しましう。

それにしても……路銀、思ったよりも掛かりそうです。

一応、宿代は先払っていますし、買い込むのは携帯食と地図程度で済むでしょうから、次の街までは持つと思います……

こんな事なら、二日前の山賊達の襲撃の際、彼らを倒した証になる様な物を、手に入れておくべきでした。

私の持つ、消耗品系の下級アイテムを売り払うという手もありますが、それは最終手

段にしておきたいですし。

この装備程度で、昨日のあの騒ぎですからねえ。」

マイナー・ヒーリング・ポジション

下級治療薬だけで、それこそ昨日と同じ騒動になりそうな、そんな気がしてとてもこの街では売り払う気にはなれない。

そんな事をしたら、今度こそ生産者組合に所属して、この街でアイテムや装備を作り続けるように強制されそうである。

まあ……パンドラズ・アクターにはそれに従う義務も義理も責任もないから、無視して先へと進むだけなのだ。

ただ、その事を伝令か何かで国中に伝えられ、指名手配のような扱いにされてしまつては流石に困るのだ。

せっかく、この姿で「道化師の請願」の能力と「至高の方々」の能力の双方を安定させている状況なのに、それが使えなくなるのは困るなんてレベルでは済まない。

うっかりすると、どちらかが暴走して大騒動になるか、逆にどちらも一時的に使用不可能になる可能性すらあるのだから。

「とにかく、これ以上は目立たない様に気を付けないと、それこそどこで足元を掬われるか判りませんからね……」

「本当に、俣ならない」と溜息を付きつつ、朝食を取る為に一旦部屋を後にしたのだった。

出立、そしてかの方との再会しました!

一通りの買い物は、昼前までに済ませる事が出来た。

宿屋の主に、事前に少し多めの金額を払っていたので、昼食後の出立でも問題ない。

聞いた話では、パンドラズ・アクターの様に少し多めに宿賃を払い、午後からの出立と言うケースは割と普通にある話なんだそうだ。

組合で仕事を捜す冒険者や、商品の仕入れの関係で出立が遅れた商人など、その理由人は人それぞれだが、確実に部屋を確保するために打つ手の一つらしい。

これは、他所の街でも使える手だから覚えておくといいと、こつそりと教えてくれた店の主には感謝するしかないだろう。

とにかく、購入してきた品物を中心に手早く荷物を纏めると、出立の準備を整えていく。

この街での情報収集は、既に諦めていた。

昨日の段階で、半ば諦めて出立する事を視野に入れていたし、今日の買い出しの際にそれとなく何か変わった事が無かったかと水を向けてみたが、何も情報は得られなかった。

もちろん、街の中核である行政関係者から話が聞ければ、もしかしたら違う話が聞けたのかもしれないが、それもあくまで可能性の一つでしかない。

最初に立ち寄った、ラグラン村の村長宅で見せて貰った地図通りなら、この辺りはこの竜王国の中でも辺境に当たるのだろう。

この近郊で起きた異変なら、もしかしたら少しはその事を知っている者がいるかもしれないが、中枢や反対側の地域の情報となるとあまり入ってくる機会はないと思うべきだった。

まして、その異変が起きた場所が他国ともなれば、まずここで情報を得られる事はないと思うべきだろう。

それなら、色々と自分には面倒事しか起きなかったこの街で、無理に情報収集をする為に滞在期間を伸ばすより、サクッと切り捨てて次の街を目指した方が、余程有益だろう。

《昨日は、受付の女性が謝ってくれた事で場は収まりましたが……私が装備を自作出来ると知れば、その後に絡んだ輩の様なものがまた出るとも限りませんからね。

それに……この話が武器や装備などを作る鍛冶師達の耳に入れば、もつと厄介な事態に発展する可能性だってない訳はありません。

面倒事を避けるなら、早々にこの街は出るべきでしょう。》

一応、体調は持ち直してはいるものの、万全の状態かと問われれば違うと言ってしま
うレベルだ。

そんな状態で、出来るだけ面倒事を避けようとするのは、当然の状況判断だと言え
るだろう。

今、この街にいるのは自分よりもレベルの低い相手ばかりだが、いっとうその状況が
変化するかなど判らないのだから。

そう、さくさくこれからの行動を決めると、パンドラズ・アクターは出立の準備を終
えた荷物を片手に、部屋を後にしたのだった。

本当に、それは予想外の再会だった。

いや、再会と言って良いのかも分からない。

それ位、現状に対してパンドラズ・アクターはひどく混乱していた。

何故なら、かの人と今の姿の自分は初対面だからだ。

そう……目の前で倒れ付して昏倒している、ウルベルト・アレイン・オードルとは。

そもそも、彼がこんな風に昏倒してその場に倒れている原因は、間違いなく自分にあつた。

あの後、宿屋の主人たちにお礼を告げ、そのままその足で街を出て数時間が経つた頃だろうか。

街で購入出来た、高価な割に余り書き込みの無い地図を広げつつ、それでも街道筋だけは確認出来る事に安堵の息を吐いたのは、街を出てすぐの事。

とにかく、次の街を目指して山間の街道を旅していたところ、突如背後に転移門^{ゲート}が出現したかと思うと、そこから伸びてきた異形の手に肩を掴まれたのだ。

本当に突然の事で、びっくりしと勢いでつい肘打ちを繰り出したところ、そのまま相手の急所にクリーンヒットしたらしい。

戸惑いつつ、気絶させてしまった相手を確認すれば、それがウルベルトだったと言う落ちちなのである。

咄嗟の事だったとはいえ、転移門^{ゲート}が現れた瞬間に、本来なら気付くだろう【至高の四十一人】が纏う、支配者としての気配が殆どしなかつたのも、容赦ない攻撃になつた理由の一つだろう。

他人の空似と言う可能性は、まず無い。

かなり薄れてしまっていてはいるが、それでも目の前のウルベルトからはちゃんと「至高の四十一人」の気配が感じられる。

そしてもう一つ、はつきりと断言出来る理由が、パンドラズ・アクターの中にはちゃんとあった。

今、目の前に居るウルベルトの身体の大半を構築しているのは、間違いなく自分がかつて作ったゴーレムであり、その中に揺らぐ様にかの方の魂が見え隠れしているのが判ったからだ。

一体、何がどうなった結果、今のウルベルトの状態が引き起こされてしまっているのか、パンドラズ・アクターには判らない。

しかし、だ。

このまま、この場にウルベルトを寝かせておくのは、流石に問題があるだろう。

幸い、手持ちのアイテムにはグリーン・シークレット・ハウスもある。

少し街道から離れて山の中に入れば、グリーン・シークレット・ハウスをさえそうなる場所はあるそうだし、ここで迷っていてかの方を人目に晒すのは憚られた。

何故なら、ウルベルトは人の姿ではなく、本来の悪魔の姿ままで倒れているのだから。

一応、種族的に考えれば非力ながらも、ウルベルトを抱えて移動する位の力はパンド

ラズ・アクターにだつてある。

山道を歩く事にも随分慣れたので、そう苦にする事なく丁度いい広さがある場所を見つけると、パンドラズ・アクターはアイテムボックスからグリーン・シークレット・ハウスを取り出した。

素早くそれを展開し、ドアを開けると中へと急ぐ。

少しでも早く、かの方をきちんとした場所で休ませたかったからだ。

寝室のベッドまで、出来るだけ揺らさないように運んで静かに横たえると、少しでも身体が楽になるように靴を脱がせる。

そのままでは、足が締め付けられていて窮屈だからだ。

意識がないまま、きつちり服を着込んでいる状態は、息苦しいと聞いた事がある。

それなら、着ている服のボタンを緩めて少しでも楽な状態にしようと胸元に手を伸ばした所で、その手を捕らえられた。

「……一応、あの攻撃は正当防衛と言うのは解りますが……」

その前に、私と気付いて欲しかったですね、パンドラズ・アクター？」

うつすらと目を開けた、ウルベルトの手によつてだ。

だが、それよりもパンドラズ・アクターは別の事に気を取られて目を見開いていた。

どこことなく、からかうように楽し気に揺れた口調で名を呼ばれたからだ。

今の自分は、本来の姿からかけ離れている筈なのに、どうして自分が誰なのか分かったのだろうか?

気にはなるものの、今はそんな事を考えている場合じゃない。

とにかく、慌てて手を引こうとしたのだが、掴まれた手は緩む様子がなくて。

むしろ、こちらが慌てている様子すら楽しんでいるらしく、ガツチリ掴んでいた手を気付けば強引に引き寄せられていた。

当然、そんな事をされれば、現在の外装の体格的に力負けするパンドラズ・アクターは、問答無用で体勢を崩す訳で。

そのまま、いつそ鮮やかと言っている程の手際で体勢を入れ換えられ、すっかり身動き出来ないように、がっちり下半身の上に乗られて、足まで押さえ込まれていた。

「……さて、現状についてあなたが知る限りを説明したいただきましようか、パンドラズ・アクター。」

正直、モモンガさんの所の子にこんな真似をするのは、とても本意なんですけどね。

流石に、出会い頭でいきなり攻撃された身としては、自身の安全が第一なので我慢していただきましよう。」

やはり、断言するように名を呼ばれてしまえば、ウルベルトはきちんと自分を認識出来ているらしいと、理解する事ができた。

「……なぜ、私だとお分かりになったのですか？」

今の私は、ウルベルト様ドッベルゲンガーが知る二重の影の素のままの姿ではございませんのに。

出来れば、今後の参考にさせていただきますので、お教えいただけませんか。」

状況説明を求められている事は理解していたが、それでもこちらの方が気になってしまつて仕方がない。

だつて……今の自分の外見は、モモンガのリアルリアルの幼少期のお姿をモデルに、ある程度の年齢まで健康的に成長させた上で、そこから幾つか弄ることによつて、他人の空似程度まで変質させた姿をしているのだ。

リアルを知るウルベルトなら、もしかしたらモモンガと勘違いする可能性はあれど、一目でパンドラズ・アクターだと見抜くなど、到底不可能なのである。

たからこそ、何を根拠に己がパンドラズ・アクターだと見抜いたのか、知っておきたかつたのだ。

攻撃出来ないように、ガツチリと組み敷かれたまま、逆に疑問を口にしてくるパンドラズ・アクターに対して、ウルベルトは仕方がないと言わんばかりに首を竦めた。

この様子だと、見分けられた理由を言わない限り、梃子でもこちらの問いに答ええないような気がしたからだ。

「……まあ、答は簡単な話なんですけどね。

最初、クリアボヤンス【千里眼】であなたの姿を見付けた時は、モモンガさんがリアルな姿で歩いていると本気で思いました。

ですが、よく見てみれば知っている姿よりもかなり幼いものでしたし、何より髪型などが違っていましたからね。

その時点で、あなたがモモンガさんではないと、判断しました。

他人の空似も疑いましたが、クリアボヤンス【千里眼】の対象は【私の作成したアイテムを所持している者】でしたので、ナザリックに無関係では無い筈。

モモンガさんの外見になれて、私のアイテムを持つナザリックの者と限定すれば、答は自ずと導き出されます。

そう、モモンガさんの手で生み出された、グレート・ドッベルゲンガー上位二重の影であるパンドラズ・アクター、貴方だと。」

につこりと笑うウルベルトに、パンドラズ・アクターは流石だと思った。

一応、所持品には探知阻害の魔法を掛けてあった筈なのだが、それを無効化させて探し出されるなど、正直言って想定外だったのだ。

あまりの驚きに、目を見開くパンドラズ・アクターを見て、ウルベルトはとても楽しみに更なる答えを教えてくれる。

「もちろん、今の話が通用するのは、私が作った中でも特別なアイテム数点だけなのですよ。」

そうですね……その対象になるのは、私自身の主力装備か貴方とデミウルゴスに与えた装備一式、後は……モモンガさんの手元にある筈のアイテムが一つ位でしょうか。

私としては、どれか一つにヒットすれば良いかと思つた程度の行動だったので、予想外の存在をあるべきではない場所で見付けてしまい、つい冷静さを失つてしまつていたようです。

……
これでも、一応お前を見付けてから、一日間を置いてから転移門を開いたのですが……

まあ……それはそれとして。

元々、穏和で人一倍気遣いの人であるモモンガさんお手製で、大袈裟な言動などさえ除けば、カルマ的にも中立で穏やかな気遣いの出来るお前が、私に対してあんな風に攻撃してきたのも、突然背後に転移門が開いて触れられた事で、驚かせてしまったからでしょう?」

拘束していた片手を外し、頭を撫でながら問うウルベルトに、パンドラズ・アクターは素直に頷いて見せた。

事実、急に背後に現れた手に肩を掴まれた事に驚き、「至高の存在」の気配が薄すぎて

察知が遅れた為、その手から逃れようとして咄嗟に肘打ちを放ったのだから、あながち間違いではない。

素直に同意したパンドラズ・アクターに、今度はウルベルトが問うような視線を向ける。

先程の質問に対する答えを、ウルベルトは求めているのだろう。

どうやら、ウルベルトも一人でこちらの世界に転移させられたらしい。

しかも、自分の作ったゴーレムを核にして、今の姿を取っているのだとしたら……：相
当の負担が彼には掛かっているだろう。

良く見れば、彼の身に付けている装備は今の自分と同じ位のレベルのものばかり。

確かに、本来の主力装備をモモンガに預けているとは言え、もし、他の誰かが一緒だとしても装備のランクが落ち過ぎである。

そう考えれば、彼が単身こちらに来てしまったのは間違いない。

だからこそ、パンドラズ・アクターを見付けた途端、居ても立つてもいられずに文字通り飛んできたのだろう。

そう、ウルベルト側の状況を理解してしまえば、何を話せばいいのか自ずと答は出る訳で。

念の為に、注意深く様子を窺ってみたが、精神支配系の魔法が使われている形跡も無

さそうである。

なら、全て話しても問題ないだろうと、パンドラズ・アクターはゆつくりと口を開いた。

「あの、今更ではありませんが……随分とお久しぶりでございます、ウルベルト様。

いえ、こうして完成してからは初めてお会いするのですから、初めましてが正しいのでしょうか？

それは、さておき。

実は……」

今まで、この世界に宝物殿に一部ごと飛ばされた自分と、ウルベルトの身に起きた状況を確認し、お互いの情報を擦り合わせていくために。

安全なはずの場所で、ウルベルトの姿が揺らいだのは、パンドラズ・アクターが自分の状況がある程度まで話し終え、次に調べた事を話し始めた時だった。

一瞬、何が起きたのか判らなかつたのだが、すぐにそれはウルベルトの側にある限界

が来たのだと、悟る。

ウルベルト自身、こうなる事が既に判っていたのか、不承不承と言う感じで何とも言い難い顔をしていても、それ自体に驚いている様子はなかった。

「……あー、そうか。」

気絶していても、能力発動時間は変わらないのか……

つたく、これじゃ本当に俺一人じゃ、街に潜り込んでもどうにもならない事が確定した訳だな。」

溜息交じりに、そう先程とは打って変わった変わった砕けた口調で呟いた姿は、パンドラズ・アクターが現在のウルベルトの核になっていると思っていた、自分の作った小さな試作品のゴーレムのもので。

ある程度予想していても、その姿はやはり衝撃的なものがあつた。

あの、「至高の御方々」の中でも、「悪」を嘯く偉大なる魔法詠唱者たるウルベルトとは、思えないほどの愛らしさを漂わせる姿だったからである。

自分で作っておいてなんだが、まさかこんな事態になるなんて思いもよらなかつたのだ。

もし、まさか自分の作ったゴーレムの中に、ウルベルトの魂が一時的とはいえ入る状況になると判っていたら、もつと違う形で作っていただろう。

この状況を生み出した一因に、「至高の御方」の一人であるタブラ・スマラグディナが関わっている事を、まだパンドラス・アクターは知らないが故に、そう余計に思ってしまった。

どことなく、肩を落とした様子で申し訳なさそうにしているパンドラス・アクターに気付いたウルベルトが、その理由を察して苦笑を浮かべながら軽く手を振る。

「あー……うん、まあ……そう、気にするな？」

別に、お前が悪い訳じゃないから。

この姿になった事に關して言うなら、悪いのはどちらかと言うとタブラの奴で……じゃなくて、タブラさんですからね？」

すっかり、小さくなつた事で今までパンドラス・アクターの前で「悪^ウの魔法^ル詠^ベ唱^ル者^ト」としてのロールプレイを忘れていた事に気付いたウルベルトが、慌てて言い直す。

しかし、そんなウルベルトに対して首を傾げながらパンドラス・アクターはあっさりと言った。

「どうぞ、ご自分のお話しのし易い口調になさつても、私は気に致しませんよ、ウルベルト様。

【ユグドラシル】でナザリックの宝物殿に居た頃、よくウルベルト様は私の前で崩した口調でお話になっていらつしやいましたし。

むしろ、先程の口調の方が、私としては親しみを覚えるのですが……それではお嫌いですか?」

つい、懐かしそうに語るパンドラズ・アクターの言葉に、固まったのはウルベルトだった。

「……パンドラは、「ユグドラシル」の頃の記憶、あるのか?」

どこか狼狽えた様子で、ウルベルトからそう尋ねられたパンドラズ・アクターは、にっこりと笑顔で頷き同意する。

「はい、全部ではございませんが……ウルベルト様とモモンガ様に関しては、色々とお話しいただいた事を覚えております。」

例えば……と指折り数えながら、一番記憶に残っている事を上げていけば、いつの間にか小さな体を更に丸めて蹲るウルベルト。

どうやら、パンドラズ・アクターが例として挙げた内容は、どれもウルベルトにとって過去に葬ってしまいたい内容ばかりだったらしい。

まあ、「ユグドラシル」では色々パンドラズ・アクターの前で、思っていた事を吐き出していたのだから、そうなっても仕方がないのかもしれないが。

なぜ、急にウルベルトがそんな反応をしたのか、理由がいまいちわからず、不思議そうに首を傾げるパンドラズ・アクターだった。

ウルベルト様と色々な確認をしてみました

ウルベルトから、彼の現状を聞かされたパンドラズ・アクターは、今後の行動に幾つか修正を入れる事を決めていた。

当初の予定のままだと、ウルベルトを本来の姿に戻すのはかなり難しいからだ。

彼の本体を目覚めさせるのに必要な命は、全部で十万。

それを、様々な理由で弱体化している二人で集めるのは、かなり至難の技だと言えるだろう。

わ

実際に、パンドラズ・アクターが今使える魔法の中に、召喚系のものは少ない。

一応、魔術を優先したウルベルトの構成から、パンドラズ・アクターが継承して使用出来る魔法の中で、今回の一件に対して使えそうなもので一番効果が大きいのは、第十位階の「最終戦争・悪」アーマゲドン・イビルだが、それでも一度に回収出来る数はそれほど多くない。

と言うよりも、その魔法を使用しても問題ない環境を作り出すのは、この国ではかなり難かった。

何せ、隣の国はスレイン法国である。

せつかく、パンドラズ・アクターが手間を掛けて召喚しても、彼らが気付いて討伐隊を出されては困るのだ。

もちろん、この場合の彼らの討伐対象は、悪魔だけではなく召喚した自分達にも当て嵌まるだろう。

むしろ、こちらにその手立てがあり、コントロール出来るのなら、捕らえて支配下に置きたくなるはずだ。

ピーストマン相手になら、これを仕掛けて本国側を潰した方が何倍も楽だからだ。

そして、その召喚した者が人間なら、自国に重要ポストを与えられるだろうが……人間以外だと話が変わる。

こちらが異形だと知られたら、何をされるかわからない位に危険な国なのだから。

その点から考えても、もう少しスレイン法国から離れなくては、ウルベルトの本体を目覚めさせるのに必要な命を集めるための魔法を使用するのは、難しかった。

少なくとも、スレイン法国から離れた場所……地図で見る限り「カツツエ平野」辺りまで移動してからでない、悪魔の召喚は危険過ぎるだろう。

それに、少しだけ噂を集めた感じでは、今挙げた「カツツエ平野」は、常に霧が立ち込めアンデッドが犇めく場所だと言うので、多少の無茶が利くと判断してのだ。

もちろん、モモンガやナザリツクの面々と合流してから、改めてその手段を考えると

言う方法もあるだろう。

だが、その時点でモモンガが建てていた指針によっては、それを邪魔する事になってしまう可能性もあつて。

パンドラズ・アクターとしては、出来ればそれは避けたかった。

ギルド長であり、様々な責任を負っている可能性は高いからだ。

このパンドラズ・アクターの意見には、ウルベルトも賛成してくれている。

本人的にも、余りモモンガの負担になるのは、本意ではないらしい。

ウルベルト的には、理由はどうあれ最終日に会いに行くことも叶わず、こんな面倒事を抱えた状態では、会わせる顔が無い心境なのだろう。

そう考えてしまう、ウルベルトの気持ちはよく判った。

パンドラズ・アクターも同じ状況なら、モモンガに迷惑を掛けるよりも、自分で何とかする方を選ぶからだ。

まあ、それが難しいと判断したからこそ、こうして自分と合流するのを選んだのだろうが。

《それを素直に選んでいただけで、本当に良かった。

もし、ウルベルト様が無理を押して自分一人で動くことを選択されていたとしたら……多分、こうしてお互いに顔を会わせるのは、かなり先の話になっていたでしょうね。

今のウルベルト様では、かなり行動の制限が有るようですから。

それに……無事にこうしてお会いするのも、難しかった可能性すらあり得ますし。》

自分の手のひらに乗る程度の、今の小さなゴーレムの姿では、モンスター相手に生き延びる事は出来ても、スレイン法国関係者が相手では、かなり厳しい筈だ。

一応、ウルベルトのレベルは百のままだが、実際に戦闘になった時に発揮できる実力は精々レベル六十まで。

なぜ、そのレベルだと判断したかと言えば、この小さなゴーレムボディに問題があるからだった。

パンドラズ・アクターが、このゴーレムを作った時はまだ未完成の頃。

あくまでも、能力テストの試作品と言うことで、細かな性能までは指定されなかった。

だから……パンドラズ・アクターは、作り上げたウルベルトの姿のゴーレムの能力値を、完全に彼に似せる事はしなかったのだ。

その結果、外見の完成度はそれなりだが、能力値は微妙にバランスが悪くなったのである。

それでも、本人の希望に沿う形で決めた部分もあった。

可能な限り、「攻撃系の魔法詠唱者の設定して欲しい」と、言う希望である。

だから、攻撃の威力はそのまま残しているが、HPが四割でMPは六割となり……そ

の縛りは、割と解り難くその実力を削る結果となっていた。

しかも、本来の器から今のゴーレムに、複雑な術式が絡み合い強引に入り込んでいる都合上、MPの消費率が五割増しに増えている。

その予定外の消費率の加算が、地味にウルベルトの魔法が使える回数を削るので、手数はあれど実際にどこまで使えるかと問われたら、微妙だった。

この状態で、ウルベルトが集団相手に戦闘になった場合、壁役無しでは高速詠唱で高位魔法を使うしか、戦い方の選択肢が無い。

しかも、だ。

実際にその方法を取ったとしても、数回でMP切れで戦闘不能になる可能性が高いのである。

実に、大きなハンデが課せられた結果、本来のレベルよりもかなり低く力を見なければならぬのが、今のウルベルトの実力なのである。

ウルベルト本人からすれば、忸怩たる思いだろう。

パンドラズ・アクターのように、最初からそれを覚悟の上で選んだわけではないのだから、その気持ちは特に強い筈だ。

それでも……ウルベルトの口から語られた、この状況になるまでの話の内容を思えば、こんな形でも生きてくれているだけましだと本当に思う。

生きてさえ居てくれれば、モモンガとの再会を共に果たす事も出来るのだから。

「それで、今後の事なのですが……まずは、ウルベルト様の戦力強化をするべきだと、私は愚考致します。

今のウルベルト様のままでは、ご自分で満足に動く事も難しいかと。

それならば、今の私に出来る形での手立てを、全て試させていただきたい。

もつとも……今の私では、本来の力を十全に使える訳ではございませんので……出来ることにも限りはございますが。」

スツと、胸元に手を当ててそう告げると、ウルベルトは微妙な顔をした。

バリバリと、頭の後ろを掻きながら溜め息を吐くと、こちらの顔を真っ直ぐに見る。

その仕種に、何かウルベルトの不興を買ってしまったのかと、パンドラズ・アクターは不安になった。

それでなくても、ウルベルトが今の姿になった原因の一つに、自分が関わっている事を、本気で申し訳なく思っていたのだ。

もし、ウルベルトの不興を買っていたのだとしたら……今すぐ【バウ・オブ・クラウン道化師の誓願】を発動させるつもりだった。

モモンガの親友であり、自分に様々な知識を与えてくれたウルベルトの不興を買って、このままでない。

代価としてレベルを支払い、能力変更による強制変更でまず溜め込んだ【世界級アイテム】等のアイテムを吐き出し、「ウルベルトを本来の姿に戻す事」を願えばいい。

それが済んだら、更に代価にレベルを払って能力変更して、ナザリックへ彼とアイテムを強制転送すればいいのだ。

もちろん、ウルベルトを元に戻すなら、十万の命の代わりなのだから相当のレベルを払う事になるだろう。

場所も解らないナザリックへの、ウルベルトと今手持ちのアイテムを全て送り届けるなら、これもまたかなりのレベルが必要な筈だ。

能力変更を二回すれば、そこで支払うレベルはもう絶対に戻らない。

それが必須条件だからこそ、かなり無茶な願いすら叶えられるのである。

パンドラズ・アクターが、自分一人の時にその選択をしなかったのは、万全の状態でもモンガの元に戻るためだった。

だが、ウルベルトとこうして合流し、彼をナザリックに戻すためなら、例えば自分が万全の状態で無くなったとしても、許される気がするのだ。

そう……最悪、代価を支払い過ぎて消滅してしまっただとしても。

覚悟を決めて、その事を進言する為に、パンドラズ・アクターが口を開こうとした途端、コツンツと何か固いもので頭を叩かれた。

ハツとなって視線を上げれば、いつの間にか飛行フライで目の前に浮かんだウルベルトが、仁王立ちするかのように胸を張りつつ、片手に持った火スタッフ・オブ・サラマンダー竜の杖を眼前に突き付けていて。

また、ウルベルトの不興を買ってしまったと、心の中でしょんぼりとしたパンドラズ・アクターに、ウルベルトは手にした杖を振り回しながら口を開いた。

「こら、パンドラ。」

お前、さつきからなにか勘違いして、不穏なことを考えてないだろうな？

言っておくが、俺が溜め息を吐いたのは、お前が原因じゃないんだぞ！

むしろ、今更ながら情けない事に気付いて、自分で自分に呆れただけだから。

勘違いした挙げ句、変に暴走した思考で行動したら、それこそ怒るぞ、パンドラ。」
ツンツと、杖でパンドラズ・アクターではなくサーティの外装だから存在している鼻を突つくと、コホンツと軽く咳払いをした。

どうやら、話す内容を切り替えるために、わざと咳払いしたのだろう。

その様子は、どこか気恥ずかしそうだと、パンドラズ・アクターは感じた。

「……………たく。」

俺はな、こうして自分の意思で動いているお前に会えた事を、本気で喜んでるんだからな。

そうだ、一つ言つてなかつた事を思い出した。

良く、一人で宝物殿の宝を守る為に、ここまで頑張つたな、パンドラ。

お陰で、ナザリックの財を確実に守れている。

だからな、俺から言うことがあるなら、それは「ありがとう」だと思う。

本当は、再会してすぐに言うべきだったんだろうが、他に優先事項が多すぎて忘れてたな。

一人だけで、あれだけのものを抱えて旅をするなんて、精神が休まる暇もなかつただろう？

本当に……今までよく頑張つたな、パンドラズ・アクター。」

杖をしまうと、小さな掌を伸ばしてパンドラズ・アクターの額に触れると、優しく慈しむ様に撫でる。

それは、また完成前に感じた手の暖かさと同じで……

ホロホロと、気付けば涙がパンドラズ・アクターの瞳からこぼれ落ちていた。

ただ、嬉しくて堪らなかつた。

己の創造主のモモンガではないが、親友であるウルベルトから「今まで頑張つた」と認められ、本当に嬉しくて堪らなかつたのだ。

今まで、モモンガとウルベルトしか、まともにパンドラズ・アクターを気にかけてく

れる人は、ほぼいなかった。

もちろん、戯れに現れては知識を落として行く人ならば、幾らでもいたが、それも短い期間で顔を見なくなつて。

だから、そのうちの一人から認められ労いの言葉をかけられたことが嬉しくて……涙が溢れ止まらなくなつてしまつたのである。

そんな風に、ホロホロと泣き出したパンドラズ・アクターの頭を、ウルベルトは小さな手で優しく撫でる。

小さな手が触れる場所は、とても少ない。

それでも、頭を撫でる手が触れた場所から温かさが広がつて、ますます涙が止まらなくなつて。

結局、パンドラズ・アクターが泣き止むまでに、かなりの時間が掛かつたのだ。

泣き止み、冷静さを取り戻したパンドラズ・アクターは、とても恐縮してしまつたのだが、ウルベルトは氣にした様子はない。

むしろ、どこかホツとした様子も見える。

その様子に、自分の行動が彼を怒らせた訳でも、不興を買つた訳でも無いことに安堵しつつ、それならばなぜウルベルトが溜め息をついていたのか、パンドラズ・アクターはその理由を知りたくなつた。

まずは、ウルベルトと話しやすい状況を作るべきだろう。

いつまでも、飛行フライをウルベルトの使わせている訳にはいかない。

彼のMPを考えれば、負担が大きすぎたからだ。

幾つか候補があったが、一番ウルベルトに抵抗を感じない方法とを考え、グレート・クリエイト・システム上位道具作成を唱えてウルベルトサイズの椅子とテーブルを作り出した。

同じく、作った書斎の机と椅子の上に乗せ、その下にビロードを敷いた台座を作り出して高さを調整する。

そうして、対面で話しやすい状況を作り出すと、そこにウルベルトを招いた。

サイズこそ小さいが、意匠と質感には拘って作ったそれは、ウルベルトに相応しいものだ、パンドラズ・アクターは自負している。

その拘りが、ウルベルトにも伝わったのだろうか？

何度か、そのデザインを確認するように見ては、軽く頷きながら手で触れて更に確認し、ドカツと座って満足そうに笑う。

その様子を見ただけで、ウルベルトがそれを気に入ってくれたのが良く判った。

ウルベルトが気に入るものを作れた事に喜びつつ、パンドラズ・アクターは更に彼の為に用意する必要がある物を思い立つ。

そこで、一先ずそれを用意する為にこの場から退出するべく、ウルベルトに声を掛け

た。

「すいません、ウルベルト様。

本来ならば、先にお茶と茶菓子を用意すべきでしたのに……

まだまだここから話は長くなりますし、今からでもご用意させていただきますね。

すぐに戻りますので、暫くそちらでお待ちいただけますか。」

それだけ言い残すと、パンドラズ・アクターはウルベルトに向けて軽く頭を下げ、部屋を出るとキッチンへと向かった。

己の創造主であるモモンガとは違い、ウルベルトは飲食可能なことから、目を覚ました時点でお茶を用意するべきだったと、パンドラズ・アクターは己の不手際を反省する。

幾ら、自分の本職が執事やメイドでは無いとはいえ、「至高の四十一人」の一人であるウルベルトに、何も持て成しを用意せずにいた自分が、情けなかった。

だからといって、ここで落ち込んでいて待たせるくらいなら、手早く済ませるべきだろう。

テキパキとお茶の準備をしながら、パンドラズ・アクターは簡単に出来る茶菓子を頭に浮かべた。

手早く出来るのが、まず第一条件だろう。

本来の姿のウルベルトが相手なら、クリームとフルーツをふんだんに使ったクレープ

を出すのが、多分一番早い。

しかし、今の姿では食べ難いだろう。

何となく、出せば喜んで貰える気はするのだが……

《お優しい方ですし、お出ししたら食べていただけるとは思いますが……流石に、その身をクリームまみれにする訳には参りませんからね。》

どう考えても、食べている途中でクリームと格闘して、どこかをクリーム塗れになりそうな気がするのだ。

しかも、食べ終わった頃にそれに気付き、自分の姿に慌てる姿すら浮かんで。

そうなる事が予想付いているのに、それを出すのは失礼に当たるだろう。

端から見て、その姿がどんなに愛らしく見えたとしても。

何か無いかと、素早くこのグリーン・シークレット・ハウスに備え付けの調理道具を

見渡し、中に電子レンジを見付けると、パンドラス・アクターは手抜きである事を理解しつつ、早く出せる事を優先した。

電子レンジが使えるならば、短時間でケーキが作れるからだ。

本来なら、【至高の御方】に出すには相応しくない事など、百も承知だ。

その事を重々承知しつつ、それでもその菓子を出すのを決めたのは、これ以上ウルベルトを待たせない為である。

それでも、掛けるべき手間はちゃんと掛けて、丁寧に作り上げたケーキは、フォンダンシヨコラだ。

これならば、最初から小さく切り分けて提供出来るし、アイスクリームなども添えて見栄えも良く出来る。

飲み物は、紅茶と珈琲のどちらも出せるように保温ポットに準備を済ませたところで、パンドラズ・アクターはウルベルトが待つ部屋へと急いだ。

「お待たせしてしまつて、申し訳ありません。

お茶と茶菓子ををご用意させていただきました。

ウルベルト様が、紅茶と珈琲のどちらがお好みなのか存じ上げませんでしたので、どちらも飲めるようにご用意いたしました。どちらをお出ししましょうか？

茶菓子は、フォンダンシヨコラをご用意しましたので、どちらでも構わないのですから、それに合わせて選ばれるのも宜しいかと。

それと、一つお詫びを。

時間がありませんでしたので、茶菓子の用意に少々手抜きをいたしました。

本来ならば、ウルベルト様にお出しするには価しいものなのですが……時間も無ければ専用の料理人も居りませんし、私の手製の品でお許しただけませんか？」

紅茶と珈琲のサーブ用ポットやカップ、出来立て熱々のフォンダンシヨコラを載せた皿など、お茶と茶菓子をウルベルトに提供する為に用意した品々を載せた、ワゴンカートを押しながら部屋に入ると、ウルベルトは待ちきれないといった様子でこちらを見て、笑みを浮かべている。

カップは、小振りのミルクピッチャーを参考にして、それと同じ位のサイズで作り出した物だし、皿は味見などに使う小皿で丁度良い感じの物があつたので、今回はそれをそのまま使わせて貰った。

少し、深めの皿に熱々トロトロのフォンダンシヨコラを盛り、備え付けの冷蔵庫の中に入っていたバニラアイスを、ケーキの半分の量で添える。

そうすると、まだ熱いシヨコラにバニラアイスが溶かされ、お互いに混ざりあつてさらに美味しくなるからだ。

先に、フォンダンシヨコラを盛り付けた皿を出したところで、ウルベルトにどちらを選んだのか尋ねるために顔を見ると、ニツと笑いながら紅茶を指した。

「それだけ濃厚なシヨコラの香りに合わせるなら、紅茶の方が良いだろう？」
香りの感じだと、甘いフレーバーティーって感じじゃ無さそうだし。」

その言葉に、パンドラズ・アクターはにっこり笑い返しながら頷いた。

ウルベルトの指摘の通り、パンドラズ・アクターが用意したのはダージリンの中でも

最高級のフィナー・ティピー・ゴールデン・フラワリー・オレンジ・ペコーのセカンド・フラッシュである。

これなら、フォンダンシヨコラの味に負けることなく、それでいて仄かな自然の甘味がする、素晴らしいお茶なのだ。

せめて、お茶だけでも最高のものを考えたからこそ、パンドラス・アクターはこれを用意したのである。

「では、ミルクになさいますか？

それともストレートで？

レモンもございりますが、私のお薦めはストレートが宜しいかと。

「ご用意した茶菓子里に飲み物を合わせるなら、ストレートの口当たりが一番合うと思われるので。」

ポットを片手に提案してみれば、ウルベルトは少し悩んだ素振りを見せ、皿とカップを何度か見た後、何にするか決めたようだった。

こちらを見ると、笑顔でカップを指す。

「……そうだな、まずはパンドラのお薦めのストレートー貫おうか。

沢山用意してくれたみたいだし、お茶も茶菓子里もお代わりすれば、色々楽しめるだろう？」

その言葉に、ウルベルトに対して恭しく頭を下げると、パンドラス・アクターは丁寧な小さなカップに紅茶を注いだ。

溢さない様に気を配りつつ、カップをウルベルトの待つテーブルに置くと、最後にケーキを食べるためのスプーンとフォークを用意する。

ウルベルトの手のサイズを考慮して、持ち手は細く握り易くしておきながら、先の部分は口に合わせて少し大きく食べ易くした特別製の。

これなら、今の姿のウルベルトでも扱い易いだろう。

それを、ウルベルトサイズで作ったお手拭きと共に、小さな皿に並べてテーブルに置くと、再度ウルベルトに頭を下げてから自分の席に着いた。

「それでは、お召し上がり下さいませ、ウルベルト様。」

笑顔で勧めれば、待ち兼ねたようにお手拭きで手を拭い、カップを手を取った。

まずは、紅茶を飲んで喉を潤すらしい。

一口飲んで、ほうっと満足げに一息漏らすと、コクコクと頷きながらももう一口飲む。

次に、フォークを片手に取ると、丁寧な一口分にケーキを切り分けて、アイスを絡めながらパクリと頬張った。

途端に目を見開き……次の瞬間、蕩けるような笑みが溢れた。

それこそ、ウルベルト本人は自覚なくとも、パツと背後に花が散る幻想が見えるほど

で。

その様子に、喜んで貰えた事を悟ると、パンドラズ・アクターはニコニコと笑みを溢しながら、自分の分のフォンダンシヨコラを取り分けた。

電子レンジを使い、ある程度手抜きで作った割りに、切り分ければトロトロとしたチョコレートが溢れる出る。

自分も、紅茶を選んでカップに注ぐと、まずは一口飲む。

ダージリンの中でも、セカンドフラッシュ特有のkokと「マスカットフレーバー」と呼ばれる天然のほんのりとした甘さが口の中に広がって、思わずほうつと息が漏れた。

次に手にしたスプーンで、スツとケーキに差し込むとすりと一口掬い上げる。

アイスも一緒に掬って口に運ぶと、トロリとしたチョコレートとアイスが絡み、温かい中に冷たさが混じっていて、ホロホロと口の中で蕩けていくのが堪らなく美味しかった。

予想より、上出来な出来栄に安堵しつつフォンダンシヨコラを口にしてしていると、正面でカチャリと音を立てて皿にフォークが置かれた事に気付く。

スツと視線を向ければ、取り分けた分を全て食べ終えたウルベルトが、まだ物足りない様子で皿を見詰めていて。

この手抜きでも、気に入っていただけただけの事に喜びつつ、パンドラズ・アクターは素早

く立ち上がると、ウルベルトに向けて笑顔で笑いかけた。

「どうやら、お気に召していただけたようですね。」

もし宜しければ、先程ご自身がおっしゃったように、お代わりされてはいかがですか？

まだまだ沢山ございますし、トッピングもバナニアイスから生クリームに変えられますが……先程と同じ様にアイスでお食べになられますか？」

「どうなさいますか？」と、首を傾げながら問えば、ウルベルトはどちらにしようか迷ったらしい。

すぐに返事をせず、残りの紅茶を飲み干しカップを置いてから、口を開いた。

「せっかくだし、生クリームをトッピングしたのも食べてみたいな。」

今のバナニアイスのだって、凄く旨かった。

パンドラに言わせると、このフォンダンシヨコラは手抜きみたいだが、これ事態も凄く旨い。

だから、トッピングが、変わったらどんな感じになるのか、凄く楽しみだ。」

上機嫌で皿を指し示しつつ、ニコニコと出したフォンダンシヨコラを誉めちぎるウルベルトに、パンドラズ・アクターは恐縮してしまった。

ここまで誉められてしまうと、かえって申し訳なくなってしまう。

それでも、喜んでいるウルベルトに水を差すのは申し訳なくて、お代わりのフォンダ
ンシヨコラに少し多目の生クリームを盛り付けてテーブルに載せた。

空になったカップを手にとると、次の紅茶を用意し始め……先程の言葉を思い出して
手を止める。

「今度は、何をお出ししましょうか？」

先程はストレートでしたが、今度はミルクになさいますか？

それとも、いつそ珈琲になさいますか？」

飲み物を変えても良いように、カップはまだ二つほど用意してあるので、珈琲を希望
されてもすぐに対応出来る。

そう思ったからこそ、パンドラズ・アクターは提案したのだが、ウルベルトは苦笑を
浮かべただけだった。

「あー、そうだな……今度はミルクティーにしてくれ。」

後、そのお代わりを用意し終わったら、そろそろ話を始めようか。

のんびりとお茶を楽しむのは、またいつでも出来るだろうし。

それに……今度は、お前が作った飯も食ってみたい。」

出された皿を取りつつ、ウルベルトはそう切り出した。

いつまでも、お茶を楽しんでいる場合ではないのは、パンドラズ・アクターも理解し

ているので、素直に頷くと紅茶とミルクの量を加減しつつを同時にカップに注いで、少しミルクたっぷりのミルクティーに仕上げる。

正式なミルクティーの淹れ方としては、作法がなっていないと言われそうだが、今のお姿のウルベルト自身にミルクを淹れて貰うのは少々難しいだろうし、この方が混ぜる手間も少ないので、パンドラズ・アクター自身は好んでいる方法だ。

完成したミルクティーをテーブルに置くと、改めてウルベルトと向かい合う。

お互いに一旦手にしていた物を置き、落ち着いた所でウルベルトが口を開いた。

「それじゃ、現在抱えている問題を幾つか打開する方法を考えようか。」

とは言え、パンドラのレベルダウンその物は、ワールド世界級アイテムによる強制的な部分が大きくて、対処法はあまり無いからなあ……

やるなら俺の方が……その前に、幾つか実際の能力値の確認が必要だろうな。

あくまで、今の俺に判っているのは、大体の威力でしかないし。

それで……対策として、パンドラならどうする？

俺としては、アイテムを使って修正するしかないだろと思ってるんだが……」

そこで言葉を切ると、ウルベルトはこちらの様子を窺いながらフォークでフォンダンシヨコラを口に運んでいる。

その言葉に耳を傾けながら、パンドラズ・アクターは自分なりにウルベルトの強化方

法を考えてみた。

確かに、今のウルベルトの実際の能力値は正確なものが欲しい。

幾つか、手持ちのアイテムの中に、魔法補正やMP消費率の低下効果を持つものはあるが、それを単純に使用するよりも、きちんとウルベルト様に調整した方が、様々な点で効率が良くなるだろう。

更に付け加えるなら、ウルベルトの種族特性等も加味して修正をすれば、より効果は上がる筈だ。

その代わり、現在ウルベルトが身に付けている装備は全て見直して、最低でも聖遺物^{レリック}級にしておかないと、本人よりもこちらが心許なくて仕方がない。

何せ、ウルベルトにとって最強装備は、パウ・オブ・クラウン【道化師の誓願】によって、パンドラズ・アクターの中に封印されてしまっているのだから。

簡単に取り出せないように、モモンガに再会しない限り封印解除出来ない為、ウルベルトに返せないのがとても辛い。

あの装備があれば、もう少し追加で装飾品を選び、それに幾つかの手を加えるだけで、ウルベルトの自由度は確実に上がっただろう。

宝物殿領域守護者として、その事が明確に解るだけに、パンドラズ・アクターとしては忸怩たる思いだった。

だとしても、それはあくまで無いものねだりではない。

それが判っているから、そのことは口に出さず最初に考えた事を説明する事にした。

多分、先程から自分の事を氣遣つてくれるウルベルトなら、こちらの言いたい事などお見通しなのだろう。

だとしても、聞かれた事に対して返答をしないでいるなど、僕として失礼に当たる以上、きちんと答える義務があつた。

「そうですね……私の手持ちのアイテムの中に、HPを上昇させるものとMP消費率を下げる効果のものが、幾つかございます。

ウルベルト様の種族属性などを踏まえ、アイテム調整をしていくのが、一番確実な方法になるかと思われます。

アイテムに使われている素材の属性に依つては、属性による補正強化の効率に変化が出る場合もありますし。

手持ちの使える資材から、補強パーツを作る必要もあるでしょう。

それらの作業を進めるには、ある程度の時間が必要だとして……このままこの地である程度根気をいれてこの国に留まるか、それとも先を急ぎウルベルト様の本体がある場所へ移動して、そこからナザリックを探す為の手段を考えるか。

どちらを選んだとしても、一度ウルベルト様の本体は回収するべきでしょう。

どのような形になっているのか、この目で確認しないといけないですからね。

それと、私としてはきちんと御身の保護もおきたい。

例え誰であろうと、ウルベルト様に危害を加えようとするものは許せませんから。」

懸念事項を全て挙げれば、ウルベルトはスツと目を細める。

見る限り、不快そうな様子は見えないのだが……

こちらの回答に、何も言われないのがとても不安だった。

もし、ウルベルト様に不快な回答だったのなら、どう挽回すれば良いのか、判らないからだ。

ウルベルトから、何を言われるのか判らずにこちらが緊張する中、ウルベルトが口を開いた。

「……あー、そうだな。

一先ず、パンドラの手持ちの中に、ある物の中で一番良い性能のを使うとして、だ。調整は、移動しながらの方が良いだろう。

この辺り一帯は、俺やお前にとって危険な国が近いんだろう？

なら、あまりその近隣に留まるのは、不安要素を残す事になるから避けるべきだな。

それなら、一旦、転移門^ゲで俺の本体を回収しに行つて、また戻ってくるかだが……戻るにしても、ここではなく隣街に移動した方が良いでしょう。

どれだけ時間が掛かるか判らないし、同じ場所に戻ると描けた時間の分だけ移動して
いない事の不審さが目立つ事になる。

それは、現状では避けるべきだろう。

正直、面倒だが……余計な詮索を招くくらいなら、その程度の手間は掛けても良いけ
どな。」

笑いながら告げられた言葉に、パンドラズ・アクターはホツと胸を撫で下ろした。

幾つか修正はあったが、自分が提案した内容はほぼ受け入れられたと言えるだろう。

つまりそれは、ウルベルト自身の考えに、パンドラズ・アクターがある程度までは添
えたと言う事でもある。

今後の事を考えるなら、出来るだけお互いに意志疎通は必須案件であり、話し合いが
無事に進むことは良いことだと思うのだ。

些細なことでも、すれ違ったままでは大きな誤差になり兼ねないのだから。

《……多分、ウルベルト様はこちらの意図を理解して、ある程度までは尊重して下さい
のでしょう。

昔から、お優しい方でしたから。

それに……どれも理に叶っています。

今の我々に必要なのは、ウルベルト様の本体の安全確保と、今のゴーレムボディの強

化策ですからね。

私に関しては、ワールド世界級アイテムが絡んでますから、そう簡単には手の打ちようがありませんし。》

そう再度認識しつつ、パンドラズ・アクターはアイテムボックスから、手持ちの中でもウルベルトの強化に使える装飾品系アイテムを幾つか取り出した。

それを一つずつ並べながら、丁寧に説明していく。

「ウルベルト様が、アイテムにどこまでお詳しいのか、私は存じ上げませんので……一応説明させていただきます。

こちらの腕輪は「バングル・オブ・ソーサライ妖術師の腕輪」で、効果はHPを三十%、MPを二十%、最大値から上昇させる効果があります。

これを使えば、低下しているHPとMPの双方を上昇させられますので、今のウルベルト様には効果的かと。

そして、こちらの指輪が「リング・オブ・テンペランス節制の指輪」で、MPの消費率を最大十五%まで下げることが出来ます。

ただし……今のままでは、使う魔法の種類によって五%しか削れない場合もありますので、そこは要修正かと。

双方共に伝説級レジェンドですので、ウルベルト様が身に付けるのに相応しいかと思われれます。」

美しい意匠の腕輪と指輪は、ウルベルトにも見覚えがある品だったらしい。

どこか懐かしげに、目を細めて指輪と腕輪を見詰めている。

これは、モモンガが所持していた課金アイテムで、今の神器級ゴツに装備を一新するまで、ずっと使用していた物と同じ品だ。

この時は、課金ガチャで同じものを複数当たったので、伝説級レジェンドとして宝物殿のパンドラズ・アクターの元に納めていたのである。

「ああ、これなら大丈夫だろうな。」

モモンガさんが使っていたから、効果とかも解ってるし。

しっかし、まあ……よく手元に残していたな？

さっきの話から考えると、お前なら封印に回してそうなレベルのアイテムみたいなんだが……」

くるくると指先で角度を確認しながら、ウルベルトから掛けられた言葉に、パンドラズ・アクターは小さく首を竦めた。

確かに……普通に考えれば、本来なら伝説級レジェンドのこの二つを封印せずにいたのは、おかしいのかもしれない。

しかし、だ。

この二つの効果を考えると、パンドラズ・アクターとしては封印するのはかなり惜し

かったのである。

それに……この二つのアイテムは、まだ一組手元にあつた。

だから、一組は万が一の時に使用するものとして、手元に残しておいてのだ。

その結果、こうしてウルベルトの補助装備として役立つ事になったのだが。

「実は、もう一組手元にございまして。

そちらを保管用に回す事で、こちらは実用品として手元に残す事が出来たのです。

一先ず、場所を移動いたしましょう。

ウルベルト様のお話では、本体がある場所は人はおろか異形種すら殆ど存在しない、雑魚モンスターの住み処なのでしょう？

そこなら、多少魔法を使用しても問題ないと思われれますので、そちらに移動されてから、現在のウルベルトの状況確認をさせていただきます。実際にこの目で粗の威力確認した訳ではございませんから。

そこで、様々な能力を威力確認した上で、それに合わせて調整する必要がありますし。次いでですので、本体の封印をしている氷のようなものの上に、強固な多重展開した結界を展開した上で、試し打ちの魔法で周囲を掘削しても良いでしょう。」

にこやかに笑いながら提案すれば、ウルベルトも頷いて同意しつつ手にしていたアイテムを身に付けると、残っていたフォンダンシヨコラを食べ始める。

パンドラズ・アクターの皿にも、まだ半分ほど残っているので、ウルベルトに倣ってスプーンを手を取った。

既に覚めてはしまっているが、多少味が落ちてでも僅かに味わいが変わるだけで、そこその味は維持している。

それに、ウルベルトがまだ満足げに食べているのに、自分が残すのはおかしいだろう。そう……冷めて素材に使用した米粉のもっちり感が増したそれは、溶けたアイスを吸い込んでもちもちのトロトロとしていて、また別の意味で美味しくなっていた。

これは、これでパンドラズ・アクターには好きな味わいである。

そんな感想を抱きつつ、パンドラズ・アクターは自分の分を食べ進めていく。

本来なら、ウルベルトの前にある冷めたものを下げて、温め直したフォンダンシヨクラと、紅茶の新しいものを用意すべきなのだが、先程ウルベルトとあった時に、その視線が不要だと告げていた為、あえて用意を止めたのだ。

それほど掛からず、お互いの皿が空になったので、パンドラズ・アクターは一先ず全てを下げることにした。

片付けは後回しにて問題ないが、このまま部屋の中に放置は出来ない。

なので、一先ずまだ大皿に残っているフォンダンシヨクラを、保存ボックスにしまう必要があるのだ。

てきばきと、キッチンでの最低下の片付けを済ませ、急いでウルベルトの元に戻れば、待っていたかのようにパンドラズ・アクターの肩へ飛行フライで移動してくる。

慌てて片手を添えて支えつつ、可能な限り足早に外へ移動すると、グリーン・シークレット・ハウスを元に戻してアイテムボックスに収納した。

「それでは参りましょうか、ウルベルト様。」

その言葉に、ウルベルトが千里眼クレアボヤンスと水晶クリスタル・モニターの画面を使い、目的の場所を写し出す。

それを座標に、パンドラズ・アクターが転移門ゲートを開くと、そのままそれを潜ったのだった。

第一章 ナザリツク 視点

異世界に転移したら、宝物殿の一部が欠けてしまっていた

パンドラズ・アクターが、宝物殿に起きた異常事態に気付き、自分の意思で動き始めるほんの少し前。

同じ様に異常が発生し、それに対して苦慮する者達がいた。言わずと知れた、ナザリツク地下大墳墓の面々である。

最初に異常に気付いたのは、かの地のギルド長であるモモンガだ。

まあ、彼の場合、「ユグドラシル」終了までギルドの王座の間で過ごし、強制ログアウトでこの長年に渡る栄光の幕を引くつもりだったのだから、異常事態に気付かない訳がなかったのだが。

サービス終了時間を過ぎても、一向に強制ログアウトされる事なく、コンソール画面も表示されなければ、GMコールも使えない。

極め付けは、今まで自分の意思で動く事が出来ない筈のNPC達が、自分の意思で動

きこちらに話し掛けてきていると言う事だろうか。

その態度は、誰もが混乱を見せるモモンガの様子を敬いを示しながら心配げに見つ、与えられるだろう指示を待ち構えている。

そこで、執事のセバスとプレアデス達にナザリック周辺の偵察と警戒体制の指示を与え実際に行動に移させ。

一人、その場に残った守護者統括のアルベドに対し、最後の確認をしようとした瞬間、それは起きた。

大きな振動と共に、どこかで何かが崩れるような衝撃が、ナザリック地下大墳墓全体に響いたのである。

流星にモモンガも、それだけあからさまな異常が起きている状況下で、アルベドに対してセクハラ擬きの接触など試みる精神的余裕はない。

アルベド側も、唯一この場に残ってくれた至高の御身に何か有っては為らぬと、殺気を放ちながら警戒体制に入りつつ、他の階層守護者へ状況確認を急ぐように指示を飛ばしている。

それを視界の端に納めつつ、モモンガは自分の持つギルド武器を使用しながらマス

ターソースが確認出来るか、小さく呟くようにキーワードを口にしていた。

「……マスターソース・オープン。」

すると、今までと変わらぬ様子でギルドの管理システムの小窓が開いた。

どうやら、こちらはコンソールとは違ってきちんと作動するらしい。

そんな事を思いつつ、各階層の様子を大まかに確認していたモモンガは、ある場所の起動中の罫に関する情報を見た瞬間、思わずそれまで座っていた王座から勢い良く立ち上がった。

「モ、モモンガ様？」

その様に慌てて立ち上がるなど、一体、どうなさったのですか？」

守護者統括として、僕達からの報告を受けていたアルベドが、モモンガの突然の行動に慌てて声を掛けた。

だが、その声がるまらで聞こえていないかのように手元の操作を続けたかと思えば、信じられないかのように顔を片手で覆い隠す。

その様子は、アルベドから見ても尋常ではなかった。

《……一体、なにがモモンガ様をここまで突き動かした挙げ句、ここまで憔悴する程の動揺させたと言うの……？》

判らないからこそ、アルベドはとても不安になってくる。

《もし、これが原因でモモンガ様までこの地を見捨てて去ってしまったら……》
そう思うだけで、心の底から絶望が這い上がってくる気がするのだ。

だからこそ、何か問題が起きているならば、自分を含めた僕達に命じて欲しい。

『問題となる案件を明確にし、私達に対して「それを排除せよ」と。』

だが、肝心のモモンガからは何の言葉も無いまま、時間だけが過ぎていく。

いや……次第にモモンガから発せられる気配は重く、苛立ちに満ちたものへと変わっていくのを感じたアルベドは、ただひたすらモモンガの言葉を待つしか出来ない。

もしかして、このままモモンガまで本当にここを去ってしまうのかと恐怖に刈られそうになった時、漸くモモンガがゆっくりと口を開いた。

「……本来ならば、絶対であり得ないだろう異常が、このナザリック地下大墳墓の宝物殿に起きている事が判明した。」

まだ……なにが起きているのかは正しく把握している訳ではない。

だが、あそこに仕掛けられた罠が機能停止状態を示し、尚且つ宝物殿領域守護者へ状況報告を求める伝言メッセージを飛ばしたのだが、返答がないのだ。

あそのこの領域守護者は、私が自ら創造した僕だという点でも、私からの伝言メッセージを理由もなく返答を返さぬままにするとは到底思えん。

故に、先程発生したナザリック全体を揺るがした振動と衝撃と言う異常事態の発生源

は、宝物殿の可能性が高いと私は判断した。」

地を這うような、そんな響きと共に苛立ちを顕にしつつ、それでも先程の自分の言葉に対する返答をくれるモモンガに対して、アルベドは内心ホッと安堵の息を付いた。

先程から、モモンガが黙ったままだったのは、何度も件の宝物殿守護者へ伝言^{メッセージ}を発していたからだろう。

だが、その返答は得られる事は無いままとなり、有り得ない事態に苛立ちを押さえられなかったと言われれば、納得するしかない。

モモンガがそう言うなら、間違いないのだろうから。

それよりも、問題は件の宝物殿とその領域守護者だろう。

ナザリックの中にあるながら、どこにも繋がらないその宝物殿は、残念ながらアルベド自身にとって管轄外に近い場所だ。

一応、守護者統括として守護者を管理する都合上、その名前と姿、与えられている役割の概要は知っているものの、直接会った事はない。

正直、そんな場所での異常事態の発生に対して、彼女が採れる手など殆ど存在していないと言っているだろう。

そもそも、宝物殿はアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーしか立ち入る事が出来ない、文字通り特別な場所である。

だとしたら、この異常事態に対応出来る者は、現時点ではモモンガしか居ない事になる訳で。

一体、何が起きているのかも解らない状況下で、唯一このナザリツクに残ってくれた至高の存在とも言うべきモモンガ一人に対応させるなど、ナザリツクの守護者統括としても、モモンガを愛する事を許された（設定をそう書き換えて下さった）一人の女としても、到底許容出来る内容ではなかった。

「モモンガ様！」

これから宝物殿まで、確認の為に足を運ばれると言うのであれば、ぜひとも私や他の僕をお連れ下さいませ！

今、このナザリツクに何こ起きているのか分かっていない以上、至高の御身であるモモンガ様の身に何かあってからでは遅うございます。

ですので、ぜひとも私達の同行をお許し下さりますよう、付して願ひ奉ります。「必死の思いで、膝をつき土下座をするように頭を下げて同行の許しを願うアルベドに対し、モモンガは申し訳ない気持ちになりつつも承諾する事は出来なかつた。

確かに、今までの様子を窺う限りでは、アルベドを筆頭にNPC達は自分に対して忠誠を向けてくれているらしいと、何となく感じてはいる。

しかし、だ。

まだ、それが本心だと信用する事は、今のモモンガには出来なかったからである。「……アルベド、済まないが同行の許可は出来ない。」

宝物殿への立ち入りは、原則としてギルドメンバーのみだからな。

それよりも、お前には第四、第八階層を除く全ての階層守護者へ第六階層の闘技場に集まるよう、通達を頼むとしよう。

集合時間は、今から一時間後だ。

その間に、私は宝物殿の確認を済ませておく。

なに、あくまでも現在の状況を簡単に確認するだけだ。

危険を感じる様なら、それ以上深入りせずそのまま第六階層に異動するつもりだから、そう案ずるな。」

諭すように告げると、モモンガはアルベドの返事を待たずに指輪に魔力を込める。

すると、今までと変わり無く指輪はその力を発揮し、モモンガの姿はその場から瞬く間もなく消え去っていった。

それこそ、アルベドが止める間も無い位の素早さで。

だから、モモンガはその時のアルベドの様子を見る事はなかった。

それこそ、まるで見ることに出来ない筈の宝物殿に対して、憎悪と嫌悪の入り交じった刺々しい顔をして睨み付けていた事に。

そんなアルベドに気付く事なく、無事に宝物殿入り口とも言うべき一角に転移を果たしたモモンガは、まず安堵の息を吐いた。

一応、指輪の機能が無事に働いている事の確認が出来たことと、この場所に関しては罫が働いていない事以外は、特に問題がないと判断して良さそうだからである。

もちろん、ここから先に関してはまだどんな状態なのか、全く予想が出来ない点が残すものの、それに関しては一先ず先に進んで一つずつ確認して行くしかない。

先程、王座の間でアルベドに対して言った通り、あくまでも今回は簡単な現状確認が目的なのだ。

もし、途中で自分一人の手に負えないと判断したら、速攻でその場から退却するつもりなのである。

だから、それほど彼女が心配する必要がないのだ。

幾ら、モモンガがこの状況に焦っているとは言っても、流石に情報が足りない現状でそこまで突っ走る程、愚か者ではない。

この奥にある、宝物殿の心臓部とも言う場所がどうなっていて、その場を守る領域

守護者であり己にとつて他に変え難い宝でもある彼が、一体どうなつてしまったのかと思つただけで、恐怖にかられそうになるのだが。

警戒しつつ、飛行フライを使つて宝物殿の表層部と言ふべき場所に幾つも連なる、金貨と下位の財宝が混ざり山の数々を通り越えると、漸く目的地に到着した。

金貨や一般の財宝が置かれている場所と、ここから先の空間の重要度ははつきり言つて段違いだ。

だからこそ、こうしてパスワードが必要な闇が扉として壁に張り付くよう存在し、その奥に守護者と言ふべき番人を置いている。

正直、宝物殿の罫が働いていない時点で、この扉のギミックも機能停止して武器庫などの通路が晒されていると思つていただけに、この状況は予想外だった。

緊張と共に、頭の中で扉を開けるのに必要なパスワードを考え、直ぐに首を振る。

ここ数年、モモンガもこの宝物殿の奥に立ち入らないまま、ナザリックの維持に必要な分の金を稼いで来ては、そのまま宝物殿の金貨の山の中に放り込んで立ち去ると言うのが日課だったのだ。

仕方がないじゃないか、奥に入る為のパスワードを忘れたとしても。

実際、なかなか複雑なギミックが多いナザリックでは、自分自身ので利用する回数が少ないと場所だと、こう言う事も割と発生し易かった。

我がギルドには、凝り性の上に己の拘りを反映したギミックを設置したがるギミック担当が、本当に多かったのだ。

その結果がコレであり、当然だが忘れた時の為にギルドメンバーだけが知る、全てに通じる共通パスワードがある。

モモンガは、それを迷う事なく口にした。

「アインズ・ウール・ゴウンに栄光あれ！」

その途端、扉に浮かび上がる文字の羅列。

これが、この扉を開くためのパスワードのヒントである。

それを眺めながら、モモンガはその意味を自分の記憶の中から引き出す為に、暫し思考を巡らせていく。

数分後、コレだろうと言う心当たりを引き出したモモンガは、辿々しくもそれを唱えることにした。

「えーつと……この意味はこうだったはず。」

かくて汝、全世界の栄光を、我がものとし、暗きものは全て、汝より離れ去るだろう。確か……これで、合ってたよな？」

何度か詰まったものの、パスワードとしては意味を成したらしく、それまで目の前にあつた扉だった闇は一気に収縮し宙の一点に浮いている。

成功した事に、ホッと安堵の息を吐いたモモンガは、一旦ここまでの工程を確認するように思考を巡らせ。

問題ない事を確認し、どこか少しずつ緊張してくる気持ちを抑えながら、ゆっくりとその扉の奥にある通路へと足を踏み入れた。

そして……数歩進んだ先で、モモンガはあり得ない光景を目にする事になる。

何故ならその奥は……数メートル先の地点で、まるで何かで抉り取られた様な傷跡を残しつつ、その先にはポツカリと空いた真つ黒な空間が広がっていたからだ。

それは、まるでなにか強い力の干渉を受けたかのように、抉り取られた先には本当になにも存在していないのがわかる。

真つ黒な空間は、見た目と違い真つ直ぐなガラスを詰められたかかのように、こちら側から触れる事はもちろん干渉する事は出来ないらしい。

近付いただけで弾かれ、触れようとした場所が軽いスタン状態にすらなる為、うかうか側で確認する事も出来ず、苛立ちが募る。

この場所だけなのか、確認するべく他の扉のもとに走っては、パワードを使い扉を開けて確認していき……

数分後、全てを確認し終わったモモンガは、なす術もなく愕然としていた。

扉の先は、場所によって抉り取られている一は違っていたが、それでもはつきりと言

えることが一つだけある。

どのルートも、この奥にある宝物殿最深部へ辿り着く事が出来ないと言う事実だ。

もし、自分の予想が正しいければ……この先は、決り取られた場所から全て存在して
いないのだろう。

だからこそ、先に進むことが出来ないのだろうと考えれば、今の状況にも納得はいく。
それなら、この先にあつた宝物殿最深部と、そこを守護していた己の大切な【宝】で
もある守護者はどうなつてしまつたのだろうか？

もし……全てが消失してしまつたのだとしたら……

そう仮定しただけで、骨の身体で出る筈の無い冷や汗が、全身から噴き出すような気
持ちになる。

もちろん、実際は骨だけの身体だからそんな事にはならないのだが。

抑えようのない、強い苛立ちや焦りの感情が沸き上がった瞬間、それは一気に沈静化
した。

この不可解な状況に巻き込まれた後、アルベド達NPCとの王座の間でのやり取りの
間にも、何度かこの現象は起きていた事から、これはアンデッド特有のスキルの一つな
んだらうと、本当に今更ながらに納得しつつ、モモンガはここで一ヶ所、そして王座の
間で一点確認するべき事に思い当たる。

それは、この宝物殿内に残っていた維持管理室に残っているだろう、責任者の名前表示の部分の確認と、王座の間でのマスターソースの確認だった。

どちらも、対象者が死亡していれば名前の欄は空白になるし、敵に支配され敵対行動を取っていれば文字が黒く表示される。

その二つを見れば、今の宝物殿守護者の状態を確認する事が出来る筈だと、そう思い付いたからだ。

とにかく、確認するべく急ぎ足で残っていた維持管理室に駆け込むと、名前が表示されているプレートを仰ぎ見る。

モモンガの目に入ったプレートには、白い文字で「パンドラズ・アクター」と表示されたままだった。

「……ハッ……ハハッ……ハハハッ……！」

変わっていない……いつもと何も変わっていないじゃないか！

なら、消えた宝物殿最奥部とアイツは……パンドラズ・アクターは、どこに行つたと言うんだ？」

この維持管理室の表示は、いつもと変わらぬままだったが王座の間のマスターソースは違うかも知れない。

情報が足りなさ過ぎる為に、現状での判断を下すのを止めて一先ず保留にすると、モ

モンガはこの場を後にする事にした。

少しでも、判断材料となる情報を増やす為にも、王座の間に向かう為に。

王座の間の手前、ソロモンソレメの小さな鍵トに転移したモンガは、足早に先を急ぐように進んでいく。

荘厳な扉を潜り抜け、誰も居ない事を確認しつつ王座の前まで移動し、逸る気持ちを抑えながらも先程と同じ様にマスターソースを開くと、速攻でNPCタグを開く。

画面操作で、レベルの高い順に変更してから指を滑らせ、その名前の表示を確認した瞬間、モンガは安堵から思わずその場にへたり込んでいた。

ここにも、宝物殿内の維持管理室と同じ様に白い文字で「パンドラス・アクター」と記されていたからだ。

「……一体、何かどうなっているのかなんて、今の俺には解らない。

だけど、少なくとも「パンドラス・アクター」が何者かの手に堕ちたと言う状況じゃない事だけは、この二つの情報から確認出来たと思って良いのかもしれないな。

依然、消えた宝物殿最奥部とパンドラス・アクター自身の行方は解らないままだけど、

この表示状態から判断するならば、少なくともナザリックそのものとの繋がりが消えた訳じゃ無さそうだし。」

現状を口にしてみると、思っていたより冷静な判断が下せそうだと少し安堵する。せつかくなので、そのまま声に出しながら簡単に状況整理を進めてみる事にした。

「まず最初に、ナザリックの周囲の状況把握の為に探索に出したセバス達からは、現時点ではまだなにも言ってきてない。」

これは、まだ調査に出してからそんなに時間が経っていないから、仕方がないとして。階層守護者達は、信用出来るかどうか確認した訳じゃないけど、アルベドやセバス達を見る感じじゃ、心配無さそうかな？

この辺りは、まだ様子見の段階だと保留にして置くとしよう。」

一先ず、幾つか挙げた現状を省みてみたが、どちらもまだ様子見の段階であり、現時点では保留と言う判断になった。

これは、どうしても判断材料が少ないのだから仕方がないだろう。

まだまだ、確認する必要がある案件は多いが、宝物殿で咄嗟に幾つか使った魔法は「ユグドラシル」の時と変わらなかつたので、魔法に関する確認はある程度済んだと判断して良さそうだった。

攻撃魔法は、これから移動予定の第六階層の闘技場で試せば良い。

「……最後に、消えた宝物殿と。パンドラズ・アクターに関しては……まだ、ナザリックとの繋がりが切れて居ないなら、この手で探すだけだ。」

アレは……パンドラズ・アクターは、俺とギルドの皆で協力して作った、俺の……俺だけの【宝物】だからな。」

無意識に、顎に片手を宛ながら呟くように零れた最後の言葉は、それこそ低く地を這う様な響きを伴っていて、もし誰か聞くものがいたとしたら、それこそ恐ろしさに身を震わせていただろう。

だが、それを呟いた本人は気付いていなかった。

守護者たちと対面してみたんだが

王座の間から、第六階層の闘技場に指輪の力で転移したモモンガは、大きく息を吐くと軽く首を振った。

宝物殿の中で目撃した、あの衝撃的な光景が目には焼き付いて離れず、モモンガの中で大きな喪失感を産み出しているのを振り切る為だ。

もちろん、それ位では消えたりはしない。

だが、これから対峙する守護者達の事を考えるなら、余りあからさまにそんな素振りを見せるのは良くないだろう。

それ位の事は、今のモモンガにも理解出来ていた。

「……今は、先に済ませる事の方が多いいからな。」

とにかく、守護者が集まる前に攻撃魔法を試しておかなくちゃ……」

小さく呟きながら、闘技場の通路を格子戸がある方に向けて、少し急ぎ足で進んでいったのだが……

こちらの動きに合わせ、持ち上がった格子戸の外に出た所で、思わず固まった。

なぜなら、既に守護者達が全員揃って、モモンガを待ち構えていたからだ。

まだ、こちらが指定した時間になっていないのだが、彼等は可能な限り早く集まって来たらしい。

宝物殿と王座の間での確認作業で、予想以上に時間を使ってしまった為に、こちらの予定が狂う形になってしまったようだ。

しかし、こうなってしまうては仕方がないと腹を括ると、守護者達が待つに闘技場中央に降り立った。

「……どうやら、待たせてしまったようだな……」

出来るだけ冷静に声を掛ければ、それによつてモモンガに気付いた守護者達が、一斉に自分に対して顔を向け道を開けるように左右に整列していく。

それに片手を上げて応えると、彼らが作ってくれた道を進んで全員の正面に立った。

こうして、彼らの前に立つても敵意は感じないし、敵閥知も反応しない。

むしろ、寄せらるのは強い尊敬の念だった。

「モモンガ様、そのような言葉は我らには不要でございます。」

御方のお呼びとあらば、即座に参りますのが我ら僕でございます故。」

モモンガから一番近い位置にいた、デミウルゴスがそう言い切れば、同意するように頷く守護者の面々。

彼らを見る限り、どうやらモモンガに対して敬う姿勢はアルベドやセバスたちと変わ

らないらしい。

それを、鷹揚な態度見えるような素振りでもやり過ぎすと、アルベドが口を開いた。

「では、皆、至高の御方に忠誠の儀を。」

彼女の言葉を合図に、素早く横並びに整列していく守護者達。

そうして、それぞれまるで決められていたかのように綺麗に並び終えると、第一、第二、第三階層守護者であるシャルティアから順に名乗りを上げていく。

全ての階層守護者が名乗りを終え、締めめにアルベドが名乗りを上げた所で一息置き。

最後に忠誠を誓う言葉を述べて締め括るのを聞きながら、モモンガは注意深く様子を窺っていた。

今までの様子から、彼らの言葉に嘘はないだろう。

それ位の事は、流石にモモンガにも理解出来た。

正直、これほど真っ直ぐに好意を含んだ忠誠を向けられると、どう対応していいのか一瞬分からなくなる。

しかし、だ。

彼らに対して、支配者としてここで上手く捌き切れなければ、これからの自分の目的すら叶わなくなるだろう。

それだけは、絶対に避けたかった。

「面を上げよ」

全員、一糸乱れの無い動きで顔を上げる。

統一性の取れた行動を見て、モモンガは感嘆の念を抱きながらもそれは口には出さず、別の言葉を口にした。

「……まず、良く集まってくれた、感謝しよう。」

出来る限り内容を選ぶため、普段よりも短い言葉でそう告げれば、即座にアルベドの言葉が入る。

「そんな、感謝などお止めください。」

我ら、モモンガ様に忠誠のみならず、この身を捧げた者たちなれば、至極当然の事でございます。」

その返答に対して、他の守護者たちが口を挟まないことから、同意していると考えて良いのだろう。

モモンガが、次に何を言うべきか言葉に迷っていると、それを察するかのようにアルベドが「どの様な命令でも、見遂行いたします。至高の方々の名に恥じない働きを誓います」と宣言し、その後が続くように守護者全員が唱和する。

それを聞いて、モモンガは嘗てのアインズ・ウール・ゴウンの黄金期を思い出していた。

仲間達の残したNPC達の忠義の篤さと共に。

こんな、真つすぐに自分を慕ってくれる彼らの事を、疑っていたこと自体が馬鹿馬鹿しくなる。

だから、素直に感嘆の声を上げていた。

「素晴らしい………実に素晴らしいぞ、お前達！

お前達ならば、私の目的を理解し、失態することなく事を運べると、今、この瞬間に確信した！」

両手を広げるといった、誰の目から見ても大仰な仕種で断言すると、モモンガは守護者全員の顔を見渡した。

自分の言葉に、本当に嬉しさを滲ませた瞳を向けてくれる守護者たち。

「これなら大丈夫だろう」と判断したモモンガは、今まで自分の中に押さえていた願いを迷うことなく口にした。

「私はな、お前達に伝えなければならぬ事がある。

先程、ナザリック全体を大きな震動が襲ったのは、皆気付いているな？

あれは、このナザリック地下大墳墓の宝物殿の一部が突如抉り取られたからのようだ。

もちろん、その原因は現時点では一切不明であり、その場にいた領域守護者共々、そ

ここに納められていたナザリック最大の秘宝の数々も失われた状態となっている。

我が願いは、ただ一つ。

現在、行方不明となっている宝物殿領域守護者の身柄の保護と、失われた秘宝の数々の奪還だ。

その搜索を、お前達に任せたいと思うのだが、何か意見はあるか？」

滔々と、低く通る声で告げるモモンガに対し、質問の声を上げたのはデミウルゴスだ。

「……モモンガ様。

恐れながら、申し上げます。

私は、宝物殿に守護者が存在する事すら存じ上げませんでした。

ここに居る者の殆どが、私と同じでしょう。

なので、その人となりがどの様な者なのかも解りません。

ですので、こうしてお尋ねするのですが……

もしや……宝物殿領域守護者自身が、宝物殿内から何等かの手を使い、秘宝の数々と宝物殿の一部を持ち去ったと言うことはございませんか？

ナザリックの者が、モモンガ様を裏切るとは思えません……エクレアの様な者もお

りますので……」

今までは、到底あり得ない事態の連続に、デミウルゴスは頭に浮かんだ疑念を口に

出してモモンガに問う。

その言葉を聞き、存在すら知らなかった相手に対しての疑念を持ったのか、守護者達
はあり得そうだとする気配を見せていた。

あくまでも、デミウルゴスとしては可能性の一つとして挙げただけなのだろう。

だが、その言葉は今のモモンガにとって、言つてはならない一言だった。

それまで、どちらかと言えば機嫌良く話していた筈のモモンガの気配が、一気に目に見えない死のオーラに満ちたものへと変化したからだ。

どう考えても、今のデミウルゴスの言葉によつて、モモンガの機嫌を損ねたのは間違いない事を、守護者達は嫌でも悟る。

「……アレが、宝物殿領域守護者が、私の事を裏切る事だけは、絶対にない。

なぜなら、アレは私がこの手で産み出したたった一人の僕だからだ。

もし、アレが私を裏切ったのとしたら……お前達が捧げてくれた忠誠すら、私は信じられなくなるだろう。

それ位、お前達僕にとって創造主とは大切な存在なのだろう？

それとも、これは私の思い違いだったか？」

怒りに駆られ、周囲を圧倒するほどの死のオーラを放ちながら、それでも静かに問う
モモンガに対して、デミウルゴスはもちろん全ての守護者が慌てて頭を下げる。

間違いなく、自分の質問がモモンガの逆鱗だった事を察したデミウルゴスなどは、全身から血の気が引く思いだろう。

それでも、自分の失言で他の守護者達にまで迷惑を掛ける事は出来なかった。

「も、申し訳ございません、モモンガ様。

モモンガ様のおっしゃる通り、私達僕にとつて、己の創造主は何よりも変え難いもの。何があつても、裏切るなどあり得ません！

知らぬ事とは言え、この失言の咎は全て私の不徳の致すところ。

他の者達には、何とぞ寛大な御慈悲を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

そして、この失態の払拭の機会をいただけるのであれば、これに勝る喜びはございません。」

己の失言を恥じ、他の守護者まで巻き込まないように詫びるデミウルゴスの言葉に、モモンガは怒りを収めると鷹揚に頷いて受け入れた。

「……ならば、デミウルゴス。

お前に、アルベドと協議の上、ナザリックの防衛網の再構築が済み次第、隠密能力に秀でた僕達を使いパンドラズ・アクターと宝物殿の探索の総責任者の任に就くことを命じよう。

己の失言を、行動によって灌ぐがいい。

もうすぐ、周辺の探査に出掛けているセバスが、ここへ報告の為に来る予定だ。他の者達は、セバスから周囲の状況を聞き次第、追って指示を出す。

その前に、聞こう。

今回の異常事態に対し、各階層で何かを前兆のようなもの、このころあたりがある者はいるか？」

モモンガの問いに、誰もが心当たりがないと答える中、小走りにこちらに向かつてくるセバスの姿が見えた。

セバスの報告が終わった後、それぞれ守護者への指示を出したモモンガは、最後に彼らから自分への評価を聞いて内心身悶えながらも、何とかそれを悟らせずに私室のある第九階層に異動した。

正直、あまりの高評価に戦々恐々の気分を味わったのだが……彼等はどう見ても本気だったので、下手に突っ込む事も出来なかったのだ。

《……まあ、いい。

彼らに失望されないよう、失態は出来ないが……それさえ気を付ければ、パンドラズ・

アクターの搜索を十分任せられそうだからな……

いや、待て。

相手は、ナザリックの僕の中で最高の頭脳を持つデミウルゴスと同等の頭の良さで設定した、あのパンドラズ・アクターだぞ？

アレが自分の意志で動くなら、絶対何らかの偽装はしてくる筈だ。》

無事、目的を果たせたと安堵の息を吐き、これからの事を思案し始めたモモンガは、まず、捜す相手であるパンドラズ・アクターの頭の良さを思い出し。

次に、自分がパンドラズ・アクターにどの様な設定をしたのか思い出ししていく。それこそ、自分にとって黒歴史とも言うべき痛々しい設定の数々を。

「……と言うか、あれ……待てよ。

そもそも、アレがあの設定のまま動き回る？

……うわー、ちょっと待て、アレが？

それを、デミウルゴスに捜査を命じて発見させる？

うわー、マジで、うわー!?

……あー……沈静化した。

はあ……もう、デミウルゴスにはみんなの前で命令してしまったし、今更それを考えても仕方がないか。

むしろ、命じた直後に撤回する方が、彼らの不信を招きそうな気もするし。」
思い出して、口にすればする程、次第に血の気が引くような気がした。

あくまで骨なので、実際は何の変化も無いのだが。

だが、実際に沈静化が掛かるほどのダメージを受けたのは間違いない。

《……とにかく、今はあらゆる情報収集が優先事項だしな。

彼らに集めさせた情報を元に俺が精査して、そこから先は自分で探しに行くべきかい。》

出来そうな対応策を練りつつ、何とか気を持ち直したモモンガは、自室へと向かってゆつくりと廊下を先に進んでいく。

扉の前に控えるメイド達に、「暫く考え事をするのでこの部屋付きのメイド全てを人払いするように」と指示を出すと、彼女達が扉を開けてくれるのを待つ事にした。

下手に断り、メイド達に泣かれてそれを宥める事になるのは、出来るだけ避けたかったからだ。

彼女達が見送る中、モモンガは、自室の扉を潜り扉が閉じるのを待つ。

そのまま歩みを進め、ソファに辿り着くと、身を投げ出すようにぐったりと座り込む。

この世界に転移してから、宝物殿の一件が重ねて発生し、その上で守護者達との対面と言う事態が続いたので、精神的に疲れたのだ。

尤も、今の自分はアンデッドであるが故に、実際に疲労を感じることはないのだが。そして、改めて現状を顧みる。

《とにかく、何でもいから情報が欲しい。

このナザリックを守るためにも、パンドラズ・アクターと宝物殿を捜すためにも。今の段階じゃ、本当に一体何が起きてこうなったのか、何も分かってないからな。

まあ……こつちの世界に移動した事は、別に構わないんだ。

俺自身には、今のところ何の不都合もない……訳じゃないが、あちらより悪くなるとは思えないし。

どういう状況であろうと、最終的に、アレが……パンドラズ・アクターと宝物殿の中身全部が、俺の手元に戻って来さえすれば良い訳だからな。》

先程、守護者の真っ直ぐな忠義を受け、冷静さを取り戻していた筈のモモンガだが、パンドラズ・アクターや宝物殿の事を考え始めると、先程とは違い次第に狂気の色が滲み出す。

この変化は、人目に触れる可能性が有るか無いかの差なのだろうか？

それとも、単純に手元にパンドラズ・アクターが居ない事への思いが零れたからだろうか。

「……ああ、でも、アレに誰かくだらしない相手の手垢が付いていたら、どうしてくれよう

か……

あれで、少し大袈裟な言動さえ除けば、文句なしのいい男になれる筈だし。

そもそも、偽装でそれなりにハンサムな人の姿になれば、アレだって有りになるかもしれないよな。

アイツだって、この世界に一人だけ放り出されているのなら、誰かに縋りたくなくなるかもしれないし。

そんなアイツに、集る存在が居ると思うだけで、そいつらをミナゴロシにしたいくなる。アレは、このオレがみんなと共に作った、大切なオレの「宝」なんだ。

俺と、ギルドのみんなと、ナザリックの者以外、勝手に見ず知らずの奴が触れて良い訳がないだろう？

……ああ、パンドラズ・アクターをこの手に取り戻したら、先ずは余計な傷がついてないか、頭の前から爪先まで一つ残らず確認しなきゃダメだな。

確認作業に、NPC作成ツールのモニターが使えれば、見えない場所の漏れもなくていいんだけどな。

ああ、宝物殿が元に戻れば、アイツの部屋に製作時に調整で使ってて余った、その手の課金アイテムが幾つか残ってたっけ……

なら、ここを離れていたんだし、パンドラのフルメンテナンスは当然だよな……」

こぼれ落ちる言葉は、次第に狂気に満ちてくるが、モモンガ以外この場には居ないため、止めるものはない。

モモンガ自身、自分の言葉が狂気に満ちていることに、この時はまだ気付いていなかった。

その場に残った守護者の会話

モモンガがその場から去った後、残されていた守護者たちはその場に伏したままだった。

怒れるモモンガから放たれる、恐ろしいまでのオーラに押し潰されそうになるのを、必死に耐えていたためだ。

その重圧が消えても、誰も動くものはいない。

特に、その失言から威圧を強く受けていたデミウルゴスは、全く動く気配はなかった。自分の失言によって、モモンガの怒りを買う、あわや自分たちへの信頼を失いかけたからだ。

ひどく恐縮しているデミウルゴスに、他の守護者たちは同情めいた気持ちを抱いていたが、それを口にするものはいない。

この一件は、とてもデリケートな内容を含んでいるからだ。

誰もが口を閉ざしたまま、漸く緊張を緩めながらその場で立ち上がると、その沈黙に耐えられなかったのか、第六階層守護者マーレがキュツと手を握りながら口を開いた。

「あ、あの、さっきのモモンガ様…凄く怖かったね、おねえちゃん。」

「……ほんと、すごく怖かった。

あたし、あのまま押し潰されるかと思ったよ、うん。

前に、ぶくぶく茶釜様というモモンガ様を見た時より、凄く怖かったと思うもん。」
マールレの言葉尻に乗るように、姉であり同じく第六階層守護者のアウラが、フルフルと身体を震わせながら同意する。

アウラの主張に、誰もが同じ思いを抱いていた。

自分たちが知るモモンガは、もつと穏和な性格だった記憶があっただけに、あの怒りに圧倒されてしまったと言つていいかもしれない。

最初は、とても上機嫌で自分たちが捧げた「忠誠の儀」を受け入れてくれていただけに、余計にそう感じた。

「……アレガ、支配者トシテノオ顔ヲオ見セニナツタ、モモンガ様ノ姿ダトイウ事ナノダロウ。

元々、我々ノ忠義ニ応エ、ソレヲ見セラレルオツモリダツタガ、ソノ前ニデミウルゴスノ一件ガ起キタトイウトコロダロウナ。

ソシテ、デミウルゴスノ発言ニ纏ワル一件ハ、不幸ナ行キ違イダツタ。

ダカラコソ、モモンガ様ハ全テ御許シクダサツタ。

ヤハリ、モモンガ様ハ偉大ナ方ダ。」

それまで黙っていたコキユートスが、静かに頷きながら自分の意見を言えば、それに同意するのは当事者であるデミウルゴスだ。

「確かに、コキユートスの言う通りですね。

知らぬ事とはいえ、あれは私も不用意な発言でした。

まさか、あれ程までにモモンガ様のお怒りを買う事になるとは、思ってもいませんでしたからね。

それにしても……アルベド、貴女はある程度の事情は知っていたでしょうに、なぜ事前に話して下さらなかったのですか？

もしくは、あの場で私が発言する前に、彼についてあなたが知っている事を教えてくだされば良かったのです。

そうすれば、私とてあの様な事を言い出したりはしなかったのですがね。」

自分の失態を反省しつつ、普段なら率先して会話を繰り広げそうな筈なのに、ひたすら沈黙を保つ守護者統括であるアルベドへ、素直な苦情を口にする。

あの時、モモンガの発言後に追加情報を付け加える事が出来たのは、間違いなく守護者統括としてその存在を把握していただろうアルベドだけだ。

普段の彼女なら、モモンガの言葉の補足として、件の宝物殿領域守護者がモモンガの手によって産み出されたものであり、モモンガからの信頼が篤い事を、双方の誤解を招

かないために付け加えていた筈である。

しかし、彼女はそれをしなかった。

その結果として、デミウルゴスはその存在について何も知らぬまま質問し、モモンガからの怒りを買ったのだ。

流星に、デミウルゴスでも情報を全く持たない相手に対して、この異常事態が起きている状況下では、疑わずには居られないのだから、むしろこれは当然の流れだろう。

故に、デミウルゴスから唯一情報を持ちながら、秘匿した形になったアルベドに、苦情が零れるのも当然の話だった。

それに対し、アルベドは目を伏せたまま静かに首を振る。

「……そうね、デミウルゴス。

あなたの言う通り、モモンガ様の宝物殿領域守護者に関する説明不足については、私が補足すべきだったわ。

でも……私はこの件に対して半信半疑なのよ。

宝物殿領域守護者が、本当に信用がおける相手なのか、と。

考えても見て？

このナザリツクに異変が起きた直後に、宝物殿の一部が突然消えたのよ？

デミウルゴス、あなたの言う通り何らかの反意を持った行動だと、疑うのは当然の話

だわ。

だから、あえて私はないにも言わなかったの。

まさかモモンガ様が、あそこまでお怒りになるとは思わなかったから。

それに……確かに、私は与えられている守護者統括と言う役目の都合上、その存在について知っていたわ。

それでも、知らされている事は極僅かなものなの。

その名前と種族、普段の外観とそのレベル、後は創造者が誰なのか程度しか知らないし、直接会った事もないわ。

彼の受け持つ場所を考えれば、それも仕方がない話なのでしようけど。」

どう言葉を紡げばいいのか、本当に困りきった様子でデミウルゴスに答えるアルベド。

その言葉には、嘘はみられなかった。

立场上、デミウルゴスのフォローをせずに黙っていた事に対して、それなりに罪悪感があるのか、それとも情報共有の必要性を感じたのか、アルベドはさらに言葉を紡ぐ。

「……モモンガ様のあの様子では、宝物殿領域守護者に関しての詳しいお話をお伺いするのは、暫く無理でしょうね。

だから、今の段階では私の知っている話をしておくわ。

搜索するにも、ある程度の情報がなければ絞り込みすら出来ないもの。

宝物殿領域守護者の名前は、パンドラス・アクター。

先程、モモンガ様が口にしていらつしやつたけど、もう一度きちんと言っておくわね。

レベルは総合計百で、領域守護者ながら私達と同格に当たるわ。

種族は上位二重グレート・ドッベルゲンガーの影影で……このナザリックにおいて、唯一、モモンガ様が御手で

生み出された僕よ。」

最後の言葉には、どこか言明し難い雰囲気を漂わせていたが、それに対して突っ込むものは居ない。

下手に突っ込む方が、後で面倒になると思ったからだ。

それに、アルベドの気持ちも何となく解らなくもない。

最後まで残ってくれた、慈悲深いモモンガの手で生まれたと言う時点で、羨ましくて仕方がないからだ。

それよりも、デミウルゴスには気になる点が幾つもあった。

「アルベド、今、貴女は宝物殿領域守護者であるパンドラス・アクターは、上位二重グレート・ドッベルゲンガーの影だと言いましたね。

だとしたら……探すのはかなり困難を極めるかもしれません。」

眉を潜めながら、困ったように呟くデミウルゴスに、他の守護者たちがどう言うこと

かと首を傾げる。

それに対し、アルベドは納得したように頷いた。

デミウルゴスの言いたい事を、直ぐ様察したからだ。

「……そうね、全くその可能性がないと言わないわ。

誇り高き、ナザリックに名を連ねる者としては、あまり相応しい行動とは思えないけど。」

二人だけで納得し合っている様子に、焦れたようにアウラが声を上げた。

「ちよつと、二人だけで話を進めないでよ。

ちやんと私達にも解るように、一から説明してくれないと、訳が解らないじゃない。」
二人に詰め寄るようにアウラが問えば、後ろでコキュートスやマーレも同意するように頷く。

それを見て、済まなそうな顔を見せたのはデミウルゴスだ。

横で、忘れていたと顔に手を当てるアルベド。

「ああ、すまない。

私達だけで納得して、進めていい話ではなかったね。

なぜ、パンドラズ・アクターが上位二重の影だと、その搜索が困難になるかと言うのだね。

彼の種族、【二重の影】ドツベルゲンガーはスキルに外装を変化させると言うものがあるのは、君達も知っているだろう？

そのスキルこそが、我々の搜索を困難にさせる原因になるのだよ。」

そこで言葉を切ると、ゆっくり視線を巡らせる。

今の自分の言葉の意味を、アルベド以外に気付いたものが居るか確認するためだ。

どうやら、これだけでは解らないらしい。

なので、彼らの思考を促すように言葉を続けた。

「良く、考えてみたまえ。

今、彼が置かれている状況下は非常に難しいと言っているかもしれない。

少なくとも、味方は皆無の状態で守護すべき数多の秘宝を抱え、単身でナザリツクの外に居る訳だからね。

そんな状態で、自身と秘宝の安全を確保しようとしたら……君達は、彼がどういう行動をとると思うかい？」

デミウルゴスの順を追った言葉による示唆に、その場にいた者たちは静かに考え。

次の瞬間、その答えが頭に浮かんだ。

「……マ、マサカ……。パンドラス・アクターガ、己ノ外装ヲコノ世界デ一番多イ種族ニ変化サセルダロウト、ソウ言イタイノカ、デミウルゴス。」

思わず、コキュートスが漏らした言葉に、正解と言わんばかりに頷くデミウルゴス。「その通りですよ、コキュートス。」

間違いなく、秘宝と己の身を守る為に必要だと判断を下して、パンドラス・アクターは本来の姿を別のものへと変えるでしょう。

私でも、彼と同じ立場におかれたとしたら、可能な限り身を隠し安全を確保しつつ、ナザリックへの帰還方法を探すでしょうからね。

ですから、ただでさえ手掛かりが少ないと言うのに、更に彼を捜すのは困難になると予想出来るのです。」

コキュートスの言葉で不足している部分を、丁寧に補足していくデミウルゴス。

それを聞けば、アルベドと、二人で話を進めていた内容もある程度は見えてきた。

つまり、彼らはパンドラス・アクターが己の姿だけでなく様々な偽装によつて、その正体を見破れなくするのではないかと、その可能性の高さを示唆し合っていたのだ。

なるほど、改めて言われればあり得る話である。

「……その件でありんすけど……」

状況は、デミウルゴス達が想定しているよりも、もつと大変かもしれないでありんすよ?。」

今まで、沈黙を保ちその場に蹲っていたシャルティアが、口元に手を当てたままそう

口を開く。

ほんのり頬が赤く染まっている事に、その場にいた全員が気付いていたが、それよりも気になる発言をしていたので、一先ずスルーして気になった事を確認するべく問い掛けた。

「どういう事ですか、シャルティア。」

あなたは、なにかパンドラズ・アクターに関して知っていると仰うのですか？」

「何か知っているなら、包み隠さず教えてくれ」と、言外に含めてデミウルゴスが問えば、それに対してシャルティアは蹲ったままこちらへ向き直り、素直に頷く。

そして、何度か思い出すように頷いた後に口を開いた。

「私も、直接会った事がある訳ではありませんし、名前を聞いた訳でもありません。」

ですが……かつてペロロンチーノ様が私の部屋で、同じく至高の御方のお一人であり、ご友人であられるウルベルト様と、こんなお話をしていたのを聞いた事があります。え。

確か……そう。

「そう言えば、モモンガさ……んところのNPCですけど、外装は全部で四十五の予定なんですよね、ウルベルトさ……ん。」

「ええ、そうです。」

せつかくなので、その外装の一つに装備をプレゼントしようと思ひまして。

丁度良いので、デミウルゴスに用意した予備の装備のデザイン違いのものを、現在準備中なんですよ、ペロロンチーノさ……ん。」

【そうなんですか？】

それなら、俺も何か装備を用意しようかな。

別に、かわいい女の子用の装備とかでも大丈夫ですよ。

聞いた話じゃ、スキルを使えば性別問わずで変化出来るみたいですし。」

【まあ、あまりやり過ぎの装備じゃなければ、モモンガさ……んも受け取ってくれると思いますよ。】

と、言うものでありんした。

この話を聞けば、デミウルゴスやアルベドなら私の言いたい事が判るでありんしょう？」

思ひ出した会話を、敬称の部分で何度も様と言ひそうになりながらつつかえつつ、再現して聞かせるシャルティア。

これだけの会話を、よく彼女が覚えていたものだど、その場にいた誰もが感心しつつ、至高の方々の会話なら当然かと思う。

それを聞いて、デミウルゴスは何か考える素振りを見せていた。

彼女が披露した会話は、とても貴重なものであると同時に、重要な意味を持っていたからだ。

「とても貴重かつ、重要な話をありがとうございます、シャルティア。」

そうですね、性別すら解らなくなつたと言う意味では、捜査の難易度は上がりましたが、それでも闇雲に探すよりもヒントになりそうな事が一つ、判明しました。

彼は、私の予備の装備のデザイン違いを持つている可能性が有るのですね？

ならば、その事を後でモモンガ様に確認させていただく事に致します。

デザイン違いと言う場合、同じ素材を使っている可能性がありますがね。」

いい話を聞いたと、赤熱神殿の私室にある自分の予備の装備を確認しようと考えるつ、他の面々に視線を向けた。

今のシャルティアのように、直接名前を挙げていなくても、パンドラズ・アクターを思わせる会話を、「至高の方々」がしていた可能性はある。

それを、彼らのなかに聞いていた者が居ないか、確認しているのだ。

現時点で、出来るだけ情報を得ておきたいデミウルゴスとしては、当然の行動だった。しかし、シャルティア以外の面々はなにも知らないらしく、首を横に振っている。

「ゴメン、デミウルゴス。」

私は何も知らないかな。

シャルティアみたいな会話も、聞いたことはないと思う。

「マール、あなたもだよな？」

「う、うん、僕もパンドラス・アクターさんの名前は、ここで初めて聞いたと思うし、モング様のNPCのお話も聞いたことはないと思うよ。」

「ごめんなさい、デミウルゴスさん。」

済まなそうに、双子の二人から声を掛けられ、デミウルゴスは軽く肩を竦めた。

「……そう、気にしなくても大丈夫ですよ、二人とも。」

私だって、全くその存在を知りませんでした。

むしろ、彼の事を漠然とでも御方々のお話から知っていたシャルティアの方が、ある意味では幸運だと言えるのですから。

その様子では、コキュートスも何も聞かされてはいないのですね？」

明確な答えを口にせず、悩む素振りを見せるコキュートスに対して声をかければ、やはり思い当たらなかつたのか静かに頷く。

アルベドに対しては、先程の説明の中に追加されなかつた時点で、特に聞く必要はないだろう。

全員から話を聞き、少しでもヒントを得られた事に感謝しつつ、デミウルゴスは全員に対して軽く頭を下げた。

「……それでは、私はモモンガ様にお伺いする事がありますなら、これでこの場は失礼しましよう。」

今現在、モモンガ様が何処に居るかは不明ですが、伝言でお時間をいただけるかお伺いした上で、いらつしやる場所をお尋ねすれば良いことですからね。」

それだけ言い残し、その場を去っていくデミウルゴスを、誰も止めたりはしなかった。

セバスとシクススのお蔭で確認出来た

モモンガが、自室に戻り暫くした頃。

漸く、パンドラズ・アクターの事に関する様々な感情が収まり、ナザリツクに来てから確認していない事を思い出していた。

《……しまった、結局、闘技場を利用しての攻撃魔法のチェックをし忘れてるじゃないか？

いや、それ以外にも忘れている事は沢山有るぞ！

……アルベド相手に確認しようとしたら、宝物殿の事が発生したからなあ……

優先事項がそちらに傾いて、確認し忘れていた。

闘技場で階層守護者達と会った時も、宝物殿絡みの事で出向くのが遅れたから、まともな観察出来なかったし。》

そう、モモンガは漸く冷静に……正確に言えば、宝物殿関連以外の事に余裕をもって思考を回せるようになった。

落ち着いて考えれば、本来ならここに来るまで何を確認し忘れていたのか、考えていく。

王座の間でしていない事は、アルベドを相手に「彼らが本当に生きているのか」を、確認する為に、彼女の手に触れる事だ。

あの時、残っていた彼女を側に呼び最初に軽く手に触れはした。

だが、アルベドの痛みをこらえる表情を見て、慌てて手を離してしまつた直後だったのである。

あの、ナザリックを揺るがすほどの轟音が響き、宝物殿の一部が抉り取られるように消えたのは。

当然、その続きをするなんて時間も精神的な余裕もなく、その後にする予定だった「ユグドラシルで禁止事項に当たる行為」の接触、つまり胸に触れる行為の確認もしていない。

そう、彼女相手に何もしていないのだ。

闘技場でも、彼らが無駄話一つせずに緊張した面持ちで既に揃っていた事もあり、予定していた攻撃魔法の確認等、必要なことは何も確認出来ていなかった。

むしろ、彼らの様子が緊張し過ぎていて、今更彼らの前で攻撃魔法や自身の能力の確認など、恐ろしくて出来なかつたのである。

その事もあり、彼らを余り側に近寄らせてもいない。

これは、仕方がない対応だとモモンガが思う。

アルベドに手を触れた時の反応から、同士討ちが解禁されている可能性（これも、完全には確認出来なかった）があり、彼らから確固たる忠誠を向けられるまで、裏切られるかもしれないという不安の中にあつたのだから。

確かに、今、彼らから向けられる忠誠心は本物だ。

それでも、実際に彼らに触れて脈がある生物なのか、直接確認した訳ではない。

そんな事もあつて、彼らに対して命ある個々の生物として生きた存在なのか、意思を宿した精巧なアンドロイドのような存在なのか、いまいち認識が曖昧なのだ。

見た目通り生きている存在なら、あれだけの忠誠心を向けられていれば、余程何か失態を犯さない限り失望される心配はないだろう。

しかし、アンドロイドのような存在なら……何らかの干渉で意思が簡単に書き替わつて、あっさり裏切られるのではないかと、一抹の不安が残る。

これは、彼らとの齟齬を無くす為にも、早急に確認すべき案件だろう。
己の攻撃魔法と同士討ちの件は、どう確認したものかと頭を悩ませ。

そこに部屋のドアをノックする音が響く。

「……入れ。」

一瞬、部屋に入れるかどうか迷つたものの、逆に今考えていた事を試す良い機会だと思ひ直し、入室を許可する。

すると、中に入ってきたのは暫く退室を命じてあつた一般メイド一人と、執事のセバスだった。

セバスは、モモンガの落ち着いた様子を見てスツと頭を下げる。

「モモンガ様、このような事態ですので、お側に仕えさせていただきたく、こうして参りました。」

頭を上げてそう述べるセバスに、徐に頷くとモモンガは迷う事無く彼を手招いた。

「丁度良いタイミングできたな、セバス。」

実は、お前に頼みたい事があつたのだ。

協力してくれるな？」

目の前に立つセバスに問えば、勿論だと同意を得られ。

これで、迷う事なく試す事が出来ると内心安堵の息を吐く。

そして、出来るだけ威厳をもってセバスに命じた。

「では、その手を前に出すがいい。」

少し、実験をしたことがあるのだ。」

その言葉に従い、素直に己の腕をモモンガの前に差し出すセバス。

その手首を、負の接触メガタイプ・タツチの効果をそのままに掴む。

すると、アルベドと同じ様に痛みを堪える顔をしたセバスを見て、モモンガは確信し

た。

やはり、負の接触はセバスに対して効果を発揮し……つまり、フレンドリー・ファイア同士討ちが発生しているのだと。

《……これは、色々と注意が必要かもしれないな。

フレンドリー・ファイア同士討ちが、通常化しているなら、範囲魔法による攻撃でも味方を巻き込む可能性がある。ある訳か。

そして、それは俺自身にも言えるだろう。

フレンドリー・ファイア同士討ちが当たり前なら、当然仲間からの常時発動型特殊技術キルも、同じだと思った方がいい。

この、メガタイプ・タッチ負の接触が、いい例だ。

自分で意識して切らないと、常に発動したままだとするなら、ナザリックのNPCも同じ事が言えるのだろう。

……やはり、攻撃魔法とか闘技場で他の事も含めて確認するべきだったな。》

つい、宝物殿絡みで少し動揺しすぎていた事を、モモンガは少しだけ反省する。

精神沈静化が掛からないギリギリで、じわじわ蝕むような焦燥感に煽られ、冷静さを何処か欠いていたのは間違いないだろう。

そんな事を考えつつ、セバスに人と変わらぬ脈があり、体温も存在する事を確認した

所で、握っていた手を離れた。

「負の接触を切らずに触れたのたが……その様子では、やはり痛みを感じたのだな？」

痛みがなくなり、表情を常の穏やかな笑みを湛えた顔に戻っているセバスに問えば、彼は素直に頷いた。

「はい、確かにおっしやる通りでございませぬ。

ですが、お気になさる必要はございません。

あの程度の痛みなど、ダメージにはなりませんので。」

こちらの問いに、迷う事なくそう答えるセバスの様子を見れば、そこに嘘はないのだろう。

まあ……多少の痛みは感じたとしても、レベル百のモンクに通るようなダメージではないので、当然の反応ではあるのだが。

だが、これで一つ確信は持てた、

セバス達NPCは、それぞれが自分の意思を持ち、生きている存在なのだ。

人の姿を持ち、脈があり、いくぶん低めの（これは竜人だからなのか）体温がある存在を生きていると言わずして何と云うのだろうか？

まあ、シャルティアのような真祖吸血鬼やコキュートスの様な種族は、この喩えに値しないだろうが、そんなことは些細な話でしかない。

用は、モモンガが彼らを生きた存在だと認識できるかどうかの話なのだから。

これで、少しだけモモンガの中にあつた不安要素は消えたと言えるだろう。

フレンジー・ファイア
同士討ちがに關しても、一応は確認が出来た。

後は、本当にここが別の仮想世界ではなく、自分達は本当に異世界に転移したのだと、その確信が欲しい。

もちろん、今の段階でもそれに近いものは抱いているが、最後の確証が欲しかった。

なので、その為に一先ずセバスを一時的にこの場から立ち去らせる必要があるだろう。

「……セバスよ、私の部屋のクロークが少々散らかっていてな。

その整理を頼めるメイドを、数人呼んできてくれないか？

その間、私の身の回りの世話は……あー、シクススだったな？

この者に任せよう。」

その指示に、セバスはスツと頭を下げると部屋から出ていく。

何も言わずに向かったので、彼としてもモモンガ様が一人で行動していなければ、取り敢えず問題はないのだろう。

これで、確認する状況は十分に整った。

そう判断すると、モモンガはシクススを手招きする。

「……シクススよ、こちらに来るがいい。」

お前にも、一つ実験に付き合って貰いたいのだ。」

そう言えば、セバスとのやり取りを見ていた彼女は素直にこちらにやって来る。

己が仕える主人の言葉だ。

そもそも、彼女に逆らう気など無いのだろう。

自分の前に立ったシクススに、モモンガはセバスの時と同じように手を出すように指示を出す。

何処か、戸惑いながらも手を差し出すシクススに、その理由を思い当たったモモンガは、安心させるように声を掛けた。

「……そう、心配せずとも大丈夫だ。」

お前相手に、セバスの時のような負の接触を切らずに触れるという真似はしない。

そもそも、違う実験だからな。

では、触れるぞ？」

そつと、手首に指を添えるように触れれば、柔らかな肌の感触とそこにトクン、トクン……と、脈打つ血管の流れを感じた。

次に、触れる場所を肘の内側に変えれば、同じく脈打つ血管の流れと共に、ふわりと香る石鹸の柔らかな香り。

腕の位置を持ち上げたことで、袖が服と擦れ合いそこから匂いが薫ったのだろう。

悪い匂いではないし、香水などより余程好感が持てるものだ。

《……ただ、先程より少し脈が早くなっている気がするんだけど……》

少し、様子が変わったのを気付きながら、それでもまだ確認したいことは終わっていないので、二の腕に触れるとシクススに問う。

「……その、だ。」

お前の心音を確認したいのでな、胸に触れても構わないか？」

脈を計るという行為の延長線上だと、説明しながら問えば、ビクビクと何処か怯えながらも頷くシクスス。

一応は同意を得たので、そつと、胸の谷間近くに指先を触れる。

ふつくらと柔らかな感触を押し上げつつ、服の上から心臓の真上辺りに触れれば、ドクン、ドクン、と先程よりも大きく脈打つものを感じた。

ああ、これは確かに生きている者の命の鼓動だ。

彼女の胸元に触れたことで、その確かな感触を感じ取りつつ、更にセクハラ十八禁の禁止行為に触れる行為か可能な事を確認した。

どんな理由があろうとも、女性の胸に触れる行為は禁止事項に当たる。

それが出来た時点で、確かにこの世界は仮想空間ではなく、現実なのだろう。

漸く、モモンガはそう確信出来た。

協力してくれた彼女に、礼を言おうとした時である。

ドアのノックが響き、彼女がそれに驚いてバランスを崩したのは。

「キャッ！」

彼女の口から思わず飛び出る、小さな悲鳴。

それを、かの執事が聞き漏らすこと等あり得ず、勢い良く押し開かれる扉。

倒れかけた彼女に手を伸ばし、引き寄せて抱き止めたのだが……それを見た、セバスと他のメイド達がどう見るかなど、言うまでもなくて。

「……これは、お邪魔いたしました。」

部屋の片付けの件は、後程改めて参ります。」

そう、頭を下げて退出仕掛けるセバスにメイド達。

彼らの誤解に直ぐ様気付いたモモンガは、必死に呼び止めた。

ここで下手な誤解をされるのは、あまり良くない。

なぜか、そう判断したのだ。

「ま、待て、セバス！」

何を勘違いしているのだ！

私の実験に付き合わせ、緊張していたシクススが、ノックの音に驚いて転びかけたに

過ぎん！

余計な勘違いで、気を使われると迷惑だ！

それと、今見た事は他言無用だ。

シクススはあくまでも協力しただけだからな。

それよりも、部屋の片付けの方を早く頼む。

一応、収納されてはいるが、整理整頓されているとは言い難いからな。」

少しきつめの口調で言いながら、メイド達を呼んだ目的を再度告げてやれば、彼女達はてきぱきと、己の役目を始めていく。

自分の側に控えるセバスとそれを見つつ、モモンガは少し疲れたように内心溜め息を漏らしたのだった。

デミウルゴスと、情報を擦り合わせてみた

モモンガが第九層にある自室に戻ってから数時間後、デミウルゴスから伝言メッセージが入った。

どうやら、アインズに確認したい事が幾つか出てきたらしい。

正直、数時間前に顔を合わせた時の高評価を思うと、なかなか顔を合わせ難い部分がある。

あるのだが、それでもわざわざこうして伝言メッセージで面談の申し込みをしてきている以上、重要性が高い可能性も高かった。

と言うより、デミウルゴスがこうして連絡をしてくれている時点で、それは間違いなく先程モモンガ自身が命じた「パンドラス・アクター」の捜索に関わる事柄なのだろう。

それ位、モモンガにも簡単に想像が出来た。

だからこそ、速攻で自室を訪ねる許可を出したのだから。

それから数分後、モモンガ付きのメイドがデミウルゴスの来室を告げてきたので、そのまま部屋に通させると、彼女たちに退出を命じる。

今回の一件は、この段階で一般メイドや他の僕たちに情報を開示するつもりはないか

らだ。

それに、だ。

デミウルゴスの質問の内容が、今の段階で想定出来ない以上、あまり多くの相手に聞かれるのは色々な点で良くない気がしたのだ。

なぜなら、「パンドラズ・アクター」に関しての情報を殆どデミウルゴスに渡していないのだから。

「失礼いたします、モモンガ様。

ご多忙の中、こうして私の為にお時間をいただき、ありがとうございます。」

丁寧に自分に向けてお辞儀をするデミウルゴスに対し、モモンガは出来るだけ穏やかでありながら威厳のある口調になるよう、気を配りつつ声を掛ける。

「……そう構える必要はないぞ、デミウルゴス。

お前に与えた責務を考えれば、お前が私に会いに来るのも当然の話だ。

むしろ、どのような怒りを感じていたとしても、あの場である程度の情報を開示するか、それとも後で私の元を訪れるように伝えなかった私の対応が不味かったな。」

先程、ついうっかり八つ当たりのように怒りをぶつける形になった事を、済まないと思うからこそその対応だ。

それに、彼らとて知らない事を理由に責められても困るだろう。

あの時の対応は、間違いなくモモンガ側のミスだと言ってよかった。

「……いえ、私の方こそ申し訳ありませんでした。」

きちんと、モモンガ様のお話を全てお伺いしてから質問していれば、あの様にご不快な思いをさせずに済んだでしょうに。」

恐縮したように、再度頭を下げながら告げるデミウルゴスに、モモンガは軽く首を振った。

「……その件はもう良い、デミウルゴス。」

むしろ今は、もっと優先すべき事があるだろう？

それで、私に一体何を聞きたいのだ？」

このままだと、なんとなく堂々巡りになりそうな気配がしたので、先に話を進めるべくデミウルゴスに問い掛けるモモンガ。

その言葉を受け、もう一度だけモモンガに向けて頭を下げた後、デミウルゴスはここを訪ねた用件を切り出した。

「それでは、モモンガ様。」

パンドラズ・アクターに関わる事について、幾つかお教えいただけますか？

まず一つは、わが創造主であるウルベルト・アレイン・オードル様が、かのパンドラズ・アクターの為に作った装備があり、それが宝物殿にいる彼の元にあるのか、と言う

事でございます。

実は、シャルティアがかつてペロロンチーノ様とウルベルト様がそのような話をして聞いたのを聞いた事があると申しております。

それで、その話の中で出てきた装備というのが、私の予備の装備のデザイン違いだと言ふ事も申しております。

もし事実なら、パンドラズ・アクターを探すための手掛かりの一つにならないかと、愚考した次第でございます。」

デミウルゴスの質問の内容を聞き、モモンガは素早く記憶を巡らせた。かつての仲間との、懐かしいやり取り。

特にモモンガと親しかった、「非課金同盟」のウルベルトとペロロンチーノは、確かにパンドラズ・アクターの基本外装が決まった時に装備を贈ってくれた。

まだ、完成は先の話だと言うのに、それでもこれも一つの節目だからと、パンドラズ・アクターの為の専用装備と言う手の凝った祝い方してくれたのだ。

あれは、本当に嬉しくて仕方がなかったことを、モモンガは覚えている。

ただし、ペロロンチーノから贈られた装備は女性ものだった為、残念ながら即座にクロークの肥やしになる事が決定したのだが。

実は、モモンガもデミウルゴスやシャルティアの制作時に、それ相応のデータクリス

タル（彼らの拘りを知っていたので、自分がデザインした装備は諦めた）をプレゼントしていたので、そのお返しだったらしい。

それらを思い出し、その当時の懐かしい気持ちになりつつも、モモンガはデミウルゴスの質問に対して頷いて見せる。

「……そうだな、確かに装備一式をフルセットで貰っていたな。

あれは……ウルベルトさんがナザリックに来ていた頃に、何度かパンドラズ・アクターに着せていたから、宝物殿内にあるパンドラズ・アクターの私室にあるはずだ。

黒をベースに、とてもシックな感じのデザインだな。

帽子からブーツまで、一揃えの物だとすぐに判る位に統一されていて、ウルベルトさんらしいデザインの仕上がりだと、ペロロンチーノさんと話していた覚えがある。

……ああ、そうだ。

確かに、受け取った時に「デミウルゴスとデザイン違いなのです」と言っていたな。

私が覚えている違いは、パンドラズ・アクターの上着のボタンに使用した宝石をデミウルゴスのブローチに、デミウルゴスの上着のボタンに使用した宝石をパンドラズ・アクターのブローチにした事と、外套のデザインが一部違っている事位か。

他にも、幾つか違っている点があるらしいが、実際にお前たちを並べて比べる事はしなかつたからな。

それらも全て、随分と昔の話だ。

流石に、そこまで詳しくは覚えていない。

……参考になったか？」

贈り主のウルベルトは、パンドラズ・アクターにその装備を何度か着せる度、満足そうに頷いて「よく似合いますね」と褒めてくれていた。

実際、黒を基調としたあの装備一式は、パンドラズ・アクターによく似合っていたと思う。

ただ、パンドラズ・アクター自身の能力の関係上、神器級ゴツメズアイテムを持たせられる場所が装備部分にしか存在しなかった為、メイン装備は自分で作った神器級ゴツメズの装備を採用したのだ。

その辺りは、ウルベルトも理解してくれていたのだ、まだ完成前のパンドラズ・アクターが居る宝物殿まで訪ねて来ては、そこで装備させるだけで満足していたと言う記憶も、モモンガの中にはある。

よくよく思い返せば、ウルベルトはパンドラズ・アクターの事をとても気に入って、未完成の状態でも構いに来ていたのだ。

正直、モモンガよりも宝物殿に足繁く通っていたのではないだろうか？

他のギルドメンバーには、未完成を理由にほとんどお披露目していないのに、基本外

装が出来たと聞き付けた時点から、ウルベルトはパンドラズ・アクターの完成状況を見に来ていた記憶もある。

そして、あの装備を着せては「行動チェックですから」と言つて、宝物殿内を連れ歩いていた。

ある意味では、一番パンドラズ・アクターの完成を楽しみにしていたのは、モモンガよりもウルベルトだったのだ。

結局、彼はパンドラズ・アクターの完成した状態を見る事は叶わなかったのだが。

そう……それら一連の出来事は、ウルベルトが仕事の都合でユグドラシルへ簡単に続出来ない海外に向かう事になり、半強制的に引退状態になる直前まで続いた、とても懐かしい記憶だった。

装備に纏わる記憶から、モモンガはウルベルトとパンドラズ・アクターに絡む幾つもの思い出を引き出し、懐かしげに目を細める。

モモンガからの回答を聞き、デミウルゴスはその場で考え込んでいた。

多分、既に自分の予備装備を自分の私室がある第七層の赤熱神殿で、全て確認してきているのだろう。

それらを元に、モモンガから聞く事が出来た情報と精査する事で、どれがそれに該当するものなのか、考えているといった所だろうか。

「モモンガ様、その装備とはこちらのものではないでしょうか？」

今、モモンガ様からお伺いした条件に合うものは、これ一つでした。

なので、間違いはないとは思いますが……念のために、ご確認いただけませんかでしょうか。」

その言葉と共に、デミウルゴスが自分のアイテムボックスから一つの装備を取り出す。

「どうやら、自分の装備を幾つか持参してきていたらしい。」

そうして取り出されたものを受け取ると、モモンガは目の前で広げて確認していく。

「流石だな、デミウルゴス。」

既に、どのデザインなのか候補を絞って持参してきていたのか。

ああ……これだ、な。

細かいデザインまでは、流石に覚えていないが……この、ブローチとボタンに使われている宝石には覚えがある。

装備に関しては、これで間違いないだろう。

それで、他に聞きたい事とは？」

指先で、ボタンの部分を軽く突きつつ、デミウルゴスに質問の続きを促す。

それを受けて、デミウルゴスは続きの質問を口にした。

「それでは、次の質問をさせていただきます。

パンドラズ・アクターの外装や能力に関して、どの様なものがあるのかお教えいただけますでしょうか。

彼の種族が、グレート・ドッベルゲンガー上位二重の影だという点に関しては、既にアルベドから話は伺っております。

ですが、そうなると種族的に外装が複数存在している事や、スキルなどの能力で外装を変化させる事が可能ではないのかと、推察いたしました。

しかし……それでは現時点で私が持つパンドラズ・アクターの情報量では、搜索が非常に困難かと思われます。

そこで、モモンガ様が私に教えても構わないと思う情報までで構いませんので、是非ともお教えいただきたいとお願ひに参りました。」

このデミウルゴスの問いは、モモンガも想定していたものだった。

元々、後からデミウルゴスを呼び出して教えて置く予定だった事なので、むしろこうしてデミウルゴスの方から聞きに来てくれて良かったとすら思っている。

なので、能力的な面に関しては、ある程度まで教える事に何も問題なかった。

「そうか、アルベドからある程度は話を聞いているのか……」

正直、どこまでアルベドがパンドラズ・アクターの事を把握しているのか、私も正確

には知らないのだが……種族を知っているなら、基本知識はあると判断していいだろう。

そうだな、アレの外装と能力か……

パンドラズ・アクターは、種族レベルが四十五で、そのままそっくり四十五の外装を持つている。

そのうちの四十一の外装は我ら「アインズ・ウール・ゴウン」のギルドメンバー全員分で、その能力の約七割から八割が使用可能だ。

残りの外装は、どう設定してあったか……済まないな、デミウルゴス。

どうも、ギルドメンバーの外装と能力の事は覚えているが、そちらはすぐに思い出せん。

基本的に異形種の外装だった事は、ちゃんと覚えているのだが、な。

まあ……どちらにせよ、アレは状況に応じて姿に変化出来るような種族スキルを所持しているのは間違いない。

その点から考えても、もしアレが人間種に姿を変えていたとしたら、捜すのは間違いないく困難だろう。

この世界の事を、まだ正確に把握していない段階ではあるが……人間種がいるとするならば、紛れ込める程度の数は存在しているだろうからな。」

一旦そこで言葉を切ると、モモンガは空を見据えた。

パンドラズ・アクターに関して、デミウルゴスが相手でもどこまで話していいものか、ここにきて迷ったからだ。

正直言つて、パンドラズ・アクターを探し出す為に必要な情報は、外装が変えられる種族的なものだけでも大丈夫な気がしなくもない。

むしろ、デミウルゴスに話しておいた方がいい内容は、別の部分に存在していた。

出来れば、モモンガ的には話したくないのだが……どうせ搜索させていれば、発見時に判明するだろう内容でもある。

それなら……今、この時点でデミウルゴスにだけでも話を通しておいた方が、もしかしたら自分のダメージは少なくなるかもしれない。

「……そうだな、パンドラズ・アクターの事を搜索するお前には、きちんとこの事に関しては話しておくべきだろう。」

アレは、な……その、だ……少々、いや、大分……いや、かなり言動がオーバーで、な。

その名の通り、役者として設定を組み込んだ際に、「役者として大仰な言動をするべし」と定めた結果でもあるのだが……正直、初見の者には良くも悪くも強い印象を与えてしまうらしいのだ。

これは、性格の基礎設定の中に含まれている部分だから、そう簡単には言動が変わる

事はないだろう。

もしかしたら、その辺りを踏まえて捜した方が発見し易いかもしれない。

その、だ。

お前も、アレの言動を直接見たら……少々引くかもしれないが、その点さえ除けば頭脳と知略もお前と同等レベルであり、能力面でもその利便性からかなり優秀な奴ではある。

今回のような事態に直面した場合、その優秀さ故に身を隠した上での逃げに徹せられると、探し出すのはかなりの困難さを極めるだろう。

だからこそ、私はナザリック随一の頭脳を持つお前に搜索を命じた。

その事を肝に銘じた上で、パンドラズ・アクターの捜査に当たってくれないか、デミウルゴス。」

腹を括り、今まで人前に連れ出さなかった黒歴史としての一面を説明したモモンガは、デミウルゴスの様子を窺った。

今の話聞いて、どう思われるのか判らなかつたからだ。

ただ、パンドラズ・アクターの完成を楽しみにしてくれていたウルベルトが創造したNPCだから、もしかしたら大丈夫かもしれないと思わなくもないが、あくまでもこの辺りは可能性でしかない。

そんな風に思いつつ、デミウルゴスの様子を見れば、自分の質問に対するこちらの返答を静かに聞きながら、何やら思案を巡らせている。

「どうやら、モモンガの予想はそれ程外れていなかったらしい。」

【自身と同等の頭脳と知略の持ち主】という点でも、強い興味を持った結果かもしれないが、それでもモモンガは構わなかった。

それで、結果的にデミウルゴスがパンドラズ・アクターを無事に見付け出し、その身柄を保護してナザリックへ連れ戻してくれるのならば。

「……大変貴重な情報をお教えいただきました事、心よりお礼申し上げます、モモンガ様。」

先程の装備の一件に加え、今のお話に関しても踏まえた上で、パンドラズ・アクターの捜索網を構築させていただきます。

それではモモンガ様、貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。

私は、周辺地域の情報収集とパンドラズ・アクターの捜査網構築の為に、これにて失礼させていただきます。」

モモンガが告げた、パンドラズ・アクターの性格面に関して、デミウルゴスは一切触れることなく、感謝の意を示して退室していった。

この反応だと、モモンガから受けたパンドラズ・アクターの言動を含めた性格に関し

て、実際にどう思っていたのかいまいち不明ではあるが、表面的にはそれ程引いていた様子はない。

役者としての設定からくる言動だと、モモンガ自身がはつきりと告げていた事もあり、そのまま言葉通りに受け取ってくれたのかもしれないが、実際は微妙だった。

「まあ……良いか。

デミウルゴスに話した通り、役者なら道化じみた仕種だっておかしくはないからな。

それにしても……まさか、NPCがユグドラシルでの俺たちの会話を覚えているなんて、予想もしてなかったよ。

ホント、これは思わぬ情報だったな。」

シャルティアの一件は、モモンガも予想していなかった内容だったので、早い段階でそれを知る事が出来たのは良かったのだろう。

NPCたちが、どれだけ自分たちギルメンの会話を覚えているのか、今の段階でははつきりしないものの、その可能性があるかと踏まえていれば行動も変わってくるからだ。

これは多分、このナザリックには居ないパンドラズ・アクターにも同じことが言えるだろう。

「……そうか。

だとしたら……パンドラズ・アクターも、ウルベルトさんとの事や俺の言った事を、それなりに覚えている可能性もある訳か。」

そこまで考えた所で、この場には居ないウルベルトとのここ最近のメールのやり取りを思い出す。

確かに、ウルベルトは仕事の都合で半強制的に引退状態になってしまっていた。

半ば飛ばされたような海外では、ウルベルトに割り振られる仕事はかなり多くて忙しいらしく、あちらから送られてくるメールはごく短い文章しかない。

それでも、モモンガに対して最低でも五日に一度のペースでメールを寄越しては、その時点でのモモンガやナザリックの状況と「ユグドラシル」全体の状況を確認して、モモンガとの交流を続けていた人だった。

帰国さえ叶えば、再度「ユグドラシル」に……ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」に復帰出来るように、と。

最後に届いたメールは、丁度最終日の三日前。

『モモンガさん、こんばんは。』

漸く、こちらでの仕事を終わらせる事が出来ました。

【ユグドラシル】が終了するのに、ギリギリになってすいません。

速攻で帰国するために、既にパスポートとかチケットの手配も済んでいるので、遅く

ても「ユグドラシル」最終日の昼には、日本に戻る予定です。

仕事の挨拶回りだけは、帰国当日にどうしても済ませておく必要があるのが面倒です。

この数年、どれだけのアップデートがあつたのか、モモンガさんから伺っていますが、それらのアップデートを済ませる必要があるのも、もしかしたら遅い時間にしか顔を出せないかもしれません。

それでも、絶対にログインしてナザリックに向かうつもりですので、その時はよろしく願いますね。

ナザリックでの再会を、とても楽しみにしています。

ウルベルト・アレイン・オールド

『

結局、このウルベルトとの約束は守られる事はなかったが、あの人の事だから最後まで諦めたりはしなかっただろう。

もしかしたら、「ユグドラシル」のサービス終了直前、最後のコンマ一秒にログインが叶って、それが原因でナザリック以外の場所に飛ばされてしまっている可能性だってある。

現に、あり得ないはずの宝物殿一部消失が起きている以上、その可能性が全く無いとは言いきれなかった。

いや……もしかしたら、ウルベルトのギリギリのログインが影響して、宝物殿が一部飛ばされてしまい、彼と一緒に別の場所に移動してしまったのかもしれない。

「……この想像通りだったら、どれだけ嬉しいか……」

もし、本当に自分の想像通りだったとしたら、パンドラズ・アクターだけではなく、ウルベルトも一緒に発見出来る事になる。

ウルベルト自身も戻ってくるつもり満々だったし、モモンガ的にもそうなってくれた方が嬉しい。

むしろ、彼がどんな形であれ帰ってきてくれたらどれだけ嬉しくて、どれだけ助かるだろうか？

もし、あの二人が本当に自分の想像したのと似たような形で合流し、一緒にナザリツクを探して旅をしているのだとしたら……

《……どうしよう、パンドラズ・アクターの行動や言動パターンを思い出したら、思い切り不安になってきたんだけど……

いや、うん、大丈夫だって。

ウルベルトさん、ノリノリでパンドラズ・アクターの設定の相談に乗ってくれてたし、未完成のアイツを「モーション確認する」って自分が作った装備を着せたり、宝物殿内を連れ回していた位だし。

アイツのあのノリも、言動も半分以上モーション確認で知ってるし!」

頭の中に浮かんだイメージは、モモンガにとつての黒歴史全開の言動をするパンドラズ・アクターと、それを楽しむウルベルトの姿しか浮かばないのだ。

むしろ、ウルベルトの普段の言動を思えば、同じレベルで返してくる気がする。

「……あー、……駄目だ、精神沈静化が掛かる位、すごく不安だ……」

しかも、ウルベルトさんの方がパンドラよりも不安要素が高いことに、今気付いた。

俺だって、アバターの種族に精神が引つ張られてるのに、ウルベルトさんが影響出ない訳がないだろ。

あの人、悪魔だよな？

しかも【悪の魔法詠唱者^{マジックキャスター}】として、ノリノリで動き回ってたよな？

あー、もう！

……あの二人が本当に一緒だと、余計な被害を周囲に振り撒いてそうな気がしてきた

……

……うう、胃なんて無いのに、胃が痛くなる気がしてきた……」

無い筈の胃を押さえ、モモンガはそこまで想像を打ち切った。

これ以上、あり得ない想像でダメージを溜める趣味など無いからだ。

《まあ……どちらにせよ、デミウルゴスが集めてきた情報次第だよな。》

ウルベルトさんに関しては、何か手がかりが見つかったら、速攻でデミウルゴスが報告してくるだろうし……

早く……本当に、早く見つかるといいんだがな、パンドラズ・アクターが。

あいつさえ保護出来れば、消えてしまっている宝物殿の一角にあつたナザリツクの宝の数々は、全て戻ってくるだろうし……》

つらつら、頭の中で半分ほどデミウルゴスを頼りにしつつ、素早く対応策を幾つか練っていく。

モモンガは、この時パンドラズ・アクターの事を考えているのに普段の冷静さを維持していた。

だが、モモンガは気付かない。

パンドラズ・アクターの事で暴走しそうな思考が、ウルベルトが戻ってくる可能性を視野に入れて思考し始めた途端、冷静になっっている事を。

そう、今の自分がどれだけ微妙な精神のバランスで成り立っているのかを。

一つの出来事と、大切な思い出の記憶

異世界に転移して、四日目の夜。

カルネ村と王国戦士長ガゼフ・ストロノーフに纏わる一連の出来事を終え、ナザリックに戻ったモモンガは、守護者たちに名を変えた事とこれからのナザリックの方針を告げ、自室に戻った。

名乗る名前を変えたのは、ギルドの皆が気付き易くする為と言う理由もあるが、パンドラズ・アクターもこの名を聞けば、絶対に確認しに来るだろうと踏んだからだ。

《……少なくとも、大人しく宝物殿で迎えが来るまで待つている位なら、自分で動き出すのは間違いないだろうと、デミウルゴスに搜索の指示を出したのだし。》

「……あー、詳しい情報を集める為にも、このままナザリックに籠りきりになるんじゃないな。俺自身も外に出た方がいいかもしれないな。」

今はまだ大丈夫だけど、宝物殿があんな状態だから、ナザリックの運営資金だって早急に集める必要があるし。

いっそ、冒険者にでもなってみても………!!!
「」

一応、今後の方針に関して大まかに決定した事で、少しでも精神的なゆとりが出来た

ような気がして、自分の考えを口に出して纏めながら、一息入れようと応接セットのソファに座ろうとした時である。

ゾワリと、背筋を冷たいものが走る感覚がしたのは。

それは、戦場に立った時に走る強い緊張感のようなものだった。

自分がいる場所は、ナザリック地下大墳墓の第九層にある自室であり、戦場にいる訳ではないのに、そう感じてしまった理由が判らず、ひどく困惑して。

次の瞬間、この感覚を実際に感じているのは、もしかしたらパンドラズ・アクターではないのかと、何故かそう思えた。

召喚した僕とは違い、自分が創造した僕であつても領域守護者のパンドラズ・アクターと、意識的な繋がりがあつた訳ではない。

だが、この自分が戦場に立った時の精神的な緊張感と同じ感覚は、パンドラズ・アクターが感じているものだ、と、何故か確信出来た。

そう確信したと同時に、心の奥底から浮かびがるのは、痛烈な不安。

ここまで、自分が不安に思う理由は簡単だ。

完成するまではもちろん、完成した後も常に宝物殿の奥に押し込め、外に出した事がないパンドラズ・アクターは、人とともに接した事がなければ、一度も戦闘をさせた事もない。

今まで、そんな必要はなかった。

あくまでも、パンドラズ・アクターの一番重要な役目は、ギルドの仲間の姿とその能力を保持し続ける事だったから。

そんな、「ユグドラシル」時代でも実戦経験が一度もない、宝物殿に収められていただけのパンドラズ・アクターが、単独で戦場に出ているのだとしたら……

実戦経験が全くない、自分の中でギルドの仲間を除いて一番の宝物が戦場に立たされている。

その姿を想像しただけで、目の前が真っ暗になる気がした。

同時に、強制的に精神の鎮静化が起きる。

しかし……何度沈静化しても、不安は消える事無く繰り返し噴き出してきて、治まる様子が見えなかった。

パンドラズ・アクターのレベルは、設定可能であるレベル百ではあるものの、基本的^{ドッベルゲンガー}に二重の影の能力を重視して種族レベルが四十五という、特殊能力特化で創造している。

もし、パンドラズ・アクターがこの世界の強者と対峙していて、その能力値が戦闘方面に特化されていたとしたら。

正直言って、同じレベル百同士でも、勝つ事は難しいかもしれない。

もちろん、ギルドメンバーの能力を使用限度まで使えば大丈夫だと思うが、戦場を知らないパンドラズ・アクターが実際にどこまで戦えるのかなど、想像が出来ないのだ。「……もし、アレの身に何かあったら……」

それこそ、どこか俺の知らない場所で酷く傷付けられる状況に陥って、存在が危うくなってしまうっていたら……」

ふとした想像を口に出した瞬間、それが現実になるとしか思えず、身体の芯から震えが止まらなくなる。

思わず、自分の体を掻き抱いていたが、喪失の恐れからくる震えは止まる事はない。先程から繰り返している精神の鎮静化すら、焼け石に水と同じだけの効果しかなくて。

自分が戦ってみて、この世界のレベルが全体的に低いものだとか確かに実感していた。それなのに、だ。

それでも……パンドラズ・アクターが「戦場知らずの箱入り息子」であるが故に、心の底から不安が拭えないのだ。

自分の目でその存在が確認出来ない為に、どうしても自分が感知しない場所で失われてしまう可能性が頭をチラついて、その恐怖と鎮静化の波が何度も繰り返されるうちに、気が狂いそうになり掛けた瞬間である。

『そんなに心配しなくても、大丈夫ですよモモンガさん』

そう、懐かしい友の――式式炎雷――の声が心の中で聞こえた気がして、同時に古い記憶が頭の中で蘇ったのは。

それは、パンドラズ・アクターの作成コンセプトを決め、その為にギルドメンバーたちから外装データと現在の能力データを譲り受ける為に、円卓の間で頭を下げて回っていた時の話だ。

誰もが、モモンガの頼みを快く聞いてくれて、事細かなデータを後で纏めて渡してくれる約束してくれた。

それに感謝しつつ、そのデータをどうやって再現しようか考えていた時である。

いつの間に纏めたのか、自分の分のデータを差し出しながら、式式炎雷がふとこんな事を言い出したのは。

「ねえ、モモンガさん。

今度モモンガさんが作るNPCなんですけど、俺の能力は出来るだけ隠密系スキルを軸に再現する方向で進めませんか？」

突然の式式炎雷の主張に、いきなり何を言い出すのかと驚いていると、たまたまモモンガの横にいたペロロンチーノが口を挟む。

「んー、それだと結構能力がアンバランスになるんじゃないんですか？」

「いや、だって二重ドッベルゲンガーの影は最大でも八割までしか能力再現できないんですよ？」

「だったら、最初から隠密系スキル特化で高機動を狙った方がいいかなと思って。」

「でも、モモンガさんのNPCって宝物殿領域守護者の予定だし、別に隠密系スキルとか高機動とかは要らないと思うけどなあ。」

「いやいや、せっかく俺の外装と能力を使えるようにするのなら、俺らしいビルド構成にするべきでしょ、ペロロンチーノさん。」

「それこそ、変幻自在ドッベルゲンガーの二重の影なんだから、幾らでも外装を変えられる訳だし。」

俺の能力と、たつちさんの能力を交互に使われたら、すごく相手はやり難いと思うんだよね。」

特に、宝物殿まで辿り着くには、そこまでに相当の戦闘を重ねて消耗している筈だからさ。」

そこで、俺の隠密系スキルとか使われて背後から忍び寄られたら、結構いい感じで潰せる気がするし。」

「あー……なるほど。」

「そうやって考えてみれば、それも悪くないかもですね。」

「それなら、俺はやっぱ弓兵だし弓の的中率をまずメインにおいて欲しいかも。」

「二人とも、面白い話をしていますね。」

そういう事なら、私は攻撃魔法が中心の魔法詠唱者としての能力値が最優先になりませんね。

まあ、モモンガさんが死霊系魔法詠唱者マジックキャスターですし、それで丁度良くないですか。」

式式炎雷とペロロンチーノの会話に、更に口を挟んだのはウルベルトだ。

それを皮切りに、その場にいた面々が自分の能力はどこをメインにして欲しいなどと言出し始め。

それぞれ、自由気ままに自分の主張を口にするものだから、本人たちの希望通りに出来るかどうか判らず、モモンガは目を白黒させていた。

「自分はどうか考えているのか」など、その場にいた全員が思うがまま一斉にそれぞれのコンセプトを言われても、聞き取れる筈がないのだ。

しかし、ほぼ全員から同時に話しかけられて、聞き取れないでいるモモンガの混乱など気にする事無く、その場にいた全員が『自分はこうして欲しい』と言う主張を言い合っている、どんどん纏まりがなくなっていく……

結局、一部の突出した主張以外、全部聞き取る事が出来ずに困っているモモンガの様子に、首を竦めながら一つの提案を口にしたのは、ギルドの軍師であるふにと萌えだった。

「……あのねえ、皆さん。

先程から、モモンガさんが困っている姿が見えないんですか？

全員が一齐に自分の主張を口にしたら、モモンガさんが全部聞き取れないに決まっているでしょうが。

そんな風に、全員で一齐に聞き取れもしないお願いする位なら、自分の希望を全員が纏めた上で、モモンガさんまで提出すれば良いんですよ。

実際、どこまでその希望通りに再現可能なかの精査は、後から要確認になる面々もいるでしょうが……

まず、この話を聞いた最初の段階で、式式炎雷さんみたいに希望があればきちんと告げて、その上でそれも添えてデータを渡せば良かったんですけどね。

それと、もしモモンガさんが良ければ、モモンガさんの所のNPCの職業レベルの1つに、吟遊詩人パを入れませんか？

少し前に読んだ、百年以上前の小説に出てくる吟遊詩人パが、歌うだけでなく戦闘能力も高くて頭が良い、文字通り万能型だったんですよ。

なので、もし良ければ変幻自在の万能型になるだろうモモンガさんのNPCも、そのキャラクターに似ていると面白いかと思ひまして。

どんな人物なのか、キャラクター構成を書き出して私のデータと一緒にお渡しします

から、ぜひ参考にしてください。」

ニコニコと笑いながら、モモンガの困っている状況を取り除く提案をした上で、そつと自分のお勧めの職業レベルを習得させたらどうかと話をもつていく、ぷにつと萌え。

それに触発され、周囲から色々な声上がるもの、全部「希望や要望があれば、それらを全部纏めてからモモンガさんに提出」と言い切られ、モモンガがそれに同意したのでそれぞれ自分の希望を纏めるべく動き出していく。

それこそ、波が引くかのように円卓の間から退出してくのを見ながら、既に会話の途中で希望を書き出していたらしい式式炎雷が、要望書を差し出してきた。

「とにかく、俺の希望は隠密系スキルを中心にして、高速機動が出来る構成にして貰える
と嬉しいかな。

もちろん、最大八割までの再現率なのは判ってるし、無理な部分は諦めるけど。

でも、やはり隠密系のスキルは絶対に持たせてやって欲しい。

それがあれば、少ない人数相手ならモモンガさんのNPCの生存率が上がるでしょう？

まあ、宝物殿まで入り込まれてたら、俺たち全滅の可能性もあるけどね。

とにかく、俺が言いたいのは俺たちのデータを使うなら、それぞれその人の拘った部分を再現した方がいいと思う訳さ。

どんな事態が起きても、根底となる能力が固定化されてたら、案外上手いくいかもよ？」

ご機嫌な笑みで主張され、モモンガは手渡された要望書とデータを手に去っていく彼の後ろ姿を見送るしか出来なかった。

その後、全員からのどういうコンセプトで再現して欲しいのか要望書が提出された訳だが、実に彼ららしくその外装と能力に最適化した部分を根幹にした要望が多かったので、モモンガはそれを基本としてパンドラズ・アクターのデータを構築していったのである。

もちろん、自力では再現不可能な部分はそれぞれ当人に相談できれば相談していたのだが。

そうして……何度も修正しながら再現する事に努めて、漸くパンドラズ・アクターが完成した頃には、ギルドメンバーは誰もログインしなくなっていた。

式式炎雷の声が聞こえたと思つた瞬間、パンドラズ・アクターを設計していた頃の話の思い出したモモンガは、それまで自分の中で強く湧き上がっていた恐怖がかなり治まっていた。

それによって、恐怖を抑え込むように引き起こされていた、精神の鎮静化も治まってる事に気が付く。

あの時……式式炎雷さんの主張を取り入れる事にして、本来の彼の無茶振りに近いビルド構成をベースに、隠密系スキルをメインに再構築したパンドラス・アクター。

そうだ、パンドラス・アクターは、ただ素直に皆の外装と能力をコピーした訳じゃない。

ぶにつと萌えのお勧めキャラの設定を見て、「演じるもの」として割と良い感じだと思っただから、そのコンセプトを取り入れて職業レベルの中に吟遊詩人バードを組み込んだし、武器選択の中に楽器以外に弓も組み込んでおいた。

これは、そのままペロロンチーノの能力も応用出来るんじゃないかと、ちよつとだけ考えた上での構築だ。

他にも、色々とギルドメンバーの拘りを再現する為に掛けた時間は、全部パンドラス・アクターの身になってる筈だと思う。

「……そうだよな、みんなが色々と拘った部分を、全部組み込んであるんだ。

俺の最高傑作で、一番の宝でもあるパンドラス・アクターが、例え外に出すのも戦闘するのも初めてだとしても、そう簡単に負けたりする訳がないんだよな……」

そう、ゆつくりと思えば返しながら改めて口にしてみれば、完全ではなくても心の奥に

巢食う恐怖は消えたし、身体の芯から震えて止まらなくなっていた震えが消える。

むしろ、彼らとの懐かしい記憶が蘇った事で、胸の中にはどこか暖かなものを感じている位だった。

例え、パンドラズ・アクターが完成する頃には、仲間の姿が誰一人見られなくなってしまうっていても、その思いはパンドラズ・アクターの中に残っている。

だからこそ、モモンガにとってパンドラズ・アクターは誰よりも大切な「宝」だったし、失う事が出来ないものだ。

同時に、大切な仲間たちの能力を詰め込んでいるパンドラズ・アクターの事を、もう少しだけ信用してやるべきではないだろうか。

《……式式炎雷さん、あなたの言う通りですね。

万が一、何かがあつてパンドラズ・アクターが一人で対応しなくちゃいけないなら、あなたの隠密系スキルはとても有効だと思います。》

アインズ・ウール・ゴウン最速を誇った、かの忍者の姿を思い浮かべ。

《ふにとつと萌えさん、あなたの言っていた様に吟遊詩人のスキルも付けたんですよ。

弓が得意だつて言つてたので、吟遊詩人の武器スキルに弓を選択して、ペロロンチーノさんの能力を引き出せるようにしたり、結構構築に手間がかかったんです。

まあ……ウルベルトさんが、ログイン出来なくなつてからも五日に一度メールをくれ

て、小まめに相談に乗ってくれたお陰で、その辺りのスキルとキャラの構成を納得がいく所まで設定出来たんですけど。》

彼の主張を受け入れ、パンドラに持たせた一つの職業を思い出しながら、苦労した事を頭の中で言葉に連ね。

《ペロロンチーノさん、あなたの必中能力を中心に据えてのビルド構成を再現するのは、意外に苦労したんですよ？

》
本当に、どれ一つ欠けても困る様なガチビルドなんですから、ペロロンチーノさんは。

親友の一人の能力は、バランスが取るのが難しすぎて、結局最後の方まで再現がずれ込んだのだと思い出し。

《ウルベルトさん……どうすれば、あなたの使う攻撃魔法を最大限まで再現出来るのか、相談に何度も乗ってくださいってありがとうございました。

いつも短い返事なのに、パンドラズ・アクターの能力再現に関しては、これでもかって位の長い説明を送ってくれましたっけ。》

そして、離れていてもメールのやり取りすら大変な環境でも、相談に乗り続けてくれたもう一人の親友の姿を思い浮かべる。

「……そうですね、そんな風に皆さんの外装と能力を譲り受けたパンドラズ・アクター

が、この世界の住人に負けるなんて、あり得ない話でしたよ、うん。」

つい、その場にいないメンバーに対して話し掛けるように、自分の中にある思いを口にしていけば、それまで感じていた強い緊張感が突然消えた。

スツと、素早くアイテムで時間を確認してみれば、丁度最初に緊張するのを感じてから二十分程が過ぎていて。

もし、本当に今まで感じていた緊張感がパンドラズ・アクターの感じていたものだとすれば、これは戦闘が終了したと言う事なのだろう。

そう思うと、やはりパンドラズ・アクターが少なくとも存命しているのか、確認したくなってしまうもので。

それまで座っていたソファから立ち上がると、自室から王座の間の前にあるソロモンソレゲメトの小さな鍵トまで転移する。

素早く、中に誰もいない事を確認した上で、音を立てない様に気を付けながら中に身を滑りこませ、急ぎ足で奥へと進めて。

とにかく速足で広間の中を移動し、王座の前で慣れた手付きでマスターソースを確認すると、やはり今までと変わらないままパンドラズ・アクターの名前は白い文字で表示されていた。

それを見て、漸くモモンガの中で本当の意味での安堵が広がる。

やはり、それまでは怖かったのだ。

もしかして、自分が感じていた緊張感を感じなくなったのは、パンドラス・アクターがダメージを受けすぎて気絶するなり死亡するなりしてしまったからじゃないのかと。

幾ら、仲間の言葉と自分が作り出したNPCの事を信じていても、「絶対」と言う事が
あり得ない事を、モモンガはちゃんと知っていた。

知っているからこそ、自分の目でマスターソースを見て無事なことを確認しなくて
は、安心する事が出来なかったのだ。

なら、最初からここに確認しに来なかったのか？

それは簡単な理由だ。

モモンガが、この王座の間から退出した時、まだ僕は平伏した状態で全員残っていた。
多分、アルベドやデミウルゴスあたりから何らかの追加指示が出されていたのだら
う。

つまり、それから暫くこの王座の間は使用されていただろうと、すぐに予測出来た。

その状態から、彼らが退出するまでに掛かるだろう時間は、短くても十五分は掛かる
はずで。

幾つもの状況を予想すれば、モモンガが一人でここを再度利用する事が出来る、最短

の時間はどうしても二十分以上後だったのだ。

「……だが、まあ……これで一応、パンドラズ・アクターの命に別状がないのと、洗脳されている可能性がないと言う事だけは、確認する事が出来たな。

怪我をしているかどうかについては、また別の話になるが……まあ、それなりに回復アイテムは持たせてあるし、余裕があれば速攻で治していそうな気もするが。」

つつい、自分の手持ちのアイテムの予備など、余裕があるアイテムは宝物殿のパンドラズ・アクターの自室に突っ込んでいたのを思い出す。

その中には、効果不明の未鑑定アイテムもあつたような気もしたが……それに関して、いまいちかはつきりと覚えていないので横に置くとして、だ。

頭が良いと設定してあるのだから、自分の裁量である程度は判断して動く事が出来るだろうと思う事にして、だ。

問題は、それ以外の場合の時。

「どちらにせよ、アレの無事の姿を見るまでは、本当の意味で安心はできない、か……もし、そう……もしも、だ。

アレが簡単に治療する事が出来ない様な、深手を負わされて身を隠していたり、洗脳されるような事があつてみる……

それこそ……この地に住まう生きとし生けるもの全てに、後悔させてやる……」

マスターソースの画面を消し、静かに吐き出すように零れたモモンガの声が、王座の間に低く響く。

それこそ、もしこの声を聴く者がいたとしたら、それこそ恐ろしさで心臓が止まるのではないかと言う位、凍り付く様に冷たい響きに満ちたものだった。

衝撃と絶望と、そして……アインズの慟哭 前編

アインズが、パンドラズ・アクターが戦闘時に感じたものと似た、強い緊張感を感じ取った二日後の夕方。

再び、背筋に恐ろしい程の悪寒を感じたアインズは、思わず書類に目を通す手を止めていた。

この頃、パンドラズ・アクターは、ウルベルトと共に彼の本体のある洞窟を訪れて、封印に対峙していたのだが、当然その事実をアインズは知らない。

彼に伝わるのは、パンドラズ・アクター自身が感じる失敗出来ない事から発した緊張感と、ウルベルトを己の手で助けられると言う、最高の役を請け負った事から発する精神の高揚である。

つまり、現時点でアインズに伝わっているのは、漠然としたパンドラズ・アクターの精神的な高揚と緊張感の二つの筈だった。

アインズが、思わず書類を片付ける手を止めたのは、文字通り、背筋が凍る様な恐ろ

しいモノが来る予兆を感じたからだ。

それを感じた瞬間、一気に精神の沈静化が掛かったアインズは、これを感じているのがパンドラズ・アクターであり、間違いなく戦闘に入る前の高揚感と緊張だと、理屈ではなく理解したのである。

間違いなく、アインズの身に待ち受けているのは、言葉に言い表せないだろう精神的な負担だ。

自分が直接戦闘に参加して、その際に感じる緊張感や恐怖などの感覚なら、多分、警戒が必要なレベルまで疲弊する訳ではないだろう。

しかし、だ。

これを感じるのは、自分ではなくパンドラズ・アクターであり、実際に何が起きてそうなっているのか、全く判らないままに戦闘中の精神的な感覚だけが伝わってくる。

その事が、実際にどれだけ恐ろしいものなのか、アインズと同じ様に理解出来るものがあるとしたら、それはギルメンだけだろうか？

前回、それを回避する事が出来ずにどれだけ自分が精神の鎮静化をする羽目になったのか思い出せば、とても放置できる状況ではない。

何故なら……今、アインズは、アルベドと共に現時点で判明している事について、確認作業を兼ねた書類整理をしていたのだから。

この場に居るのは、アルベドだけではない。

現時点でアインズの側付きのメイドや、護衛役として八肢の暗殺蟲エイトエッジ・アサシンが常に側に控えているのだ。

流星に、何も知らない彼ら僕たちを前にして精神の鎮静化が何度も掛かっていれば、誰の目から見ても不審さを拭う事は出来ないだろう。

それ位の事は、アインズにだって理解出来る。

現に、今だって突然手を止めたアインズに対して、何かあったのかと言う視線が、四方から向けられているのを感じるのだ。

こんな中で理由も言わずに取り乱せば、この場は蜂の巣を突つついたような騒ぎになるだろう。

特に、「ユグドラシル」の最終日について悪戯心で設定を「モモンガを愛している」と変更したアルベドの視線は、アインズが何をするにも食い入るように見詰められている気がして、とても怖いのだ。

そんな相手の前で、どうする事も出来ない理由で不用意に混乱状態を晒すなど、恐ろしくて出来ない。

だからと言って、誰にもどうする事も出来ない事を彼らに話したとしても、悪戯に困らせるだけだと言う事も同時に理解していた。

故に、アインズに出来る選択肢はただ一つ。

「……あー、済まないが……今日はここまでしておくでしょう。」

一つ、一人で確認したい事を思い出したのでな。

この部屋にこもる予定だから、護衛は不要だ。

側付きのメイドも含め、全員この部屋から即座に退出して、私が呼ぶまで近づかない様に。」

そう、この場にいる者全てに対して、人払いの指示出して一人になる事だった。

現状において、アインズに他の選択肢はない。

ナザリツクの支配者として、僕たちの前で取り乱す姿を見せる訳にはいかないからだ。

アインズの突然の言葉に、何があつたのかと詰め寄りたそうにこちらを見るアルベドの視線を強く感じたが、あえてそれに気付かぬ振りをして、更に視線で急ぐように促した。

何せ、パンドラズ・アクター側がいつ戦闘を始めるのか判ら無い以上、今は一刻を争う状況なのだ。

申し訳ないが、支配者としての威厳を保つ為にも、この場に誰一人残すつもりはない。

《正直、かなりこの場にいる者達の不審を煽りそんな発言をしていると、俺だって思うけ

どさあ……仕方ないだろう？

下手に誰が残っていると、突然俺が他人には何も判らない状態で蹲ったり叫んだりする姿を、延々と見せる事になる訳だし。

むしろ、パンドラの戦闘がいつ始まるか判らないから、可能な限り早急にこの場から全員を下がらせないと、かなり不味いんだけどなあ……」

切羽詰まった今のアインズの頭は、その点しか考えが及んでいなかった。

故に、アインズを一人にする事に抵抗を示すアルベド達に対して、更に言葉を重ねて指示を出す。

「……このナザリックの中にいる限り、どんな危険があると言うのだ？

お前たちを信頼しているからこそ、一人で部屋に籠る位は問題ないと判断したと言うのに。」

私の言葉を理解したら、次に伝言^{メッセージ}で呼ぶまで、私の部屋の近辺にも近付かない様に。

余程の緊急事態……そうだな、パンドラズ・アクターを発見した等の特別な案件でない限り、直接この場にくる事はもちろん、伝言^{メッセージ}で連絡する必要もない。

この周囲の部屋の掃除等を受け持つ者が、うっかりこの部屋の側に近付かない為にも、その旨はきちんと伝え忘れないようにしてくれ。」

少しだけ、苛立ち混じりにそう言葉を重ねれば、流星にアルベド達も反論が思い浮か

ばなかったらしい。

反論すると言うことは、自分達が計画してアインズに許可を受けて敷いたナザリック内の防衛網が、ザルだから御身を守る自信がないと言っているようなものだからだ。

だからこそ、そのアインズの言葉にその場にいた全員が渋々従うことを了承して、頭を下げて退席していく。

その結果、アインズは気付いていなかった。

まさか、頑として譲らぬ自分の指示に渋々従ったアルベドの顔から、能面のごとく表情が消えていたことに。

部屋の中に居たものを、自分の部屋から出して部屋の回りも完全に僕の気配が消えて、人払いが完成したのを確認すると、アインズは漸く安堵の息を吐いた。

これで、自分がどれだけ騒ごうとも問題はないだろう。

完全に一人の空間を確保した事で、少しだけ余裕が出来たからだろうか？

先程から感じていた、パンドラズ・アクターからの緊張感が微妙に弛んだ気がした。

むしろ、どこか緊張の種類が変わった気がするのだ。

先程の緊張も、もしかしたら戦闘を前にしたのではなく、何かミスが許されないも

のを前にした強い緊張だったのかもしれない。

何より、アインズの胸の内にじわじわと何か期待を込めたかのような、そんなどこか暖かなキラキラとした感情も感じる気がするのだ。

そんなものを感じて、アインズが気を緩めた瞬間である。

背筋が芯まで凍る様な、そんな恐ろしい程の緊張感が伝わって来たのは。

この時、パンドラズ・アクターとウルベルトは、結界の解除を成功し……ボスモンスターのフリーズを覚醒させ、戦闘に入る前段階の状態だった。

そして、互いに欠けている彼らが選択した戦法が、アインズを確実に消耗させるものだったことも、彼らは知らない。

何故なら、パンドラズ・アクター側の繋がりはアインズよりも更に薄く、一方的にパンドラズ・アクターの状態をアインズに伝えるものであって、アインズの状態を彼に伝えるものではなかったから。

もし、自分の緊張やダメージ等の状態が伝わる事を知っていたら……もう少しパンドラズ・アクターは、自分を守る戦い方をしたかもしれない。

あくまでも、「そうだったかもしれない」と言うレベルの仮定でしかないのだが。

ゾワゾワと、背筋を這い上がる恐ろしい程の緊張感が、一気にアインズの背骨を伝っていく。

急激に高まったそれは、精神の鎮静化が発生した事で一旦は消えたものの、再び這い上がってきた。

それと同時に、それまでアインズが僅かに感じていたはずの、暖かいような柔らかな感情は一気に消え失せ、キリキリと鋭い感覚に変わっていくのが、とても恐ろしくて仕方がない。

だが……微妙に高揚した感覚も含まれ始める感じもするのは、自分の気のせいだろうか？

訳が判らない感覚に、酷く心を掻き乱されては鎮静化されていくのを感じて、アインズは目眩がしていた。

今、アインズが感じているのは、二つ。

どこか喜びに心が浮き立つような、そんなワクワクとした期待交じりの高揚感を感じながら、それでいて強すぎる……それこそ、死の覚悟を腹に据えたような、そんな緊張感がアインズの中で入り混じる。

後者の緊張感は、単独で強敵を前にした可能性を踏まえればまだ判るのだが、前者の感覚が理解出来ない。

この感覚は、まるで誰かと協力体制を取っているかのような、そんな感覚がするの
不思議で仕方がなかった。

前に感じた時は、こんな風には感じなかったから。

だからこそ、アインズは不審に感じたのだが……直ぐにそんな事を考えている余裕は
無くなった。

何故なら、今まで以上に強い緊張感による精神の鎮静化の波と、断続的に全身の至る
ところに鈍く響く僅かな痛みを同時に感じたからだ。

本当に、アインズがその身に感じるのは細やかなもので、軽く何かに当たったら程度
の痛みだ。

しかし、だ。

これが……もし、パンドラズ・アクターが攻撃を受けている場所と同じで、感じる痛
みが数倍に跳ね上がるのだとしたら……

そう思っただけで、アインズは精神の鎮静化が無ければ冷静さを保てなくなりそうに
なった。

自分が思考を巡らせているほんの僅かな間にも、全身の至る所に無数に感じる僅かな
鈍い痛み。

それが全部、パンドラズ・アクターの身に降りかかっている敵からの攻撃だとしたら、

相当の数の攻撃を受けている事になるからだ。

正直、それ相応の戦闘力を持たせたはずのパンドラズ・アクターが、これだけの攻撃をその体に直接受ける状態だとすれば、確実に敵は同格以上の実力者だと考えていいだろう。

それと同時に、僅かにでも自分がパンドラズ・アクターが受けているだろう痛みを感じられている事実を前にした事で、頭の中が少しだけ冷静さを取り戻す。

《……確かに、パンドラズ・アクターはどちらかと言えば特殊役ワイルドの立ち位置で、戦闘系かと言われると微妙なタイプだ。

しかし、パンドラズ・アクターが持っている二重ドッベルゲンガイの影の能力を前面に押し出して、持たせた仲間のスキルがあれば、それ程苦戦する筈がない……

いや……もしかしたら、別の場所に転移した影響をアイツだけが受けて、一部の能力が発揮出来なくなっている可能性も視野に入れた方がいいのかもしれない。

そう考えれば、どちらかと言えばそれ程の実力者がいるとは思えないこの世界で、パンドラズ・アクターがこれだけの強烈な戦闘に対する緊張を抱いている理由にも説明がつく。》

ほんの僅か、それこそアインズのHPを決して削る事が無い程度のごく微量の痛みだが、それをパンドラズ・アクターと同じように感じていると思えば直したお陰で、前回よ

りも僅かにだが冷静さを取り戻す事が出来た。

戦闘が始まる前の、何とも言い難いような不思議な高揚感には既に感じ取る事は出来なくなり、アインズが今感じ取れるのは精神の鎮静化が定期的に掛かるほどの痛烈なまでの戦闘時の緊張感と、ごく僅かな鈍い痛みだけ。

これだけの数、もし本当にパンドラス・アクターが自分の身に受けているとすれば、回復のタイミングを間違えた時点で確実に見える未来は、ただ一つ。

そう思った瞬間、アインズはその恐ろしい現実には自分の身体を掻き抱いていた。

もしこれが、自分の目の前で行われている戦闘だとすれば、無理矢理にでも参戦してパンドラス・アクターの負ったダメージを回復しつつ、敵を叩きのめす事も出来ただろう。

そうでなかったとしても、自分が把握している状況下での戦闘なら、途中から介入する事だって可能だった。

アルベドたち僕が、自分自身が戦闘に向かう事を止めるなら、逆に彼らに命じて介入させるといふ手段だって執れる。

だが……現時点ではパンドラス・アクターがどこに居るのか全く行方が掴めていない上に、こうして誰と戦っているのかすら判っていないのだ。

今のアインズに、この状況を変える為に打てる手は何もなかった。

「……なぜ……何故だ……どうして、こんな風に緊張感や僅かな痛みが伝わってくるなら、どうしてアイツの居場所が判らないんだ!!」

せめて……せめてアイツがいる方角だけでも分かれば、デミウルゴスにそちらの方面を徹底的に捜させるのに!」

アイنزは、無意識のうちにギュツと握り締めた拳を振りかぶると、そのままそばにあつたテーブルへと振り下ろそうとして……出来なかつた。

激高したアイنزの精神が、スキルによつて強制的に沈静化されたといえ、それも間違いない事実だろう。

だが……それ以上に理由を挙げるとすれば、ここが人の出入りが割と多いアイنز自身の自室だつたから。

そう、例えばここがアイنز自身の部屋だとしても、メイドなどの僕が出入りする可能性がある場所で、そんな真似をする訳にはいかないという、自制心が瞬間的に働いたからだつた。

もし……アイنزが怒りに任せて何かを破壊した事を、彼女たちからナザリックの僕たち全体に伝われば、それこそ騒動にまで発展しかねない。

ギリギリと、身を焼くような焦燥感に駆られては鎮静されるという状況に身を置きながら、それでもまだその程度の事は判断出来るだけの理性が、アイنزにはまだ残つて

いたと言ってもいいだろう。

だからと言って、度重なる精神の高揚と沈静化が、アインズの精神を削っていない訳じゃないのだ。

むしろ、状況が把握出来ない中で強い緊張感と、全身に微かに感じるダメージを受ける状況に、じわじわとだが確実に柔らかい部分が削がれて、アインズの精神を消耗していく。

繰り返す精神の高揚と沈静化は、アインズに極度のストレスを与えるのだから、当然の話だった。

「まあ……それでも、まだ本当に耐えられない程のレベルではないんだけどな。

それよりも、パンドラズ・アクターの方が心配だ。

前回の戦闘は、今の感覚に比べたらそれこそ初心者レベルのものだったと言っていない。

感えている緊張感と、私が断続的に感じる僅かな被ダメージ数から考えても……最悪な事態を想定してきちんと警戒して対策をとっていると、そう信じたいんだが……」

がつくりと、疲れたように全身から力を抜きながら、ソファに腰を下ろして背凭れに凭れたアインズは、胸の中で小さく呟く。

正直、強制的に起きる精神の鎮静化がなければ、今の段階ですら酷く取り乱してこの

部屋の物をすべて破壊してしまっていただろう。

それ位、今のアインズは共鳴して伝わってくるパンドラス・アクターの戦闘時の緊張感と実際に負っているダメージからくる僅かな衝撃に、酷く振り回されていた。

だが……口に出して呟いたように、まだ本当の意味で耐えられないレベルではない。乱高下する精神状態に、グラグラと意識は揺らされる部分が強いのだが、それでもまだ理性を保っていられるレベルなのだ。

もちろん、これも前回のパンドラス・アクターとの共鳴による緊張感を感じたという経験があったからこそ。

これが初めて体験するものだったとしたら……度重なる精神鎮静化によってここまで、理性が保っていたか自信はなかった。

いつそ……こんな苦しいだけの感覚だけの共鳴なら、無かった方がよかったのかもしれない。

そんな考えが、フツと頭の端を掠めた瞬間、アインズは思わず首を振った。

確かに、その方がこうして自分が把握していない所で、突発的にパンドラス・アクターが感じた精神の戦闘時の緊張などの高まりが伝わってきて慌てるという事態は起きなくなるだろう。

だが、それは同時に……パンドラス・アクターの身に何か異常事態……そう、その命

に係わるような状況になっても、全く自分には伝わらなくなると言う事で。

「……判っている……ああ、判っているさ……」

こうして繋がっているからこそ……俺はアイツが無事に生きている事を、絶対の自信を持って断言する事が出来ているんだって位……」

こうして、パンドラズ・アクター側に強い感情や緊張などの感覚が引き起こされない限り、アインズが自覚する事は殆どないものの、それでも確かに自分達の間には細く繋がった一本の糸が存在している事を、アインズは先日の一件ではつきりと理解していた。

だからこそ、こうして何かパンドラズ・アクター側に大きな感覚が発生した時に、その感覚がアインズにも伝わってくるのだ。

普段は、意識して探らないと自覚すら出来ない様なそんな細い繋がりだとしても、それが繋がっている事でアインズは安堵出来る事がある事も、ちゃんと判っている。

そう……パンドラズ・アクターが確実に生きていくという確信を。

例え、無数のダメージを負っているのが伝わってきても、それすらパンドラズ・アクターが生きているから感じる感覚だ。

そう考えれば、どんなものでも伝わってくるだけましな状態だと、そうアインズが思い直した瞬間である。

今まで感じた事が無い程の、複数個所への痛みが発生し。
ブツツツ……

文字通り、何かに分断されたかのように掻き消され、そのまま、何も……それまで感じていた筈の繋がりを、一切感じなくなったのは。

あれだけ、何度も精神状態が乱高下する程に感じていた強い緊張感も、微かにしか感じ取れない癖に確実にダメージを負っている事を示す痛みも、そして……ずっと今まで感じていた細く微かなでありながら確実に繋がっていた、パンドラズ・アクターへと伸びる糸が、全く存在していない。

そう思った瞬間、アインズはこれ以上無い程に混乱した。

《まさか……まさか……まさか……!!》

とてもそれが信じられず……だが、確認する必要を思い立ったアインズは、迷う事無くその場で宝物殿へと転移していた。

そこで、王座の間の前室を選ばなかったのは、アルベドや他の僕と接触する可能性を、辛うじて残っている理性が想定の一つに入れたから。

もし、この状況で誰か僕にあつてしまったら、それこそ騒動に発展するだろう。

それ位、今の自分が普通の状態でない事を、強烈な不安とそれを鎮静化する状況を繰り返しながら、アインズはギリギリ理解出来ていた。

だからこそ、宝物殿に向かう事を選択したのだが……

宝物殿の表層部の広間に転移し、金貨の山を飛行で一気に飛び越えながら、現在は分断され消息不明の奥の広間へ続く扉の前に降り立つ。

前回と同じ様に扉を合言葉で解除すると、分断されずに残っていた宝物殿の管理室へと足早に駆け込み……

視界に入ったそれを認識した瞬間、愕然としながらその場所にすがり付き、信じられないと言わんばかりに手を伸ばしていた。

アインズが、そこまで衝撃を受けた理由はただ一つ。

この宝物殿まで、これ程までに急いで転移した目的の物に、異常があつたからだ。

そう……アインズがこの場所に来た目的である、宝物殿を管理する管理者名が確認出来る場所……そこには、空白になった管理者名を示すプレートが掲げられていた。

衝撃と絶望と、そして……アインズの慟哭 後編

何度見ても、空白になったプレートが表示は変わる事が無い。

正直、ここに来て確認すればこの状況になる可能性を察していたにも拘らず、アインズには到底受け入れがたい状況だった。

目の前に指示された、信じたくない現実を目の当たりにしたアインズは、発狂しそうなほどの喪失感が抑えられないままに頭を掻き毟り、身悶える。

それと同時に、湧き上がる痛烈な怒りをぶつけるかのように、今度こそ迷う事無く振り上げた拳を側にあつたテーブルへと振り下ろしていた。

それこそ、一切の加減をする事無く振り下ろされた強烈な衝撃に、その机が壊れて碎けるさまを視界に収めつつ、それでもアインズの気は収まる様子は見せない。

何度も何度も、繰り返し鎮静化が掛かっているのにも拘らず、だ。

いつそ……このままここで狂ってしまうかもしれない。

そう、アインズが本気で思った瞬間である。

今まで空白だった管理者名の部分に、再び「パンドラズ・アクター」の名前が浮き上

がる様に復活したのは。

アインズは、それがパンドラズ・アクターの所持していた蘇生アイテムがその効果が発生した結果だと、瞬時に悟る。

あの、大量のダメージを負いながら、それでも特攻に近い状態で戦闘を続けていた理由も、蘇生アイテムを使用する事を前提に置いていたものだと。

理由が判りはしても、アインズにはパンドラズ・アクターがその行動を選択した事には、全く納得がいかなかった。

何故、パンドラズ・アクターがそんな真似をしなくてはいけない？

どう考えても、この世界でそんな事をパンドラズ・アクターに強要出来る者など、アインズには思い浮かばなかった。

いや……頭の端を、一つの可能性が掠めはしたものの、速攻でそれを否定して破棄したのだ。

どうしても、考えたくなかったのだ。

ギルドの仲間が、パンドラズ・アクターを使い捨ての盾の様に自分勝手に使っているという、可能性を。

その可能性を否定してしまえば、何故パンドラズ・アクターがここまでして戦闘に向かうのか、アインズにはその理由が判らなかった。

もし、万が一にも洗脳されているのだとすれば、今の死亡でそれは解除される筈。それなのに、現在進行形で戦闘時に感じた緊張感は緩んでいない。

つまり、それは洗脳で戦闘を強要されているのとは、話が違うと言う事になる。

では、なぜパンドラズ・アクターが自分の意志で、死亡覚悟の戦闘をしているのか？
現時点では、先程までに感じていたような僅かな痛みを感じない事と、緊張感を感じる者のそれ程危険な雰囲気のものではない点から考えて、戦闘が小休止している事が予想される。

正直、あまり考えたくない状況ではあるが、そういう戦闘になる相手をアインズは「ユグドラシル時代」に嫌と言う程知っていた。

それは、一言で言い表すなら「ボス攻略」である。

自分たちがナザリックごと転移してきたように、もし宝物殿が転移したエリアにボスマンスターがいるダンジョンしているのだとしたら。

いや……もつと怖い事を考えると、パンドラズ・アクターが転移した場所がダンジョンの一角で、脱出するために戦闘が必要な状況なのだとしたら……

そう考えれば、すべて辻褃が合ってしまう事に気付いたアインズは、本気で焦りを感じていた。

確かに、パンドラズ・アクターは仲間たちの能力を八割使える万能型だ。

多分、このナザリツクの僕の中でここまで何でもこなせる万能型はいないだろうし、彼一人が居れば階層守護者全員の代役をこなせる実力があるだろう。

これに関しては、そうあれと設定したのがアインズ自身なのだから、まず疑いようがない。

問題は、どれだけ能力が優れていたとしても、単独でボス攻略をするのはほぼ無理ゲーだと言う点だろうか。

もし、種族特性を最大限に利用した万能性を上手く活用するのなら、単独ではなく仲間間の協力を得てその可変性を生かさないと、ボス相手では決め手が足りないだろう。

そもそも、パンドラズ・アクターは宝物殿の主で管理を任せていたけれど、その二重の影としての能力を最大限に生かせる武器を与えてあったかと言えば、アインズ自身にも疑問が残る状態なのだ。

ある意味、アインズ自身の油断から来たものではあるのだが……ぞつとするような状況を察して、アインズは更に恐慌状態に陥り掛けていた。

アインズが予想したのは、ある意味では正しくある意味では大きく外れていた。

まあ、この時点でねんどろいどゴーレムサイズとは言え、ウルベルトがパンドラズ・アクターと合流している事を知らないのだから、当然の話だろう。

そして、この状況がどうしても避けられないと言う点もあっていた。

これはウルベルト自身も気付いていないのだが、彼らがいる場所は間違はなく、ダンジョンの最奥のボスの間でもあったのだから。

更に付け加えるなら、現在がボス戦の最中だと言う事もあつてはいたが、二段階変化の最中だと言う事までは理解していなかった。

アインズは、焦りながらも今は戦闘が小休止状態である理由を、必死に考えていた。

先程、頭の中に浮かんだ【ボスとの戦闘】の合間と言うのもあり得るだろうが、中ボスからラスボスへの連戦と言う可能性も存在しない訳じゃない。

と言うのか、どちらかと言うとそちらの方がアインズとしては安堵出来る状況だった。

中ボスを倒したものの、ダメージが深すぎて一旦死亡した状態になり、復活してラスボスに備えている状態だと言うなら、自分である程度の戦闘状況をコントロールで出来る可能性も高いからだ。

だが……最初の仮定通り【ボスとの戦闘】の合間だとしたら……最悪な状況だと、そう言わざるを得ないだろう。

何故なら、普通のボスではこんな形での小休止が入る事はまずない。

それが入る様なボスは、フォルムチェンジがある最強クラスのボスだと仮定して間違いないからだ。

このタイプのボスは、軒並み普通よりも数段強くて「ワールドエネミー」より若干弱い程度のケースが多く、「運営狂ってる！」と攻略するたびに仲間と叫んだ覚えがあるほどである。

アインズにとって、フォルムチェンジがあるボスでも特に印象深いのは、中ボスでありながらラスボスよりも強くフォルムチェンジを備えていた、「アンデルセン童話のダンジョン」の「憂氷と凍結の女帝フリーズ」だろうか？

何故、アインズが彼女の事をそこまで印象深いと言うかと言えば、そのドロップが魔法詠唱者にとって素晴らしく美味しい内容の癖に、ドロップ率が恐ろしく低いと言質の悪さを誇っていたからだ。

このアイテムが、「ワールドディザスター」を取得していたウルベルトに必要なだったために、それこそ連戦に次ぐ連戦をした相手だからこそ、嫌と言う程アインズはそのボスの事を覚えていたのである。

《……あの時は、本気で苦労したんだよなあ。

それこそ、何度「これだから糞運営は!!」って、みんなで叫んだっけ。

結局、三か月間で毎日三チームずつ戦闘を繰り返した挙句、延べ三百回も戦闘してド

ロップしたのが最終日に参加した三チームの内二チームから連続二個だったんだよな。

その、あまりのドロップ確率の偏り方に、最終日にも「だから糞運営つて言うんだよ!!」って、全員で叫んだのを思い出したよ、うん。》

フツと、アインズの中にある仲間との懐かしい記憶がその琴線に触れて浮かび上がった事で、精神が落ち着きかけたのだが……すぐに、それを突き崩すように痛烈なまでの緊張感が伝わってきた。

どうやら、再び戦闘が始まったらしい。

先程よりも、ダメージを受けている感覚は少なくなっているので、もしかしたらパンドラズ・アクターも少しづつ戦闘に慣れてきたのかもしれないと、アインズは少しだけ込み上げる恐怖を抑え込むように考える。

それと同時に、千里眼クレアボヤンスを発動させ、必死にこの緊張感と繋がる場所を探すのだが……どうしても、見付ける事が出来なかった。

これは、現在。パンドラズ・アクターとウルベルトが行っているのが、ダンジョンの中の最奥のボス部屋での戦闘と言う最悪な状況下であり、そのダンジョンのボスであるフリーズの張る結界が強固過ぎてアインズの千里眼クレアボヤンスを弾いていたからなのだが……そんな事などアインズは当然知らない。

そんな状況下でも、アインズとパンドラス・アクターの間にある細い糸のような精神的な繋がりには機能していたのだから。

アインズが、必死に千里眼クレアボヤンスでパンドラス・アクターを探している間にも、戦闘は激しさを増しているようだった。

パンドラス・アクターが、その身に受けるダメージこそ回数は減っているものの、感じ取った痛みは少しばかり強くなっている感じがするのだ。

これは、確実に敵の能力が上がっている証拠だろう。

この時、アインズは一つの勘違いをしていた。

今回の戦闘が始まってから、僅かばかりとはいえアインズの感じとるパンドラス・アクターのダメージは、どちらかと言うと切り傷系の物ばかりだった事から、ボスの属性を風だと勘違いしていたのである。

この勘違いをして居たことが、パンドラス・アクターの搜索に後々影響を与えることになるのだが……それを、今のアインズが気付く事はない。

ただ、一つだけ彼に理解出来たことがあるとすれば、この事だった。

【この変化は良くない】

漠然とはあるが、そう感じたアインズが不安を募らせていると、それを更に増長す

るように、痛みに変化が起きたのだ。

それこそ、指先から身体中の至るところが徐々に砕けるかのような、嫌な感覚が断続的に続き。

そして、再び今のアインズにとって、感じたくない恐怖が訪れた。

ブツンツツ

先程感じた、繋がっていた筈のパンドラズ・アクターとの糸が切断された、嫌な感覚。バツと視線を上げてネームプレートを見れば、またパンドラズ・アクターの名前はそこから消えていた。

どう考えても、パンドラズ・アクターの二度目の死亡確定である。

それを見た瞬間、アインズの中にあつた恐怖と怒りは振り切っていた。

「糞がっ！」

糞っ、糞っ!!

誰が、二度も、俺が、俺が仲間と作った、最高傑作を!!」

沈静化が掛かるよりも先に、突き上げるような強い怒りが込み上げてきた。

怒りのままに声を上げる度に、腕を振り回しながら足元にある物を踏み潰していく。

そうして、理性を振り切っていたアインズは、そのまま怒りをその場にある物にぶつ

ける事で発散して……次に来た強い沈静化で一氣に冷静になっていた。

怒りのままに動いたアインズの周囲は、完全に破壊されたテーブルや椅子の破片が飛び散り、見るも無惨な姿を晒している。

怒りに理性を飛ばしてから、沈静化で冷静に戻るまでのほんの僅かの間に、暴れたアインズが破壊した後なのだろう。

その、破壊衝動にアインズが身を任せている間に、壊したのはテーブル一つと椅子が一脚。

どちらも、アインズがパンドラズ・アクターの為に選んで揃えたものだった。

思い返してみれば、ここでパンドラズ・アクターの自室は、他の場所よりも丁寧に掃除されてその場にある調度品は全て磨き上げられていた記憶がある。

それを、怒りに任せて破壊して事に気付いたアインズは、思わず胸が痛くなっていた。

「……失敗した、な……」

流星に、これらを私が壊した事をパンドラが知ったら、確実に嘆きそうな気がする。

見た目こそ、それほど派手ではないが……これらはそれなりの素材を使ってあまのひとつさんと私が作った、それなりの逸品だったのを忘れていたからな。

……はあ、これは確実に泣かれるな。

流星にここまで壊したら、どう見ても復元不可能だろうし。」

自分が思わず壊してしまった、テーブルや椅子を視界の中に納めつつ、小さく溜め息

を漏らす。

フツと視線をあげれば、その先には再びパンドラズ・アクターの名前が復活したネームプレートがあつた。

二つ目の蘇生アイテム効果で、無事に復活できたらしい。

それを自分の目で確認してた事で、アインズは少しだけ安堵するものの、まだ安心出来る状況ではない事を理解していた。

未だに、パンドラズ・アクターの精神は緊張が高まっていたのだから。

ボス戦特有の、大きな間を開けた後の二度目の戦闘に入つて十分経たないうちに、パンドラズ・アクターの二度目の死亡を経験したアインズは、この後どれだけパンドラズ・アクターが死亡するのか、それを考えさせられるだけで恐怖を感じるしか出来ない。

二度の死亡だけで、これだけ自分は取り乱してしまったのだ。

もし、復活出来ない程に……そう、手持ちの蘇生アイテムを全て使い切つてしまう程に死んでしまったら……金貨を使いこのナザリックで蘇生が出来るのだろうか？

そんな事すら、現時点では全く判らない状況でのこの死亡の繰り返しは、アインズにとつて恐怖以外の何物でもない。

アインズの記憶の中で、パンドラズ・アクターの手元にあつた蘇生アイテムは、全部で五つ。

ただし、そのうちの一つは装備して即蘇生する系統のアイテムではなく、もう一つはアインズが自分でパンドラズ・アクターの装備である軍服の中にこっそりと組み込み、それと判らない様に潜ませたものだ。

だとすれば、自力で復活出来るのは合計四回だろう。

《いや……軍服の中に組み込んだ蘇生アイテムは、パンドラ自身が知らないから、それをアイツが蘇生可能回数として計算に組み込むとは思えない。

何せ、ナザリックでもトップクラスの頭脳の持ち主として設定しているから、そういう甘い見積もりはしない筈だ。

だとしたら……あともう一回死亡したら、本当にパンドラには後が無い事になる。

そこで、潔く撤退してくれればいいが……脱出するために戦っているなら、多分引かないだろう。

ここから先が、本当に俺にとってもパンドラにとっても正念場、だな。

ああもう、誰の装備を使っても構わないから、ちゃんと使って全力で戦ってくれ!!》
ギリギリと、存在しない筈の胃が痛むのを感じつつ、そうアインズは心の中で叫ぶ。

本気で、宝物殿の霊廟にあった仲間の装備を使う事で、パンドラズ・アクターが自分の身を守るなら、少しくらい使用しても構わないと思う位には、十分アインズの心は追い詰められていた。

無意識のうちに、グツとアインズが自分の拳を握り締めた瞬間である。

アインズの中に、今までずつと感じていた戦闘時の緊張感とは全く別の、まるで誇らしげに胸を張るかのような、そんな強い高揚感がこみ上げてきたのは。

それは、今の自分を誇るような、己の心を奮い立たせるような、そんな精神の高揚。

それと同時に、わくわくとした楽しい高揚感と、何か嬉しそうな期待を込めたような、そんな柔らかく暖かな気持ちを強く抱いているのが、アインズの中に伝わってきたのだ。

まるで、何かに宣言するようなパンドラズ・アクターが抱いた強い思いが伝わった瞬間、アインズはあれだけ抑えられなかった強烈な不安が、和らいでいくのが解った。

《……ああ、そうだよな。

例えば、パンドラが一人で戦っているとしても、それを離れている俺の方が心配し過ぎてこんな風に暴走したら、駄目だよな。

それこそ、お互いに繋がっていて精神状態が伝わるのだと仮定したら、俺が怖がったり不安がったりすればする程、パンドラ側にもそれが伝わってしまうだろう。

もしかしたら、それが原因で戦闘しているパンドラの判断に揺らぎが出たりしたら、それこそ後悔するだけでは済まない話だ。

それなら、俺はパンドラを信じてアイツが頑張れるように祈る方が、余程あいつの為

だろう。

むしろ、それしか出来ない事に苛立って暴れた俺の方が、よっぽど子供じゃないか。

アイツは……パンドラズ・アクターは、こんなになにかを誇らしげに思いながら、気持ちを奮い立たせて戦っていると言うのに、俺の方が不安や恐怖に負けてたら恥ずかしいよ、うん。》

そう思った途端に、アインズの中の不安がまた少しだけ和らぐ。

もちろん、パンドラ側から伝わる戦闘中と思われる緊張感や様々な高揚感といった感覚は、未だに強く感じているので、向こうの様子は変わらないのだろう。

変わったのは、アインズの中で今まで育ち暴走していた、恐怖と不安の感情だった。

確かに、今のアインズにパンドラズ・アクターが実際どうなっているのか、それは判らない。

だが、だからと言って不安に煽られ恐怖に怯えて、それを怒りに変換して暴れたりして良い物じゃないのだ。

むしろ、創造主である自分が信じてやらなくて、誰がパンドラズ・アクターの事を信じてやれると言うのだろう。

パンドラズ・アクターが、特に精神面で強く感じている時にその一部しかアインズに伝わらないと言う、中途半端な状況だからと言って、それに自分は一々反応し過ぎたの

だと、漸くアインズはそう思う事が出来たのだ。

それと同時に、強く願う。

どうか……パンドラズ・アクターがこれ以上死ぬ事無く、無事に戦闘を終えられるように。

アインズの心境が変わっても、依然と状況は変わらなかつた。

先程までに比べれば、パンドラズ・アクターがダメージを負う回数は減つたものの、全くない訳じゃない。

むしろ、一つ一つの痛みはほんの少し強くなつた事から、その身に受ける攻撃が強くなつた事が伝わってくる。

それでも、今までの様に不安がつて常に沈静化が掛かる状態から、アインズは漸く脱出していた。

パンドラズ・アクターの事を、心配していない訳じゃない。

ただ、アインズは信じているのだ。

自分の作り上げた、最高傑作のパンドラズ・アクターなら、絶対に最後まで戦い抜いて勝利する事を。

だから、今までの様に不安がり恐怖に怯える心を落ち着けてみれば、戦闘中に感じている緊張感以外にも色々と感じる者が強くなつてきたのだ。

何か一つ、例に挙げるとすれば……わくわくとした感情が、パツとまるで弾ける様に更に強く込み上げる瞬間が、何度もあった。

これは、何かを仕掛けてそれが成功した事による高揚感だろう。

普段から、パンドラズ・アクターはあの顔の造形故に、その時に感じた感情を声や身振りで示す事が多い位、感情が豊かなのだらうと、こちらの世界に来て直接会っていないのも関わらず、そうアインズは思わずにはいられない。

それ位、今のパンドラから伝わってくる感情の波は豊かなものだからだ。

戦闘中だから、強い緊張感はずっと変わる事が無いが、それ以上にどこか自分の行動を誇らしげに楽しんでいるような感情と、それと変わらない位に感じる責任感と言うのもあつて。

「……もしかしたら、アイツから伝わってくるのは、最初からこんな感じだったのかもしれないな……」

ただ、全くパンドラの状況が判らないまま鋭すぎる緊張感を感じた事で、俺が勝手に不安と恐怖に飲み込まれ過ぎただけで。」

そう、小さく呟いた瞬間だった。

言い様の無いような、そんな強烈な焦燥感と共に背中を中心に強い衝撃が走り……次の瞬間、誇らしさと口では言い表せない様な安堵感が伝わったかと思うと……

ブツンツツ

三度目の、パンドラズ・アクターと繋がっていた糸の切断を感じていた。

それと同時に、再びネームプレートからパンドラズ・アクターの名前が消え落ちる。

己が感じた幾つもの感覚と、目の前の状況にインズはどうしてもその場に立つていられなくなりながら、何とか耐えようと側にある壁に縋り付くと、その視線をネームプレートに向けた。

だが、何度見てもそれは変わる事が無く空白のまま。

状況が変わらない事を認識した事で、インズはその場に思わず崩れ落ちていた。

もしかしたら、こうなるかもしれないと予想していたとしても、実際にこの現状を突き付けられてしまったら、冷静さを保っていられる訳がない。

つい先程まで治まっていた、強烈な不安と恐怖がこみ上げた瞬間、一気に鎮静化して冷静な状況に引き戻されたインズの頭を、フツと一つの疑問が過る。

あの、パンドラズ・アクターが抱いた「誇らしさと口では言い表せない様な安堵感」は、一体なんだったのだろうか、と。

少なくとも、あんな風にパンドラズ・アクターが感じると言う状況があり得るとすれば、その前に感じた焦燥感も交えて考えればた一つ。

何かが危険に晒され、パンドラズ・アクターが文字通りその身を挺して守ろうとした

結果、無事に守り抜く事が出来たと言う事だ。

だが、そんな風に自らの命を差し出してまで、パンドラス・アクターが何を守ろうとしたと言うのだろうか？

「……宝物殿にあった、^{ワールド}世界級アイテム？

いや……パンドラにとって、宝物殿に収められていた品々は大切なものだが、それに対する対策は既にきっちり取っていると思っていだろうか。

むしろ、それらの品々に関しては、本人が納得いくまで考えた上で、完璧な手段で持ち運びを敢行している筈。

だとすれば、パンドラがそんな行動をするのはただ一つ。

俺や、ギルドの仲間に関わる事。

そんな、まさか……だが、それ以外には、思い付かない……」

理路整然と、冷静に考えたアインズが出した答えは、パンドラス・アクターの側に仲間がいる可能性だった。

しかし、それだと仲間がパンドラス・アクターを戦闘時に、都合良く盾として使っている事になる。

そんな事は、とても信じたくなかった。

本気でそう思ったからこそ、アインズは必死になりながらパンドラス・アクターが蘇

生してくるタイミングに合わせて、千里眼クレアボヤンスを展開するために意識を傾け。

ポウツと、胸に温かな繋がりを示す糸が繋がったと感じた瞬間、アインズは迷わず発動させていた。

「千里眼！」

その声に合わせて、千里眼クレアボヤンスの呪文が発動したかと思うと、ユラユラと空間を揺らめかせる。

まるで、何かを探すかのような揺らぎを割と長い時間を掛けて見せた後、あれだけ反応しなかった視界が歪ながらゆらりと開け、アインズには全く見覚えのない場所が映し出されていた。

そこに映し出された映像は、黒髪の少年とおぼしきボロボロな後ろ姿。

彼が、ゆつくりとした足取りで向かう先には、分厚い氷に閉ざされた奥に揺らぐ様にはつきりしない影が見える。

それとほぼ同時に、強烈に胸に込み上げる懐かしさ。

そう思った瞬間、プツリツと千里眼クレアボヤンスは途切れてしまったが、アインズにはそれだけで十分だった。

「……そうか、そうか……ああ、そうだったのか!!」

あの少年こそ、今のパンドラズ・アクターが使用している人間の姿の外装なのだろう。

それ以外に、パンドラズ・アクターを対象にして発動させた千里眼クレアボヤンスに、映し出された理由が思い浮かばない。

更に、あの氷の奥に揺らいで見えた黒い影。

分厚い氷の中に閉ざされていたから、姿こそはつきりと見えなかったが……アインズには、そこに仲間がいた事が確信出来ていた。

そして、何故あれだけパンドラズ・アクターが必死になって、単独では戦うのが難しい相手に何度も死に戻りしながら、それでも必死になって挑んでいたのか、も。

あれ程の無茶を、全部わかっていながらパンドラズ・アクターが強引に押し通した理由なんて、本当に簡単な事だった。

全部、あの氷に閉ざされたギルドの仲間を……アインズにとって誰よりも大切な「アインズ・ウール・ゴウン」の仲間を助け出そうと、それだけを考えて行動していたのだ。それが判った瞬間、アインズの中に込み上げてきたのは、ただパンドラズ・アクターの事を誇らしく思う気持ちだけだった。

たった一人で、本当は苦しかっただろう。

もしかしたら……あの場で氷漬けにされていた仲間の意識と、交流する事が出来てアドバイスは貰えたかもしれない。

または、何らかの助勢は得られた可能性も、全くない訳じゃないが、それだって不十

分だっただろう。

多分……殆ど実際にまともに動けたのはパンドラズ・アクターだけだった筈だ。

それでも……こうして、成し遂げて氷の中から助け出そうと言う姿だけが、一瞬でも見れた事を思うだけで、アインズの胸の奥がじんわりと熱くなるのを感じていた。

「……ふふふ……そうか、アイツは自分の意志で死ぬのを覚悟してまで、『アインズ・ウル・ゴウン』の仲間を助け出そうと、文字通り死力を尽くしてくれたんだな……」

そう呟くと、グツと足に力を入れてその場に立ち上がった。

本音を言えば、もう少しこの場に留まって色々な事を考えたい所だが……急いでデミウルゴスに伝えるべき情報が増えたのだから、そちらを優先するべきだろう。

先程、千里眼で映し出されたパンドラズ・アクターの装備は、自分が与えた最上級のものではなく、能力テストの際に自分で幾つか作り出した遺産級^{レガシー}程度の品だった。

幾つも理由は考えられるが、何らかの状況で装備が不可能になっっている可能性もなくはない。

それにもう一つ、重要な情報がある。

パンドラズ・アクターの同行者に、ギルメンが加わった可能性があると言う点だ。

もちろん、あくまでも現時点では可能性としか言い切れない状況だが、それでも伝えておいた方がデミウルゴスもそれを考慮して探さだろう。

何故、「可能性としか言えない」のかと言えば、それは彼らが所持しているアイテムやスキル、使用可能な魔法の都合によるものだった。

人の姿になる事が出来なければ、この世界で人の街に入り込むのは、正直とても難しいのだ。

パンドラズ・アクターなら、こちらの事を探しながら旅をしているだろうと言う想定の下、アインズはデミウルゴスに搜索させていた。

これからも、それは基本的に変わらないが……これからは同行するギルメンが居る分、行動が変わってくるかもしれない。

そう思うからこそ、早くデミウルゴスに自分が掴んだ情報を話しつつ、相談をしたいと思ったのだ。

他にも、アインズには気になる事が幾つもあった。

氷に閉ざされた形で、パンドラズ・アクターに救出されていた仲間の事だ。

どうして、あんな風に仲間が氷に閉ざされた姿でいたのかは、アインズには判らない。可能性として考えられるのは、自分達よりも早い時代に転移してきていて、罫に嵌められてあんな状態にされていたと言う点だ。

この辺りの事も含めて、早急に「プレイヤー」関連の情報の詳細を調べさせる必要があるだろう。

もしかしたら、「魔神」に纏わる伝承か何かの中に、ひっそりと紛れている可能性がある。
る。

「……もし、それが判れば……その場所を特定して、パンドラたちを探す手掛かりになるからな。

これに関しては、デミウルゴスときっちり詰めて話す必要があるだろう。

ああ……それにしても、一体誰がこつちに来ているんだろうな？

それも全部、探し出して再会出来れば分かる話だし、今は確実にこちらの世界に仲間がいる事が判っただけで、良かったと思う事にするか。

とにかく、まずはパンドラと仲間の身柄の安全な確保が最優先だな、うん。」

姿が確認出来なかった仲間と、必死になって仲間を助け出してくれたパンドラズ・アクターに思いを馳せながら、アイNZは宝物殿を後にしたのだった。

第一章 ウルベルト視点

一体、何でこうなったんだ……

……一体、なんなんだろうか？

何か……自分の顔に、生臭い空気が掛かけられていて、すごく気持ちが悪い。

あまりの気持ち悪さに、思わず目を閉じていられなくなつてパツと開けると、そこにあつたのは視界を覆い尽くすような、巨大なウサギタイプのモンスターの顔だった。

鼻をヒクヒクさせながら、鋭い牙をチラリと覗かせつつ、何時でも襲いかかれる様にこちらの様子を窺つていて。

それを見た瞬間、俺は思わずズツと腰を引いて片手を上げて、魔法の矢を唱えていた。
すると、それに合わせるかのように俺の背後に浮かび上がる、十個の魔力の塊。

まるで狙い定めたかのように、その魔力の塊は巨大なウサギもどきに向けて降り注ぎ……そのまま巨大ウサギもどきを消滅させていた。

その様子を、ただ茫然としたまま視線で追う事しか出来ない、俺。

あまりに突然な事に、咄嗟に呪文を唱えていたのだが、まさかそれが本当に使えろとは思わなかつたのだ。

だが、咄嗟に声に出して口で唱えてみて、すぐに使い方が頭の中に浮かんだのである。まるで、息をするかのように自然に、魔法の使い方がすぐに解ったのだ。

馴染んでいたものを、漸く取り戻したかのような感覚の中、俺は、自分に身の危険を感じさせたウサギもどきへ向けて、作り出した魔法の矢マジック・アローを放っていたのである。

「……何なんだよ、この状況は……」

一先ず、魔法によってウサギもどきを倒したことで、身の危険を感じる状況でなくなったのは、何となく理解できる。

今、自分がいるこの場所には、他に生き物の気配はしなかったからだ。

安堵の息を吐いた俺は、改めて出来るだけ注意深く周囲を見渡す。

一体、何がどうなつて自分がどこにいるのかもわからない状況なのだ。

少しでも情報を正しく得る事は、生き残るためにも必要だった。

すると、ここはどこか薄暗い洞穴の中らしいことが解った。

目を覚ました時は、眼前にウサギもどきがいたせいで、その事にしか気が回らなかつたが……落ち着いたからこそ、この状況が普通ではあり得ない事に、漸く気付く。

何故なら……臭いがするのだ。

そこで、一つ思い出す。

最初、自分がこの場で目を覚ました理由も、あまりに生臭い吐息を感じたからだ、と。

一体、何がどうなっているのか、全く解らない。

そもそも、何で最初の段階で、この異常な状況に動揺しなかった？

普通だったら、もっと動揺して混乱している筈だろう？

それなのに、俺はまるでそれが異常ではない事のように、対応してしまっている。

なぜ、そんな風に冷静に対応できたのだろうか？

解らないなりに、このままこの場に留まるのは駄目だと、漠然とした予感がした。

そんな時……ふと、何か意識が惹かれるものを感じて。

どうせ、何も解らないのならば……今、自分が置かれている状況を変える為にも、動いてみる方がいい。

直感が赴くまま、ゆっくりと自分が惹かれる方へ移動していくと、どこから差し込む光の中で、キラキラと輝くものがあった。

キラキラ、キラキラ……

どこからか、差し込む光を吸収して乱反射しているそれは、透明度が高い水晶か氷なのだろうか？

良く判らないが、それがひどく気になって仕方がない。

少しだけ、近寄ってみる。

何の変化も怒らない。

もう少しだけ、近寄ってみる。

すると、その中にぼんやりと人影が見える事に気付いて……思わず駆け寄っていた。そこに浮かぶ人影に、嫌と言うほど見覚えがあったからだ。

だが、乱反射しているのは透明度の高い表層部分だけらしく、よく中までは見えない。そこで、その全身が良く見える位置まで駆け寄ると、差し込む光では安定しない状況を安定させる為に、迷わず火ファイヤーボール球の呪文を唱え。

話すことなく、手に留めたそれに照らし出され、水晶の様なものの中に浮かぶ姿を確認した俺は、予想通りの姿に目を奪われていた。

そこにあつたのは、己の、「ユグドラシル」における「アインズ・ウール・ゴウン」の【悪マジックキャスターの魔法詠唱者】ウルベルト・アレイン・オードルのアバターをそのまま巨大化して封じ込めたものだったからだ。

「……はは、何だよ、これは……」

一昔以上前の、巨大怪獣映画の悪役怪獣扱いかよ！

そりゃ、俺は【悪マジックキャスターの魔法詠唱者】だったけど、怪獣扱いされる謂れはねーぞ!!」

余りにもあんまりな扱いを受けている、己のアバターの姿を目の当たりにして、我慢できずに叫ぶ。

そのまま、己のアバターを封じ込めている、水晶のようなモノのもとへ駆け寄ると、ダ

ンツと思い切り握り締めた拳で殴り付け。

ふと、ある事に気付く。

封じ込めているそれを殴る己の手が、異様に小さいのだ。

小さいと言うより、バランスがおかしい。

自分の視界に入る腕は、小さく細く……その癖、人のものではないのだ。

それは、まるで目の前のアバターを弄つて小さく変化させたみたいな、それ。

慌てて水晶のようなものに反射するだろう、己の姿を見た途端に、ピシツと音を立てて固まり。

次の瞬間、思わず絶叫を上げていた。

「なんじゃ、こりゃああ!!」

一昔以上前の、人気ドラマの有名なシーンのような叫び声を上げたウルベルトの視界に入った己の今の姿。

それは、頭を大きく手足や身体を小さくデIFOオルメした、所謂「ねんどろいどバージョン」と呼ばれるだろう姿の、ウルベルト・アレイン・オールドだったからだった。

自分の状況を考えてみた

暫く、自分の状態に呆然自失になっていたウルベルトだが……我に返ると頭を抱えていた。

残念な事に、今のこの姿そのものに関しては、実は心当たりがあるのだ。

「……………これって……………確か、モモンガさんの所のパンドラが、ゴーレム作成能力のテストの一環で作った奴、だよな？」

頭の中で思い出すのは、かつてまだ仲間で賑わっていた頃のナザリックだ。

パンドラズ・アクターの設定は、色々と問題が発生して難航を極めたのだが、その中の一つが外装と共に持たせる能力配分だった。

なにせ、互いに拘りを多く持つ濃いメンバー構成であるが故に、式式炎雷のようにピーキーな能力設定の奴がない訳じゃなくて。

その中で、能力面だけなら割と調整が楽だと、早い段階で組み込まれた者達もいる。その中の一人が、実はるし☆ふぁーだった。

本人の性格や行動の面から、「問題児」として扱われているが、彼がパンドラズ・アクターに持たせる主軸として主張したのは、ゴーレム関連の製作能力だったのだ。

まあ、本人的にも「ゴーレムクラスター」として、色々な意味で名を馳せているのだから、それを踏襲させたいらしい。

まあ、それはさておき。

当然だが、コンセプト通りの能力が使用可能になっているか、確認するのは当たり前と言う話になった。

それで、パンドラズ・アクターの外装をるし☆ふあーに変えさせて、何を作らせるかと言う話になった時に、誰かをモデルにしてゴーレムを作らせようという事になったのだ。

そのモデルが、俺、ウルベルトだった。

最初は、どんなゴーレムを作るのかと思えば、小さな二頭身のデイフォルメされた、その癖特徴は良く捉えられている素晴らしい出来映えの人形タイプのもので。

目の前に、それを完成品として差し出された時は、流星に対応に困ったものである。

あの時、モモンガさん以外のその場にいた奴等は、全員それを見て笑い転げやがったんだよ。

……ああ、思い出した。

あんまり皆が笑う事にムカついたから、その場でパンドラに対して「これと同じタイプのものを全員分作る様にな」って命じたんだっけ。

確か……小型の割に高性能で、一発だけなら超位魔法や高位戦闘スキルも扱えたんだよな。

せつかく作つたし、デIFOオルメさされている事さえ除けば、出来もかなり良いものだからつて話になって、最終的にモモンガさんが管理する事になったんだよ。

ああ、そうだよ……それで間違いない奴だ。

つらつらと、当時の事を思い出していくうちに、幾つかその当時との違っている事があるのに気付く。

まず、今の己の身体の関節などの動きだ。

精巧な人形タイプとは言え、あくまでもゴーレムである以上、人間などのようにしなやかな動きの再現に関しては、かなり難しかった記憶がある。

にも拘らず、目を覚ましてから今までそんな不自由を感じた事は一度もない。

更に言うなら、全身は固い金属系素材から産み出されており、柔らかい部分など髪の毛一つ存在していなかった筈なのだ。

それなのに、今の自分の身体は触れたら柔らかかな体毛に覆われ、ふさふさでもこもことしているのが良く解つた。

つまり……その辺りに関しては、本来のアバターである種族に合わせたものに変化しているっていいだろう。

そう考えれば、己の身体が柔らかな毛に覆われた山羊の姿をした悪魔だとしても、納得はいった。

むしろ、そうじゃない方が違和感がある位だったのだ。

多分、自分の存在の魂（だと思いたい）が中に入った事で、それに併せたカスタマイズがなされたのだろう。

その辺りの理屈は、生産職とかを取っていないのでいまいち良く解らないが。

ついとばかりに、自分の身体に解析魔法を掛けて必要な情報を抜き取っていく。

こんな訳の解らない状況下では、どんな些細な情報でも命取りになる可能性は高い。まして、今の自分の身体は手のひらサイズのゴーレムベースなのだ。

いち早く危険を回避する為にも、自分に出来るだろう正確な能力把握は、当たり前の話だった。

そうして判明したのは、予想よりもまともだったこの身体的能力とレベルだろうか？

まず、やはりこの身体はパンドラズ・アクターが習作として作ったゴーレムをベースにしているらしい。

しかし、あくまでもベースにしているだけで、一部のどうすることも出来ない能力制限を除けば、ウルベルト・アレイン・オードルそのものの能力値だ。

レベルは、前と同じ百。

ただし、この姿の代償として使用出来る超位魔法は、記憶通り一日に一回のみ。

しかも、溜めの時間は変わらなかった癖に、使用した場合は強制戦闘不能……分かりますか？

同じ理由で、グランドカスターロフ【大 災 厄】も使用可能魔法として使える事にはなっているが、使ったら一発気絶になるらしい。

つまり、誰かしらサポート要員の前衛が居なければ何ともならない状況である。

使用可能な魔法の種類そのものは、殆ど本来のウルベルトの時と変わらないが、それよりもMPが問題になるのだ。

見た目より優秀とは言え、やはり小さなゴーレムがベースである。

元々魔法職として低いHPは、本来の四割弱しかない。

MPは、本来のもの六割と割と高めではあるが、ゴーレムの身体をベースにしているからか、本来の姿よりもMPの消耗率が高いので、さして意味がない状態なのだ。

その代わり、攻撃魔法の威力そのものはそのままだと言うことを考えれば、良いのか悪いのか良く判らなかつた。

《このゴーレム、予想以上に能力値が高い。

MPに至っては、ゴーレムではあり得ないレベルだと言っても良いんじゃないか？

それでも、超位魔法とかグランドカスターロフ【大 災 厄】は使えないに等しいから、微妙なラインだけど。

でも、元のサイズが小さすぎるせいで、折角の高性能を生かし切れないのが、また性質が悪いな。

一応、使える魔法の中に実体を伴った幻覚系もあるけど、その魔法の使用可能な回数か一日に一回のみ、しかも効果時間が三十分とかふざけてるのかよ！

これじゃ、街の中に潜り込んでも情報を探り出すどころか、殆どまともに動けないじゃないか！》

もちろん、これに関しては効果延長のマジックアイテムを入手出来れば話が変わるのだろうが、今の自分にはその手立てすら目処が立たない。

しかも、そのアイテムを得る為には、まず、この外見では人形でも使い魔でもなく生きている事を納得させる必要があるのだ。

正直、こんな姿で生きている事を納得させるのは、かなり難しいだろう。不気味がられた挙げ句、殺されそうになるか実験体にされそうになるか。

とにかく、まともな扱いを望むのは難しい気がした。

《ただ……この世界が「ユグドラシル」じゃない事は、まず間違いないだろう。

あの時、最終日の終了間際だったんだから、今更延期するとはとても思えない。

まして、俺は……あの時、死んでいる筈なんだからな。

とても、生き残れたとは思えない状況だった。

だからこそ、この状況に困惑しているんだが……》

自分の中にある、最後の記憶を思い出しながら少し思案する素振りを見せるウルベルト。

ここで意識を取り戻す前の、リアルの一件は色々頭が痛い部分もあるので、一先ず先送りにする事にして。

再度、この姿になってしまった要因は何だろうか、心当りを思い浮かべていったウルベルトは、ハッと一つ思い当たることを思い出した。

そうだ、このゴーレム絡みで起きた様々な事の中に、一つこの姿になる要因になりそうな出来事があったじゃないか。

先程は、まだ動揺していたからか思い出せなかったが……冷静になって良く思い返せば、パンドラズ・アクターが作ったこの人形タイプのゴーレムに、更に細工していた奴がいなかっただろうか？

《ああ……奴だ……そう、タブラの奴だよ！

あいつ、平然とした顔で「罰ゲームの一環で、全員で臨むクエストに向かう場合、予定外のところで死んで迷惑を掛ける行為をしたら、条件達成までその姿でいるのはどうでしょう？」とか抜かしやがってったんだ。

しかも、本当に復活先をこのゴーレムの中へ固定して、憑依状態にしようとしやがっ

たんだよ！

だけど、実際にその設定を組むには流石に色々と無理があったのと、モモンガさんの懇切丁寧な説得のおかげで、代わりに課金アイテムを幾つか組み込んで、一回だけ経験値未使用での復活ポイントにしたんだよな。》

懐かしい、「ユグドラシル」時代の一幕。

あの時の騒動は、るし☆ふぁーですら反発するほどの厄介さだった記憶がある。

結局、実際には技術的に実行不能だった事と、モモンガによるタブラへの時間を掛けた説得が功を成し、セーブポイントとしての利用と言う話で纏まった一連の出来事は、そこに落ち着くまで割と本気で大変だった事を覚えていて。

それを思い出したウルベルトは、その内容に頭を抱えた。

《もしかして……その、タブラさんのゴーレムに付けた効果が、リアルでの死亡とゲーム内の死亡を混同して、この中で復活させる結果になったのか？》

正直、出来れば正解であって欲しくない内容だが……これが正しい気がするウルベルトだった。

リアルで何が起きたかのか、思い出してみた

一体、どれくらいの時間が過ぎたのだろうか？

あれから、暫く色々な可能性を考えてみたのだが、やはり最初に思い付いた「ゴレムへのタブラの細工と死亡判定が混乱した結果」と言うのが、一番高いような気がした。そう判断して理由はいくつもあるが、その中でも一番大きな理由は、自分がログイン時に死にかけていたからだ。

別に、病気で無理を押ししてのログインの結果、その途中で耐え切れずに死亡したとかではない。

俺の予想が正しいならば、あれは人違いで殺されたのだろう。

「……………つたくー！」

何をやらかして、命を狙われる羽目になつてゐるんだよ、ペロロンチーノの奴は……」
あの時、俺が殺された部屋の持ち主の名前を口に出しながら、額に手を当てようとして……微妙に指先が眉間に届かない（長い爪なら届く）事に気付き、慥然とした気持ちになった。

この身体は、デیفオルメさされている分もあちこちバランスがちぐはぐで、本来なら普通に手が届く部分に届かない事が多々ある。

これもその一つなのだが、正直言つて不便極まりない状況だった。

これでは、自分で自分の身体を洗うことすらままならないだろう。

「……真面目に、早くなんとかしねーと、いろんな意味で精神的に死ぬぞ、これ。」

幾つか思い当たる、出来ないだろうことの数々を考えながら、ウルベルトはこの状況になる前の……リアルでの事を思い出していた。

長年離れていた日本に、ウルベルトが漸く戻ることが出来たのは、殺される数時間前の話だ。

ウルベルトの本名は、宇部透と言う。

この時代において、最下層と言われる貧民層の住人であり、半ば使い捨ての駒のように海外へ出向させられ、死と隣り合わせの生活を約三年過ごし、帰国許可をもぎ取った男だ。

正直、このルートに放り込まれた貧民層の出身者の約九割は現地での死亡が確定して

いると言われる、過酷な現場での仕事を中心である。

だからこそ、よくも無事に戻ってこれたと言われる程の、ギリギリの生還でもあった。ウルベルトが生還できたのは、本人の根底に強く帰還を望む意志があったからだ。

今時、まともにネットすら繋げないような地域で、ウルベルトの心の支えはモモンガを始めとした友人達との、僅かなメールのやり取りだった。

モモンガは、ウルベルトの負担になつていないか心配していたが、むしろそのメールでのやり取りがあつたからこそ、生きる気力を保てたのだ。

この三年間、モモンガとのナザリツクに関わるやり取り等をしていなければ、ウルベルトは間違いなく他の者と同じ様に生きる意思を失い、生き残ることは出来なかつただろう。

企業の上層部も、あの過酷な環境で生き残った者に対しては、例え貧民層出身でもそれ相応の評価をするらしく、帰国そのものは割とスムーズに出来たのだ。

ただ、帰国後に働く先は決まっていって問題はないものの、かなり急いでの帰国希望だった為に、帰国後に住居の手配が間に合わなかつたのであるが。

そこで、ウルベルトが急いで連絡を取り頼つたのは、かつての仲間の一人であるペロロンチーノだった。

ここでモモンガを頼らなかつたのは、住居がないことが判明したのが帰国した当日の

昼過ぎであり、彼と連絡が取れなかった事が理由に上げられるだろう。

他にも、帰国した地域と彼が住んでいるエリアが離れていたのも理由になるのだが。

とにかく、ウルベルトが知り合いに片っ端から連絡を取った結果、数日泊まるのを承諾してくれたのがペロロンチーノだったのである。

もちろん、泊まる間の家賃として食事を奢る約束もしたのだが。

《……それで、あいつの仕事が終わる時間に合わせて駅で合流して、あいつん家へ向かったんだよな。》

現時点で、明確に記憶に残っている事を確認しながら、ウルベルトは更に何があったのか思い出していく。

再会したペロロンチーノは、相変わらずエロゲーをこよなく愛する男のようだった。

それでも、出迎えて開口一番でその話題をしない程度には、常識を身に着けたと言っているのだろうか？

そんな事を考えつつ、ウルベルトはマシンガントークを続けるペロロンチーノの様子を楽し気に見ていた。

昔の、懐かしい記憶が刺激されたからだ。

「それにしても……本当に良く無事に帰国できましたよね、ウルベルトさん。」

出向先を聞いた時には「もう会えないかもしれない」って、本気で思ってたんですよ。」

ちよつと浮かれた様子で笑うペロロンチーノに、ウルベルトも同意するように頷く。

こうして無事に帰国したウルベルトだが、何度も「死ぬかもしれない」と言う予感が、頭を過る状況に陥った事があるのだ。

それでも、その度に「絶対に帰ると約束したんだ」と、歯を食いしばって生き延びてきたのである。

「ちゃんと帰ってきたから、もう良いだろ。」

それより、本当に良かったのか？

家の手配が終わるのは、確かに三日後の予定だけだな、俺も明後日から仕事復帰が決まってるし、正式に引越しまでもっとかかるぞ？」

「それでも良いのか」と、苦笑しながら言えば、ペロロンチーノは笑いながら片手を振る。

「別にそれくらい、良いですよ」

久し振りに、昔の話に花を咲かせるのも悪くないですし。

そういや、今日は俺もモモンガさんに会いに行くし、ウルベルトさんの分の端末無い

んですけど、どうします?」

出来れば一緒に行きたいと、言外に滲ませるペロロンチーノの言葉に対して、ウルベルトはニヤリと笑う。

そして、手に持っていた鞆を軽く掲げながら、ポンツとその肩を叩いた。

「心配しなくても、自前で用意してるに決まってるだろ?」

ただ、三年前に飛ばされるまで使ってた奴だから、ちよつと型が古くてな。

まず、データのアップデートに時間が掛かりそうなんだよな……」

懐かしそうに触れるウルベルトに、ペロロンチーノはビツクリしたように鞆を見た。

このご時世において、半ば死地に向かったウルベルトのそんな物を、どこでどうやって残しておいたのだろうか?

その、疑問の眼差しを向けるペロロンチーノに対して、ウルベルトは小さく首を竦める。

まあ、気持ちは良く解るからだ。

普通なら、そんな状況下で真っ先に処分される対象になるのが、ウルベルトが確保していた端末機の類である。

それなのに、三年間もの間どうやって処分されない様に保持していたのだろうか、疑問に思うのはむしろ当然だった。

ペロロンチーノの視線を受け、ウルベルトは少し困ったような様子で頬を掻きながら、ぼそりと呟く。

「……さんが、預かってくれたんだよ……」

名前の部分が聞き取れなかったのか、首を傾げるペロロンチーノ。

やはり、アレでは聞こえなかったらしい。

その姿を見て、ウルベルトは観念したようにもう一度その名前を口にした。

「だから……たっちさんが、日本から出る直前に預かってくれたんだよ。」

「あなたの事ですから、何があっても帰ってくるでしょうし、その時、端末が無ければ困るでしょう？」とか言いやがってな。

それで、無事に帰国が決まった事を知らせたら、空港で待ち構えてやがって、こいつを返してくれたんだよ。」

今、ウルベルトの手の中にある鞆の中の端末がどういう経緯で保管されていたのか、その説明を聞いた途端ペロロンチーノは本気で驚いた顔をした。

三年前、ウルベルトが急に引退する直前まで、あれだけ仲が悪かった二人の間で、まさかそんなやり取りがあったとはとても信じられなかったからだ。

ウルベルト自身、ペロロンチーノが驚く理由は良く判る。

自分だって、まさかたっちがそんな申し出をしてくるとは思いもしなかったのだ。

昔から、仲も悪くいざこざだつて絶えなかつた相手であり、それをきつかけに仲直りをした訳でもない。

だが……実際に、たつちはウルベルトの端末を帰国するまで完全な状態で預かつてくれていたし、ウルベルトもこの件に関してだけは信用したからこそ、こうして手元に端末がある訳で。

「……まあ、良いんですけどね。」

理由はどうあれ、ウルベルトさんの端末が無事に手元にあつて、ナザリックで待つているだろうモモンガさんに会いに行くのに問題がないなら。」

ペロロンチーノも、この件に関してはこの場で追及するつもりはないらしい。

今日は「ユグドラシル」の最終日だからだ。

既に、割と遅い時間になっていたし、ここで下手に時間を取っていたらアップデートが間に合わなくてログインできない可能性も出てくる。

それより、この件に関しての追及は後日に回した方がいいと、そう思い直したのだから。

二人揃つて、急ぎ足になりながらペロロンチーノの部屋へ向かつて……

《……そうだ、アイツが家に着く直前で、忘れ物に気付いたんだよ……》

あの時、ペロロンチーノの住んでいるマンションに着く直前、何かを思い出したように慌てふためいた顔をして、俺に鍵を突き出してきた。

「すみません、ウルベルトさん。」

俺、ちよつと大切な物を買ひ忘れたのを思い出しました！

悪いんですけど、先に部屋に行つて貰えますか？

前にも一度俺の家には来た事があるから、場所は判りますよね？」

どう見ても、「失敗した」と言わんばかりの様子を見て、本当に大切なものを忘れていたのが良く判つた。

そんな様子を見れば、これからしばらく居候になる身のウルベルトに、了承する以外の選択肢はなかつただろう。

「……全く、仕方がないな。」

その代わり、勝手に部屋の電源使つてアップロードを始めても構わないか？

そろそろ始めないと、本気で間に合わなくなりそうだし。」

時間を見れば、本当にモモンガとゆつくりと話をするなら、急いでアップデートをする必要がある時間帯になり掛けていた。

それは、ペロロンチーノも判つていたのだろう。

ガサガサと鞆の中を探りつつ、早口でまくし立ててくる。

「もちろん、大丈夫です。」

ついでに、俺の分もやっておいて貰えませんか？

後、時間指定で荷物が来る予定なんですよ。

支払いは終わっているの、受け取っておいて貰えませんか？

玄関の下駄箱の引き出しの中に、判子も入ってますから！

「すいません、もう本当に買いに行かないと、店も閉まるし帰宅時間が遅くなってモモングさんに会いに行けなくなっちゃいます！」

なにやら、引換券の様なものを取り出すと、手に握りしめながらそれだけウルベルトに対して言いきって、そのまま走っていくペロロンチーノ。

その慌しさに苦笑しつつ、ウルベルトは預かった鍵を片手に一人先に部屋へと向かった。

《アイツの部屋は、まあ……相変わらず趣味全開だったな。》

それで、一先ず荷物を片隅において、自分の分とアイツの分の端末のアップロードを開始して……

暫くたったところで、奴が来たんだ……》

最初は、部屋の呼び鈴を押された事に気付かなかった。

それまでずっと気を張っていたから、無事に日本に帰国できて気が緩んでいたからだと、今になれば良く判る。

もう一度呼び鈴が鳴った事で、ウルベルトはこの部屋の呼び鈴が鳴っている事に気付いたのだ。

そして、ペロロンチーノが「時間指定の荷物が届く」と言っていた事も思い出す。慌てて確認すれば、やはり玄関先に居たのは荷物の宅配業者のようだった。

直に受け取りに行く旨を告げ、玄関に向かう。

言われた場所から判子を取り出し、玄関を開けて流れ作業の様に伝票に判を押して。荷物を受け取ろうとした瞬間だった。

配達員が隠し持っていた、ナイフで脇腹を思い切り刺されたのは。

咄嗟の事に驚いて身を引けば、ナイフを引き抜かれて更に背中側から腹を刺されたかと思うと、その場所からのナイフは引き抜かれ。

最初の傷は浅かったのか、それほど出血をしなかったのに……二カ所目の傷口は止め処なく血が溢れ出て、引き抜かれた途端に周囲へ鮮血が飛び散っていく。

その様子を視界の端で見たウルベルトは、その場に崩れ落ちながら「もう、自分が助からないだろう」と、直感していた。

刺した男も、こちらに十分な致命傷を負わせたことを察したのだろう。

血走った眼をしながら、ナイフを手元の袋にしまいつつ、ぶつぶつと何かを呟いている。

「やった、これで金が貰える」

「これで、肺の交換ができる」

「ああ、助かった……」

既に、正気を保つてゐるのかわからない様子の男は、そんな事を呟きながら部屋を荒らす事無く出ていった。

どうやら、配達員として荷物を届けた上で、その相手を殺すように指示をされていたのだろう。

一人暮らしの男の家に、時間指定で荷物を配達をすれば、そこに居るのは受け取る相手だけ。

つまり、狙われていたのはペロロンチーノであり、ウルベルトは間違われて刺された事になる。

どうして、そんな事態になっているのか、その理由はウルベルトには判らない。

ただ……このままでは、モモンガとの約束を守る事が出来ない事だけが、今のウルベルトに理解出来る事だった。

「……冗談じゃない……」

せめて、一言だけでも……モモンガさんにかえって……きたって、ちゃんとあいさつ……しなきゃ……」

朦朧とし始める意識を何とか保ちつつ、這うような姿勢でウルベルトはゆつくりと部屋の中を進んでいく。

多分、部屋に帰ってきたペロロンチーノが見たら絶叫ものだろうと思いつつ、身代わりで刺されたようなものだから、諦めて欲しいと頭の端で考える。

もう……ウルベルトに残っている時間は、ほんの僅かしか残っていないのだ。

これ位は、許してほしかった。

息も絶え絶えに、漸く辿り着いた着いた部屋の中で、小さく響く端末の動作音。

震える手で、そつと端末に触れれば、丁度、専用の操作画面上に「アップデートが完了しました」と表示されるのが見えて。

もう、残り少ない力を振り絞り両手を上げると、頭にゴーグルモニターをセットする。そして、ログインした俺は……

「……そのまま、完全に「ユグドラシル」にログインし終わる前に、現実世界の俺は息絶えたと考えて、まず間違いないだろうな……」

ゴツンツと大きな音を立てながら、ごろんとその場にひっくり返るように横になった俺の頭の中は、正直言って限界に近かった。

今の現実を確認したら、予想以上のムリゲーを押し付けられていた

どれ位、洞窟の中でゴロリと地面に横たわっていただろうか？

そうして、冷たい地面の上に横たわっていた事で、少しは冷静さを取り戻せたとウルベルトは小さく溜息を付いた。

今の段階で、リアルに関して何かを考えたりする必要は……多分、もう無いだろう。何を考えたとしても、自分は死んでしまっているのだ。

それを伝える術はないし、自分の気持ちや考えを伝えた所で、残るのは向こうで生きているペロロンチーノを含めた親しい友人たちの後悔だけなのではないかと、漠然と思う。

むしろ、確実にウルベルトの事を身代わりにしてしまった形になったペロロンチーノは、今の段階で後悔しかしていない筈だ。

そこに追い打ちを掛けるのは、流石にウルベルトも躊躇われた。

今回ばかりは、こちらが無理を言つてペロロンチーノの家に泊めて貰えるように頼み込んだ結果であり、タイミングが悪かったただだからだ。

それに……ウルベルトが身代わりにならなければ、ペロロンチーノが死んでいた可能性が高い訳で。

《……あいつの場合、刺された事に慌てて救急車とか警察とかには連絡しそうだけど、モモンガさんに会いに行く事とかは頭から抜けそうだし。

それで致命傷を負っていたら、こんな風に俺みたいな状況にもならず、そのまま死んでそうな気がするんだよな……

まあ……そう考えると、かなり不本意ではあるが、これで良かったのかもしれない。《今の自分の姿と、現在の状況に不満はあるものの、それ以外は別に何も問題を感じていない。

そもそも、リアルに未練があるかと問われれば、はつきりと「否」と言えてしまえる位には、危うい立ち位置に置かれたのが自分だった。

何より、ウルベルトがこの姿になった事から、ある推測も成り立つ訳で。

《……俺がこの姿になってここに居る訳だから、少なくともモモンガさんは来ていると思つて間違いないよな？

このゴーレムを、自分のアイテムボックスにしまつて持ち歩いてたの、モモンガさんだし。》

そう考えると、出来れば早めにモモンガと合流したいと、思わなくはない。

彼なら、色々なアイテムを持っていた筈だから、この自分の現状を少しでも改善する術を持っていてそうだからだ。

そうは思う……思うのだが。

《この、今の俺の姿を、モモンガさんの前に晒す？》

この、ある意味無様としか言いようのない姿を!?

【悪の魔法詠唱者^{マジックキャスター}】として、モモンガさん相手にも散々【ユグドラシル】で【悪の美学】を語り、そう振る舞っていた俺が!?!》

過去の自分を思い返しただけで、あっさりともモンガに会う事を諦める位には、今の姿を彼に見せたくないのだと、本気で思う。

ただ……今のウルベルトが見せたくないと思っているのは、小さなゴレムとなり果てた自分の姿であり、過去の発言に関しては欠片も恥じている訳ではない。

むしろ、あれだけの発言をしていた自分が、こんな【悪の魔法詠唱者^{マジックキャスター}】に相応しくない姿になってしまった事を、非常に恥ずかしいと思うのだ。

彼の中で、あれほど誇らしく自分の思うままに振る舞っていた事は、いまだに誇りに思える事なのだから。

それはさておき。

もう一つ、モモンガと接触を躊躇う理由が、ウルベルトにはあった。

それは、とても簡単なものだ。

この姿になった発動条件を考えると、一つ、空恐ろしい事が考えられるからである。モモンガの側には、他のギルメンがある程度まで揃っているかもしれないと言う、恐ろしい光景が。

《……無理だ……絶対に無理だ……

まあ……モモンガさんは、多分、きつと……この姿を見ても、笑ったりはしないだろう。

だがな、あいつらは……他のギルメンは、違う。

ペロロンチーノは、俺が身代わりになって死んだ時点で家に居なかつたんだから、リアルに居るのは間違いない。

「たっちの奴は、端末を受け取る際に「今夜は夜勤なんでどうしても行けません、モモンガさんに宜しく伝えてください」って言ってたから、アイツも確実にリアルに居るだろう。」

だから、あの二人に見られる心配は、まあ……しなくてもいいだろう。

けどな……絶対にこの姿を見たら、笑う奴等が居るじゃないか!》

この試作品ともいうべきゴーレムを、パンドラス・アクターが作った時に、その場において散々笑い転げた面々の顔が、次々と浮かんで消えていく。

あの時ですら、完成したこのゴーレムを前にあれだけ笑い転げた連中である。

今、こうしてこの姿となり果てたウルベルトを見たら、間違いなく爆笑では済まないだろう。

むしろ、ここぞとはかりに弄りにくるだろう可能性も高くて。

そう考えるだけで、この状態での合流するのは、酷く躊躇われた。

もちろん、このままで何も手を打たずにいる状況で過ごすのも、良い訳がない。

それ位の事は、ウルベルトだって理解しているのだ。

それでも、やはり……

「……済まない、モモンガさん。

やつぱり、俺には無理だ……」

少なくとも「ユグドラシル」なら、大概の事を笑い飛ばして己を貫いたと、自信を持って言えるウルベルトだが、流石にこれは無理だった。

この姿を晒すのも苦痛だが、それよりもこの姿になった事で、元に戻るまで仲間の負担になるのも苦痛だからだ。

もちろん、そんな事をいつている場合ではないのかも知れないと、頭の端で思わなくもない。

ないのだが……やはり様々な思いがグチャグチャに浮かんで消えていく。

いずれ顔を合わせるにしても、今はまだ彼らに会うのは勘弁して欲しかった。

はあ……と、情けない表情で溜息を付くと、ゆっくりと体を起こす。

あちらこちら小さく、見た感じはかなりアンバランスな造りをしていても、やはり高性能ゴーレムボディの面目躍如と言うべきか、割とこの姿でも自由な動きが可能だ。

もちろん、色々と手が届かない場所などもあるし、不便なことには変わりないのだが……それでも、一度横になったら起きれないなんて状況にはならない事に、ウルベルトはホツと安堵の息を吐く。

一々、起き上がる為に飛行の魔法フライを使うのは、非効率的だったからだ。

それはさておき。

今は、他に考えるべき事が沢山あった。

まずは、この姿になった経緯と元に戻る為の手段だろうか。

先程思い出した情報を踏まえるなら、これはタブラが仕掛けようとしていた「死亡によるペナルティ」が、様々な条件が重なって実際に発動したと予想していいだろう。

これに関しては、状況的に考えても間違いないと思う。

出なければ、本来のウルベルトのアバターが目の前に存在して居るのに、この姿に

なった理由が思いつかないからだ。

もちろん、この場所に何も存在せずに今の姿になったのなら「死亡寸前で強引にログインしたため、入るべきアバターが他に見つけられなかった」と、そう考える事が出来た。

しかし、こうして目の前には封印されている状態とは言え、本来のウルベルトの器もあつて。

だとすれば、今の状態をどうすれば解除できるのだろうか？

そもそも、実際にタブラの仕掛けが発動したとして、ではその仕掛けの解除条件はどうか？

きちんとその辺りを把握しないと、後から解除できませんでしたなんて事になったら、それこそ目も当てられないだろう。

正直、この姿を出来るだけ人前に晒したくないと、本気で思っているのだから。

やはり、それを確認するためにも、一度目の前のウルベルトの本体の状況も確認するべきだろう。

この、全身を覆う氷のようなものがどんな効果をもっているのか判らない為、容易に魔法で調べる事を躊躇っていたのだが、そうも言っていられないだろう。

情報不足の状態では、どう対処していいのか対策すら思いつかないのだ。

一応、タブラの仕込んだ仕掛けが原因だろうと漠然とわかっていても、それがどうしてこんな状態になっているのが根本的に判っていないのだから。

「……やつぱり、調べるしかないよなあ……」

いつまでも、こうしてただこの状態の本体を見ている訳にもいかない。

そう自分の中で腹を括ると、ウルベルトは魔法で丁寧に探知を掛けていく事にした。もちろん、最初の段階で魔法による妨害がないか、きちんと確認した上でだが。

丁寧に時間を掛ける事、数十分。

漸く、目の前の身体から魔法を駆使して集めた情報を解析して纏めながら、ウルベルトはその場がっくりと項垂れながら膝を付く。

それと同時に、本気で頭が痛くなるのを感じていた。

予想していたよりも、今の身体から目の前の本来の姿に戻る条件が、面倒なものだったからだ。

「……予想、していない訳じゃなかったけどな……」

でも、流石に「復活の為に、十万の命を集めて氷の中で眠れる悪魔に捧げよ」はないんじゃないですかね、タブラさん。」

はーっ……と、もう溜息しか出ない条件だ。

そもそも、想定となっている「十万の命」は、どう定義したものを指している？

この辺りに居るだろう、生物なら全部対象なのか？

ある程度までの強さを持ったモンスターが対象なのか？

それとも……人間種の命が対象なのか？

一応、はつきりと人間種と限定していないのだから、逆にモンスターなどを含めた大きな定義だとして、だ。

それでも、流石に「十万の命」を集めるのは、本気で骨が折れるなんて作業ではない。「ユグドラシル」時代だって、レベル上げの為にモンスターを一定数刈り取るのに、どれだけ時間が掛かったのかを考えれば、この世界の常識が判らない状況では空恐ろしい事になっているだろう。

「……これは、どう考えても俺一人では何とも出来ない状況じゃないか。

だからと言って、誰かの手を借りようにも、なあ……」

こうなつてくると、会いたくないとかそういう問題じゃなくなってきたと言つていいだろう。

元々、前衛なしに戦うのは難しい後衛の魔法職なのに、この姿ではさらにその能力を安定して発揮するには、前衛職は必須と言つていい。

誰かしら、前衛職の協力を得て「狩り」をこなしていけないと、いつまでも元の姿に戻る事は出来ない、考える必要があるだろう。

もし、この後無事にギルメンたちと合流し、その中でタブラと会えたとしても、一度発動してしまっている仕掛けを解除するのは、難しい筈だからだ。

これに関しては、多分ウルベルトの考えで間違いないだろう。

以前、そんな話をナザリックの「ギミック担当」達がしているのを聞いた事があるからだ。

この世界でも、「ユグドラシル」の常識がそのまま通用するのかどうかはさておき、魔法での調査で確認した情報なのだから、それを前提にしておいた方がいいだろう。

下手に、別の解除方があることを期待して、手を拱いている方が時間が惜しい数だからだ。

《とにかく、今は誰かの協力が欲しい。》

そう考えた所で、そもそも彼らがどこに居るのかも判らない状況だと思い出し……ウルベルトは小さく舌打ちした。

とにかく、今のウルベルトの状況では、あらゆる情報が足りなさ過ぎた。

今、自分がいるこの場所が、一体どこなのか。

【ユグドラシル】ではないここは、一体どんな世界なのか。

ナザリックやモモンガさん達が、この世界ではどうなっていて、実際にはどこにあるのか。

自分を取り巻く状況が、まだまだ分からない事だらけだと言う現実を突き付けられ、ウルベルトはただ頭を抱えたのだった。

自分の持ち物の確認と、合流出来そうな相手を探してみ
た

正直、余りにきつい条件を目の前に突き付けられ、それをクリアするには単独では無理と言う現実を前に、ウルベルトはどうするべきなのか思案に暮れていた。

今の自分には、実際には出来る事はあまり多くない事も、きちんと把握しているからだ。

MPそのものだけなら、この外見のわりに本来のアバターの六割と、割と多いと言えるだろう。

だが、その分魔法を使う為に使用するMP消費量が本来の五割増しと、それを打ち消すだけのものになっていて、意外に使えない。

威力はそのままだと言う点は、少しだけ救いがあると思えるのだが、それでも使い処を間違えれば割と簡単にMP切れを起こして動けなくなるだろう。

他にも、小さくとも高性能なゴーレムボディのおかげで、魔法職でありながら紙装甲と言われるほど物理耐性は低くないが、それでも本来のアバターのHPの四割程度の体力しかない事とか。

物理耐性はそこそこだが、装備がほぼ遺産級レベルのもので固められていたり、アイテムボックスがほぼ碌に使えないアイテムばかり状態（それでも一応使えた）になっていたりしたのである。

もう……とにかく、このままでは元に戻る処かモモンガたちと合流するのも危うい気がしてくるほど、今の自分の状況は良くなかった。

装備に関して言えば、むしろこのサイズで、よくもまあ遺産級の品を装備させてくれたものだと、パンドラズ・アクターの器用さに感心させられていた。

正直言つて、装備に関してはあくまでも見せかけだけの張りぼてだったとしても、試作品のゴーレムでは仕方がない状況だったのだ。

それを考えれば、遺産級のものでもきちんと装備させてくれているだけ、かなりましだと考えるべきだろう。

もしかしたら、後からモモンガが念の為に預かった全てのゴーレムに遺産級の装備させたという可能性も、まあ……なくはないのだが。

アイテムボックスに関しては、中に高価な品がほとんど入っていない状態なのについては、自分で納得している。

三年前、ナザリックを最後に訪れた時に、手持ちのもので高価なアイテムの大半は、モモンガに預けておいたからだ。

自分がいない間、「もし何かあった時は使って欲しい」と、それらを彼に託したのは間違っていないと思う。

あの時、いつ戻れるのか判らない状況下において、ギルド長であるモモンガに託すのが、最善の判断だったと今でも思っている。これに関しては後悔はない。

よくよく考えてみれば、このゴーレムボディになった状況下でもアイテムボックスを使える事がすごい事であり、使えない可能性の方が高かったのだ。

そう思えば、使えないアイテムボックスの中身が充実していても、余り意味がないだろう。

更に考えれば、このゴーレムボディの総HPならば、手持ちのアイテムで十分回復出来るってしまう状態なのだ。

下手に高価な分、その効力が高いアイテムを持っているより、余程使い捨てして惜しくないと思えるだろう。

《……そうやって考えると、割とアイテムボックス内の内容は、悪くないのかもな。

無駄に高価で効力が高いアイテムとかだと、かえって勿体なさ過ぎて使いそびれそうだし。

「アイテムの価値が高すぎて、使い惜しんでいる間に死んでしまいました」とか……一番笑えない状況だから、今の俺は。

まあ……その代わり、MPブースト系とかの補助アイテムとかも無かったんだけど。これに関しては、下位の補助装備系アイテムは全部部屋のクロークに突っ込んでいたから、【無くて当然だ】と最初から諦めてたけどな。》

つらつら考えつつ、今、この場で直に出来る確認作業を続けていく。

アイテムボックス内にあるのは、大半が安価な治療薬などの消耗品系アイテムだった。

それでも、一応武器として聖遺物級の杖が数本入っっている。

思わず、それを見付けた時に本気で嬉しさから小躍りしてしまった位には、他に今後の活動の主軸として使えそうな物は入っていなかった。

「……落ち着け、俺。

これで武器は手に入ったんだから、それでよしと思うべきだろう。

しかもこれ、炎属性持ちなら追加効果で【火球】ファイヤーボールをMPを使用せずに使える、モンスタードロップアイテムでも特典付きの杖じゃないか。

更に装備効果として、炎属性及び氷属性攻撃無効化とか、もう……もう！

良かった……念の為に炎属性持ちの悪魔にしておいて。

まあ……焼け石に水かもしれないけど、今の俺には十分有効なアイテムだよ、これは。」

一通りその効果を確認し、【スタッフ・オフ・サラマンダー火竜の杖】を撫でつつ、小さく呟くウルベルト。

この程度の武器ですら、今の何もない自分にはありがたいものだった。

本来の俺からすれば、こんなのゴミアイテム同然の杖だとしても、今の俺には必要な武器だ。

よくもまあ……この杖がアイテムボックス内に残っていたものである。

暫く、その理由を考えるように杖を見つめ。

そして、思い当たった答えに、ウルベルトは何とも言い難い顔をしながら頭を抱えた。

《……あ……なんとなく、理由は分かった。

この杖の全体的な印象が、サラマンダー火竜とか言いながら、どこか俺のデ作った理想のウル悪魔を思わせる雰囲気だからか。

だから、つい、手放せなくてアイテムボックスの中に突っ込んでくとか、どれだけ自分が作ったデミウルゴス最高傑作の事、気に入っているんだよ俺は！

いや……まあ、うん。

そりゃ、三年前まで住んでた部屋では、デミウルゴスを十分の一スケールのフィギュアにして飾ってたし、海外に飛ばされてる間もギルメン全員と取ったスクショと一緒にデミウルゴスとのツーショットも持って行ってたけどさ。

良いじゃないか、俺の自慢の最高傑作デミウルゴスなんだから。》

自分の作った中でも、最高傑作だと自負している第七階層守護者【デミウルゴス】を思浮かべつつ、そう開き直るウルベルト。

なにせ、自分の中にある思いの丈を込めて作った、文字通り【理想の結晶】であるかの悪魔は、どこに出して引けを取らない最高の出来だだと自負しているのだ。

この辺りの感覚は、同じ様に思い入れをもってNPCを作った人間でないと、判らないかもしれないが。

とにかく、どんな理由であれ自分の手持ちの武器があつた事は喜ばしい事だった。

可能な限り手持ちのアイテムの確認も済み、この杖以上に使えそうな物は無い事も確認したので、次にするべき事を考え始める。

「……やっぱり、情報収集、だな……」

自分が現在いる場所の事すら、何の情報も掴んでいないと言う状況が、どれだけ空恐ろしい事かと言う事を、ウルベルトはちゃんと理解していた。

ここがどんな場所で、どんな存在が中心となつて存在しているのか、きちんと把握しないとこの洞窟の外に出る事すら出来ない。

そもそも、この洞窟の中ですら、本当に安全なのかと言う点すら、最初の状況を考えれば怪しかった。

一応、あの時にウサギもどきのモンスターを倒してから、この洞窟の中に入り込んで

くる存在はいない。

だからと言って、安全だと思いつむのは危険だろう。

もしかしたら、こちらの隙を少し離れた場所から窺っているのかもしれないのだ。

幾ら注意しても、注意したりないと言う事はないだろう。

油断などしている余裕など、今の自分にはどこにも存在していないのだから。

「……さて、情報収集するにしても、この世界で魔法による探知対策がどうなっているのか、いまいち判っていないのが痛いな。

これで誰か仲間がいるなら、多少の無理も出来るんだが……」

そう、単身の上に魔法耐性はもちろん物理耐性などの守りが弱い状態で、下手に魔法を使うのは正直迷う所だった。

これで、まだ何らかのアイテムなどで身代わりが可能な状況なら、ある程度まで強硬手段に出れるのだが、それも無い。

本来の姿なら、探知カウンター・デテクト対策などの対策も万全で、装備だつて今の物以上を身に着けて

いたから、無理も出来ただろうが……今は違うのだ。

どうしても、ウルベルトが慎重に行動してしまうのは、仕方が無い事だった。

ウルベルトが情報収集を始めてから、一体どれくらいの間が過ぎたのだろうか。

それこそ、普通に外の世界を観察する分には問題ない事を理解した後は、MPが続く限り色々な形で情報を集めてそろそろ三日が過ぎると思しき頃。

外の様子を観察する際に、太陽の動きで日付を把握していたウルベルトは、そろそろ本命を仕掛けようかと考えていた。

本命……それは、モモンガ若しくはナザリックの関係者を捜す事だ。

ここで、なぜ直接ナザリック地下大墳墓を探さないかと言うと、あの場所は世界級アイテム「諸王の玉座」によって探知魔法を阻害する効果によって守られている為、探す事が出来ないからだ。

それなら、モモンガもナザリック関係者も探せないのではないかと指摘されそうだが、自分と同じように単身でこちらの世界に來ている可能性も、まだ捨てきれない。だからこそ、とある方法を使って探索してみようと思ったのだ。

その方法とは、クレアボックス「千里眼」を使つての「自分の作成したアイテムを所持している者」の探索だった。

この方法を使用すれば、探索する対象との距離は問題にならない。

もちろん、指定したアイテムを相手が見つからなければ反応しないから、その探知対

象を誤認する心配もない筈だ。

何より……この方法で見付けられる可能性がある対象は、全部で三人しかない。

一人は、自分が生み出した最高傑作であるデミウルゴス。

二人目は、己が所属していた「アインズ・ウール・ゴウン」のギルド長である、モモンガ。

そして三人目は……己が、色々と気に入って装備などを与えていた、モモンガが作成したNPCでありナザリックの宝物殿を預かるパンドラズ・アクター。

三人のうち、こちらの世界に来ていて尚且つ外に出ていそうなのは、上から二人だろう。

三人目のパンドラズ・アクターは、まずモモンガが外に出すとは思えなかった。なので、デミウルゴスカモモンガを捜すつもりで魔法を使ったのだが……

予想とは全く違い、この方法で見付ける事が出来たのは、なんと「まずあり得ないだろう」と予想していたパンドラズ・アクターだった。

最初、クレアボックス【千里眼】を使用して見付けたのは、人間の姿をしたモモンガなのではないかと思つた。

だが……よく観察してみれば、モモンガにしては年齢がかなり若すぎたし、髪長さや雰囲気もかなり違う。

その時点で、モモンガの可能性は一旦外した。

もちろん、アイテムなどの影響下によつて自分の様に外見が変化した可能性も考慮すべきだろうが、それにしてもどこか雰囲気幼過ぎて。

他人の空似を一瞬考えたが、それだと最初にクレアボックス【千里眼】での探査対象から外れてしまふのだ。

自分が作成したアイテムを持つ、ナザリック関係者の中でモモンガの外見に良く似た存在になれるもの。

そう考えれば、答えは自ずと導き出されていた。

モモンガの手で生み出された、グレート・ドッセル・グーガ上位二重の影であるパンドラス・アクターだと。そう理解してしまえば、クレアボックス【千里眼】越しに見る相手の幼さも納得出来てしまった。

NPCの中でも、宝物殿の中にあり完成するまでに時間が掛かり過ぎた事もあって、特に経験値が足りないパンドラス・アクターだからこそ幼さだ、と。

どうやら、彼は現在、人間種の作つた街の中に居るらしい。

一応、この世界の常識などを情報収集しては見たものの、自分のいる場所はトロールが主体なのか人間が少なすぎて、どこか情報が足りなさ過ぎるようだ。

自分の中にある人間としての知識を当て嵌めると、割と上手く人の中に溶け込んでいるように見えるが、それでも何処かぎこちない素振りが見える。

この辺りは、パンドラズ・アクター自身が殆ど他人と接触した事が無いと言う点から考えても、仕方がない部分なのだろう。

《確か……パンドラの属性はナザリックでもあまり居ない中立で、カルマは――五十年代だっただけ。》

だから、あんな風に普通に人間と会話できるんだよな。

他のNPCだと、属性が悪よりだから……別の意味で悪目立ちしてるだろうな。》

この辺りに関しては、流石にデミウルゴスはどう対応するのか、微妙に予想が出来なかった。

属性は極悪だが、頭が良い設定にしてあったから、もしかしたら逆に上手く人間を利用しているかもしれない。

まあ……その辺りは実際に自分の意志で動いているデミウルゴスを見た訳ではないし、何とも言えないのだが。

それにしても……と、ウルベルトは独りごちる。

「……自分の意志を持って動くようになると、パンドラはあんな感じなんだな……いや、うん。」

まさかNPCが、本当に自分の意志を持って動くようになるとは、思ってたんだけど、俺。

そうなたらいいと思って、こうして魔法で探してみただけど、実際に見てみるとすごく感動的な気がするな、うん。

モモンガさんも、この事を知っているのかな？

もしかして、ナザリツクごとこつちの世界に来てるなら、今頃モモンガさんはすごい事になってるんじゃないかな？」

クスクスと楽しげに笑いながら、【千里眼】クリアボヤンスで暫くパンドラズ・アクターの様子を伺っていたウルベルトは、一旦そこで魔法を打ち切った。

色々と他にも試していた為、今の段階で残りのMPが少なくなってきたからだ。

「……今ので、パンドラはすぐに見つけられるのは判ったし、合流するならMPが回復した明日以降だな。」

これからの行動の目途が立ち、ホッと安堵の息を漏らしたウルベルトだった。

一先ず、パンドラと話をしてみた【ウルベルト様と色々な確認をしてみましたのウルベルト視点】

パンドラズ・アクターが「ユグドラシル」時代の記憶があると言う、思わぬ地雷によってダメージを受けたものの、ウルベルトはそれ程のんびりしていられない状況を理解していた。

今、自分が抱えるハンデも結構酷いが、パンドラズ・アクターの抱えているハンデも相当だと思う。

《……まさか、^{ワールド}世界級アイテムを含

めた、ナザリックの宝物殿の宝を守る為に、自分のレベルを下げる選択をするとは思わなかったな。

とは言え、放置して敵にみすみす奪われる可能性を考えれば、仕方がない選択肢だったかもしれない。

それにしても……まさかパンドラの部屋に未区分の^{ワールド}世界級アイテムがあるとは思わ

なかった。

【道化師の請願】ねえ……

初めて聞く名前と能力だが、その性能はどちらかと言うと【二十】の一つ【永劫の蛇の指輪】に近い気がする。

まさか、NPCに同化しその同化した本人しか使えない世界級アイテム。

そんな、NPC専用の特殊な世界級アイテムが【二十】の一つとして、数に入ってるとか言わねえよな……いや……むしろ、それ位の事なら平気でやらかしてそうだよな、糞運営なら。

だとしたら……これから、パンドラの存在はいよいよ重要なものになると思っていない。

まさか、自分の作ったNPCが偶然に偶然が重なった結果、生きた世界級アイテム、しかも【二十】なんて希少性の高い存在になるなんて、モモンガさんは思いもしてないだろうな……》

内心、こっそりとそう考えつつ、ウルベルトはこれからの事を考えていた。

大前提として、自分が姿を取り戻すために動くのはもちろんだが、この世界における状況把握も必須の一つだろう。

パンドラズ・アクターの話では、この世界には【武技】や【タレント】などの【ユグ

ドラシル」では馴染みの無い能力もあるらしいからだ。

第十階位魔法を使用しての悪魔召喚などで、己が元に戻る為に必要なコストである命の回収をしてもいいが、それには邪魔が入らないのが条件となる。

しかし、それをするには人目につかない場所を確保するなど、色々難しいらしい。

《……スレイン法国か……

話を聞いた限りじゃ、プレイヤーが一枚噛んでそんな感じの国だよな。

ビーストマンとかいう国に襲撃を掛けて、一気に滅ぼすのも一つの手だろうけど……その向こう側の勢力図がはつきり判らない所でそれをやると、後が面倒な事になりそうで怖い。

それに、種族的に人間たちよりもかなり強い分、国としての総住人の数は十万行かない可能性もあるからなあ……

この国に居る間は、襲撃してくるこいつらを積極的に刈り取りつつ、他の方法も考える必要があるか。

さて……俺の考えはこんな感じだけど、目の前のパンドラはどう考えているのやら……

意思疎通は、お互いこの苦境を脱出するためにも絶対条件だよな。》

つらつらと、頭の中で考えていた事を纏めつつ、ウルベルトはスツと視線をパンドラ

ズ・アクターへ向けた。

その視線は緊張感があり、その瞳はどこか不安と安堵が入り交じった何とも言い難いので、ゆらゆらと揺れている。

普段の、人の顔とは違う^{ドッベルゲンガー}二重の影の姿だったら絶対に見られないだろう、その瞳のあからさまな揺らぎに、ウルベルトは今の状況が悪くないものだと思っただけだった。

あちらの姿のままなら、こんな風にすぐにパンドラズ・アクターの感情の揺らぎに気付かなかった可能性が高いからだ。

唯でさえ、表情が読み難い^{ドッベルゲンガー}二重の影なのに、これで本人が隠そうと意識して演技したら、ウルベルトはもちろんだが創造主であるモモンガとて気付けないんじゃないや無いだろっか？

それ位の事は、平気でやって退けそうなのがパンドラズ・アクターなのである。

だから、表情が読み易い今の姿は、ウルベルトにとって運が良かったのだ。

まあ、それはさておき。

不安と安堵が入り交じっているのは、自分がここに来た経緯を話したからだろう。

彼らNPCにとって、自分達の存在は重要度が高いのだろう。

ウルベルトとしては、終わった事なのでそこまで気にしても仕方がないと思うのだが、パンドラズ・アクターには違うらしい。

まあ、一度死んでいるなどと話されれば、心配するのは当たり前かもしれない。

「ユグドラシル」時代なら、例え死んでもレベルダウンだけで復活する事は可能なので、それほど深刻な話ではないのだが、こちらの世界はそれが通用するのか判らないのだから、余計に心配をかけてしまったのだろう。

そう考えると、少しだけ申し訳ない気もしなかつた。

しかし、だ。

状況に少しばかり問題があるとはいえ、ウルベルト自身はこうして無事に生きているのだから、そこまで不安になる必要はないだろう。

むしろ、優先すべき案件は他にあつた。

自身の復活を含めて、これからこの世界においてどう行動するか、だ。

一応、先程も頭の中で考えていた様に、復活の手段はいくつか思い付かなくもないのだが……色々と不安要素がある為に、実行するのに迷う案件ばかりなのである。

なにせ、ウルベルトもパンドラズ・アクターも、本来なら行動基盤となる「ナザリック地下大墳墓」から、迷子のような扱いなのだ。

何も考えないまま行動した結果、モモンガやナザリックの仲間たちに迷惑をかける事だけは、絶対に避けたかった。

そう考えると、今は己の復活の為であつても、簡単に命を刈り取る行為は控えた方が

いいだろう。

どこで、どうナザリックと繋がっているのか、全く判らないのだから。

《まあ……とにかく、俺としてはパンドラと合流した事で、それまでよりも選択肢を広げる事が出来たと思うべきだろうな。

実際問題として、ほとんど何も持っていない俺よりも、宝物殿の自室のアイテムの大半は確保出来ているパンドラの方が、物資的な面でも選択肢は多そうだし。

それに、この外見を晒す事にそれほど抵抗感を持たずにいられたのだから、割と優秀なこのゴーレムボディの制作者なら、何かあった時に対策を取って貰えると考えたからだしな。

現在残っている職業レベルを考えると、俺のこの身体のメンテナンス自体は何の問題もなくこなせるみたいだし、選択肢としては正解だったと思っただろう。

他の連中に見られるよりも、精神的な負担も少ないしな、うん。》

本来の力を失った姿を、パンドラズ・アクターの前に晒すのは、本音を言えば避けたかった。

だが、そうして人前に出るのを避けていても、どんどん自分にとって状況が不利になる可能性の方が高くて。

安全と自分のプライドを秤に掛けて、その上で安全を取ったのはちゃんと理由があ

る。

ここが、「ユグドラシル」の世界の魔法が使用可能でありながら、実際は全く違う異世界だからだ。

自分がただ死ぬだけで済むなら、プライドを優先しても問題はなかっただろう。だが、こちらには間違いなくナザリックが来ているのは間違いなくて。

ウルベルトがその事を確信したのは、皮肉にも目の前にいるパンドラズ・アクターの存在を目にしたからだ。

宝物殿の領域守護者という、限りなく宝物殿から出る可能性が少ない存在が、ナザリックを離れて単独行動をしているという異常性。

それを目の当たりにして、通常ではありえない状況自分の状況を重ね合わせれば、死ぬ直前に「ユグドラシル」へログインしていた結果として、異世界に転移したと考えるのは当然の話だろう。

自身の状況を、「ユグドラシル」最終日に最後までログインしていただろうモモンガに重ね合わせれば、彼が来ていないという可能性の方が少ない。

もちろん、パンドラがいた宝物殿の奥のエリア一部だけが転移したという可能性もない訳ではないが……漠然としたものだが、ウルベルトにはモモンガがこちらに来ているという確信があった。

その理由こそが、今の自分のゴーレムボディだ。

この姿になった条件が、タブラの設定したままだとするならば、その前提としてクエストの招集者としてモモンガが居なくてはならないだろう。

なにせ、彼が「宜しければ、皆さんで集まりませんか？」とメールを仲間に一斉送信したのだ。

その彼が居なければ、前提となるクエスト発行者がいない事になり、この姿になっただろう設定の発動条件が成立しない。

故に、モモンガはこちらに絶対に来ている事もまた、ウルベルトは確信してるのである。

それはさておき。

持論を頭の中で展開しているよりも、そろそろパンドラズ・アクターから意見を聞いた方がいいだろう。

今のままでは、同じ所で思考のループを起こしかねない。

それに、不安がつているパンドラズ・アクターから今の時点の考えを聞いておくのは、悪い話ではなかった。

これから、ナザリックが見つかるまでの運命共同体ともいう相手と、意思疎通を疎かにしておく訳にはいかないのだから。

スツと視線を向ければ、今までの自分の状況を説明してから、ずっとこちらの思考が終わるのを待っていたらしいパンドラズ・アクターがスツと頭を下げる。

「どうやら、その視線だけでこちらの意図を汲んでくれたらしい。」

「真つすぐにこちらを見つつ、彼はゆっくりと口を開いた。」

「それで、今後の事なのですが……まずは、ウルベルト様の戦力強化をするべきだと、私は愚考致します。」

「今のウルベルト様のままでは、ご自分で満足に動く事も難しいかと。」

「それならば、今の私に出来る形での手立てを、全て試させていただきたく。」

「もつとも……今の私では、本来の力を十全に使える訳ではございませんので……出来ることにも限りはございますが。」

「まさか、こんな事態になるとは思いもしなかっただろうに、ウルベルトに対して申し訳無さそうにそう告げるのを見て、思わず何とも言えない気持ちになる。」

「こればかりは、パンドラズ・アクターが悪い訳じゃない。」

「むしろ、こうして彼と合流出来たことに安堵すら抱いているのに、そんな顔をされてしまうところの方が申し訳なくなってくる。」

「なので、つい頭を掻きながら何と言っているのか判らず言葉の代わりに溜息を洩らし、慌ててその顔を真つすぐに見て。」

そして……次の瞬間、自分の反応が失敗だった事を察せざるを得なかった。

今まで、不安と安堵の間で揺れていたパンドラズ・アクターの瞳が、一気に絶望に染まったからだ。

こういう目をしている相手を、ウルベルトは少し前までいた【リアル】での【苦境の三年間】に何度も見ているので、どれだけ危うい状態なのかすぐに理解出来てしまう。

しかも、困った事に目の前にいるパンドラズ・アクターには、ある意味最も危険かつ面倒な切り札があるのだ。

こちらの反応に対して、余計な事を考えて暴走してしまう前に、先ずは落ち着かせることが最優先だろう。

《……やっべ、マジ、やっべ！

凄くヤバイ感じじゃないか、あのパンドラの目は。

ホント、俺とした事が今の状況で対応間違えるなんざ失敗だわ……

普通に考えても、不安がっている相手の前で俺の今の反応はないよな、うん。
あー……マジでどうしょ。

このまま放置しておく、本気でさっきの俺の反応で思い詰めたパンドラが、切り札ともいべき【道化師の請願】^{バウ・オプ・クラウン}を切って何かやらかしそうな雰囲気だし……

何と言うのか……一旦こうと思ひ込むと、そのまま思い詰めて一直線に走っていく感

じが、モモンガさんそっくりだよな、パンドラって。

もしかして、NPCって設定以外の部分は創造主に性格とか言動が似てるのかもな。

……と、その考察はまた今度にして、一先ず暴走しそうになつてるパンドラをなだめないと拙いか。》

ウルベルトが、自分のうっかり行動を反省している間に、自分で自分を追い詰めるようにどんどん思い詰めていくパンドラに気付き、急いで対処するべく飛行フライを使いふわりと浮き上がると、そのままパンドラズ・アクターの目の前まで移動した。

しかし、自分の思考に嵌りこんでいるのか、パンドラズ・アクターはそれに気付く様子がない。

目の前にいる相手にすら、気付けないほど思い詰めてしまっている事に、少しだけ溜息を吐きつつ手にしていた火スタッフ・オブ・サラマンダーの杖を振り上げると、そのまま軽く額に向けて叩き付けていた。

その衝撃によって、漸く自分の思考から抜け出たらしいパンドラズ・アクターが、ハツとしたように視線を向けてくるのを感じながら、ウルベルトは出来るだけ自分を大きく見せるように胸を張りつつ、手にしていた火スタッフ・オブ・サラマンダーの杖を眼前に突き付けてやる。

自分の思考に入り込んだ結果、ウルベルトの事を無視した形になった事で、ますますどこか思い詰めそうな様子を見せるパンドラズ・アクターに対し、ぶんつと勢いよく杖

を振り回して見せつつ、ウルベルトはゆっくりと口を開いた。

「こら、パンドラ。」

お前、さつきからなにか勘違いして、不穏なことを考えてないだろうか？

言っておくが、俺が溜め息を吐いたのは、お前が原因じゃないんだぞ！

むしろ、今更ながら情けない事に気付いて、自分で自分に呆れただけだから。

勘違いした挙げ句、変に暴走した思考で行動したら、それこそ怒るぞ、パンドラ。」

こういう勘違いは、相手が勘違いしている事に気付いたその場で訂正しておかないと、そのままそれが正しい事なのだと思いついてしまふ場合がある。

それを避ける為にも、きちんとその場で間違えている事を告げてやる必要があるだろう。

特に、まだ経験値が圧倒的に低いパンドラズ・アクターのようなNPCの場合、こちらが注意しておかないと勘違いが加速しそうな気がするのだ。

だからこそ、こうして思った事は包み隠さずに告げてやらなくてはいけない。

先程の自分の様に、不安がっている相手の前で溜息を付くなど、勘違いを助長する行動は絶対に避けるべき行動だった。

そう考えたからこそ、こうして自分の考えを判り易く口にしてているのだ。

ついぞと言わんばかりに、ツンツと杖で「サーティ・ルウ」という人間としての外装

のある鼻を突つついてやると、気持ちを切り替えるべくコホンツと軽く咳払いをしてみせる。

正直、ここから先の話を口にするのは、ウルベルトとしてはかなり照れ臭い部分が多い内容だ。

だが……この状況下では言わないままにしておく方が、不安に揺れているパンドラズ・アクター相手では不味いと判断した為、こうしてきちんと言葉に出して話す事にしたのである。

そうすることで、少しでも彼の不安を取り除けるのならば、と。

「……つたく。」

俺はな、こうして自分の意思で動いているお前に会えた事を、本気で喜んでいるんだからな。

そうだ、一つ言っただけでなかった事を思い出した。

良く、一人で宝物殿の宝を守る為に、ここまで頑張ったな、パンドラ。

お陰で、ナザリツクの財を確実に守れている。

だからな、俺から言うことがあるなら、それは「ありがとう」だと思う。

本当は、再会してすぐに言うべきだったんだろうが、他に優先事項が多すぎて忘れてたな。

一人だけで、あれだけのものを抱えて旅をするなんて、精神が休まる暇もなかっただろろう？

本当に……今までよく頑張ったな、パンドラズ・アクター。」

手にしていた杖を一旦しまふと、そのままスツとパンドラズ・アクターへと手を伸ばし、先程叩いてしまった額に触れて、そつと優しく撫でてやる。

本音を言えば、小さな子供を宥める様に本来の姿で抱き締めてやりたかったのだが、今日の制限時間分は使用してしまつたのでそれは出来なかつた。

その代わりと言わんばかりに、何度も何度も優しく撫でてやれば、今まで我慢していたのが抑え切れなくなつた様子で、ホロホロと涙が瞳から零れ落ちる。

それと同時に、パンドラズ・アクターの中で張り詰めていた緊張の糸が、プツンツと途切れたのをウルベルトは感じていた。

ただただ、声も出さずにホロホロと涙を零すパンドラズ・アクターを見て、ウルベルトは心の中でホツと安堵の息を吐く。

これで、少しは彼の中にあつた精神的な不安が取り除けたのではないかと、そう思つたからだ。

それに……別に、ウルベルトはパンドラズ・アクターを宥める為に嘘を言つた訳ではない。

今まで聞いた話から、彼がたった一人で宝物殿の中で最も重要な秘宝を守るために、どれだけ心を砕いていたのか判るだけに、心から「よく頑張った」と思つて褒めたのだ。それこそ、宝物殿の秘宝を守る為なら自分のレベルすら犠牲にして、味方が一人も居ない中で精神が休まる合間もないまま、ずっと緊張の糸を張り巡らせてここまで頑張つていたのを知れば、褒めないでいられる筈がない。

むしろ、それを叱責するような真似をするなど、パンドラズ・アクターの苦労を欠片も考えもしない愚か者のする事だろう。

多分、モモンガとてパンドラズ・アクターの状況を知れば、「勝手な事をした」と責めたりせず「今まで一人で良くやった」と褒める筈だ。

ならば、この場に居ない彼の分もパンドラズ・アクターを思い切り褒めて、少しばかり甘やかしてやるべきだろう。

こんな風に、パンドラズ・アクターが泣いているのを、無理に止めさせるつもりなど、ウルベルトの中には存在していなかった。

むしろ、今まで苦勞した彼の気が済むまで、好きだけ泣かせてやりたい。

ここから先は、また別の意味で苦勞を掛ける立場にあるだけに、ウルベルトは余計にそう思うのだ。

正直、ウルベルトから見てパンドラズ・アクターは外見通りまだまだ子供なのだから、

もつと甘やかしてやるべきだとすら思う。

まあ……それだけの余裕は、今の自分達には存在していないのだが。

それでも、「今だけは……」と考えたウルベルトは、何も言わずにただ頭を撫でてやりながら、彼の好きにさせていた。

その結果……パンドラズ・アクターが泣き止むまでに、かなりの時間が掛かったのだ。

お腹が空いたら、お茶と茶菓子が用意された【ウルベルト様と色々な確認をしてみましたのウルベルト視点2】

漸く泣き止み、精神的に落ち着いて冷静さを取り戻したパンドラズ・アクターは、子供っぽい行動をしてみましたと、申し訳なさそうに恐縮していたが、ウルベルトは特に気にはしていなかった。

むしろ、こうしてこの場で思い切り泣いた事で、今まで溜め込んでいたものを吐き出せたのなら、悪いことではないと思っている。

今のパンドラズ・アクターの表情を見れば、泣いた事ですつきりとした感じなのが読み取れたので安堵しつつ、これからの事に少しばかり考え……すぐに中断する事になった。

気になっていた事が解決したからのか、微妙に空腹を覚えたからだ。

正直言つて、今の種族的な面ではどうしても食べる必要はない。

しかし……それでも空腹は感じない訳ではないのだ。

特に、街でパンドラズ・アクターが食事をしている姿を見ているうちに、この世界の食べ物に対して興味がわいている分、余計に空腹を感じてしまっていて。

精神的に余裕が出来た分、それをダイレクトに欲求として感じてしまっているの
う。

自覚すると、ますます何かを食べてみたくなかった。

《まあ……俺自身の手持ちの中には食料はなかったけど、パンドラは偽装の為に街で携帯食料とかいろいろと買い込んでたしな。

非常に情けない話ではなるが、俺が「食いたい」と言えば出してくれるだろ。

それよりも、今はもうちよつとゆとりをもって話をしてほしい気がするな。

漸くパンドラも落ち着いた事だし、仕切り直して事で話すには……》

つつい、自分の中にある食欲に意識を取られつつ、ウルベルトがきちんとパンドラズ・アクターと向き合って話そうと思つた時である。

それまで大人しく、自分の前で恐縮した様子で立っていたパンドラズ・アクターが、
グレイター・クリエイト・アイテム
上位道具作成を唱えたのは。

魔法によつて、今のウルベルトの姿に合わせたイスとテーブルが、パンドラズ・アクターの手の中に出現した。

優美なデザインで組み上げられた、木製でありながら磨き上げられた美しいアンティークテーブルに、革張りのゆつたりとした座り心地が予想出来る椅子である。

それを、恭しく丁寧に両手で持ち上げつつ、もう一度上位道具グレイター・クリエイト・アイテム作成を唱えて今度は

大理石を天板に使ったアンティーク調の、重厚感ある書斎机とそれに合わせた椅子のセットを作り出すと、手にしていたウルベルト用のテーブルと椅子をその上に一旦乗せた。

それでも、どうやら満足が行く高さにならなかつたらしい。

更に追加で、ビロードを敷いた台座を作り出すと、ウルベルト用のテーブルと椅子の高さを調整している。

その拘りように、何とも言えない気持ちになりながら、パンドラズ・アクターの作業が終わるまで黙って待つ事にした。

こういう所も、何となくモモンガに似ていると思うと、つつい懐かしくて微笑ましい気持ちになったからだ。

どうやら、漸く満足が行く状態を完成させたらしい。

ニコニコと笑顔を浮かべると、ウルベルトに完成したイスとテーブルを見せると、恭しく招き入れる。

そんな彼の様子を見て、ちよつとだけ内心で苦笑を浮かべつつ、ウルベルトはゆるりと飛行で移動すると、一先ずビロードの台座の上に降り立った。

魔法で簡易的に作り出したものとはいえ、物を作り出す技能は元々持っていたパンドラズ・アクターの手によるテーブルとイスは、とても落ち着いたアンティークの意匠で、

見ていて悪くないと素直に思える出来だと言っていていいだろう。

悪に拘る「ウルベルト・アレイン・オードル」としては、もつと違うデザインでもいい気もしたが、きちんとアンティーク調で品の良いデザインを選んでいる事を考えれば、これはこれで悪くないと思つたのだ。

それに、何も毒々しいデザインばかりが悪を引き立てる訳ではない。

むしろ……こういう感じで、品の良い品を使いこなして見せる方が、より悪魔である己を引き立てると、そう感じたのだ。

手を伸ばして、スツとその感触を確認してみれば、掌に触れる皮の感触も中に詰まっているクツションの弾力も上質で、とても魔法で作つたとは思えないほど素晴らしかった。

ここまでして貰つて、使わないなんて言うつもりはウルベルトにはない。

それよりも、ここまで使い手の事を考えているパンドラズ・アクターに対して内心で感嘆しつつそのまま、ドツカリと腰を下ろした。

予想通り、その座り心地もかなり良くて、文句のつけようがない出来栄えだと言つていい。

それは満足げに笑みを浮かべていると、こちらが気に入った事が伝わつたのだろう。ニコニコと、それは嬉しそうに笑みを浮かべながらこちらを見ていたのだが。

ふと、何かを思い立った様にこちらの顔を見ると、そのままそれを伝えるべく口を開いた。

「すいません、ウルベルト様。」

本来ならば、先にお茶と茶菓子を用意すべきでしたのに……

まだまだここから話は長くなりますし、今からでもご用意させていただきませぬ。

すぐに戻りますので、暫くそちらでお待ちいただけますか。」

スツと、堂に入ったような丁寧なお辞儀をすると、そのままパンドラズ・アクターはその場から退出していった。

先程の言葉と、このグリーン・シークレット・ハウスの構造から考えて、キッチンへと向かったのだろう。

こう言う点を見ても、やはり細かな気遣いが出来るところはモモンガに似ていると、背凭れに身を預け中がウルベルトは思案に耽った。

《……ホント、あの混乱から立ち上がってすぐにこの気配りだもんなあ。

そういう意味では、モモンガさんの良い所をしっかり受け継いでるよな、パンドラつて。

まあ……本人の申告通りなら、モモンガさんに無事に再会するまでは【願掛け】で設定通りの言動を封印しているらしいし、そうなると自然に創造主であるモモンガさんに

似てくるのかも。

もつとも、「魔王ロール」をしているモモンガさんにも、本来の設定のパンドラは似ていると思うけどな。

この辺りは、ナザリックに合流してみても、他のNPCと顔を合わせてみないと、比較対象が少なすぎて何とも言えないんだけど。

それにしても……割と、言動には注意が必要かもな。

現時点では、「ナザリックから引き離されて孤立している」と言う、ある種の極限状態に置かれている状態だから、ある程度まで俺の言動に合わせてくれると思うべきだろう。

これも比較対象がないからはつきりと言い切れないけれど……多分、パンドラは俺と手持ちのアイテム全てをナザリックに送り届ける為なら、平気で自分のレベルを使い切って消滅する方向を選ぶ気がする。

先程パンドラが見せた、あの目は……そういう事を平気でする人間の目だ。

もちろん、パンドラは人間じゃなくて異形種のNPCだけど、属性は中立で感性もかなり人間に近い部分がある筈。

その上、モモンガさん譲りの性格だとしたら……うん、ちゃんと注意しておかないと色々な意味で危険だわ。

何と言っても、今のパンドラには厄介な切り札があるからなあ……」

そこまで考えた所で、ウルベルトは一旦思考を中断した。

と言うか、中断せざるを得なかった。

キツチンから漂う、とても甘くて美味しそうな匂いによって。

「……そう言えば、パンドラって料理人としてのスキルもあつたっけ……」

宝物殿の守護者として、必要な職業レベルを設定する際に、いつの間にか持たされていた料理人の職業レベル。

ウルベルトは、その経緯を詳しく知らないのだが……ガッツポーズを決める一部のギルドメンバーの中に女性陣三人が含まれていた事と、ぐったりとした様子で疲れ果てていたモモンガの様子から、相当なごり押しがあつたのだろうと想像が付いていた。

だが、この異世界に飛ばされて食事を取れる状況になつてみると、かなり助かる能力を持つているのではないだろうか？

ウルベルト自身は、悪魔なので普通の食事をしなくても、特に問題はない。

パンドラズ・アクターも、モモンガから与えられた飲食不要のアイテムがあるので、食事そのものはどうしても必要ではないのだが、これが人の中に混じつて移動する場合は、そういう訳にもいかないのだ。

一人旅を基本にするとは言え、時にはパンドラズ・アクターが最初の村でした様に、道

案内人を必要とする場合もあるだろう。

その時、料理が出来れば長旅でも交代で夜営が出来る分、道案内人となった相手からの受けもいい。

どんな事でも、出来ないよりは出来た方が色々と助かる事が多いのだ。

《まあ……どんな料理が出てきたとしても、〔リアル〕より確実に美味しい物が食べられそうなんだけどな、実際問題として。

パンドラの話じゃ、アイテムなんかは種族や職業によつて使えない者とかもあるらしいから、料理とかもスキルが無けりゃ出来ない可能性が高いかもしれないな。

俺が気になるのは、その場合だと使った食材はダークマターになるのかな？

それとも、最初から料理する事が出来ないのか……まあ、パンドラと一緒にいる限り、俺は料理をする必要はなさそうだけど。》

ふんわりと漂ってくる美味しそうな甘い匂いに、そんなことを考えながらウルベルトはパンドラズ・アクターが戻ってくるのを大人しく待つのだった。

「お待たせしてしまって、申し訳ありません。

お茶と茶菓子ををご用意させていただきました。

ウルベルト様が、紅茶と珈琲のどちらがお好みなのか存じ上げませんでしたので、どちらでも飲めるようにご用意いたしました。どちらをお出ししましょうか？

茶菓子は、フォンダンシヨコラをご用意しましたので、どちらでも構わないのでしたら、それに合わせて選ばれるのも宜しいかと。

それと、一つお詫びを。

時間がありませんでしたので、茶菓子の用意に少々手抜きをいたしました。

本来ならば、ウルベルト様にお出しするには価しないものなのですが……時間も無ければ専用の料理人も居りませんし、私の手製の品でお許しただけませんか？」

ウルベルトが、キッチンから漂う美味しそうな匂いに、甘いお菓子を連想させながら待ち構えていると、漸くキッチンへと続く扉が開き、パンドラズ・アクターが戻ってきた。

割と急ぎ足で、それでいて優雅かつ丁寧な動きで彼が押すワゴンカートには、紅茶と珈琲のサーブ用ポットやカップ、出来立て熱々と思しきチヨコレートケーキ（実物を見るのは初めてだが、間違いないだろう）を載せた皿など、ウルベルトに満足が行くものを提供する為に用意した品々を載せられていた。

わざわざ、ウルベルトが使いやすいように用意したのだろうカップや皿は、アン

テイク調の繊細なデザインの陶器類で、ちよつとばかり使うのに躊躇いを覚えそうな感じである。

それを、パンドラズ・アクターは危なげなくカートワゴンの中で丁寧に扱いながら、先ずは茶菓子の用意を始める事にしたらしい。

小さなボール皿を手元に置くと、用意されていたチョコレートケーキにさつくりと取り分け用のスプーンを差し入れる。

その途端、部屋の中に濃厚なチョコレートの匂いが一気に溢れ出した。

甘く、そして香ばしいカカオの匂いが部屋に溢れたのは、スプーンを入れたチョコレートケーキの中身が、まだとろとろと蕩け出てきたから。

その様子を見て、ウルベルトはこれがただのチョコレートケーキではなく、フォンダンシヨコラと呼ばれる中から蕩け落ちるチョコレートを楽しむケーキだと、漸く思い当たった。

【ユグドラシル】時代、実際に食べれる訳ではないのにも拘らず、女性陣が特に拘ったスイーツの中の一つにそれがあつたので、覚えていた程度の知識ではあるが。

まだ、直接器に触れるのは無理な程に、熱々といった感じのフォンダンシヨコラをスプーンで丁寧に取り分けると、中から溢れ出るチョコレートを零さない様に皿に盛りつけ、保冷専用の器から真っ白なバナラアイスを掬い取るとそつとその横に盛りつける。

フォンダンシヨコラの熱で、バニラアイスはトロリと蕩け出し、バニラアイスの冷たさで熱々のフォンダンシヨコラは食べごろの熱さに冷やされていく。

そんな、完璧なデザートは盛り合わせを作り出すと、パンドラス・アクターは丁寧にウルベルトの元へとそれを運んできた。

スツと向けられた視線を見て、何を飲むのか尋ねるつもりなのだと思察すると、ニツト口の端を上げながら迷わず紅茶を指で指し示す。

「それだけ濃厚なシヨコラの香りに合わせるなら、紅茶の方が良いだろう？」

香りの感じだと、甘いフレーバーティーって感じじゃ無さそうだし。」

ウルベルトの口から、そんな言葉がすると零れ出たのは、たまたまこちらの世界に来る前に空港で出迎えたたつちを相手に、アーコロジー内の喫茶店で本格的な紅茶を飲む機会があったからだ。

互いに色々な事情から、たつちとは「ユグドラシル」時代は終ぞ叶わなかった和解をしていたので、それ位の時間を持つ事に關して抵抗がなかったし、何より預けて置いた端末を受け取る必要があったから、断れなかったともいうのだが。

とにかく、にわか知識ではあってもこの場合は上手く対応が出来たと思いつつ、ウルベルトはパンドラス・アクターの顔を見た。

すると、嬉しそうににっこりと笑いながら頷く姿を見て、やはり間違いではなかった

らしいと内心で安堵の息を吐く。

「では、ミルクになさいますか？」

それともストレートで？

レモンもございますが、私のお薦めはストレートが宜しいかと。

ご用意した茶菓子里に飲み物を合わせるなら、ストレートの口当たりが一番合うと思われますので。」

「いかがされますか？」といった様子でポットを片手に提案され、ウルベルトはどう答えましたのかと少し悩む。

元々、「リアル」の食生活は合成食品が普通であり、こんな風に天然のものを自分で選ぶなんて事はまず無い。

まして、ウルベルトはこうして異世界に転移する直前まで、それこそその合成食品すら口にするのも大変な最も過酷な環境下にいた為、どう答えるべきか分からなくなつたからだ。

しかし……だからと言って、このまま答えないままだと折角のデザートがお預け状態になつてしまふだろう。

これだけ美味しそうなものを前に、その状態が続くのは流石に嫌だったので、素直にパンドラズ・アクターが勧めたものを頼む事にした。

わざわざ勧めてきたのだから、それが一番おいしいのだろうと信じて。

という訳で、まずパンドラズ・アクターの顔を見ると、笑顔を浮かべてカップを指で指した。

それと同時に、出来るだけ迷いが無い様子で何を頼むのか口に出す。

「……そうだな、まずはパンドラのお薦めのストレートー貫おうか。

沢山用意してくれたみたいだし、お茶も茶菓子もお代わりすれば、色々としめるだろう？」

こちらが、彼の用意したものを色々としめたいのだと告げれば、それは嬉しそうな様子で恭しく頭を下げてくる。

やはり、こういう風にきちんとこちらの意図を告げやれば、問題なく話は進むらしい。どこか楽しげに、パンドラズ・アクターが丁寧な紅茶を注いでいく姿を見ながら、ウルベルトは今後の為に頭の端に忘れないように記憶していく。

こういう細かな点を注意し忘れた結果、うっかり意思疎通が出来ずに問題が起きませんでしたでは困るからだ。

そして、この回答も間違いではなかったようだ。

ウルベルトに対して、こうして奉仕できるのが嬉しいと言わんばかりの笑みを浮かべつつ、丁寧な手付きでカップをテーブルへと運ぶと、最後にこれもウルベルトの事を考

えて用意されたのであろうスプーンとフォークを、小さく畳んだお手拭きと共に小さな皿の上に並べてテーブルの上に置く。

これなら、今の姿のウルベルトでも扱い易いだろう。

そして、再度ウルベルトに向けて軽く頭を下げてから、パンドラズ・アクターは自分の席に着いた。

「それでは、お召し上がり下さいませ、ウルベルト様。」

にこにここと、自分の作ったもので喜んで貰いたいと言わんばかりのパンドラズ・アクターを前に、ウルベルトはワクワクとした気分を出来るだけ抑えながら、丁寧にお手拭きで手を拭い、まずはカッツプを手を取った。

今まで何も口にしていないのだから、いきなり固形物を口にするよりも紅茶を飲んで、口の中と喉を潤す事にしたのだ。

カッツプを口元に近付けると、ふんわりと鼻を擽る果物のような甘い香りが、「リアル」で飲んだものより強くふくよかで堪らない。

一口口に含んでみると、ほんのりとした甘さの中に鼻を抜ける香りがすつきりとした味わいで、これはこの場で用意出来る最高級品なのだとすぐに判った。

思わず、ほうつと吐息が漏れるのを抑えられないまま、流星はパンドラだと軽く頷きつつもう一口飲む。

《……なにこれ、これが本当に美味しい紅茶!?

花の香りっていうか、種類は違うけど前に一回だけ食った事がある果物に似た香りと甘さっていうか!

スツと鼻に抜ける香りがまた堪らなく美味くて堪んないよ、これ。

たっちの奴に連れて行かれた喫茶店の紅茶とは、雲泥の差って奴だろ!?

これと比べたら、アレは見た目の色とちよつとだけ香りが付いたお湯って言うてもいい位じゃないか?》

舌で味を堪能しつつ、ウルベルトはそんな感想を頭の中に浮かべていた。

「リアル」では、嗜好品でしかない紅茶の味など、人工的に作り上げたものでも滅多に無く、最後にたっちと訪れたあの喫茶店だって、かなり高級な部類になる。

あの世界の食料事情的に考えれば、アレだってウルベルトにはほぼに口にする事なんて出来ないレベルのものなのだが、比べる相手が悪かったというべきなのか。

これなら、手早く用意されたフォンダンショコラの味も、かなり期待が出来るのではないだろうか?

そんなことを考えつつ、用意されたトレイからフォークを片手に取ると、先ずは丁寧に一口分にケーキを切り分けた。

味への期待から、ちよつとドキドキしつつアイスを絡めると、そのままパクリと頬張

り。

ふわんつと鼻を抜けるカカオの甘く香ばしい香りに、思わず目を見開いた。

口の中に広がる、甘く詰めたバナナアイスとチョコの素晴らしい味と香りは、今まで口にした事がある食べ物でも最上の味わいで、思わず口元に蕩けるような笑みが浮かび上がる。

一口だけで、こんな気持ちになれるのなら、満足するまで食べたらどうなるのだろうか？

想像しただけで、すごく幸せな気持ちになりながら、ウルベルトは溢さないように丁寧にスプーンを動かしながらパクパクと食べ進めていく。

パンドラズ・アクターが用意したフォンダンシヨコは、まだまだ沢山焼き上げたであろう器の中に残っているから、お代わりをする事は十分可能な状態なのだ。

《……うつま！

マジで、これはすっげえ美味しい！

トロットロで、熱々に蕩けた濃厚かつ芳醇なチョコレートの味と、冷たいバナナアイスの濃厚なミルクとバナナの薫り高い味が絶妙に絡み合ってるって言うか、もう堪らん位に美味しい！

そもそも、こんな美味しいもん食ったの初めてだよ、俺。

つい先日までいた場所じゃ、それこそ食事も満足に食べなかったけど、そういう次元じゃなくて、だ。

それこそ、口の中に含んだだけでトロリと蕩けていくのに、その味わいと香りは何時までも残っていて、もつともつと食べたくなる味だよ、これ。

前に、最高に美味しい物は人を幸せにするって本で見た事があるけど、本当の話だったんだな……

しかも、これってパンドラにしたら時間が無くて手抜きしてるんだろ？

だとしたら、本気で作ったパンドラの料理はどれ位の美味さなんだよ、おい！》

本気でそんな事を考えつつ食べ進めていくと、それ程時間が掛からずに取り分けて貰った分を食べ終えてしまっていた。

つつい、美味しすぎたそれを一気に食べ進めてしまった事を、《もつと味わって食べればよかったと》少しだけ残念に思いつつ、スツとスプーンを皿の上に置く。

すると、正面で自分の分を食べていたパンドラズ・アクターと目が合った。

その途端、嬉しそうに笑顔を浮かべながら立ち上がると、ニコニコとそのまま声を掛けてくる。

「どうやら、お気に召していただけたようですね。

もし宜しければ、先程ご自身がおっしゃったように、お代わりされてはいかがですか

?

まだまだ沢山ございますし、トッピングもバニラアイスから生クリームに変えられますが……先程と同じ様にアイスでお食べになれますか？

ウルベルトの食べっぷりを見て、気に入った事がすぐに判って嬉しかったらしい。

お代わりをただ用意するのではなく、別の食べ方もあると提案してくるのを聞いて、ウルベルトは少し迷った。

今の取り合わせは、文句無しで美味しかったと言っている。

だが、わざわざこんな風に提案してきたと言う事は、そちらも間違いなく美味しいと自信があるからなのだろう。

どうせなら、色々な美味しいものを味わってみたいと思うのは、当然の事だった。

一先ず、残りの紅茶を飲み干して口の中をすっきりとさせると、ゆつくりと口を開いた。

「せっかくだし、生クリームをトッピングしたのも食べてみたいな。

今のバニラアイスのだって、凄く旨かった。

パンドラに言わせると、このフォンダンショコラは手抜きみたいだが、これ自体も凄く旨い。

だから、トッピングが、変わったたらどんな感じになるのか、凄く楽しみだ。」

褒めるべき所は、迷わず褒める。

作った本人がどう思っている、ウルベルトにとって出されたフォンダンシヨコラは
とても美味しかったのだ。

だから素直に、それを上機嫌になりながら告げてやれば、パンドラス・アクターは恐
縮してしまった様だった。

まあ、本人としてはもつと上質の物を出したかったようだし、思う所があつたのだら
う。

それに関しては、明日の朝なり夕方なりの食事で挽回出来る次の機会があるのだか
ら、一先ず納得して貰うとして、だ。

ウルベルトの意識は、既に次に用意されている生クリームたっぷりのフォンダンシヨ
コラに向いていた。

バニラアイスを盛り付けた時より、少しばかりフォンダンシヨコラは冷めているのだ
ろう。

すぐにトロトロと溶けたりせず、ぽつたりとした生クリーム特有のふんわり感を残し
ていて、どんな感じの味わいになっているのかとても楽しみだった。

こちらがそんな事を考えている間に、パンドラス・アクターは空になったカップを手
に取ると、紅茶のお変りも用意し始め、すぐに手を止める。

そして、こちらの顔を見ながら首を傾げつつ問い掛けてきた。

「今度は、何をお出ししましょうか？」

先程はストレートでしたが、今度はミルクになさいますか？

それとも、いつそ珈琲になさいますか？」

フォンダンシヨコラのトッピングを、バナラアイスから生クリームに変えただけでなく、飲み物もまた別のモノを選択できる準備が出来ているらしい。

彼の手元を見れば、珈琲を希望してもすぐに対応出来るようにコーヒーカップも用意されているが見えた。

本当に、こういう細かな心配りを見ていると、彼の創造主であるモモンガさんを思い出させて仕方がないと、少しだけ懐かしく思いつつ、そこでフォンダンシヨコラのおいしさに忘れていた事を思い出して苦笑する。

このままだと、満腹になって重要な事を後回しにしたまま、ゆったりとした気分浸つてしまいそうだったからだ。

「あー、そうだな……今度はミルクティーにしてくれ。

後、そのお代わりを用意し終わったら、そろそろ話を始めようかのんびりとお茶を楽しむのは、またいつでも出来るだろうし。

それに……今度は、お前が作った飯も食ってみたい。」

全ての盛り付けを終え、再びテーブルの上に載せられた皿を取りつつ、パンドラズ・アクターに向けてそう切り出した。

折角だから、満足いくまで紅茶とフォンダンシヨコラを楽しみたいところだが、今はそれどころではない。

小腹をある程度まで満たした時点で、本来の目的の話し合いを続けるべきだろう。

多分、冷めたら多少味は落ちるかもしれないが、それでもまた別の楽しみ方がある筈だ。

そんな事を考えつつ、ウルベルトはパンドラズ・アクターがミルクティーの準備を進めていくのを大人しく見守っていたのだった。

今後の方針の確定後に、予想外のアイテムが提供された！「ウルベルト様と色々な確認をしてみましたのウルベルト視点3」

テキパキと、ミルクティーを用意していくパンドラス・アクターの動きはとても手慣れた様子で、普段から何度も繰り返し返している自分の好みの淹れ方なのだろう。

紅茶とミルクを同時に注ぐ様子は、いつそ慣れた仕種が格好良い位だ。

それに、これなら最初から紅茶とミルクが混ざりあつていて、混ぜなくてもそのまま飲めそうだと思う。

甘いフォンダンシヨコラを食べる分、紅茶には砂糖を入れる必要がないので、このまま飲めば良いのは手間が少なくていい。

そうして、完成したミルクティーをテーブルに置いたパンドラス・アクターは、再び自分の席についてこちらに向き直った。

一応、ここから先は重要な話なので、手にしていたものを一旦置いて、ウルベルトは

口を開く。

「それじゃ、現在抱えている問題を幾つか打開する方法を考えようか。」

とは言え、パンドラのレベルダウンその物は、世界級アイテムワールドによる強制的な部分が大きくて、対処法はあまり無いからなあ……

やるなら俺の方が……その前に、幾つか実際の能力値の確認が必要だろうな。

あくまで、今の俺に判っているのは、大体の威力でしかないし。

それで……対策として、パンドラならどうする?

俺としては、アイテムを使って修正するしかないだろと思ってるんだが……」

そこまでで一旦言葉を切ると、ウルベルトはパンドラズ・アクターの意見を待つ事にした。

一応、今の時点で自分が思い付く事は上げてみたので、ここから先はデミウルゴスに次ぐ頭の良さを誇るパンドラズ・アクターの意見を聞きたかったのだ。

どうせ、彼の意見が纏まるのを待つなら、その間は手元のフォンダンシヨコラを食べ待つ事にしよう。

先程のバニラアイスと、生クリームでは絶対に味わいが変わっているはずなのだ。

それを、こうして待つ間に味わって何が悪い。

確実に「美味しい」と分かっている物を目の前に置かれ、お預けを食らっているのは

辛いのだ。

特に、食料事情が悪くてかなり苦しい環境で何年も過ごしたウルベルトには、自分の分として用意されたものを我慢するのは難しかった。

《どうせ、パンドラの答えが出るまで待つんだし、その間は食べても良いよな？》

なんか、生クリームもまだフォンダンシヨコラに残ってる余熱で、少し柔らかくなつて溶け掛けている気がするし。

つか、もう食う！

確かに、真面目に話し合いの事は必要だけど、用意されたものを食べながらもそれは出来るし！》

そう思い切ると、ウルベルトは一旦置いたスプーンを手に取り、フォンダンシヨコラが盛られた皿を持ち上げると、丁寧にスプーンを挿し入れた。

バニラアイスとは違う、ふんわり柔らかな生クリームごと

フォンダンシヨコラをスプーンで掬い上げると、そのまま一口頬張る。

口の中で蕩ける食感、バニラアイスよりもとろりと広がり、少し冷めたフォンダンシヨコラと絡み合つてとても美味しいものだった。

冷めた事で、チョコレートクリームのようになっていた部分がもちもちとした食感に代わり、そこに生クリームが絡む事で絶妙な味わいを生み出していたのである。

《本当に、食べるまでの時間とトッピングが変わるだけで、ここまで味わいが変わるとは思わなかった。

ここまでふわふわに泡立ててあると、もつとしつかりとした食感になるのかと思つたのに、口の中で蕩ける滑らかな口当たりがこれまた美味いんだよ、ほんと。

熱々だった時は、フォンダンシヨコの部分はとろとろだったのに、冷めたら食感がもちもちに変わるつて、どんな食材を使つてるんだらうな？

俺に出すもんだし、変なものは使つてないとは思うけど……

まあ、とにかくパンドラの作つたものは、冷めても美味いつて事は間違いない訳だし、気にしなくても良いか。》

内心で納得しつつ、ウルベルトはモグモグと口を動かして食べ進めていく。

その合間に飲むミルクティーも、また先程とは違つた味わいで美味しかった。

ウルベルトの好みとしては、先程のストレートの方に軍配が上がるが、これも決して悪くはない。

この辺りも、用意したのがパンドラズ・アクターだったからかもしれないと、頭の端でちらりと思う。

料理人のスキルの有無で、飲食系の出来映えが変わるのだとしたら、間違いなくウルベルトには出来ないと思うからだ。

もしかしたら、ナザリックのメイドや執事などは、その立ち位置からお茶を淹れるまでは出来るかもしれないが、今の時点では判らないから、その件に関して考えるのはまたの機会にするとして、だ。

そろそろ、パンドラズ・アクターが自分の考えを纏め終える頃ではないだろうか視線を向ければ、読みは当たったらしい。

少し迷う素振りを見せつつ、パンドラズ・アクターはゆっくりと口を開いた。

「そうですね……私の手持ちのアイテムの中に、HPを上昇させるものとMP消費率を下げる効果のものが、幾つかございます。

ウルベルト様の種族属性などを踏まえ、アイテム調整をしていくのが、一番確実な方法になるかと思われます。

アイテムに使われている素材の属性に依っては、属性による補正強化の効率に変化が出る場合もありますし。

手持ちの使える資材から、補強パーツを作る必要もあるでしょう。

それらの作業を進めるには、ある程度の時間が必要だとして……このままこの地である程度根気をいれてこの国に留まるか、それとも先を急ぎウルベルト様の本体がある場所へ移動して、そこからナザリックを探す為の手段を考えるか。

どちらを選んだとしても、一度ウルベルト様の本体は回収するべきでしょう。

どのような形になっているのか、この目で確認しないといけないですからね。

それと、私としてはきちんと御身の保護もおきたい。

例え誰であろうと、ウルベルト様に危害を加えようとするものは許せませんから。」

つらつらと連ねられた言葉は、今のウルベルトの状況を考えれば、どれも的確なものだった。

パンドラズ・アクターの懸念はどれも良く解る。

この世界は、今まで居た「ユグドラシル」とは違う。

その点から考えて、アイテムの効果がそのままとは限らない事は、最所の段階できちんと想定すべきだった。

特に、種族による装備アイテムの効果の変化があつたりしたら、この状況下ではとても笑えない話だと言つていいだろう。

だからこそ、パンドラズ・アクターはそれも含めて確認する必要性を訴えてきたのである。

しかも、その必要性を十分に踏まえた上で、今後の行動の

指標を幾つか挙げているのが凄いと言うべきだろうか？

更に、現時点では安全性が確保されていない、ウルベルトの本体の回収の必要性まで訴えてきている。

これに関しては、パンドラズ・アクターの言う通りだと、ウルベルトも話を聞いた時点で素直に同意していた。

本音を言えば、今こうして側を離れている間にも、見知らぬ誰かの手で本体に何かされていいかと言う不安は、ウルベルトの中でかなり高い。

もちろん、ここに来る前にきちんとウルベルトに出来る結界を多重展開してきたものの、「ユグドラシルプレイヤー」なら、ある程度の時間があれば解除出来ない代物ではないのだ。

そんな不安を抱えた状態で、パンドラズ・アクターと共にナザリックを探して旅をするのは、とても無理があるだろう。

だが、本体を何らかの形で回収して安全さえ確保してしまえば、その不安はなくなる。

都合が良いことに、確実に安全を確保出来る手段を持った相手が目の前にいる以上、パンドラズ・アクターの負担になる事を承知の上で、任せるしかないだろう。

多分……その方が、あの場にウルベルトの本体残したままその安全を定期的に確認するよりも、パンドラズ・アクター自身の様々な面での負担は少ない筈だ。

その代わり、封印の代償としてパンドラズ・アクターのレベルダウンは免れないだろうが。

こればかりは、使用条件だから変えられないのが腹立たしいが、ウルベルトとしては封印さえ解けばレベルが戻る事に納得するしかない。

それらの事を、素早く思考を回すこと約数秒。

思考を回し始めた途端、自分が無意識に目を細めていた事に気付いたのは、パンドラズ・アクターの様子が僅かに変化したのを目にしたからだ。

こちらの反応が、どうなるか不安を感じているのだろう。

さしずめ、自分が余計な事を言つて、俺を不快にさせていないかと言つた所だろうか？

何となくだが、パンドラズ・アクターは俺が上位者であると同時に、自分より遥かに頭が良い存在だと認識している素振りが見える。

故に、自分が思い付く様なことは全て想定済みだと、そう思っているんじゃないだろうか？

全く、買い被りすぎだと本気で思う。

もしかして、これもNPCは全てそんな感じなんだろうか？

《……俺の予想通りだとしたら、本気でとても恐ろしい話だぞ、おい。

そりゃ、小卒では得られない類いの知識は、ある程度までネットやギルド仲間から得ているし、そこそこの頭の回転も良い方だと思つているけどな。

ナザリックで一、二を争うパンドラズ・アクター程の頭脳は持ち合わせていないっての。

それなのに、そんな期待をされてしまっていたら、こちらのストレスが半端ない気がするじゃないか。

おいおい！止めてくれよホントにさあ……

過度の期待なんて、答えられなかった時の失望が怖くて仕方がねーだろ？

……ちよつと待て。

もしかして、モモンガさんは今まさにこの状態で複数のNPCに囲まれて暮らしているとか、そんな状態とか言わないよな？

だとしたら……あの人のストレスとかメンタル面は大丈夫なのかよ……》

自分の状況もちろんだが、ナザリックと共にこちらに来ている可能性が高いモモンガの事を考えた途端、予想よりも高ストレス下にいそうな状況が頭に浮かび不安になってくる。

それを思えば、まだパンドラズ・アクター一人を相手にすれば良い自分が、泣き言など言っていない。

むしろ、少しずつパンドラズ・アクターを俺で慣らしていく事で、再開する頃にはモモンガがストレスを感じなくする方向に持っていくべきじゃないだろうか？

ついてに、本来の設定より今の状態の方が、モモンガの好みだと教えてやるのも悪くないかもしれない。

長い調整期間が必要だった分、早い段階で決めた性格設定が仇になったと言わなければならない。

ウルベルトとしては、本来のパンドラズ・アクターの設定も気に入っているが、モモンガは設定を変更するかどうかでかなり迷っていたのだ。

仲間と決めた設定だった事もあり、最終的には変更しなかったようなのだが。

そこまで考えた所で、そろそろパンドラズ・アクターの緊張感が高まっている気がする事に気付いた。

スツと、視線を手持ちの時間を確認するアイテムに落とすと、既に彼の説明が終わってから数分が過ぎていている事に気付き、待たせて可哀想な事をしたとこの中で詫びておく。

口に出して詫びないのは、多分、今のパンドラズ・アクターには逆効果だと考えたからだ。

いい加減、待たせたままではいけないだろうと、ゆっくりと口を開く。

「……あー、そうだな。

一先ず、パンドラの手持ちの中に、ある物の中で一番良い性能のを使うとして、だ。

調整は、移動しながらの方が良いだろう。

この辺り一帯は、俺やお前にとって危険な国が近いだろうか？

なら、あまりその近隣に留まるのは、不安要素を残す事になるから避けるべきだな。

それなら、一旦、転移門^ゲで俺の本体を回収しに行つて、また戻つてくるかだが……戻るにしても、ここではなく隣街に移動した方が良いだろう。

どれだけ時間が掛かるか判らないし、同じ場所に戻ると描けた時間の分だけ移動していない事の不審さが目立つ事になる。

それは、現状では避けるべきだろう。

正直、面倒だが……余計な詮索を招くくらいなら、その程度の手間は掛けても良いけどな。」

出来るだけ安心させるように、少し笑いながら告げてやれば、パンドラズ・アクターの気配が安堵から緊張に張り詰めていたものから少し柔らかく弛む。

彼から提案された内容を、必要だと思ふ部分だけ修正した上で了承したのも、彼の安堵を促したのだと察しつつ、ウルベルトは少しだけ気を引き締めておく事にした。

一応、これでもちゃんとウルベルトなりに精査した結果の答えだが、現在の自分達の置かれている状況を踏まえたら、パンドラズ・アクターの提案した内容に多少修正を加える位しか、自分には思い付かないのである。

それ位、彼の提案はきちんと理に適っていて、ウルベルトが修正した以上に変更するのは、逆にどこかで破綻しそうな気がしたのだ。

ならば、無理に必要以上の修正をする必要はない。

そもそも、こうしてパンドラズ・アクターの意見を聞いているのは、お互いの認識に差がないか確認する為であり、問題がなければそのまま構わないのだ。

ただ、今回は幾つか選択肢が出されたので、その中で今の状況を踏まえて精査した上で、自分の意見を足しただけに過ぎない。

ウルベルトとしては、自分よりも確実に頭が良いパンドラズ・アクターに、全て考える部分を任せても良いのだ。

だが、そうして何もかも彼に任せきりにしていると、何かあった時に対応が遅れる可能性がある。

なので、お互いに意志疎通をきちんとしておきたかったのだから。

今、味方だと断言出来る相手は、お互いしかないのだ。

この二人の間で、意思の疎通が出来ていなかったら、それこそモモンが達の元に辿り着く前に、お互いに不満を抱えながら過ごす事になりかねないだろう。

多分、パンドラズ・アクターは、こちらが無茶な事を命じた場合、ある程度まで改善策を提案してはくれるだろうが、重ねて言えばそのまま従うのは間違いない。

改善案の提案とて、ウルベルトの身を守るために、必要だと思うものをするだけで、それが不要ならしない可能性すらあった。

その結果、パンドラズ・アクターを危険な目に遭わせた何て事になったら、ウルベルトがモモンガに合わせる顔がない。

《まあ……パンドラの事だから、その辺りまできちんと判つてそんな気もするけどな。

むしろ、こちらの意図を正しく読んだ上で、俺の事を優先する提案をしてきたのかも
しれない。

そう考える方が、多分正しいだろう。

頭の出来は、間違いなくパンドラの方が良い訳だし。

もつとも、ナザリックのNPCの中では一番経験値が不足している分、すぐに思い付かない部分がある可能性も、ちゃんと頭に置いておかないと駄目だろうな。

その辺りのフォローが、暫く俺がメインに置くべき案件かもしれない。

……まあ、すぐに必要なくなるだろうけど。

それも含めて、今後の課題として考える事が多すぎるぜ、本当に。

とにかく、まずは俺の強化だが……パンドラの手持ちにどんなアイテムがあるのか、予想がつかないからなあ……》

再会した時点で、パンドラズ・アクターから聞いた話を考えると、手持ちのアイテム

は持っていたとしても聖遺物級^{レリツク}までで、とても伝説級^{レジエンド}は持っていないだろうと踏んでいた。

この世界のアイテムレベルは、正直言っても低い。

ウルベルト達からすれば、到底使い物にならない遺産級^{レガシ}が、王公貴族の限られた一部が持てる最高の品らしいのだ。

それ以上のアイテムや装備など、要らぬ騒動の種にしかないので、奪われないように封印していると、ウルベルトは推測していたのだが……

どうやら、その推測は外れたらしい。

パンドラズ・アクターが、自分のアイテムボックスから取り出したのは、どれも見覚えがある装飾品系アイテムだったのである。

と言うより、自分にとっても馴染み深いアイテムだった。

ウルベルト自身が直接使う事はなかったが、モモンガが現在使用している最強装備が完成するまでの間、その便利さから愛用していた課金アイテムだったからだ。

この課金アイテムは、割と効率良く複数当てられたらしく、今でも予備として一つ手元において上で、残りを宝物殿に納める事にしたと、ウルベルトはモモンガから聞いた事がある。

多分、パンドラズ・アクターが持っているのは、その宝物殿に納められていた分だろ

う。

しかし、だ。

割と貴重な部類のこれを、他者に奪われる可能性がある手持ち荷物で持ち歩いているとは、ウルベルトにすればかなり予想外の話だった。

なので、素直に驚いて見ていたら、パンドラズ・アクターはこちらの行動を見ることで、アイテムを知っているのかどうか判断を決めかねたかのように、手にしたアイテムを一つずつ並べながら、丁寧に説明し始めた。

「ウルベルト様が、アイテムにどこまで詳しいのか、私は存じ上げませんので……一応説明させていただきます。

こちらの腕輪はバングル、オブ、ソーサリー「妖術師の腕輪」で、効果はHPを三十%、MPを二十%、最大値から上昇させる効果があります。

これを使えば、低下しているHPとMPの双方を上昇させられますので、今のウルベルト様には効果的かと。

そして、こちらの指輪がリング、オブ、テンバランス「節制の指輪」で、MPの消費率を最大十五%まで下げることが出来ます。

ただし……今のままでは、使う魔法の種類によって五%しか削れない場合もありますので、そこは要修正かと。

双方共に伝説級レジェンドですので、ウルベルト様が身に付けるのに相応しいかと思われまます。」
パンドラズ・アクターの丁寧な説明を聞きながら、ウルベルトはそんな効果だったな
と思い出しつつ、目の前の装備を着けていた頃のモモンガの事を思い出す。

《そーいや……腕輪も指輪も、装備出来る限界個数が決まっていたから、モモンガさんは
どの効果を優先するか、迷ってたんだよな。

まだレベルもMAXになってなくて、HPとかMPとかの強化アイテムは必須だった
し。

ほんと、懐かしいなあ……》

そう、魔法詠唱者であるモモンガには、この二つの持つ効果は大きく、同じ効果を持
たせた神器級ゴツゴツを完成させるまでは手放せなかった程の逸品だ。

今のウルベルトにとって、かなり心強い補助装備となるだろう。

これを用意してくれたなら、後からパンドラズ・アクターに追加して貰う装備効果の
選択肢が広がるので、かなりありがたかった。

一先ず、一つを手にとってみる。

「ああ、これなら大丈夫だろうな。

モモンガさんが使っていたから、効果とかも解ってるし。

しっかし、まあ……よく手元に残していたな?」

さっきの話から考えると、お前なら封印に回してそうなレベルのアイテムみたいなんだが……」

きちんと磨き上げられ、丁寧が保存をされていたからか、新品同様のそれを丁寧に指先で角度を確認しながら、そうパンドラズ・アクターに尋ねてみると、小さく首を竦めてみせる。

どうやら、この辺りに関してもウルベルトの記憶は間違っていないかつたらしい。

やはり、宝物殿内に複数存在していたからこそ、最低限保存すべき一組以外を手元に持っていたのだと考えれば、伝説級のこの二つを封印せずにいた事も納得できる話だ。

そのお陰で、こうしてウルベルトが装備できる状態にあるのだから、その判断に関して文句はない。

ウルベルトがそんな事を考えている間に、こちらが事情を察したのを理解したらしいパンドラズ・アクターは、簡単に説明することを決めたのだろう。

何とも言い難い顔をしつつ、困ったように頬をちよつとだけ搔くと、ゆつくりと口を開いた。

「実は、もう一組手元にございまして。

そちらを保管用に回す事で、こちらは実用品として手元に残す事が出来たのです。

一先ず、場所を移動いたしましょう。

ウルベルト様のお話では、本体がある場所は人はおろか異形種すら殆ど存在しない、雑魚モンスターへの住み処なのでしょう?

そこなら、多少魔法を使用しても問題ないと思われるので、そちらに移動されてから、現在のウルベルトの状況確認をさせていただきたく思います。実際にこの目で粗の威力確認した訳ではございませんから。

そこで、様々な能力を威力確認した上で、それに合わせて調整する必要がありますし。次いでですので、本体の封印をしている氷のようなものの上に、強固な多重展開した結界を展開した上で、試し打ちの魔法で周囲を掘削しても良いでしょう。」

本当に、あつさりとした説明だとすると、パンドラズ・アクターはすぐさまこれからの予定に関して一つ提案してきた。

あつさりと思いを切り替えるあたり、状況に対応出来るだけの順応力も高いのだろう。

それに、パンドラズ・アクターからの提案は、ウルベルトも必要だろうと考えていた事だ。

どうせ、自分の本体を取り出すなら、同時に魔法の威力をパンドラズ・アクターに確認して貰う作業も組み込むべきだと。

なので、素直に頷いて同意すると、受け取ったアイテムを手早く身に付け、残りのフォ

ンダンシヨコラを食べ始める。

これからやる事が決まったのだから、いつまでもダラダラ食べているよりもさくさく食べ終えて行動に移した方が良い。

特に、出来るだけ危険を避けるために、それなりに手間を掛ける事も視野に入れてい
るのだから、削れる時間は削った方が良いだろう。

ウルベルトが食べ始めると、それに倣ってパンドラズ・アクターも残りを食べ始めた
のだが、彼の好みはバニラアイスがある程度まで溶けて、冷めたフォンダンシヨコラと
混ぜて、もっちりトロトロな状態のものらしい。

先程より、どことなく食べる度に笑みが溢れる回数が増えているからだ。

《……今度食べる時は、あの状態のも試してみよう。

あんな風に、美味しそうな様子でパンドラが食べてるんだし、試してみない方が損な
気がするからな。

それにしても……紅茶も茶菓子も冷めても美味しいなら、お手軽な料理はどれくらいの
美味さになるのか、本気で気になってきたんだが。

まあ……向こうで俺の本体を掘り出した辺りで、軽く何か作って貰えば良いか。》

最後の一匙を食べ終えて、満足した気分を味わいながら、ウルベルトはチラリとそん
な事を考える。

どうやら、あちらも食べ終わったらしい。

そのまま立ち上がり、テキパキと食器を下げていくのを見送ると、口元を食器を下げる際に置かれた蒸しタオルで、出来るだけ丁寧に拭っていく。

何分、今の自分は山羊の姿をした悪魔であり、口元には体毛や立派な髭があるのだ。

そこへ、地味にチョコやらクリームやらが付いてしまっていて、拭かずにそのままにしておく方が、後で困りそうな様相だったのである。

ちゃんと、そこまで見越して用意万端なパンドラズ・アクターの対応に、ウルベルトは称賛の言葉しかなかった。

一先ず、一段落したら何かの形で酬むくいてやる必要があるだろう。

一通り身支度が終わった所に、急ぎ足でパンドラズ・アクターが戻ってきたので、そのままその肩へ飛行フライで移動すると、どこか慌てた様子で片手を添えてウルベルトの身体を支えつつ、可能な限り足早に外へ移動していく。

そのまま、グリーン・シークレット・ハウスを手早く元に戻し、アイテムボックスに収納して最後の準備を整えると、にこやかにパンドラズ・アクターは声を掛けてくる。

「それでは参りましょうか、ウルベルト様。」

掛けられた言葉に促され、ウルベルトは千里眼クレアボヤンスと水晶クリスタルの画面モニターを使い、目的の場所を写し出した。

それを目標の座標に据えると、パンドラズ・アクターは即座に転移門^{ゲート}を開く。そして、そのまま迷う事なくそれを潜ったのだった。

どんな事も簡単にはいかないらしい

転移門^{ゲート}を潜り抜けた途端、最初に自分がいた洞窟に戻って来たことを、ウルベルトは肌で感じていた。

一度離れて戻って来た事で、その場にいた時は感じなかった清浄な空気で満ちているのが良く判る。

どちらかと言うと、神聖な神殿の中に入ると言われた方が納得するような、そんな雰囲気だ。

悪魔である自分の本体が、そんな場所にあんな形でなぜあるのかと、不思議に思っ頭首を傾げ掛けたところで、ふと思いつく。

まるで、邪悪なものを封じる為に、特別な結界を張り巡らせた空間も、こんな感じなのじゃないか、と。

そう考えた途端、ウルベルトの頭に色々と思いついた事が出てくる。

まず、最初に接触したウサギタイプのモンスターだが、そいつらが居たのは、同じ洞窟の中でもこの本体が封じられた場所からかなり離れていた。

あの時は、全く状況が分からないまま、何かに導かれるように動いただけに、実際に

はかなり移動した事に気付いていなかったのだが……こうして改めて同じ場所に立つてみれば、その空気の差が良く判る。

この洞窟の中でも、己の本体が置かれている場所を中心に、幾重にも結界が張り巡らされている事に。

そう考えれば、この洞窟が普通でない事が良く判った。

少なくとも、結界が自然に発生したとは考えれない。

むしろ、これを自然のものだと判断した時点で、その人物は後がないと判断するべきではないだろうか？

ウルベルトの本体を封じられている空間は、それほどまでに清浄な空気による圧力が強い。

その影響なのか、この「ねんどろいどゴーレム」のウルベルトですら、息苦しくて呼吸が辛いと感じていた。

だが、ウルベルトを支えているパンドラズ・アクターは、興味深そうに周囲の様子を伺っているが、ウルベルトの様な影響を受けているようには見えない。

俺とパンドラズ・アクターとの、幾つかある相違点を探しているうちに、ふと思いついた事があった。

それは、俺とパンドラズ・アクターの属性とカルマ値のさだ。

俺は、悪魔として属性は極悪であり、カルマ値はマイナス五百だが、パンドラズ・アクターは属性は中立でカルマ値はマイナス五十。

つまり、だ。

この洞窟の結界は、属性が悪に片寄れば片寄るほど、その影響下に置かれてダメージを受けるのだろう。

本来なら、このねんどろいどゴーレムの俺も、本体と同じ影響を受けて封印されて居た可能性も、実はあつたではないだろうか。

良く思い出してみれば、初めて己の本体が封印されている姿を目撃したのは、漠然とウサギタイプのモンスターと接触した後、その場にいるべきではないと感じて、引き寄せられるようにこの場所に移動したからだ。

だが、冷静になって良く良く考えてみれば、自分でも不用心な行動だったと思う。

もし……目の前の氷のようなものが、属性やカルマ値が低いものを触れただけで封印するタイプのものなら、とつくの昔に今の俺も取り込まれて封じられていた可能性が高いからだ。

そう考えただけで、ゾクリツと背筋に悪寒が走る。

確認した訳じゃないが、多分、この推測が外れていない事を、ウルベルトは本能的に察したからだ。

ならば、なぜ取り込まれる事なくそれを回避出来たのか？

その説明は、すぐに出来た。

モモンガかパンドラズ・アクターの手で、このゴーレムに装備されたであろう遺産級レガシーの中に、『種族が悪魔の場合、神聖属性魔法及び結界からの影響を五割カットする』ファミレット・オブ・テレル【悪魔の護符】が含まれていたのを見付けたからだ。

つまり、装備効果が五割カットだったから、結界が放つ効果を弾けず引き寄せられたものの、五割カットだから封印に取り込まれる事はなかったのだろう。

種族を悪魔に限定して、五割とは言え防御に特化していたそれは、ウルベルトの意識部分の入ったゴーレムを封印から守る効果を見せた。

裏を返せば、この装備を身に付けていなければ、ウルベルトは意識すら封じられてしまい、パンドラズ・アクターに接触する事すら叶わなかっただろう。

そう考えると、最初の頃に考えていた幾つかの想定が崩れてくる。

最初、この本体の状態を解除して復活するのに、どうしても必要だと発覚した【命】の数は、タブラが設定したものではなく、この氷のような結界を解除する為なのかもしれない。

そう想定すると、これから行う予定の本体の採掘は、最悪失敗する可能性がある。

ただ失敗するだけなら、まだ良い。

他の方法を、改めて考えれば良いだけだからな。

だが……もし、失敗するとそのまま結界に取り込まれる様な状況になるなら、下手に手を出す事も出来ないだろう。

そこまで考えた所で、胸元を飾る悪魔アミコレット・オブ・デビルの護符に無意識に手を触れたウルベルトは、自分が冷静さを少し欠いている事に気付いた。

らしくない程に、この場に立つと清浄な空気にぞわぞわとした悪寒が背筋を走り、言
い様のない不安な気持ちを掻き立てられていたのだ。

だが、無意識に悪魔アミコレット・オブ・デビルの護符に触れた途端、その防御効果が発揮された事で結界に
よつて発生していた影響が消え、冷静さを取り戻せたのだろう。

まず気付いた事を告げる為にパンドラズ・アクターの顔を見て……思わず逃げ出した
い気持ちになった。

何故なら、氷に閉ざされた己の姿を見詰めるパンドラズ・アクターの顔から、表情が
抜け落ちていたからだ。

合流してから今まで、人の姿を模している現在のパンドラズ・アクターは表情豊かで、
喜びや不安など喜怒哀楽がはつきりとしていた。

そんな相手から、一切の表情が抜け落ちた様子を目の当たりにして、恐怖を感じない
筈がない。

むしろ、本来のつるりとした二重ドッベルケンガーの影の顔の方が、今のパンドラス・アクターより愛嬌があつて可愛いとすら感じるんじゃないだろうか？

そう感じたものの、ウルベルトはそれを一切口に出すことなく、己の本体を封印している氷のようなものを睨み付けたまま、沈黙しているパンドラス・アクターの頬へとそつと手を伸ばした。

「……なあ、あれはお前にそんな顔をさせる物なのか？」

あまりに酷い様子に、つい頬を撫でてやりながら問い掛ければ、パンドラス・アクターは抜け落ちていた表情を戻す代わりに青ざめ、口元を押さえながら小さく頷く。

どうやら、ウルベルトの事が意識から抜け落ちていた事に気付いて、申し訳無さで血の気が引いてしまったらしい。

そんなパンドラス・アクターを暫く宥めるように、優しく頬を撫で続けた後、落ち着いたのを見計らつて改めて問い掛けた。

「それで、お前から見たらどういふ代物なのか、きちんと説明してくれないか？
もちろん、おまえが解る範囲で良いから。」

静かな口調で命じたら、青ざめた顔を手で押さえ隠しつつゆつくりと口を開いた。
「あれ、は……天然の物ではなく、人為的に様々な強化された結界です。」

元々この洞窟の中は、清浄な空気と力場による氷のような天然の結界が、実際に存在

していたのでしょうか。

ですが、元の結界の効果は治癒などの浄化を主としたもので、ウルベルト様を捕らえてこの様な形で封印する結界ではなかった筈です。

その事を踏まえて考えるならば、何者かが元々あつた結界に手を加えて変質させ、ウルベルト様を封印するものに変えた可能性は高いでしょう。」

そこで言葉を切ると、スツと視線を落として氷と床の境界線を確認する。

次に、天上まで視線を上げると、同じ様に境界線を丁寧の確認し、軽く頷いた。

どうやら、何か見つけたらしい。

「天井と床の氷の奥に、封印に関わる魔法陣が書き込まれているのを発見いたしました。意識が抜けた本体なら、ある程度の力さえ有ればその手によって、容易く捕らえられたでしょうから。」

ウルベルト様は、存在そのものが強大な力をもった悪魔です。

本体の意識はなくても、その場に本体がいるだけで世界に影響を与える可能性がある、捕らえたもの達に判断されたとしてもおかしくありません。

だからこそ、目覚められたら危険な存在として、ウルベルト様を封じ込める為にこの天然の結界に運び込み、更に強固な結界を重ねて変質させたのでしよう。

その程度の知恵の働く程度の者なら、この世界にもいておかしくありませんからね。

ですが、あの程度の魔法陣が相手なら、私の手持ちのアイテムで解除は可能な程度のものです。

ウルベルト様の本体を、より安全な状態であの封印の氷から取り出す為にも、魔法陣は全て解除してしましましょう。

ウルベルト様は、こちらにてお待ちください。」

ウルベルトに説明しつつ、サクサクとするべき事を決めると、上位道具グレイター・クリエイト・アイテム作成で適度な高さの台座を作り出す。

そして、アイテムボックスからここに来る前に造った椅子を取り出すと、ウルベルトの身体を肩からそこに降ろして、テキパキと準備を始めるパンドラズ・アクター。

既に、魔法陣の解除とウルベルトの本体を氷から取り出す事は、パンドラズ・アクターの中で決定事項のようだ。

正直に言えば、ウルベルトもあの氷の中に己の本体が封印されたままなのは、あまり気分が良くないので反対するつもりはない。

無いのだが、少し心配だった。

この洞窟に元々あった封印を、こんな風に変質させている魔法陣の解除をしたら、パンドラズ・アクターの身に何らかの影響が出るのではないかと。

ウルベルトの心配を他所に、パンドラズ・アクターは必要なアイテムを揃え終えたら

しく、今度はそれらを丁寧に魔法陣が刻まれている場所の側に設置していく。

本当なら、直接魔法陣に設置したいのだろうが、残念ながら魔法陣そのものは氷に覆われているので、出来るだけ近くに設置しているのだろう。

解除する魔法陣まで、設置したアイテムとの間に距離がある事を踏まえ、解除に使う分よりも多くアイテムを使用する事で、直接設置出来ない分もカバーするらしい。

ウルベルトが見る限り、あまりアイテムに余裕が無いと言っていた割りに、随分とアイテムを大盤振る舞いしているような気がするのだが。

まあ、不足して解除に失敗するよりは、余分に使う方が良く考えたのかもしれないなど、ウルベルトは漠然と思う。

元々、使用するアイテムの持ち主はパンドラズ・アクター本人だし、その手持ちのアイテムの使用数にまで口を出す権利は、ウルベルトにはないだろう。

そもそも、ウルベルトの本体を封印から助け出す為に、こうして手持ちのアイテムを使い、様々な手間をかけてくれているのだ。

パンドラズ・アクターに対して、感謝して礼を言うことはあつたとしても、文句を言うつもりなど、ウルベルトには欠片もない。

そんな事をつらつら考えているうちに、パンドラズ・アクターの方の準備は終わったようだった。

満足そうな顔をしている様子から、思う形で設置出来たのだろう。

少し嬉しげなパンドラズ・アクターの様子に、微妙に微笑ましさを感じながら、ウルベルトは最後の仕上げを見守った。

今回、パンドラズ・アクターが用意したのは、大量の「解呪の呪符」だ。

これは、結界や魔法陣、呪いなどを構築する術式の一部を破壊する事で、その効果や機能を停止させる事が出来る呪符なのだが、威力と効果は一枚だけではそれほど高くない。

大概の場合、一つの術式を停止させるのに最低でも五枚から十枚必要で、数か足りていないと思うような効果が発揮されない、使い処が難しいアイテムだ。

ある程度までレベルが上がれば、様々な状態異常耐性を持つスキルを習得したり、アイテムで回避が可能になる為に、それらが使えない限定クエスト等でしか使用されない、ある種の死蔵アイテムだったりする。

だが、今回はパンドラズ・アクターの……モモンガの物持ちの良さに救われた形となった。

《モモンガさんは、こう言う何か使える可能性があるアイテムを、簡単に捨てられないタイプだったからな。

自分で保管出来ない分を、纏めてパンドラズ・アクターの私物の中に突っ込んで置い

たんだろう。

そのお陰で、こうしてパンドラが俺を助けるのに利用している訳だし、無事に再会出来たらお礼を言わなきゃ駄目だな、うん。

後、パンドラが凄く俺の為に尽力を尽くしていた事とか、宝物殿の宝を守るために身頑張った事とかもきちんと話してやろう。

自分の造ったNPCが、どれだけ役に立つ凄いやつなのか、モモンガさんは知るべきだと思おう。

とにかく、まずは俺をこの胸糞悪い場所から取り出して、安全を確保してからの話か………》

パンドラズ・アクターが、呪符を起動させる為の手順を踏んでいるのを待つ間に、ウルベルトはそんな事を考える。

実際、パンドラズ・アクターを発見して接触して居なければ、情報不足を理由にこの場に留まり続けていた可能性は高い。

一度この場を離れたから、この異常性に気付けたものの、もしここから離れていなければ、何も気付けずに本体の側に居続ける事を望んで、そのまま結界の中に取り込まれていた可能性だってあるのだ。

もし、そんな事になったら……無事に復活する事すら難しかったのではないのだろうか

か？

あまり考えたくない話だが、あり得なくはない状況だったと漠然と思う。

もし、そんな状況になっていた場合、ウルベルトが生還できた可能性はかなり低い。何故なら……ウルベルトが本当にその状況に陥った場合、こちらに来ている可能性を信じて捜索してくれていて、漸く見付かるかもしれない程度の可能性しかないからだ。

それ位、この場所は天然の結界に守られていて見付け難い気がする。

もちろん、現時点ではそれをきちんと確認した訳ではないが、この予感の外れていないだろう。

そう確信する程度には、この空間を押し包む結界は自然で、違和感を感じさせなかったのだ。

「呪符発動！」

ウルベルトが、この場所にある結界に付いて考えている間に、パンドラス・アクターが呪符を発動させた。

その途端、設置された呪符が発動して魔法陣の中に構築された術式を崩していく。

バチバチと大きな音をたて、所々で火花すら散らしつつ魔法陣の術式が崩壊していく様子は、ある意味美しい光景だった。

それと同時に、ウルベルトがここに転移してきてから感じていた重圧が一気に消えて

いき、呼吸が楽になる。

もちろん、清浄な空気そのものが消えた訳ではない。

だか、今までのように悪魔アミュレット・オブ・デビルの護符の力を借りずとも、普通に立っていられる程度の影響しか、ウルベルトは感じなくなったのだ。

これは、かなり大きな変化だと言っていいだろう。

むしろ、悪魔であるウルベルトが好む澱んだ空気が、何処からともなく発生し始めているほどで。

そう……清浄な空気で満たされた筈の結界の中で、澱んだ空気が発生しているのだ。

その事に気付いた途端、ウルベルトの中で警戒心が一気に脹れあがった。

背筋を這い上がる、嫌な予感。

この場で、この状況はかなり良くない、と。

「つつっ！」

下がれっ、パンドラつつっ！」

その直感のまま、ウルベルトは叫ぶようパンドラズ・アクターへと指示を飛ばしていた。

肩に飛び乗ったウルベルトの指示に合わせて、一切疑うことなくその場から大きく後方へと跳び、氷の結界から距離をとるパンドラズ・アクター。

まるで、その動きに合わせるかのように、大きく洞窟を揺るがす地響きが鳴り響く。そして……そいつが姿を現したのである。

レベル八十五を誇る、「ユグドラシル」の氷系中級ボスモンスター【憂氷と凍結の女帝フリーズ】が。

憂氷と凍結の女帝フリーズ戦 前半

突如、その場に登場したボスモンスター【憂氷と凍結の女帝フリーズ】は、氷の結晶を幾重にも身に纏った、美しい女性タイプのモンスターである。

女帝の名に相応しく、氷で出来たハーフェイルと白の雪様なドレスを身に付けた優美な姿をしていて、女性タイプの敵ボスモンスターの中では、美しさは際立っているといつて良いだろう。

古い童話に出てくる【雪の女王】の如く、氷の結晶と凍結した大地を従えている姿は、ある意味圧巻だった。

その、堂々威風たるボスモンスターの出現によって、洞窟内の空気は一気に凍りついていく。

場の空気を、出現しただけで一気に変質させていく様相は、流石【ユグドラシル】時代に「最低でもレベル七十以上無いと倒すのが難しい」と言われた、水系中級ダンジョンのボスだと、ウルベルトは思わず感心してしまった。

もつとも、感心しても遭遇した事を喜んでいる訳ではないが。

正直言つて、この中ボスの登場はウルベルトにとつても、パンドラズ・アクターにとつ

ても、想定外だと言っつていいだろう。

《いや……これは、俺の油断が招いた状況だな。

この洞窟にいた最初の段階で、俺の本体を覆い隠す氷の結界を余す事なく調べ尽くしていれば、あの天井と床の魔法陣には気付けた筈だ。

ああ、そうだよ！

あの魔法陣が、罨に連動している可能性なんて、調べたら簡単にわかったんだ！

なのに、自分が措かれた目の状況に意識を奪われて、俺はそれを怠つてた。

あの時点で気付ければ、魔法陣に仕掛けられていだろう罨からのモンスターの出現だって予測出来たし、もう少し対策を考えれば筈だ。

少なくとも、こんな準備不足でボス戦なんて事態だけは、絶対に避けられた筈だったんだよ！

……つくそつ！

三年も「ユグドラシル」から離れて、あらゆる意味で腕が鈍ったツケが、こんな形で出るとは思わなかったぜ……》

ギリギリと歯を食い縛ると、ウルベルトは無意識のうちにこの不愉快さに対して、苛立ちから山羊頭の悪魔らしい低く唸り声を上げていた。

しかし、苛立ちが強すぎてそんな自分に気付かないまま、ウルベルトは素早く記憶に

残っている「憂氷と凍結の女帝フリーズ」に関する情報を頭に浮かべていく。

目の前のモンスターと比較して、その外装に変更は無いらしいのを確認し、一つ重要な事を思い出した。

それは、間違いなく今の自分達にとって、かなり重要度が高いもので。

ウルベルトが記憶を引き出す間に、更に後方に下がり距離をとるパンドラズ・アクターへと、急いで伝言メッセージを繋いだ。

『聞こえるか、パンドラ。』

今から、あのモンスター「憂氷と凍結の女帝フリーズ」のユグドラシル時代の攻略情報を伝えるぞ。

異世界に転移して、変質している部分もあるかもしれないが、ある程度は変わらない筈だから参考にしてくれ。

まず、後二メートルは距離をとって欲しい。

アイツの基本戦闘領域の範囲からギリギリ抜ける。

この洞窟は狭すぎるから、アイツのHPが半分以外になった、後半に発動する最大射程距離からは抜け切れないが……それだけ離れば、ある程度の攻撃は届かなくなるからな。』

ウルベルトの指示に従い、素直に後方に下がり距離をとるパンドラズ・アクター。

やはり、戦端を切っていない状態下なら、こちらの後退を追撃してくる様子はない。その情報が変わっていない事を確認し、ホツと胸を撫で下ろすウルベルト。

これなら、まだ戦闘準備を整える時間が取れるからだ。

攻撃範囲から、指示した位置まで下がったのを確認したところで、ウルベルトは残りの情報をパンドラズ・アクターに伝えていく。

『いいか、パンドラ。』

基本、あの「フリーズ」はこちらが戦闘開始エリアに足を踏み込まない限り、自分から戦闘に入る事はない。

そう……中級とはいえボスとの戦闘だから、戦闘を開始するエリアがある程度決まってるんだよ。

だから、手持ちのアイテムと装備をある程度まで整える事は可能だ。

補助魔法を自分に掛け終えたら、次は手持ちの回復系アイテムの分配と、氷属性耐性か属性攻撃効果アップなどの、使えそうな装備アイテムや武器の用意を頼む。

悪いが、今回は短期決戦を頭において、自分に使える補助系魔法は可能な限り掛けておいてくれ。

出来れば、氷属性耐性と物理攻撃耐性辺りが掛けられたら、戦闘には有利になるか。

とにかく……今は、まずそこから頼むわ。』

視線は「フリーズ」に固定しながら、指示を的確に飛ばしていくウルベルトに対して、パンドラス・アクターは迷わずアイテムボックスから必要なアイテムを取り出し始めた。

戦闘経験が、この地に来てからのあの一戦しかないパンドラス・アクターには、当然だがモンスター関連の戦闘に関する知識は少ないのだろう。

故に、ウルベルトがモンスターを知っているならば、こんな準備不足な遭遇戦では、彼の指示に従うのが一番だと判断してくれたらしい。

テキパキと、必要なアイテムを取り出すパンドラス・アクターに対して、メッセージ伝言でウルベルトは話を進めていく。

『……それで、アイツの攻撃だが……名前通りの氷属性攻撃特化タイプだが、炎耐性がそこそこある厄介なタイプでもある。

しかも、氷属性攻撃をあらゆる形で使い、物理攻撃にも変化させてくるから注意しろよ？

もし、パンドラが前衛として俺の為に壁役を引き受けるつもりなら、止めた方がいい。流石にレベル差が大きすぎて、一発でノックアウトされる危険がある。

そんな真似をする位なら、現在使える式式炎雷さんのスキルで、一気に距離を詰めて効果的な爆発系の近距離攻撃、即その場から離脱するヒットアンドアウェイを繰り返

し、削れるだけHPを削った方がいい。

パンドラがHPを削ってくれている間に、大外から爆発系のコンボを仕掛けた上で、敵のHP残量チェックをしていくから。

手持ちの回復アイテムは、蘇生系も幾つかあるんだろ？

それなら、アイテムによる復活地点を攻撃範囲外に設置して、数回死亡するのを覚悟で動けば、今の戦力でもギリギリ倒せる筈だ。』

そう告げつつ、ウルベルトはもう一度「フリーズ」の姿を見て……漠然とした違和感を感じていた。

何か、彼女を見ていると思い出しそうな事がある気がするのだが、それが何なのか思いつけないのだ。

その違和感のはつきりしないのが、無性に気になって仕方がない。

無いのだが、このまま何もせずに手をこまねいている訳にはいかなかった。

なにせ、自分の本体の安全が掛かっているのだ。

多少の違和感程度なら、この際考慮から外しても問題はないだろう。

だが……何かを忘れているは間違いないのだから、注意は必要だった。

そんな風に、ウルベルトが指示を出しつつ「フリーズ」に対して感じる違和感に困惑する中、パンドラズ・アクターは身に付けていた装備を氷属性耐性があるものへと取り

替えていく。

相手の攻撃が氷属性特化だと判っている以上、当然の対策だった。

補助装備として、ウルベルトが受け取った「妖術師の腕輪」も身に付けてMPやHP面でも、可能な限り強化しているようだ。

武器に関しては、「フリーズ」に炎耐性がそこそこあると判っているので、炎属性に変えるのは止めたらしい。

ウルベルトの指示通り、ヒット&アウェイを繰り返す都合上、選択した武器は風属性でスピードアップ効果のある聖遺物級のレイピアだ。

「……残念ながら、私の装備に関してはここまでしか用意出来そうにありませんね。

お待たせしてしまい申し訳ありません、ウルベルト様。

それで、ウルベルト様にお渡しする装備とアイテムはこちらになります。」

そう言つて、パンドラズ・アクターがウルベルトに対して用意した追加装備は、物理攻撃耐性がある「耐性の指輪」だ。

武器は、現在使用している「火竜スタッフ・オブ・サラマンダーの杖」の効果を考えると、下手に外すのは惜しいから用意しなかったのだと、何となく理解出来た。

他の装備を出さなかったのは、既にパンドラズ・アクターの手元にあるものの中で最上のものを手渡している為、他に渡せるものがないのだろう。

更に、手持ちの回復アイテムを大量に取り出すと、ウルベルトに差し出した。

パンドラズ・アクターの性格か考えて、こうしてこちらに渡してくるアイテムは、多分、自分の取り分よりも多いだろう。

死んでも蘇生すれば、レベルがそのまま維持できる自分よりも、この身体でも死亡したらレベルダウンする可能性が高いウルベルトでは、死亡の重さが違うと、そう判断すると予想が付くからだ。

それが判っているからこそ、ウルベルトも黙ってそれを受け取った。

逆に、蘇生アイテムはパンドラズ・アクター側に多目に持たせるように仕向ける。

後、蘇生アイテムによる復活地点をこの場所に設定仕掛けたのを押し留め、すぐ側にある太い柱の影のように指示を出した。

『ここなら、この太い柱が攻撃を防いでくれるから、蘇生してすぐにまた死亡は避けられるだろ？』

フリーズの攻撃を考えると、この地点なら後半出てくる指定範囲全体攻撃の射程範囲外になるからな。

安全マージンを優先して、復活地点は敵から多少距離をとった方がいい。

ボスモンスターの割りに、フリーズは取り巻きを連れていないソロモンスターだ。

数で押される心配がない分、きつちり優位な部分を利用しないと、アイテムを無駄に

使う事になるぞ?」

その指示に頷き、テキパキと復活地点を設置していくパンドラズ・アクター。

ウルベルトは、その間にアイテムボックスから「飛行のネックレス」を取り出して身に付ける。

今の身体では、戦闘中は常に飛行フライを使い続ける必要があるため、少しでもMP消費を抑さえる為の選択だ。

そうして、ネックレスに込められた飛行フライを発動させると、パンドラズ・アクターの肩からフワリと飛び立ち、空中で静止する。

アイテムと装備を全て揃え終えたのを確認し、お互いに最後の準備として使える補助呪文の詠唱を始めた。

「……魔法詠唱者の祝福、ブレス・オブ・マジックキャスター 上位全体能力強化、グレート・フルポテンシャル 看破、シースルー 上位抵抗強化、グレート・レジスタンス 関知増幅、パラノーマル・イントウイション 魔法増幅、マジックブリンク 上位幸運、グレート・マジックシールド 上位魔法盾、グレート・ハードニング 上位硬貨、ライフ・エッセンス 魔力の精随、ボティ・オブ・イファルジエントベリル 光輝緑の体……」

どうやら、パンドラズ・アクターが使用選択した補助魔法はここまでらしい。

ウルベルトは、さらに「不屈」と「吸収」を掛けて準備を終了した。

「……ウルベルト様、これで全ての準備が終わりました。

戦闘開始の合図をお願い致します。」

静かな声でありながら、その中に明らかに高揚した様子を見せるパンドラズ・アクターに、ウルベルトは少しだけ苦笑した。

己と共に戦える事を喜ぶ姿に、始めていモモンガと共闘した時の事を思い出してしまつたからだ。

《……やつぱり、ちよつとした事でもモモンガさんに似ているよな、パンドラは。

こうなると、デミウルゴスに会うのが楽しみのような怖いような……あいつは、きつちり細かな性格まで設定しているから、そんなに俺には似ていないと思うけど。

俺の理想のあいつが、どんな風に話して動くのか……

つと、今はそれどころじゃないんだし、時間が出来たら改めて考えれば良いか。》

つつい、過去の記憶に重なるパンドラズ・アクターの姿に、別の方向を向きかけた意識を引き戻すと、ウルベルトは小さく深呼吸する。

そして……次の瞬間、戦端を切る為の攻撃魔法の詠唱を始めた。

「……我と我が仲間に対峙する愚かな者に、裁きの雷を！
魔法最強化、万雷の撃滅!!」
マキシマイズマジック コール・グレートター・サンダー

ここで選択したのは、敢えて雷属性魔法。

耐性がある為、ある程度まで効果が相殺されてしまう炎属性より、そのまま効果がある雷属性を選んだのである。

それに、特に音と発動時の派手な雷属性は、目眩ましの効果が期待出来るからだ。

単身、特攻を掛ける事になるパンドラズ・アクターの僅かなりとも援護になれば良いと、補助魔法で強化も掛けておく。

ウルベルトの詠唱に合わせて、式式炎雷の隠密スキルを発動させ、スルリと身を戦場に躍らせたパンドラズ・アクターの姿は、ウルベルトには目視できない。

それでも、彼ならこちらの攻撃魔法を避けられると、それを信じてウルベルトは次の魔法の詠唱に入った。

ただし、ここから先は攻撃魔法を単発で放つのではなく、幾重にも重ねて放つ「コンボ」である。

《一応、今の俺が使える魔法は、「ユグドラシル」時代そのままみたいだな。

だが……この身体で使える魔力は、昔よりもかなり低い。

やはり、魔力消費をきっちり考えて「コンボ」を組み立てないと不味そうだな。

この辺りは、「ユグドラシル」の頃も変わらねえんだが……最大値まで魔力増強の装備アイテムを使って居たとしても、元になる魔力が低いからな。

下手に昔のように使おうとすると、うっかり自滅しかねないから、かなり注意が必要な案件だぞ。

もつとも、今の自分が使用している装備は、あの頃に使用していた神器級の最強装備

じゃねえんだけどな……」

そこまで考えたところで、また、ウルベルトの記憶にチリリと違和感が走った。

何か、大切な事を忘れている気がして仕方がないのだ。

それが何なのか、ウルベルトか思い出そうとした瞬間、視界の端に、「フリーズ」が全方向に向けて穿ヒートシングつ氷アイスクル柱を放とうとしている姿がみえた。

慌てて、それを回避するべく射程範囲外の洞窟の天井近くに移動すると、一旦思考を打ち切って戦闘に専念する。

既に戦端を切っている以上、他の事を考えている余裕はないのだから。

憂氷と凍結の女帝フリーズ戦 中盤

一旦戦端を切れば、そこから先はフリーズからの容赦ない魔法攻撃が待ち構えていた。

基本的には、リキヤストタイムが必要な四つ攻撃が、主軸になった前半と後半の二パターンから構成されている。

魔法特化のフリーズは、直接的な攻撃は全て魔法によるものしかない。

だが、その使用する魔法によって変化した地形を利用した、物理的な威力も伴った攻撃は存在する。

前半戦に当たるHPゲージ半分までは、主に使用する魔法は四つ。

先程見せた「穿つ氷柱」の他に、一度に最大で二十発を同時に放つ「氷珠」と、フ

リーズを中心に六十秒間半径三メートルに、触れた部分が氷結してバフを剥がす霧を放つ「霧氷」、蘇生地点になる柱の三メートル前まで届く「氷の息吹」だ。

フリーズのいる場所から蘇生地点まで、約十メートルだと言えば、「氷の息吹」の攻撃範囲の広さが理解出来るだろうか？

更に、この「氷の息吹」が触れた場所は、どこであろうとそのまま問答無用で凍結す

るので、そこに向けて【穿つ氷柱】^{ピアッシング・アイシクル}が発動すると、打ち出された氷柱は凍結した場所を破壊しながら射程範囲を飛び交う形になる。

当然だが、【穿つ氷柱】^{ピアッシング・アイシクル}を避けたとしても、着弾点が凍結していればそこが破壊されて砕けた物体が辺り一帯に飛び散り、物理的に襲い掛かってくるのだ。

しかも、破壊された破片が飛散する方向など、全て推測して回避するのは至難の業で。結果として、回避しきれなかった破片によるダメージを、大小を問わずに物理攻撃として受ける事になる。

そう……それがフリーズの使う、物理的な効果を伴う魔法攻撃の正体だった。

フリーズは、最初にバフ剥ぎ効果を持つ【霧氷】^{フリージング・フォッグ}を放つ。

そうして、対戦相手となる前衛の接近を防ぐ六十秒間に、【氷の息吹】^{アイスブレス}を使って自身に有利なフィールドを作り出し、【氷珠】^{アイスボール}を多用する事で前衛をそのフィールド内へ追い込むのだ。

後は、追い込んだ先にあるフィールドに【穿つ氷柱】^{ピアッシング・アイシクル}を多数射出する事で、【穿つ氷柱】^{ピアッシング・アイシクル}そのものの攻撃と、凍結した大地などが碎かれる事による物理攻撃を併用してダメージを与えてくるのが、定番の攻撃パターンだった。

対処法としては、リキヤストタイムが三百六十秒の【霧氷】^{フリージング・フォッグ}のバフ剥ぎを回避するため、【霧氷】^{フリージング・フォッグ}の発動中は遠距離から【氷の息吹】^{アイスブレス}で凍結した場所へ炎属性の

魔法を使って解凍作業を優先する。

それによって、最後に発動する【ヒールシング・アイシクル穿つ氷柱】の物理攻撃部分を回避するか、物理攻撃無効化などのアイテムを使用するか。

とにかく、レベルが九十を越える事で物理攻撃をある程度のレベルまで無効化出来ないかと、【フリージング・フオツク霧氷】のバフ剥ぎ効果もある為に、かなりエグいレベルでHPを削つてくるボスなのである。

三百六十秒の間に、決まったパターンの攻撃を仕掛けてくるので、前半戦はまだ楽なのだが。

前半戦は、その攻撃のパターンを後方で三百六十秒毎にタイマーを鳴らして確認し、【アイスブレス氷の息吹】の効果をも【ファイアボール火珠】で打ち消ししつ、可能ならフリーズにも【ファイアボール火珠】を打ち込んで攻撃に参加する。

それと同時に、単身接近戦を挑むバンドラズ・アクターへ【アイスブレス氷の息吹】等の回避方向を指示していくのが、ウルベルトの受け持ちだった。

本来なら、習得している【ワールド・デイズター】の魔力燃費の悪さから、そんな真似をしていたらすぐに息切れしそうなのに、それを可能にしているのはウルベルトが装備している【スタッフ・オブ・サラマンダー火竜の杖】である。

この杖、【ファイアボール火珠】を炎属性持ちならMPを消費せずに同時に五発放てるという、

聖遺物級としては破格の性能なのだ。

しかも、その効果は杖が壊れない限り続くと言う、限り無く伝説級に近い聖遺物級なので、今のウルベルトにとって最高に使い易い装備だった。

これがあるから、ウルベルトは自分へ補助魔法を掛けることを選択出来たのだ。

後衛魔法職として、ウルベルトは前線に出ない分、戦闘を開始する前の段階で掛けた補助魔法のうち、幾つかは不要と思われるかもしれないが、実際は違う。

何せ、今のウルベルトのHPは魔法職として低かったものを、更に七割まで下げている「ねんどろいどゴーレム」なのだ。

前線に出なくても、敵が放った攻撃の流れ弾と言うものが存在する以上、むしろ必須な補助魔法だった。

一応、魔法攻撃の範囲外だしスタッフ・オフ・サラマンダー「火竜の杖」の装備効果で氷属性無効化が付いている。

だが、物理攻撃の流れ弾に関してはその適用外なのだから、用心するのは当然だった。せつかく、パンドラズ・アクターが攻撃を避けたのに、うっかり自分がダメージを負ってしまったら、作戦が台無しになってしまうだろう。

逆に、パンドラズ・アクターにはある程度のダメージを覚悟の上で、全面的に攻撃に転じて貰っている。

なんとと言っても、ウルベルトには作戦の都合上、低ダメージを与える【火^{ファイア}珠^{ボール}】以外に、攻撃手段がない。

最初は、それなりにダメージを与えるコンボを決めて、前半戦はもちろん後半戦も乗り切るつもりだった。

だが、パンドラズ・アクターは特殊^ス技術^キと武器の効果を中心とした打撃系戦闘を選択している。

つまり、ナザリツクのNPCの中でも一、二争う程のMPを誇るパンドラズ・アクターに、余剰MPが存在するのだ。

それなら、余剰MPをウルベルトに譲渡する事も、十分に可能だと言える訳で。

運が良い事に、パンドラズ・アクターがやまいこの能力として使える部分に【MP譲渡】が含まれていたため、実際にウルベルトに譲渡する方向で話が纏まり、作戦の幅を増やすことが出来たのである。

もちろん、パンドラズ・アクターが使うのは特殊^ス技術^キだけではないので、ウルベルトにMPを全て譲渡する訳ではない。

それでも、全くMPが補給出来ない状況よりも、採れる手段は確実に増えるし、実際に今のウルベルトは攻略人数と自身のMPの減少から捨てざるを得なかった方法を、この事によって選択していた。

そう……本来なら、MP減少によって一度しか使用する事が出来なくなっていた、グランドカストロフ【大 災 厄】を使用すると言う、文字通り奥の手を。

フリーズを相手にするなら、前半戦は打撃メインの前衛のサポートをしつつ、後衛の特殊役担当が超位魔法を決めるのを待ち、後半戦で攻撃が一周する頃に大技を叩き込むのがウルベルトのチーム内の立ち位置だった。

だが、今回はウルベルトは火力担当だけではなく、司令官や特殊役もワイルドこなさなくてはならない。

だからこそ、最初に簡単な作戦を立てた時は、火力を重視した選択肢は捨てざるを得なかったのだ。

そこに、パンドラズ・アクターからの【MP譲渡】の話が出て、ウルベルトは考えを変えたのである。

『パンドラズ・アクターから、ある程度の魔力チャージが受けられるなら、前半戦と後半戦で一回ずつ大技を決めても良いんじゃないだろうか？』と。

それでも、前半戦は【火 竜 の 杖】を使い、可能な限りMPの消費を控える必要がある。グランドカストロフ

【大 災 厄】を使うにしろ、他の攻撃力が高い高位魔法を選択するにしろ、ウルベルトのMPの消費は本来のものよりも高い。

でなければ、使用するとほぼ一発で気絶するなんて状況にはならないだろう。

しかし、そこにパンドラズ・アクターから受け取った【リング・オブ・テンペランス 節制の指輪】の効果か加わると、また話が変わってくるのだ。

なにせ、そのアイテム効果は『MPの消費率を最大十五%まで下げる事が出来る』というはかくのものであり、【グランドカスターロフ 大 災 厄】を使用した場合は、最大値の十五%カットするらしい。

つまり、割り増しした分よりも消耗率をカットする形になり、ウルベルトの一発で気絶するのを回避出来る、素晴らしいアイテムなのだ。

もう一つの【バングル・オブ・ソーサラ 妖術師の腕輪】が、更にウルベルトを助ける。

なんとと言っても、その効果は『HPを三十%、MPを二十%最大値から上昇させる効果』と言う素晴らしいものだったからだ。

その効果によって、本来の最大値の八割まで戻ったMPは、ウルベルトに少しだけ精神的な余裕を与えた。

後半戦に入った辺りで、補助魔法をもう一度使用したとしても、【グランドカスターロフ 大 災 厄】を使用して気絶せずに済むからである。

ここで、一度も超位魔法が選択肢に入らないのは、使用したら一発で気絶するという条件が、アイテム装備後も変わらなかったからだ。

《……超位魔法に関しては、俺の勘違いもあつたからなあ。

あれは、使用回数が限定された特殊^ス技術^キと同じで、MPそのものは消費しないんだよ。つまり、超位魔法を使うと気絶する仕様なのは、今、俺の使っているこの「ゴーレムボディ」が、超位魔法の使用に耐えられないからなんだよな……

まあ……普通に考えれば、この姿で超位魔法を使える事の方が、ある意味では異常なんだから、その程度のペナルティで済むと思ふべきなんだろう。

ただし、使いどころの見極めが難しいモンになつたけどな。

何せ、こいつは使えば即気絶だから、現状ではパンドラが側に居ない時には使えねえ。しかも、使うのは最後の止めを刺すとか、撤退戦でパンドラに運んで貰いながら途中で足留めに放つとかだぞ。

それ以外だと、確実に戦力を減らしてパンドラを危険に晒すからな。

とにかく、何らかの手段を構じて気絶を回避出来るようにならない限り、これは使えない手だと認識しておく方がいいだろう。

使えると思つてて使えないより、最初から使えないと考えて動いた方が、後で慌てて混乱しないだろうし。》

テキパキと、パンドラズ・アクターに指示を飛ばしつつ、ウルベルトは頭の中でそう結論付ける。

実際、使い道が難しい超位魔法をこの場で使うとしたら、本当に最後の最後、もうそれ以外に取る手段がなくなった時だと、ウルベルトは考えていた。

もちろん、その攻撃が通ればこちらの勝ちだと言う条件付きならば、だが。

今回の戦いは、絶対に勝たなくてはならない勝負だ。

なにせ、ここでフリーズに勝たなければ、己の本体を取り戻せない以上、戦闘を放棄して逃げ出す事も出来ない。

この封印が、誰の手によって施されたのか判らない為に、下手に戦闘を放棄してこの場から脱出した場合、己の本体がどうなるか判らないからである。

もし、フリーズに勝てなかった時点で、己を封印した相手に封印が解かれた事が伝わるなら、最悪な事態を引き起こす可能性が高い。

そう……今度こそ、ウルベルトの本体を殺しに掛かってくる可能性だ。

いつ、ウルベルトの本体がここに封印されたのか、それは判らない。

しかし、だ。

前回は封印で済んだからといって、今回も再封印で済むかと問われれば微妙だと、ウルベルトは考えている。

理由は、実に簡単だ。

せっかく封印したウルベルトを、何者かが解放して復活させようとしたのである。

再度封印しても、同じ様に復活させようとする者がいるのならば、封印なんて手間を掛けずに消滅させた方が、より安全だと考えても不思議じゃない。

わざわざ、自分達にとって危険をもたらす可能性のある存在を、この世界に残しておく理由はないのだから。

これに関しては、パンドラズ・アクターもウルベルトと同じ考えなのだろう。

だからこそ、かなり無理をしてもこの場でのフリーズ攻略を選択した。

そうじゃなければ、パンドラズ・アクターはウルベルトに対して、まず撤退を提案していた筈である。

こんな、何もかも準備不足でのボス戦など、本来なら避けたいものなのだから。

それでも、戦いを避けられないと判断したから、パンドラズ・アクターは覚悟を決めたのだろう。

何度か死んでも、フリーズに勝つまで蘇生アイテムを使用して、最後まで戦い続ける覚悟を。

だから、ウルベルトも腹を据えて、可能な限りパンドラズ・アクターを死なせないで済む方法を、必死に思い出しながら作戦を練った。

もちろん、本格的に参謀として作戦を練れる訳ではないから、ある程度までではある。元々、作戦を練るのは仲間の役割であり、ウルベルトには参謀役は厳しいので、出来

ればパンドラズ・アクターに変わって欲しい所だ。

だが、ボス戦が初めての相手に任せるのは厳しいし、相手がフリーズなら、ある程度までなら作戦が練れない訳じゃない。

そう判断したのは、間違いなくウルベルトだ。

そう……ある程度とは言え、ウルベルトがそんな真似が出来るのにはそれなりの訳がある。

どんな訳かと言えば、実はとても簡単なもの。

フリーズが持つ攻撃パターンを、徹底的に分析してその兆候を割り出し、瞬時に判断出来るレベルになるまで頭と身体に叩き込んだからだ。

それこそ、かなり昔の攻略だったのにも関わらず、ある程度までその能力や攻撃パターンを思い出せる程に。

フリーズが、「ユグドラシル」に登場したのは、五周年記念コラボ【海外の童話】の中の一つ、「アンデルセン童話のダンジョン」だ。

ダンジョン後半に出てくる中ボスだったのだが、運営の中にフリーズの元になった童話【雪の女王】に思い入れがある者が居たのだろう。

中ボスにも拘らず、フリーズは馬鹿みたいに高いMPと広範囲攻撃を誇り、【中ボスレベルでは無い】と言う評価を受けていた事を、ウルベルトもよく覚えていた。

もちろん、それだけでウルベルトがこの中ボスの事を、頭の中に攻略方法を叩き込むまで徹底して覚えていた訳ではない。

そう……【アンデルセン童話のダンジョン】のラスボスすら霞むほど、フリーズは強かっただけではなく、ドロップアイテムが美味しかったのだ。

フリーズの強さを前にして、それでも挑戦者が跡を絶たない程に、プレイヤーが集中したドロップアイテム。

それは、ドロップ率が一万分の一と言う確率の低さで排出される伝説級レジェンドアイテム、「凍れる女王の心臓」と言う名のブローチだった。

まるでルビーのような、直径五センチの深紅の結晶を中心に据えた、美しいブローチ。見た目も見事なものだったが、このアイテムの本当の素晴らしさは、そのアイテム効果にあった。

何せ【所持者のMPを最大値の3割増加させる】と言う、この時期のドロップアイテムとしては、魔法詠唱者にとって文字通り破格のアイテムだったのである。

特に、ウルベルトの様な【ワールド・ディザスター】にとって、垂涎の品だったと言っている。

だからこそ、ウルベルト自身もそれを求めてギルドの仲間に協力して貰った。

そう……その為には、あの頃は仲の悪かった、たつちにすら頼み込んで。

三ヶ月あったイベント期間中、みんなでどれだけフリーズと対峙した事だろうか？
そうして仲間に協力して貰った結果、ウルベルトは無事にアイテムを入手出来たのである。

その戦闘回数は、およそ延べ三百回。

ギルドの仲間に協力をして貰ったお陰で、三チームの交代制でアタック出来たのがよかつたのだろう。

イベント期間半ばで、アイテムドロップ率がよかつたメンバーの手元にドロップしたのを譲って貰らえたのだから。

そこまでやり込んでいたから、ウルベルトの記憶の中にギリギリだがフリーズの情報が残っていたのである。

もちろん、こちらの世界に転移した事によって、変化している部分も発生している可能性は無い訳ではないが、基本パターンは変わっていないようだった。

そこまで思い出した所で、パンドラズ・アクターにフリーズが放った【ビアーシング・アイスクル穿つ氷柱】
のよるクリティカルが入り、最初の死亡が発生した。

それを傍目に見て、心の中で歯を食い縛りながらウルベルトはフリーズを見据えた。そろそろ、前半戦の山場に来ているらしい。

パンドラズ・アクターは、確かに【ビアーシング・アイスクル穿つ氷柱】によるクリティカルを食らったが、

同時に特殊技術スキルによるクリティカルをフリーズに与え、かなりHPを削り取ってくれたからだ。

ここまで削れば、最初の【大災厄】グランドカタストロフを放つのに十分な状況だろう。

そう判断すると、ウルベルトは迷う事なくそれを叫んでいた。

「顕現せよ、究極の災厄！この凍れる大地に滅びと絶望を叫び響かせろ！——」

【大災厄】！——

その途端、フィールド全体を覆い尽くす、純然たる破壊のエネルギー。

予想通り、直撃を受けたフリーズのHPはどんどん削り取られ、半分近くになるのが見えた。

ウルベルトが、このタイミングで【大災厄】グランドカタストロフを放つ理由は二つ。

一つは、現時点で死亡しているパンドラズ・アクターの蘇生までのタイムラグの間にグランドカタストロフ【大災厄】を放てば、フレンドリーファイア同士討ちを回避できる事。

もう一つは、【大災厄】でフリーズに与えるダメージを、ウルベルトがある程度まで把握しているので、後半戦に入るタイミングが判り易い事だ。

ウルベルトが【生命の精髓】ライフ・エッセンスで見える限り、フリーズのHPはあと一撃で半分を切るだろう。

丁度、フリーズの攻撃は【穿つ氷柱】ピアッシング・アイスクルがパンドラズ・アクターに入り、最初の

フリージング・フォッグ
 【霧 氷】か【氷珠】のタイミングだ。

一時的に、敵の攻撃範囲内に移動したウルベルトが、【大災厄】によって発生したヘイトで攻撃を受けても、十分耐えられるだろう。

その間に、蘇生してくるパンドラズ・アクターからアイテムによる回復を受けながら後退すればいい。

そして、そのウルベルトの予想は外れていなかった。

フリーズがウルベルトに放った攻撃は、【氷珠】^{アイスボール}で、ウルベルトでも十分に耐えられるものだったし、その時点でパンドラズ・アクターは蘇生して回復済みだった。

なので、後退してくるウルベルトを回復しつつ、再度フリーズへ攻撃を開始する。

蘇生から回復まで済ませた事で、パンドラズ・アクターの攻撃はまた鋭いものへと変化していた。

パンドラズ・アクターもまた、この戦闘で経験を積む事で、成長しているのだろう。

そうして……とうとう、パンドラズ・アクターの攻撃がフリーズのHPを半分まで削り取った。

憂氷と氷結の女帝フリーズ 後半戦 1

フリーズのHPが半分を切った途端、その気配が大きく変わった。

確実に、今のパンドラズ・アクターの与えたダメージで、フリーズの後半戦へ入るためのトリガーを引いたのだろう。

そう判断したウルベルトは、鋭い声でパンドラズ・アクターへと指示を出した。

「下がれ、パンドラ！」

フリーズのフォルムチェンジに巻き込まれるぞ！

このフリーズのフォルムチェンジ中は、何をしても攻撃は通らないし邪魔出来ないんだ。

だから、このままこちらまで下がれ。

あちらがフォルムチェンジするなら、その間にこちらでも後半戦に対する体制を整えようか。

「済まないが、予定通りそっちから俺への【MP譲渡】を頼むわ。」

ウルベルトの言葉を聞いて、素直にウルベルトの側まで下がるパンドラズ・アクター。

彼が下がりながら、再度自分に補助魔法を幾つか描けるのを視界の端で見ながら、思考を巡らせた。

一応、アイテム効果のお陰で、ウルベルトのMPは約二割程度が残っている。

そこへ、パンドラズ・アクターからの「MP譲渡」を受けると、最大値の七割まで回復するので、かなり余裕があると言えるだろうか。

先程のダメージは、素直に直撃を受けたので、欠けた補助魔法はない。

この状態なら、後衛として戦闘に参加する分には問題ないだろう。

その分も、全て残りの戦闘に回すことを選択しつつ、ウルベルトはこれからの流れを頭の中に思い出す事に集中する。

ウルベルトの記憶通りなら、フリーズはこの後すぐにフォルムチェンジをして、後半戦に入る事になる筈だ。

今までの優美な女帝の姿から、頭に捻れた角と背に皮膜の翼を生やした、何処と無く退廃的な美貌で周囲を魅了するような、女性魔族独特の雰囲気身を纏った姿に変わる。

それと同時に、フリーズの攻撃魔法が三つ追加され、更に攻撃パターンが複雑化するのだ。

それぞれ、「ダイヤモンド・ダスト」、「フリージング・クリスタル」、「氷結スノーストーム・オブ・フリージングの吹雪」

の三つである。

その中でも攻略が面倒なのは「ダイヤモンド・ダスト」だろうか？

これは、フリーズのHPが半分を切ると始まるフォルムチェンジをする事で使用可能になるらしい全体攻撃であり、洞窟内の空気中の水分を凍らせる事で、空中に浮遊する機雷を作り出すからだ。

この機雷、触れた相手を一瞬凍らせた後で爆発するという、ある意味たちの悪い攻撃を仕掛けてくる。

その地雷を、直接触れずに撤去するには、ファイアーボール火球などの炎属性の魔法で溶かすしかなく、その癖リキャストタイムが千二百秒で再度発動可能という面倒さなのだ。

「フリージング・クリスタル」は、氷の結晶が一分間復活地点の柱の前までの戦闘フィールドに発生し、それに触れたものを凍らせ、防御すら貫通してダメージを与える、リキャストタイム九百秒掛かるが割と厄介な魔法だと言えた。

そして、最後の「氷結の吹雪」は、スニーストーム・オブ・フリージング一分間フィールドに吹雪が発生してその領域にいる全てを氷結させる、リキャストタイム千八百秒のフリーズ最大の魔法だった記憶がある。

「氷結の吹雪」に関しては、アイテムや補助魔法で対策可能だ。

だが、出来れば補助魔法を使用するのではなく、氷属性耐性アイテムの装備で躲す方

が安全だった。

理由は、前半戦で出てきた【霧 フリージング・フォッグ 氷】にある。

前半戦の魔法は、フォルムチェンジした後半戦になると使えなくなるなんて事は全くなく、むしろ強化されて発動してくる。

その癖、リキャストタイムはそのまま変わらない為、後半戦で追加された魔法の合間に入り込んでくる為、うっかりタイミングを読み間違えると、そのままその効果を？がされて無効化されてしまうからだ。

ぶつちやけ、戦闘開始前に掛けた補助魔法は、前半戦の為だけだと言っているだろうか。実際、パンドラズ・アクターは死亡する前に全ての補助魔法を使い切り、その効果が切れていたようだし。

その辺りは、パンドラズ・アクターも理解しているらしく、掛けている補助魔法はどれも後半戦の最初の攻撃から、次の次辺りまでの【霧 フリージング・フォッグ 氷】までを回避するのがやっとならうと、それを踏まえた補助魔法を選択していた。

それと同時に、ウルベルトはフリーズの攻撃パターンとそのリキャストタイムを確実にカウントするためのタイマーアイテムを四つセットする。

それぞれ、最初の攻撃が入った時点でタイマースイッチを入れる事で、きちんとリキャストタイムのカウントをして攻撃のタイミングをパンドラに教える為だ。

《……俺の記憶通りの攻撃パターンなら、最初の【霧 氷】から四分後に最初の【フリージング・クリスタル】が来て、そこからさらに五分後が【ダイヤモンド・ダスト】だった筈。

そこから六分後に【氷 結】の吹雪スリーストーム・オフ・フリージングが来れば、丸々ユグドラシルと同じパターンだと判断していいだろう。

【霧 氷】は六分刻みで、他の魔法攻撃と完全に発動が重なる事はないし、効果はバフ剥ぎと多少のダメージだけだから、この際無視するとして……問題は、【穿つ 氷 柱】ピアースング・アイスピラーか。

ここから先は、【穿つ 氷 柱】ピアースング・アイスピラーのタイミングを読むのが難しくなる。

俺の記憶通りなら、こいつに関してはリキャストタイムが無い分、他の呪文の合間を突いてくる筈だ。

タイミングが重なる時は、大技の方を優先して使用していた事と、前半戦で見せたモーシヨンから、その発動を予測するしかないか。

一応、パンドラが付いている氷属性耐性アイテムが、ある程度のダメージまではカットしてくれるから、【氷の息吹】アイスブレスは、多少なら当たっても大丈夫だろう。

【氷 球】アイスボールに関しては、回避可能だから考えなくても問題ないとして、だ。

最初の【霧 氷】フリージング・フォッグから、十九分後に来る二回目の【フリージング・クリスタル】と、

二十九分目に来る「ダイヤモンド・ダスト」の間に、俺の「大災厄」グランドカタストロフを放たないと、こっちの負けが確定する。

パンドラの手元にある蘇生アイテムは、あと残り二つ。

俺の手元にも、「蘇生ワンド・オブ・リザレクションの短杖」があるものの、出来ればこちらを使うような事態に陥る訳にはいかないからな。》

そこまで素早く思考を巡らせた所で、ウルベルトは内心溜息を漏らす。

本当に、こんな早い段階で貴重な蘇生アイテムを消耗する羽目になるとは、本気で予想外なのだ。

一応、ウルベルトの手持ちのアイテムの中に、一つ分だけ蘇生アイテムを作る為に必要な素材があり、パンドラが持つている職業レベルの中にそれを造れるものがあるから、今回の無茶を押し通している。

もし、そうじゃなければ、泣く泣く自分の本体を取り戻すのを諦めていた所だ。

まだ、この世界の事を正確に把握していない現時点で、数少ない手持ちの蘇生アイテムを全て使い潰す訳にはいかないからである。

「……パンドラ、氷属性耐性の装備以外に、物理耐性の補助アイテムは手持ちの中にあるか？」

もしあるなら、急いで自分に装備しておけ。

そろそろ、フリーズのフォルムチェンジが終わって、後半戦に突入するからな。

あと、炎属性増幅系のアイテムはあるなら貸してくれ。

ここから先に発動する、フリーズの呪文の中に機雷設置の「ダイヤモンド・ダスト」があるんだが、こいつの排除に炎属性を増幅させて「ファイアーボール火球」を使わないと不味い。

そうしないと、機雷のせいでせっかくな隠密を発動させても、触れたら関知して凍結する以上、それを避けてたらパンドラの行動範囲が一気に狭められるからな……つと、そろそろ来るぞ！」

ウルベルトの問いに、アイテムボックスから言われたものを探していたパンドラズ・アクターも、急いで必要なものを取り出すと、そのまま戦闘体制を取る。

そして、フリーズを視界に納めたまま、ウルベルトに言われたものを差し出した。

本音を言えば、自分の行動が不敬に当たるのではないかと思わなくもないのだが、戦闘中の合間を縫う行動である以上、仕方がないとパンドラズ・アクターは割り切つたらしい。

「こちらが、ウルベルト様の^{レガシー}所望のアイテムです。

私の昔の試作品で、名もない遺産級程度のアイテムですが、二割程度の魔法の威力増幅が出来ます。

ただし、あくまでもこれは試作品なので、連続使用可能時間は三十分が限界でしょう。

この状況ですのお渡ししますが、くれぐれもご注意下さいませ。」
フリーズの動きを見逃すまいと、真つ直ぐに正面を見据えながら、手短にアイテムの説明していくパンドラズ・アクターの言葉を聞き、ウルベルトもそれは仕方ないだろうと素直に受け取った。

パンドラズ・アクターは、ウルベルトに差し出せるアイテムのレベルや効果に不満があつたようだが、伝説級がこの場に出てこない事は、最初から想定済みの話だ。

むしろ、戦闘中の合間を縫ってアイテムを請求した状況下で、例えレベルの低い試作品でも遺産級が出てきただけ凄いと、ウルベルトは考えている。

もし、聖遺物級レベルのアイテムが欲しいのなら、最初の戦闘が始まる前に用意するように指示すべきだったのだ。

だから、ウルベルトもそれに不満を抱くことなく受け取ると、素早く身に付けながらフリーズの変化を見逃さないように、意識を傾ける。

それとほぼ同時に、フォルムチェンジが終わったフリーズ

が、「霧氷」を発動した。

「パンドラ、隠密スキルを発動したら、予定通り一分後に攻撃開始だ！

ここからは、パンドラの使える接近戦スキルは全て併用して使ってくれ！

今のパンドラのレベルだと、どこまで攻撃が通るか判らないからな。

そこから二分半経った時点で、一端後退してくれるか？

記憶通りなら、「霧」フリージング・フォッグ「氷」の発動から四分後にフィールド全体へ大技が来る。

それが合っていたら、俺の記憶通りで攻略可能な筈だ。

違っていたら……様子を見ながら作戦の修正を掛けるが、死ぬ回数が予定より増えると思ってくれ。

済まないな、想定より死なせるかもしれないが……ここまで来たら後には引けないからな。」

フリージング・フォッグ
「霧 氷」の終わるタイミングを待つ間に、パンドラズ・アクターに対して必要な指

示を出すと、ウルベルトも自分の攻撃をするべく杖を構える。

《……俺が使っている「火 竜の杖」スタッフ・オブ・サラマンダーは、まだ限界まで来ていないみたいだが……

多分、この戦闘が終わる頃には、この杖も限界が来て壊れる可能性が高いな。

だが……この状況を考えたら、仕方がないと思うしかないだろう。

デミウルゴスに似てると、そう思っただけで、愛着があるんだけど
なあ……

パンドラに頼んで、使えなくても良いから形だけ維持して貰うか。

やっぱり、こいつは手元に残して置きたいからな。》

この、フリーズとの戦いの厳しさを考えたら、杖の使用耐久限界が来る可能性がある

事は、ウルベルト自身も最初から覚悟はしていた。

ただ、戦闘中に限界が来ると確実にこちらが詰むので、その点だけは注意して使用していたのだが……ここから先はそんな事は言っていられないだろう。

もちろん、最後まで折るつもりはない。

無いが、この先確実に使えなくなるのは、ウルベルトの中で確定事項として織り込み済みだった。

それ程までに、この戦いでこの【スタッフ・オブ・サラマンダー火 竜 の 杖】を酷使しているのだから。

一先ず、その事を考えるのは止めて、手元のタイマーのカウントに目を落とす。

少し思考を巡らせている間に、行動開始の時間が差し迫ってきたらしい。

最初の四分が間違いないか、確認するためのタイマーのカウントがそろそろ五十秒を越える。

それを見て、ウルベルトはカウントダウンを開始した。

「……五、四、三、二、一……GO！」

カウントが終わると共に、ゴーサインを出したウルベルトの言葉に従い、パンドラズ・アクターの姿が闇に同化するように消えていった。

式式炎雷さんの隠密スキルを前回にして、フリーズに特攻を仕掛けたのだろう。

ウルベルトは、残りの三つのタイマーのセットした時間に間違いないか、もう一度目

で確認する。

どのタイムマーも、五秒前からカウントが入るようにセットしたから、タイミングを間違える事はないだろう。

しかし、やはり失敗したら大惨事の可能性も高いだけに、これに関しては気を抜く気にはなれなかった。

もちろん、その間にも続いているパンドラズ・アクターとフリーズの戦いの様子は、きちんと視野に納めて状況を把握するのは忘れていない。

フリーズの攻撃は、現在「アイスブレス氷の息吹」と「アイスボール氷球」を使い、「ピアーシング・アイスクリル穿つ氷柱」を発動するタイミングを待っている状況だ。

「ピアーシング・アイスクリル穿つ氷柱」そのものには、リキャストタイムは存在していない。

だが、フリーズの中では技の発動のタイミングが決まっているらしく、「フリージング・フォッグ霧氷」のリキャストタイム中に発動するのは一度だけ。

後半戦から登場する魔法のタイミングと重なれば、そちらが優先される事から考えると、確実に最初の四分間に一度発動するだろう。

ウルベルトの予想では、「フリージング・クリスタルフリージング・クリスタル」の発動する直前、三分から三分半頃が一番怪しいと思っていた。

どうやら、パンドラズ・アクターも同じ様に予想していたらしい。

丁度三分が来る直前に、前半戦に見たフリーズの「ピアーシング・アイシクル穿つ氷柱」の発動モーションが見えた途端、回避行動に入っていた。

後半戦開始時点で、地を這うように移動と攻撃を繰り返していた事から、この数分間のフリーズの攻撃は全て床面に集中している。

それは全て、パンドラズ・アクターがそうなるように、フリーズの攻撃を誘導したからだ。

今も、「ピアーシング・アイシクル穿つ氷柱」が発動する直前まで、床面を滑るように前進し続けたかと思うと、床面に向けて発動するのを確認して、着氷地点を避けるように天井にまで駆け上がる。

そして、「ピアーシング・アイシクル穿つ氷柱」の着氷と同時に一気に下降してフリーズに一撃入れると、そのまま一気に「ディメンショナル・ムーブ次元の移動」でウルベルトのいる場所の手前へと移動していた。

それを確認し、ウルベルトも「フリージング・クリスタル」の範囲外へと移動する。

そして……

ピーツ……ピツ……ピツ……ピツ……ピーンツ!!

タイマーが、五秒前からカウントして丁度四分経過した途端、フリーズがウルベルトの記憶通りに「フリージング・クリスタル」を発動させた。

カウントが始まるとほぼ同時に、フリーズに「フリージング・クリスタル」の発動

モーションに入っていたので、ほぼ間違いないと確信はして、カウントが終わると同時に「フリージング・クリスタル」のカウントタイマーのスイッチを押してはいたのだ。

それでも、本当にフリーズが「フリージング・クリスタル」を発動するのを見るまでは、モーションを勘違いしていないか、それなりに不安がなかった訳じゃない。

だからこそ、予想が外れなかった事にホツとしつつ、パンドラズ・アクターの居場所を確認する。

こちらの指示通り、既に柱の裏の戦闘エリア外に出ているので、パンドラズ・アクターも特にダメージを受けた様子はなく、この先の行動に問題はなさそうだった。

一分間、戦闘エリア外で待機しつつ、僅か数分間で負ったダメージを回復していく。パンドラズ・アクター。

この後、一分後に「霧 氷」が来る。

ウルベルトは、そう時間を確認しながら考えた瞬間、背筋を這い上がるような凄く嫌な予感がした。

だから、「霧 氷」の発動を気にすること無く、そのまま次の大技までの四分間を物理攻撃に徹しようと、準備をしていたパンドラズ・アクターに対して、鋭く声を掛ける。

「聞いてくれ、パンドラ！」

次の大技まで四分あるが、「フリージング・クリスタル」の後の攻撃は、接近戦ではなく少し離れた場所から弓を使った遠距離にしてくれ！

……どうしても、嫌な予感がするんだ。

この洞窟は、結構凍っている場所がある。

もし、「霧 フリージング・フォッグ 氷」の後タイムラグ無しでそこ目指して「穿つ ピアーシング・アイシクル 氷柱」が来たら、今

のお前じやそのまま死亡確定だ。

その代わり、「穿つ ピアーシング・アイシクル 氷柱」が発動したら、そこから先は接近戦に切り替えていい。

とにかく、フリーズにある程度ダメージを与えるまでは、出来るだけダメージ回避で頼む！」

今に浮かんだ直感のまま、ウルベルトは矢継ぎ早に指示を飛ばすと、己も素早く攻撃準備に入る。

まだ、この後半戦は始まって五分も経っていない。

フリーズに与えたダメージは、殆んど無い状態だ。

そんな状況下で、パンドラズ・アクターが死亡したりしたら、それこそこの先がかなりきつくなるだろう。

むしろ、フリーズに与えるダメージが減ったとしても、ここは攻撃を控えて様子を見るべきだ。

そう判断したからこそ、ウルベルトはパンドラズ・アクターが出来ない分の攻撃に変わる魔法攻撃をする事を選択した。

ウルベルトが選んだのは、チェイン・ドラゴン・ライトニング【連鎖する龍雷】だ。

現在、ウルベルトに残っているMPを考えると、グランドカタストロフ【大災厄】を放つ前に、杖の力を使わずに使用可能な魔法は、第七階位で五発が限界だ。

しかも、MP残量的に補助魔法を掛けて強化する事も出来なければ、多重展開させる事も出来ない。

それなら、耐性がある炎や氷属性よりも、確実に効果が通り易い雷属性を選ぶのは当然だろう。

ファイアボール【火珠】を攻撃の主体に置いているのは、あくまでもスタッフ・オブ・サラマンダー【火竜の杖】の装備効果でM

P消費せずに使えるからだ。

それがなければ、火属性以外でアイテムなど別の手段で攻撃していた所である。しかし、そんな事を言ってもいられない状況だと、ウルベルトは素直に思った。

そもそも……今回の一件は、ウルベルトの事情にパンドラズ・アクターを巻き込んだ様なものだ。

アイテムやMPなどを含めて、殆ど自分には手持ちが無くて仕方がないとはいえ、殆どパンドラズ・アクターからの提供によって、この戦闘が維持されている。

それなのに、肝心のウルベルトが出し惜しみをしている場合ではないだろう。

もし、下手に出し惜しみをした結果、蘇生可能な限界までパンドラズ・アクターを死なせて蘇生出来なくなってしまうとしたら……モモンガに対して顔向け出来なくなる何て、そんなレベルの話じゃ済ませられないのだ。

だからこそ、ウルベルトはパンドラズ・アクターに遠距離攻撃を選択させている様子見の数分間は、自分が攻撃の回るべきだと考えたのだから。

パンドラズ・アクターも、今回の戦闘に関する指示は全てウルベルトに従う事を決めているからか、武器を指示通り弓に変えて第三位階の雷属性魔法〔雷撃〕ライティングが付与されている矢を用意している。

もちろん、それは完全に使い捨てのアイテムだ。

矢は、基本的に戦闘中に回収になんてまず出来ないし、戦闘後に回収しても使えなくなっている事が多いアイテムだから、自然とそういう扱いになっている。

そんな矢に、〔ユグドラシル時代〕では使えない下位雷属性魔法の〔雷撃〕ライティングを付与しているだけで、とれだけ手間を掛けて無駄なことをしているのかと、ウルベルトは思わなくはない。

そんなウルベルトの視線に、パンドラズ・アクターは正面を見ながら首を竦めた。

「……これも、私のアイテム作成スキルのテストプロトタイプですよ。」

あくまでも、矢にどのレベルまで属性魔法を付与する事が出来るのか、それを調べるのが目的だったので、こういう下位の物とか沢山あるんです。

お陰で、この戦いでは使える手数が増えましたし、かなり助かってますよ。

この手の在庫は、まだアイテムボックスを探せばそれなりに沢山ありますから、それほど気になさらないで下さいね、ウルベルト様。」

弓に矢を番えながら、パンドラズ・アクターはそう口にするのと、ピンツと背筋を伸ばしつつ一気に弓を引き絞り、付与したライトニング「雷撃」を発動させながら、そのまま矢を放った。

その射は、かつて「爆撃の翼王」と呼ばれたペロロンチーノを思わせる姿で、つい懐かしい気持ちになる。

とは言っても、今は感傷に浸っている場合ではないので、直ぐに気持ちを切り替えるのと、ウルベルトも呪文を直ぐに唱えて、パンドラズ・アクターの放った矢の追加攻撃になるタイミングを狙った。

「雷の矢と共に地を這うように走れ！轟音を響かせし雷の竜よ！連鎖する龍雷!!」
チェイン・ドラゴン・ライトニング

ライトニング「雷撃」を纏った矢に、追従するように走るチェイン・ドラゴン・ライトニング「連鎖する龍雷」は、そのまま絡み付いて矢を飲み込むと、威力を増しながらフリーズへと着弾した。

それを視界に納めつつ、次の攻撃の矢を番えるパンドラズ・アクター。

もう一度、同じ様にウルベルトも【連鎖する龍雷】チエインドラゴン・ライトニングを重ね撃ちし、更にダメージを与えることを選択した。

結果として、こちらが放った二度の矢と魔法の攻撃は、補助魔法による強化に近い威力を得た事により、フリーズに予想より大きなダメージを与えたいらしい。

「リアアアアアア!!」

フリーズが、中ボスモンスター特有の怒りを示す声を上げる。

それと同時に、吹き上がる強烈な冷気と殺気。

次の瞬間、ウルベルトが予想していた通り、「霧氷」フリージング・フォッグの効果^{フリーズ}が切れた直後に

【穿つ氷柱】ピアッシング・アイスピラーを天井に向けて放ってきた。

これは、凍り付いた天井に向け「穿つ氷柱」ピアッシング・アイスピラーを放つ事で、こちらの視界を奪い主軸となる弓の攻撃を封じる効果を狙ってきたのだろう。

「穿つ氷柱」ピアッシング・アイスピラーが当たった衝撃で、天井の一部が粉碎され煙を上げながら、下へと降り注いでいく。

それを見た瞬間、パンドラズ・アクターは手にしていた弓をアイテムボックスに放り投げると、隠密スキルを発動させていた。

確かに、現状は弓を射たり魔法を使ったりするには不向きな状態だが、視界が塞がれているのはフリーズも同じ事。

パンドラス・アクターから見ても、これはチャンスだと判断したのだろう。

元々、フリーズが【穿ピアッシングつ氷柱アイシクル】を発動した後は、接近戦に切り替えても構わないと、ウルベルトからも指示を出していたからこそ、パンドラス・アクターはこのタイミングを見逃さなかった。

「……ホント、流石は我らがギルマス謹製のNPCだよな。」

実戦経験なんて、こちらに来てからのたった一戦だけで殆ど無い癖に、この度胸と判断力なんだから。」

正直、少しだけ感嘆しつつそう呟くと、自分の視界を確保するべく【火ファイア珠ボール】を連続で放つ。

出来るだけ早く視界を確保し、次のフリーズの攻撃に備える必要があるからだ。

次の大技まで、ウルベルトの予測通りなら残りの時間は二分弱しかない。

しかも、次に来ると予想される大技は、全方位空中機雷の【ダイヤモンド・ダスト】だ。先程から、フリーズに対して特攻を仕掛けているパンドラス・アクターに、戻るタイミングをきっちり知らせないと、確実に死に戻りさせる事になる。

そう、頭ではきちんと考えていた筈なのに……

次の瞬間、フリーズからこちらの向けての【氷アイスの息吹ブレス】と【氷アイス球ボール】を交互に使った乱打攻撃を受けた途端、自身の防御を優先せざるをなくなつた。

もちろん、フリーズが放つ【氷の息吹】^{アイスブレス}と【氷球】^{アイスボール}は、距離的に考えてもウルベルトに直接届く事はない。

だが、ウルベルトがいる場所の数メートル手前までなら届く。

その為、気付けばウルベルトがいる場所の手前が、全て凍り付いている状態になっていたのだ。

この状態で、【^{ピレーシング・アイスクル}穿つ氷柱】を向けられたら、確実にウルベルトは大ダメージを受けてしまうだろう。

流石に、この段階でその状況になるのは、到底許容出来なかった。

それを回避するには、手前の凍結部分を火属性魔法で解凍するしかない。

当然だが、一気に周囲の凍結部分を解凍すれば、大量の水蒸気が発生する訳で。

そのまま、洞窟内の冷気によって冷やされた水蒸気が、霧となって視界を覆い隠してしまうのも、これまた当然の話だった。

更に、大量に発生した霧が、このタイミングでどのような効果をもたらすかも。

「……ちつつ、視界が！」

視界を覆い隠す霧に、ウルベルトが眉を潜めた瞬間、次の大技までのカウントダウンが始まった。

フリーズのモーションは、間違いなく【ユグドラシル時代】に見せた【ダイヤモンド・

「ダスト」である。

ピーッ……ピーッ……

「……って、しまった！」

こんな状況で、「ダイヤモンド・ダスト」が発動したら……確実にパンドラは死に戻りだ！

こつちに早く戻れ、パンドラ!!」

ピーッ……ピーッ……

慌てて自分も柱の陰に移動しつつ、叫ぶように指示を飛ばすウルベルトに対し、パンドラズ・アクターは口の端を上げるような笑みを浮かべたかと思うと、そのまま戻る事なくフリーズへ向けて、モーションを起こすフリーズに剣を使った連撃を決める。

大技固定のモーションは、攻撃を受けたとしても崩れる事はない。

どう考えても、この段階で戻る事が難しいオーバーステイだ。

ピーッ……ピーンッ!!

《……くっそ！ダメだ！》

幾ら「ダイヤモンド・ムービー次元の移動」を使ったとしても、もう間に合わない!》

咄嗟に、ウルベルトがそう思った瞬間、大技までの最後のカウントが終了し、フリーズは「ダイヤモンド・ダスト」を発動させていた。

パキツ、パキ……、パキンツ……………

洞窟に立ち込めた水蒸気を、一気に凍らせて空中にキラキラと氷の結晶化させて機雷として浮遊させていく。

そんな中で、パンドラズ・アクターは武器を苦無へと変更し、四方八方へと合計十二本とフリーズへ二本投げ付けていた。

既に、空中に逃げ場の無いほど大量の機雷のある中でそんな動きをすれば、避けられずに触れてしまうのは当たり前だ。

むしろ、この浮遊している氷の結晶の空中機雷は、機雷の中で動くものがいたら自動的に引き寄せられる仕組みのため、動けば動くほど集まってくる質の悪さがある。

本来ならば、投擲した苦無だって氷の結晶に触れば凍結する筈だろうに、凍結しなかったのは苦無自身が炎を纏っていたからだろうか。

その為、自然と熱を放つ苦無を避けた分も合わせて、機雷の中で動くパンドラズ・アクターへと、まるで吸い寄せられるように集まっていく。

唯でさえ、避けるにいくほど密集しているのに、更に集まれば避ける事なんて出来る筈がない。

そうして……避けられずに氷の結晶が触れた場所から、パンドラズ・アクターの身体は一気に凍り付いて爆砕していく。

立て続けに凍り付き、爆砕していく身体の痛みは半端がない筈だ。

それでも、氷の結晶から受けるダメージを一切無視して、全ての苦無を投擲した。パン
ドラズ・アクターは、最終的に全身を凍り付かせ爆砕されながら、最後に一つの言葉を
口にした。

「エクスプロージョン爆裂」発動！」

その途端、洞窟の中を大きな振動と共に、冷気を一気に掻き消す程の灼熱の爆風が覆
い尽くしていた。

憂氷と凍結の女帝フリーズ 後半戦 2

柱の後ろに隠れた状態で、ウルベルトは自分の読みの甘さを痛感させられていた。

まさか、「ダイヤモンド・ダスト」が来るのが解っていないながら、それでも脱出するタイミングを無視して、死亡覚悟でパンドラズ・アクターが攻撃をし続けるとは、ウルベルトは思わなかったのだ。

まだ、後半戦が始まって九分足らずしか過ぎていない。

その段階で、パンドラズ・アクターを死亡させて二つ目の蘇生アイテムを消費するつもりなど、ウルベルトには無かっただけに、かなり痛い損失だった。

だが……パンドラズ・アクターが無理を押し通して、最後の苦無の投擲と追加効果の開放をしてくれたくれたお陰で、フリーズに割りと大きなダメージを与えつつ、「ダイヤモンド・ダスト」の効果をほぼ無効化出来たのも、また事実で。

頭では、そうやってパンドラズ・アクターの行動理由が理解出来るものの、それをそのまま素直に受け入れるのは、ウルベルトには難しかった。

「……もちろん、俺にだって解っているさ。」

俺が、この身体になっている事で、どれだけパンドラに負担をかけているか位。

それでも、こんな風に最初から死に戻り前提の特攻なんて、無茶な真似をパンドラにさせるつもりは、欠片もなかったんだぞ。

パンドラは、モモンガさんに無事に返さなきゃいけない、大事な預かりものなのに……

いや……俺がパンドラを『死なせる』事を前提に、最初の段階で作戦を練ったのは事実だ。

だから、頭の良いパンドラはより有効性の高い攻撃を通すために、自分が死に戻りする事になるのを承知で、それを実行したに過ぎない。

……チツ！

パンドラは、NPCである自分の命よりも俺達を優先する傾向が強いだろうと、合流した時の言動から気付いていたのに！

これは……俺の失敗だな……

俺たちが命じたら、あっさり命を差し出す事を念頭に置いていなかった俺の油断だ。だから、その責任も含めて俺が負うべき物は大きい。

濟まないモモンガさん……俺達は、この何倍もの責任や役割などと言った重責を、モモンガさんに一人で背負わせてしまっていたんだな……》

この姿になった事によって、幾つも生じてしまっている予想外に強固な制限お陰で、

ウルベルトの出来る事もかなり少ない。

レベルこそ、本来の姿の時と同じ百のままだが、実際にこう言う実戦をすれば威力が下がっている事が分かる。

「ワールド・ディザスター」の効果でMP消費量が上がる代わりに威力が増す筈の魔法が、どれも消費率をそのままに、効果は普通の魔法と変わらないレベルまで落ちていたのだ。

冷静に考えれば、前半戦の段階でそれは判明していた。

前半戦使った「大災厄」グランドカタストロフで証明されていたのだから。

本来、「大災厄」の威力ならば、フリーズの残りのHPを半分をきれいに削り落とし、速攻で「フォルムチェンジ」を引き起こしていた筈なのだ。

だが、実際は削り落としきれずに、パンドラズ・アクターに追撃をさせている。

つまり、ウルベルトの攻撃力は本来から比較して一割程度落ちてしていると換算すべき所なんだろう。

その事を、戦いながら冷静に把握したからこそ、パンドラズ・アクターはウルベルトの指示に従って下がることが出来なかったのだ。

これは、間違いなくウルベルトのミスだった。

もつと早い段階で、自分の攻撃力が下がっている事に気付いていれば、パンドラズ・ア

クターに特攻させなくて済んだかもしれないと思うと、自分の状況把握の甘さに腹が立つ。

苛立ちと共に、握り締めた拳を柱に打ち付けた途端、そつとそのこ拳を握り締める者がいた。

この場で、ウルベルトに対してそんな事が出来る者など、たった一人しかいない。スツと視線を向ければ、予想通り蘇生が終わつた。パンドラズ・アクターがそこに居た。ウルベルトに対して、とても申し訳なさそうな顔をしつつ、それでも真つすぐに視線を外す事無く見据えているパンドラズ・アクターの様子を見れば、自分が叱られるような真似をした事を承知しているようだ。

だからこそ、自分の不甲斐なさに苛立ちを抑えられず、柱を殴ってしまったているウルベルトを止めに入つたのだろう。

「……どうか、お怒りを御鎮め下さい、ウルベルト様。

ご命令に従わず、勝手な真似をいたしました事を、ここに深くお詫びいたします。ですので、そのように御身を傷付けるような真似はなさらないでくださいませ。」

己の小さな拳を、押し抱く様に包み込みながら、その場で膝を付いて懇願する言葉を吐く。パンドラズ・アクターの姿に、ウルベルトは大きく息を吐く事で気を落ち着けようと意識した。

蘇生したパンドラズ・アクターの姿は、かなり酷い見た目だと言っているだろう。

フリーズの「ダイヤモンド・ダスト」による機雷攻撃を、全身で受けたのだから当然の話なのだが、それでも見ているだけで痛々しかった。

だからこそ、ウルベルトは唸るような口調でパンドラズ・アクターに宣言する。
「いいか、俺は怒っているんだからな？」

このフリーズとの戦いが全部終わったら、絶対にお前に対して説教する！

お前が本気で反省するまで、説教はやめないからな？

その為にも、お前を死なせるのはあと一回だけだ。

フリーズのHPを、グランドカスターロフ「大災厄」で倒せるところまで持っていけたら、パンドラを死なせたとしても容赦なくぶつ放す。

だから、そこまでは絶対に死ぬじゃねえぞ？

判ったら、さっさと装備を整えて回復してくれ。」

我ながら、ぶつきらばうな口調での宣言だったのにも拘らず、パンドラズ・アクターは嬉しそうな笑みを零して頷いた。

ウルベルトが言いたい事を、察しがいいパンドラズ・アクターは理解してくれたのだろう。
アイテムボックスから、駄目になった分の装備の予備を取り出し、素早く身に付けて

いく。

逸んな準備に忙しい中で、パンドラズ・アクターは戦闘準備がある程度整ったと、こちらに向き直った。

「……ウルベルト様。

大切な事なので、今、この場で申し上げておきます。

私は、あなた様の為にこうして戦える事がとても嬉しいのです。

あなた様と共に、轡を並べて戦える事がとても楽しくて、実はわくわくと心が弾んでおります！

ええ、なんて素晴らしく誇らしい事なのでしょいか。

これこそ、ナザリツクに仕える僕にとって最高の誉れと言わずに、何を誉れと言うのでしょうか？

それ程までに、私は自分が誇らしいのです。

ウルベルト様のために戦い、死力を尽くして敵と対峙し、あなた様の盾となって死ぬ事が！」

精神的に次第に高揚して、少しばかり声高に宣言する様子は、少しばかり本来のパンドラズ・アクターの言動に近い気がする。

もちろん、そのことを指摘したりしないが。

そんな事をウルベルトが考えているとは思わないのか、更にパンドラズ・アクターの言葉は続く。

「……私は、宝物殿の財貨を守る守護者として、決して至高の御方々の為に戦う事を許されませんでした。

そんな私が、私だけがあなた様を守るために戦えると言う、この感極まる程の喜びを、お分かりいただくのは難しいでしょうが……

それでも、あなた様が私の死を悼んでくださるからそこ、私はそんなあなた様のために何度も死ぬ事を厭わないとだと、それだけ判っていただければ、それだけで嬉しく思います。

ですので、どうか存分に私の事をお使いくださいませ。

私も、あなた様の元でこの戦闘から様々な事を学ばせていただいております！

もし……私の行動に失態がありましたら、それは纏めて後でお叱りください。

私もまた、自分に対する不出来さへの嘆き等は、全て後で致しますので。

そうですね……どうせなら、派手に泣き喚きましようか？

まるで、人間が嘆くように。」

自分も意思を持って生きていますから、と少し朗らかに笑うパンドラズ・アクターに、少しだけウルベルトも笑った。

ウルベルトか思ったよりも、パンドラズ・アクターには明確な意思を持っている部分があるらしい。

ただ、それでも譲れない部分はあるのだろう。

ピツと指を立てると、ウルベルトに向けて言い募った。

「……それはそれといたしまして！

良いですか、ウルベルト様。

今は、優先するべきはあなた様です。

不安定極まりないその姿で、命を落とす様な事があれば、もしかしたら条件が揃わないと蘇生が不可能かもしれませんからね！

あなた様と、共に旅をする未来を知ってしまった私は、もう一人になるのは嫌です

……

ですから、何があってもあなた様の事は、この私がお守り致します。

……それにしても、これだけ時間があるのに全く攻撃してきませんね、フリーズは。

そろそろ、『ダイヤモンド・ダスト』から二分が過ぎるはずなのですが……」

ふと、気付いたことを口にするパンドラズ・アクターに、ウルベルトは苦笑を浮かべながら理由を教えてやる。

この辺りは、今後の状況把握で変化する可能性はあるが、変わらない可能性も高い話

だ。

知っていても損はない知識だろう。

「……ああ、今はフリーズの攻撃範囲外に俺たちが居るからな。

流石に、敵対する相手が戦闘領域に不在の時は、あちらの攻撃も止むさ。

ただ、リキャストタイムカウントされているから、こうして戦闘領域から出ている場合は、気を付けないと戦闘領域に入った途端に大技を喰らって即行で死亡なんてケースがない訳じゃない。

この世界で、フリーズのようなリキャストタイムが発生するような魔法を使う奴が、「プレイヤー」関係者以外で居るとは思えないが、な。

まあ……どこでどういう落とし穴があるか、それこそ分からない状況だから、これも知識として知っておいた方がいいだろう。

と、そろそろ動かないと、本気で不味いか……」

【ダイヤモンド・ダスト】が発生してから約二分半か経過し、予測通りなら次の大技まで三分半しかない。

そして、次に来る予定なのがフリーズ最大の大技、【氷結スノーストーム・オブ・フリーズング】の吹雪だ。

この技に関しては、アイテムや補助魔法で対策可能な部類だが、そろそろ発生する【霧氷フリージング・フォッグ】による補助魔法の無効化をされた直後に【穿つ氷柱ピアッシング・アイツクル】来る可能性が高く、

それを回避した所への【氷結の吹雪】という、最悪のコンボが来る予定なのだ。

これは、流石に酷い連続コンボであり、出来れば接近戦は避けた方がいいだろう。

もちろん、氷属性耐性アイテムの装備すれば、【氷結の吹雪】を躲す事も可能だが、他の二つのコンボを考えると、一撃食らえばほぼ装備が使い物にならなくなるのは確定だった。

それならいっそ、最初から攻撃範囲内に入らなければ良い。

「……パンドラ、さつき使った矢はまだ余裕はあるか？」

もし、ここである程度まで使い込める余裕があるなら、次の大技までの攻撃はあの矢で頼むわ。

どう考えてえも、パンドラに接近戦をさせるには、不向きなタイミングでの連続コンボが来る可能性が、特に高いからな。

さつきも言ったが、俺はお前をこの先後一回、【大災厄】絡みでしか死なせないと決めたんだ。

その為に取りれる手段は、全て実行したい。

アイテムの残数問題もあるのは、俺だって判る。

それでも……俺はここでこれ以上死なせて後悔をしたくないんだ。」

その言葉に、パンドラズ・アクターは少し考える素振りを見せたかと思うと、ウルベ

ルトは手持ちのアイテムから幾つか矢を取り出す。

「どうやら、こちらの提案を素直に受け入れてくれたらしい。」

他にも、幾つかアイテムを取り出すと、ウルベルトへと差し出した。

「ウルベルト様、是非ともこちらのアイテムをお持ちください。」

「こちらは、炎属性の投擲アイテムです。」

一つ投擲すれば、着弾地点から半径二メートルは炎が立ち上ぼりますので、上手くお使ください。

「ここから先は、ますますウルベルト様のMPの残りが厳しくなると思われますので。」

もし、先程と同じような状態が起きた場合、魔法が使えずにウルベルト様が大きなダメージを受けてしまうかもしれません。

そうなった場合、最悪ウルベルト様が「グランドカタストロフ」を放てず、こちらが全滅して終了と言うケースも考えられます。

それを避けるためにも、こちらのアイテムは使いきっても構いませんので、遠慮なくお使いください。

「こちらは、ここを押して投げれば作動します。」

「押さなければ、アイテムは何をしても誘爆しないのでご安心ください。」

小さな手榴弾のような小型アイテムが、全部で五個。

これだけあれば、ここから先の杖の酷使を控えられるだろう。そんな事を考えつつ、ウルベルトはタイマーに目を向けると、ここから先の事を考える。

ウルベルト達が、こんな会話をしている視界の先にいたフリーズは、リキャストタイムを過ぎた「霧氷」を発動させていた。

他の攻撃を止めていたフリーズが、「霧氷」を発動させたのは、何となく理由がわかる。

こちらの攻撃が読めない分、フリーズはここに関しては攻撃ルーチンを守ったのだから。

こちらが、転移魔法もしくはアイテムを持つている事は、フリーズも理解している。

だからこそ、少しでもダメージの大きい接近戦をさせる回数を減らす為に、「霧氷」を発動したのだ。

あちらも「霧氷」を囿にして、こちらが効果の切れたタイミングで物理攻勢に移るのを狙い、「穿つ氷柱」を打ち込むつもりなのかもしれない。

「……まあ、そんなに簡単にダメージを受けてやるつもりはないんだかな。」

首を竦めるウルベルトの横で、パンドラス・アクターが先程とは効果が違う矢を弓につがえている。

矢に付与された魔法効果は第三位階の【火^{ファイア}珠^{ボール}】だ。

フリーズの火属性耐性を考えると、このまま矢を射るだけでは、攻撃力が足りないの
でダメージを与えるのはかなり厳しいだろう。

それでも、パンドラズ・アクターがその矢を選んだのは、フリーズの頭上にかなり鋭
い氷柱が幾つも発生していたからだ。

彼の狙いは、【火^{ファイア}珠^{ボール}】で頭上の氷柱の根元を熱で破壊しながら射落とし、物理的ダメー
ジを与える事である。

先程からの戦闘で、パンドラズ・アクターはフリーズが物理的な攻撃に対して、魔法
を使用した攻撃よりもダメージが大きい事に気付いたのだろう。

これは、ウルベルトが直接言葉に教えたことではない。

パンドラズ・アクターに対して、確かに直接攻撃をするように指示は出したが、自分
では魔法攻撃を主に置いていた。

もちろん、魔法詠唱者^{マジックキャスター}として、物理攻撃の威力が少ないウルベルトとしては、それは
当然の選択なのだが、そこから遠距離からの物理攻撃を選択したのは、パンドラズ・ア
クターの機転だと言っている。

次の大技まで、残りは約二分。

今の戦闘の流れなら、フリーズは【穿^{ペネトレーティング}つ氷^{アイス}柱^{シクル}】をこの短時間内に使ってこない可能

性が高いだろう。

パンドラズ・アクターが、意図的に前衛として前に出なくなつた事で、攻撃範囲内に敵が居ない状態になり、フリーズもそここの威力を持つ技の攻撃を控えているのだと、ウルベルトには予測出来た。

《……そうだとしても、だ。

フリーズの攻撃は、本来のものに比べて幾ばくかの違和感があるんだよな……
はつきりとは言い切れないが、こちらの何かを探っているとどうなのか。

どちらにせよ、ある程度まであつちの体力削らないと、抵抗されるから捕獲とかも出来ないんだよな……》

そこまで考えた所で、ふと浮かんだ違和感。

俺が「ユグドラシル時代」にフリーズ相手にして来たのは、討伐戦であつて捕獲メイ
ンの戦いじゃない。

それなのに、なんで捕獲と言う単語が頭の中に出てきたんだろう？

不思議に思いはしたが、今すぐにその答えが出るなら、こんなに違和感を感じたまま
に放置したりしてない。

本来なら、じっくり時間を掛けて出すべき答えのような気もするのだが、残念ながら
現在は戦闘中でそんな余裕などない以上、さらに考えるべきピースが出てきてからその

先を考えるしかないだろう。

対処療法的な対応だが、こればかりは情報が足りないのだから仕方がなった。

ウルベルトが、自分の思考に囚われている間にも、状況は刻々と変化していく。

パンドラズ・アクターは、迷う事なく火属性と風属性の矢を交互に射ることで、付与された魔法の相乗効果を狙いつつ、物理攻撃になりそうなポイントも探しているようだった。

弓を主体に置いた攻撃に切り替えて事で、フリーズからの直接的な攻撃は回避出来るから、自分の被ダメージと相手へのダメージソースを、きつちりとコントロール出来る来ていると考えるべきだろう。

こうして、遠距離からの攻撃をしていると、後で手痛いしつぺ返しを食らいそうなのだが……これも、確認しつつ良く注意しておくように、釘を打っておく必要があるだろう。

そう、ウルベルトが口を開こうとした瞬間、腕に付けたタイマーが十秒前を告げた。

思っていたよりも、自分の思考に意識が向いていた事に気付いたウルベルトは、小さく首を竦めると改めてタイマーを見る。

その間にも、カウントは進んでいて、のこすところ後六秒足らずと言ったところで。

視線を向ける事で、素早くそれを確認したウルベルトは、小さく目を細めるとカウ

トする為に口を開く。

「……パンドラ、スノーストーム・オブ・フリージング【氷結の吹雪】まで、後、五、四、三、二、一……来るぞ！」

その途端、視界全てを白の暴風が覆い隠していた。

この技の厄介な所は、この洞窟なら俺たちがいる場所も全て攻撃範囲内であり、発動中は下手に動く方が追加ダメージを受ける為、何も出来ないことだろうか？

一応、アイテムや装備で対策可能だが、これを忘れているとまず間違いなく即死効果を持つ吹雪とか、腹立つレベルなんて話じゃない。

しかも……

「……アイテムや装備で回避可能な回数は、必ず一回だけしか出来ないとか……『ふざけんじゃねえ!!』てレベルだもんな……」

近くに居ることは判るが、姿が見えないパンドラズ・アクターの事を考えつつ、小さく溜め息をこぼした。

今回、パンドラズ・アクターにどれだけのアイテムを使わせたのか、考えるだけで恐ろしい数だろう。

今使っている装備だって、スノーストーム・オブ・フリージング【氷結の吹雪】を受けた分だけ耐久性はかなり下がっているし、この戦いの後で修繕するのだとしても、もとのレベルまで戻すことは難しい筈だ。

そう思うだけで、ウルベルトはパンドラズ・アクターに対して頭が上がらないと思っ
ている。

何せ、全てがパンドラズ・アクターの私物から出ている事もあって、この損失の大き
さはそう簡単に埋められないと、ウルベルトは思うのだ。

しかし……パンドラズ・アクターにその事を直接言つたとしても、本人は「ウルベル
ト様の役に立つたのだから構わない」と笑うだろう。

あくまでも、「自分の資産は、至高の方々の役に立つ為にあるのだから」と、何もかも
平気で差し出す献身さは、時に危険だとウルベルトは本気で考えていた。

この危うさは、この度の間に少しずつ修正していくとして、だ。

《……絶対に、ナザリックに戻ったら、今回の分も含めて旅の間にパンドラに出させる事
になるアイテムや費用は、該当するアイテムそのものか、それに相当する金額で補填し
てやる！

絶対に、目下の者から搾取する側になって堪るか！》

そこまでウルベルトが考えた所で、視界を覆い隠していた白の暴風が急速に収まって
いく。

視界が晴れた先には、先程までと変わらずに佇むフリーズと、その左斜め手前に立ち、
手にした雷を纏う細剣レイディテを構えたパンドラズ・アクターがそこにいた。

《何時の間に!?!》、とウルベルトが思う間もなく、パンドラズ・アクターは手にしていた剣を使い、鋭い連続突きを放ちながら剣に付与された雷属性の魔法を解き放つ。

「ザ・ブレイクダウン・サンダー断絶する雷撃!」

この魔法は、対象に必ずクリティカルを与える雷属性の攻撃を発動させる代わりに、この魔法を付与した武器も破壊する。

故に、自分の主力武器には絶対に付けられない魔法だが、その効果の有効さから、そこそこのドロップ武器に切り札として、補強に使う者はそれなりにいた。

そう考えると、あれもパンドラズ・アクターの能力確認の為に作成されたものなのだろう。

あれも、それなりに悪くない遺産級レガシーの細剣レイピアだった。

「……それを、ここで使う。パンドラの度胸には感心するしかないね。」

これで、今のパンドラの全装備は、使い物にならなくなった筈だ。」

しかも、フリーズにクリティカルを入れると同時に、一気に後退してこちらに戻ってくる。

それを見て、ウルベルトは感嘆した。

成る程、確かにウルベルトの言葉を聞いて、自分がダメージを受け難い様に、アイテム消費を覚悟でコントロールをしているらしい。

例え遺産級^{レガシ}でも、流石にクリティカルを食らえば、ある程度のHPは削れる筈だ。

これに、先程までの攻撃でフリーズに与えたダメージと合わせれば、かなり良いところまで攻撃は通っていると行って良いだろう。

もう少しで、こちらの目標である「大災厄」^{グランドカタル}での決着が、確実に付けられるレベルまで落とせる筈だ。

だが……

《正直、この後に待っているフリーズの攻撃がかなり厳しいんだよ。

今回の「氷結の吹雪」^{スノーストーム・オブ・フリーズ}のタイミングがあつていた事で確定したが、この次の「フリージング・クリスタル」の前に「霧氷」^{フリージング・フォッグ}が発生して連続技になるんだ。

しかも、その前に「穿つ氷柱」^{ヒールディング・アイス}も発動出来るタイミングが残っているから、更に怖い。

三連続で来られたら、本気でどれかが回避不能だと思えるからな。

だが……それを覚悟でパンドラは突っ込むと、最初から想定しておいた方がいい。それ位の覚悟を決めないと、こっちが負ける。》

その為にも、自分の回りの氷を排除しておくべきだと、ウルベルトはパンドラス・アクターから貰ったアイテムを、スイッチを入れながら軽く投擲していく。

先程の「氷結の吹雪」^{スノーストーム・オブ・フリーズ}の効果によって、洞窟全体が凍結してしまっているのだ。

その解除をしないと、全体にダメージソースを残す事になるだろう。

この状況を放置していたら、この後のフリースの攻撃を増長する可能性が大きいのだ。

そう考えたからこそ、ウルベルトは後の事を考えずに手持ちのアイテムを全て投擲する。

どちらにせよ、次の大技である「フリージング・クリスタル」まで残り約一分。

もちろん、フリーズとてただ素直にこちらの好きにさせてくれる事はなく、アイスボール「氷の息吹」を放って、こちらを牽制してきた。

なので、冷静に杖を使いファイアボール「火珠」で対応しつつ、更にチェイン・ドラゴン・ライトニング「連鎖する龍雷」を放ち薙ぎ払う。

こちらがフリーズの攻撃に対押している間に、パンドラス・アクターが急いで新しい装備に変えているのを確認した時である。

フリーズが、このタイミングでビースティング・アイシクル「穿つ氷柱」を放ってきたのは。

「……冗談だろっつ!!」

それを見た途端、ギョツと目を見開き思わずそう叫んでいた。

まだ、先程のフリージング・フォッグ「霧氷」から六分経っていなかったから、確かにあり得ない話ではない。

だが、このタイピングで来るかと、ギリリツとウルベルトは歯を食い縛りつつ、再びチエイン・ドラゴン・ライトニング【連鎖する龍雷】を放ち、ヒアッシング・ウイシクル【穿つ氷柱】が直撃して発生した氷塊を迎撃していく。

その横から、炎属性の苦無を四方へと飛ばしつつ、その場から飛び出したパンドラズ・アクターが、ウルベルトの撃ち漏らし手にした炎属性の剣と苦無を駆使して潰していき……

ほぼ撃ち落とした所で、後半戦四回目のフリージング・フォッグ【霧氷】が発動した。

一応、潰しきれた事で最悪の事態は避けられたが、それでもここから三連続でのコンボが来る可能性が回避された訳じゃない。

しかし、それでもパンドラズ・アクターの行動をウルベルトは止めなかつた。

多分、ウルベルトが止めてもパンドラズ・アクターは攻撃を止めないだろうし、ここが正念場なのだ。

次に来る【フリージング・クリスタル】は、確かに触れたものを全て凍らせる結晶が発生するが、全く回避が出来ない訳じゃない。

苦無など、下位アイテムを惜しまず上手く自分の周囲に投げ付けければ、その結晶にアイテムが触れて凍る代わりに、結晶も砕けてその場から消えてくれる。

ただ、使い捨ての下位アイテムが大量に必要なので、早々使えない方法でもあつた。少なくとも、【ユグドラシル時代】にギルメン達がそれを選ぶまでには、色々と思いつ

る必要があつた記憶がある。

それはさておき。

フリーズへと、接近戦を仕掛けていたパンドラズ・アクターを見つつ、ウルベルトが援護射撃として「ファイアボール火珠」を使う体制を整えた時である。

次の「フリージング・クリスタル」のカウントダウンが始まったのは。

そのまま、「ファイアボール火珠」を「フリージング・クリスタル」の迎撃にチェンジする選択をしつつ、ウルベルトは発動タイミングを合わせる為に、残りのカウントを口にする。

「……五、四、三、二、一……ゴー、ファイヤ!!」

フリーズが発動した「フリージング・クリスタル」に合わせて、ウルベルトも「ファイアボール火珠」をパンドラズ・アクターの周囲に射出して、発生した氷の結晶にぶつけて相殺していく。

パンドラズ・アクター自身も、苦無を大量に周囲へ投げる事で、自身の行動範囲を素早く広げて、フリーズに対して一気に特攻を掛けようとした瞬間だった。

視界の先にいたフリーズが、信じられないモーションを見せたのだ。

「フリージング・クリスタル」が消える直前、「ベージング・アイスナル穿つ氷柱」が発動したのである。

狙いは、パンドラズ・アクターのいる場所ではなく、ウルベルトのいる場所から斜め右頭上。

確実に、ウルベルトを狙って来たのは、疑いようがなかった。

あの位置では、爆砕した破片がとんで来ても、ウルベルトに避けるのが難しい。

魔法での迎撃も、かなり厳しいと判断して、ある程度のダメージを覚悟したウルベルトの視界を、覆い尽くす黒い影。

「……………あつ……………」

小さく漏れた声すら、覆い隠すように優しく包み込んだそれが何か、ウルベルトには一瞬解らなかつた。

だが、それに続いて響いた衝撃音と振動、そして何かがパキパキと凍り付く音に、慌てて顔を上げたウルベルトの視界に入ったのは、あちこち身体の一部が弾け飛びながら、ほぼ全身が凍り付いていたパンドラズ・アクターの姿だつた。

「……………ウルベルト、さま……………無事で……………良かった……………」

その言葉を最後に残して、受けたダメージに耐えられず、目の前で砕け散るパンドラズ・アクターを目の当たりにして、ウルベルトは怒りのまま吼えるように魔力を収縮させたかと思うと、グランドカスターロフ「大 災 厄」を発動させるべく呪文を口にした。

「我が怒りと、深い憎しみを糧に顕現せよ、究極の災厄！この凍れる大地に滅びと憎悪、憤怒を叫び響かせろ！」

— グランドカスターロフ「大 災 厄」！—

その瞬間、ウルベルトの怒りそのものが、実体をもったエネルギーの塊に変わるかの

ように、洞窟を覆い尽くしていく。

それは、確かにウルベルトの中にあつた怒りが爆発したものだつたのだ。

その怒りは凄まじく、憎悪に変わつて魔力として放出された結果、先程よりも確実に威力は上がつていた。

ウルベルトは、その爆発的な威力を目にして、これで勝つたと思つたのだが……

全てを滅ぼすような、そんなエネルギーの奔流が消えた後、ウルベルトの視界の先には、かなりダメージを負つていたものの、今だ健在のフリーズの姿が存在していたのだつた。

憂氷と凍結の女帝フリーズ 後半戦 その結末

あれだけ、パンドラズ・アクターを何度も死なせたにも関わらず、それでもウルベルトが最後の切り札として放った「大災厄」グランドカストロフはフリーズを倒し切る事が出来なかった。これは、単純に『こちらの攻撃が、最後まで届かなかった』と言う話で済む状況ではないだろう。

正直に言って、目の前にいるフリーズは今のウルベルトの状態で、とても単身で戦える相手ではない。

それこそ、尻尾を巻いてこの場から何がなんでも逃げなくてはいけない相手だと言って良いだろう。

あの時、文字通り身体を張ってウルベルトの事を守って死んだパンドラズ・アクターの為に、絶対に生き延びる必要があるからだ。

もちろん、だからと言ってパンドラズ・アクターをこの場に残していくつもりもない。後数秒で復活する彼を連れて、残るMPをほぼ全て使い一気に転移魔法で脱出するつもりだった。

ここで、フリーズの残りのHPを確認して攻勢に出る選択肢など、パンドラズ・アク

ターが蘇生してもウルベルトには残っていない。

何故なら、パンドラズ・アクターが持っていた最後の蘇生アイテムは、蘇生してもHPを殆んど回復しないタイプの物だったからだ。

つまり、蘇生そのものは問題なく出来ても、わずかな衝撃で再度死亡してしまう程度のHPしか残っていない状態なのだ、今のパンドラズ・アクターは。

更に困った事に、ウルベルトの手元には余り回復アイテムが残っていない。

最初の段階で、パンドラズ・アクターからそれなりの数を受け取ってはいたが、その大半を使ってしまったからだ。

最初の「大災厄」の時に、絶対に自分に向かつて来る攻撃を受けたダメージを回復するのと、パンドラズ・アクターが二度目の死亡をした時の回復に。

そこまで考えた所で、ウルベルトはふと気付いた。

フリーズの攻撃が、なぜか完全に止まっている事に。

最初の時のように、一度「大災厄」を放てば、それによって発生した強力なハイトは、ウルベルトがその対象となった相手からの攻撃を一度受けられない限り、絶対に収まらない。

それなのに、こちらに対するフリーズの攻撃が止まっているのだ。

本来ならあり得ない状況に、ウルベルトが驚きながらフリーズを確認するように見る

と、こちらを驚きの表情と共に見詰めていることに気付いた。

何を、そんなに驚いているのか判らず、フリーズの姿をもう一度よく見直したウルベルトは、フリーズの身に付けている装備の中に信じられないものを見付け、思わず驚愕に目を見開く。

フリーズの胸に輝く深紅のブローチに、己の紋章が刻まれていたから。

「……オルファーナ……？」

ウルベルトの口から漏れた名を聞いた途端、その場を覆い尽くしていた筈のフリーズの殺気が完全に消え失せ。

あれほど敵意を見せていたフリーズ……いや、オルファーナは、ただただポロポロと涙を溢れさせている。

「……はい、我が主、ウルベルト様……！」

涙を溢れさせながら、それでもウルベルトの口から零れ落ちた声に反応して、小さく答えるオルファーナ。

その姿は、まるではぐれた親に再会する事が出来た、小さな迷子の少女のようだった。

フリーズは、この世界に来る前「ユグドラシル」の頃から既に、ウルベルトを主と認識していた。

その理由はただ一つ。

彼は装備品として、己の核であるブローチ『凍れる女帝の心臓』を身に付け、その上で自分の召喚主として契約していたからだ。

だからこそ、その頃から彼女に可能な限りではあるが、ウルベルトの事を守護していたのである。

それは、「ユグドラシル」の人氣が陰りを見せた頃。

少しでも人氣を盛り返そうと、運営は一つの試みに出た。

最新のアツプデートで、彼女の核である『凍れる女帝の心臓』を装備していれば、主としてフリーズの召喚が可能なシステムが追加したのである。

ウルベルト自身も、その事実を仲間のふにつと萌えに聞かされ、「試しにしてみるか」との言葉と共に正式に召喚主として登録してくれる事になった。

ただし、フリーズの主として登録するには、彼女に名前を付ける必要がある。

それを知ったウルベルトは、少し考えたあと「それなら……お前は、これからオルファーナ、だな。」と、あっさり名前を付けてくれた。

《……私の名は、オルファーナ……》

名を受け取った途端、主であるウルベルトとの間に、僅ながらの繋がりが出来たのを

感じて胸が熱くなる。

その日から、彼女にとってウルベルトは何よりも大切な「守護すべき主」となった。だが……そんな彼女の思いもよそに、気付けばウルベルトは自分をあまり使用しなくなっていく。

フリーズの―オルファーナの核を得て、暫く過ぎた頃にウルベルトは『凍れる女帝の心臓』よりも強力な装備を自力作成して、そちらを主装備に使うようになったからだ。そんな事情は、オルファーナは判らない。

ただ、自分がまた使われる機会が来るのを待つだけだったのである。

そんなある日、主であるウルベルトは自分を再び身に着け……そして、「ユグドラシル」へ訪れなくなった。

最後の時を護るものとして、主に選ばれた事を素直に喜びつつ、それでも寂しさは消えない。

消えないけれど……それでも。

いつか、再び「ユグドラシル」を訪れる事を、主が友人に約束しているのをオルファーナは知っていた。

その話をした時、オルファーナの核は彼に装備されていたから。

だから、彼らの会話を聞いていたオルファーナは、彼が戻るまで緩やかに休眠しながら

ら、いつまでもウルベルトを待つ事が出来た。

それこそ、「ユグドラシル」が終わりを迎え、ウルベルトの身体だけが単独で別の世界に飛ばされてしまっても。

彼女の意識が、緩やかな休眠から急激に覚醒したのは、ウルベルトの本体が意識のなままこちらの世界に転位して来た約二百年前の事だ。

ウルベルトの装備品として、彼と一緒にこの異世界に来たことで、自分の意識を明確に持ったのである。

そうして、休眠状態から目覚めたオルファーナは、己の護るべき主の姿を見て硬直した。

何故なら……ウルベルトの身体は傷だらけで、その上、存在を示す【魂】が完全に抜け落ちてしまっていたからだ。

その姿を見ただけで、オルファーナは心臓が止まりそうな気がした。

誰よりも大切な己の主が、こんなひどい状態になっているのにも拘らず、己はのうとうと休眠していたのだ。

それを、心の底から悔やみつつ、このままになどしておけなかった。

オルファーナは、回復系の能力を持っていない。

持っていないが、こちらの世界に来たことで一つだけ能力が追加されていた。

それは、己と同じ氷属性の回復能力をもつ存在を察知する能力だ。

オルファーナが、主を何とか回復させたいと願ったから、その能力の存在にいち早く気付く事が出来たのである。

彼女は、無意識に引き寄せられるかのように、己の主であるウルベルトの傷を癒す事を願い、その場所へ辿り着いていた。

それこそが、この洞窟の中にある「治癒の水」である。

この「治癒の水」は、中に閉じ込めた者の身体に負った傷を、ゆつくりと長い時間を掛けて癒していく。

そうして、長い時間を掛けて完全に傷が癒えると自然に氷が溶け出し、閉じ込めていたものを開放する仕組みなのだ。

それを、瞬時に見抜いた氷属性持ちのオルファーナは、この「治癒の水」にウルベルトの身体を沈めて凍らせる事を迷わなかった。

少しでも早く、ウルベルトの身体が負った傷を癒し、抜け落ちてしまっている「魂」が戻って来れる環境を作り出したかったからだ。

主の事を、傷付いたまま放置できる僕など、どこにもいない。

オルファーナは、ただウルベルトの身体に負わされた傷が癒え、身体から抜け落ちてしまった「魂」が戻ってくるまで、主の事を守りたかった。

元々、オルファーナは氷のフィールドに居るなら、食事も睡眠も不要な精霊に近い存在である。

この「治癒の氷」の中に本体を沈めてしまえば、その氷の回復能力を利用して、己の主の復活を待ちながら戦わずに佇んでいる事だつて可能だったのに。

ウルベルトの復活を待ち、氷の洞窟の中に流れる緩やかな時を過ごす筈だった、どちらかと言うも穏やかで優しいオルファーナを、氷属性ボスマンスターの「フリーズ」に戻したのは、他ならぬ人間……そう、欲に駆られた冒険者だった。

最初は、この洞窟の事など何も知らぬ冒険者が、道に迷い雨露をしのぐ為に迷い込んだだけだったのだ。

それが判っていたから、フリーズは威嚇はしたものの攻撃そのものはしなかった。

わざわざ、自分から攻撃を仕掛ける必要性を感じなかったから。

だが、それが間違いだった。

その迷い込んだ冒険者が、フリーズの存在を自分が遭難した事を隠すために大袈裟に話してまわり、それによってほかの冒険者たちがフリーズを倒そうと襲撃してくるなど、考えもしなかったのだ。

フリーズにとって、正直に言えば襲い掛かってくる冒険者など、羽虫程度の存在ではない。

追い払っても襲撃してくるから、最初は邪魔だと刈り取っていただけだった。

だから、冒険者たちからどういう認識をされているのか、想像すらしていないのだ。

冒険者たちが、いつの間にか彼女の事を自分たちが名声を得るための道具の様に、討伐対象としてしまっているなどは。

もつとも、すぐにそう簡単に倒せるだけの相手ではない事も知られるのだが。

何せ、フリーズのレベルは八十五。

この世界の住人で、彼女とまともに戦えるような相手は、上位種のドラゴンなど一部の存在しかいなかった。

そして、そんなドラゴンたちも、フリーズが何かを守って外に出る様子が無い事から、放置していたのだが……

だが……フリーズは気付いてしまったのだ。

冒険者の命を刈り取る度に、己の主であるウルベルトの器に力が蓄えられていく事に。

その事実気付いてしまえば、どんなに羽虫程度の弱い存在であったとしても、今までの様に逃げ出すものはそのまま見逃してやる訳にはいかなかった。

そんな弱い命を狩るだけで、弱り果てていた主の力がごく僅かにでも戻っていくのだ。

むしろ、もっと主の贄になる存在が、自分から訪れる事を望むようになっていった。そうして……フリーズがたった数年で千人の冒険者の命を刈り取った頃、流石に放置出来なくなつたのか、当時この世界で英雄と言われていた『十三英雄』がこの洞窟に彼女を倒すために訪れる。

最初に対峙した時から、フリーズは彼らが今までの冒険者たちとは違う事を察していた。

だが、それでもフリーズには逃げ出すという選択肢はない。

そんな事が、彼女に出来る筈がないのだ。

何より大切な、己の主であるウルベルトが、背後の「治癒の氷」の中で眠りについているのだから。

だから、絶対に譲れなかった。

絶対に負ける訳にはいかなかった。

己が死んだとしても、絶対にこの奥に通す事だけは出来なかった。

何が何でも……そう、相打ちになつたとしても倒さねばならない相手だつたのだ。

文字通り、フリーズはあらゆる魔法を使って孤軍奮闘した。

そんな彼女相手に、とうとう『十三英雄』たちは自分達では倒しきれないと、そう判断を下す。

最初は、彼女のいる洞窟ワイルド・マジックごと原始の魔法によって消し去ろうとしたのだが、彼女の背後に煌めく氷の中の存在に気付いた『十三英雄』のリーダーが、慌ててそれを押し留めた。

彼曰く、「下手に藪を突いて、もっと恐ろしい存在を目覚めさせる方が厄介です」との事だった。

それはさておき。

彼らを選択したのは、フリーズごとこの洞窟を封印する事だった。

かなり大掛かりな魔法を使い、ウルベルトの本体が眠っている【治癒の氷】ごとフリーズに封印を仕掛ける方法を、リーダーは持っていたのだ。

それは……超位魔法【ワイッシュユ・アボン・ア・スター星に願いを】である。

リーダーは、経験値使用によるレベルダウンを承知の上で、それを使う事に迷いはなかった。

フリーズを倒す事に使用しなかったのは、その奥に眠っている存在の状態が把握出来なかつたからだ。

折角、氷の奥で眠っている状態なのだから、わざわざ自分の手で厄介な存在を起こす理由も思い当たらない。

それに、封印が解かれたらすぐに判るようにしておけば、すぐに対応出来るだろう。

彼にすれば、これだけ消耗した後に対峙したい相手では、絶対になかったのだ。そうして……『十三英雄』のリーダーは超位魔法〔ウィッシュ・アポン・ア・スター星に願いを〕を使用し。その結果、ウルベルトの本体ごとフリーズは封印されていたのである。ただ、オルファーナは、ウルベルトの事を守りたかつただけなのに。

そうして、長い年月を経たオルファーナに、一つの転機が訪れる。

自分とウルベルトを封じていた洞窟に、何者かが侵入してきたのだ。

その侵入者はとても小さく、何かが出来るとは思えなかったが、不思議と気になる力を有していた。

その気配に惹かれるように、オルファーナの意識が僅かに浮き上がる。

ぼんやりと漂うような意識の中で、また眠りにつこうとした瞬間、幾つもの符術が自分に向けて発動して、強制的に意識を引き戻された。

何者かの手で、自分の封印が解かれたのだ。

そう考えた途端、オルファーナが感じたのは強い怒り。

なぜ、私達を穏やかに眠らせてくれないのか、と。

その怒りは、覚醒直後の曖昧なオルファーナの理性を飲み込み、冷静さを完全に失わ

せていた。

強欲にも、自分を倒して大切なウルベルトを奪っていかうとする者達への怒りは、二百年前に受けた屈辱と複雑に混ざり合い、彼女を再びオルファーナからフリーズへと変化させる結果を引き起こしたのである。

もし……欠片でも冷静さが残っていれば、目の前に現れた小さな存在が、一体何者でどういう意味をもつ存在なのか、見間違える筈が無かったのに。

パンドラズ・アクターが復活して、回復する間に静かに語られた、フリーズ……いや、オルファーナの口から語られた、この二百年間に関する告白に、ウルベルトは思わず頭を抱えなくなった。

彼女との契約の事を忘れていたのは、間違いなくウルベルト本人である。

もちろん、オルファーナが暴走していたのも、また間違いではない。

だが、彼女の置かれていた状況を考えれば、覚醒時に意識が封印前の戦闘の意識と混濁していたのは、むしろ仕方がない話だ。

それよりも問題なのは、この洞窟にパンドラズ・アクターと来た時から何度も違和感を感じながら、その違和感の理由が何なのか、欠片も思い当たらなかった自分の方だろう。

もし、その段階でウルベルトが気付いていれば、この戦闘は回避が可能だったからだ。そう……ウルベルトが彼女がはつきり認識出来るように、魔力を込めて彼女の名である「オルファーナ」と呼んでやれば、無事に収まった筈なのだから。

だが、それはあくまでも結果論でしかない。

現実には、こうしてお互いにお互いの事に気付かず、こちらは三度のパンドラズ・アクターの死亡と大量のアイテムの消費、オルファーナ側は死亡こそしなかったが、最終的に残りのHPが五パーセント以下までダメージを負わせる激しい戦闘をする羽目になったのだ。

とても、笑って流せる状況ではない。

今回、一番被害を受けたであろうパンドラズ・アクターから、最悪見限られても文句は言えないと、ウルベルトは考えていたのだが……彼の反応は予想とは違っていた。

全ての話を聞き終えて、パンドラズ・アクターが最初に口に出して告げのは、安堵の言葉だったのだ。

「なるほど……その様な事がウルベルト様の本体とオルファーナ嬢の身に起きていたのですね。

今のお話を聞いて、オルファーナ嬢がウルベルト様の存在に気付けなかった理由にも、納得いたしました。

その様な状況で封印されたのでは、我々の事を排除しようとするのも仕方ありません。

敵対後に、その身に攻撃目的とは言え魔力を受けてからも、ウルベルト様の事を本体から抜け出した魂が仮の器に入っている状態だと、見抜けなかった事に関しましては、多少の残念さはございます。

ですが……タブラ・スマラグディナ様の施した幾つかの術式が、一時的な魂の移行を行う際の危険度を下げる代わりに、完全にゴレムへの移行中の魂を密閉するものだった事が、ウルベルト様の魂の存在を見抜く事が出来なかった原因ですからね。

ここは、彼女を責めるのは酷と言うものでしょう。

なので……この場はお互いに良い勉強をする機会だったと考え、痛み分けと言う事でお互いに納得致しませんか？」

それが一番だと、柔らかな笑顔で訴えてくるパンドラズ・アクターに、思わずウルベルトは目を剥いてしまった。

正直、今回の一件に関して言うなら、彼は完全に巻き込まれただけの被害者なのだ。それなのに、「互いに痛み分けで」なんて言い出すとは、ウルベルトの予想外だったのである。

もちろん、同じ事をオルファーナも考えたのだろう。

驚きに満ちた顔で、パンドラズ・アクターの事を見ていたのだから。

「……なぜ、あなたはそんな事が言えるの？」

あなたの立場なら、怒るのが当然だと思ふのに……」

静かに問うオルファーナに、パンドラズ・アクターは軽く首を竦めて見せる。

普通なら、彼女の主張のような反応をするのだろう。

ウルベルトとて、同じ様に考えたのだから、むしろ笑って許す素振りを見せるパンドラズ・アクターの反応が普通じゃない。

それを理解しているからか、困ったように頬を軽く掻きながら、その理由を口にするべくパンドラズ・アクターは口を開いた。

「まあ……オルファーナ嬢がそう言いたくなるお気持ちは、私にも解ります。

ですが、私としては悪くない経験をさせていたのだと、そう考えております。

むしろ、まともな戦闘の経験がないこの身にとって、蘇生アイテムまで使用する前提の実践形式の稽古を付けて貰った様なものだと、そう考えておりました。

なので、良い勉強の機会だったと申し上げました。

アイテムそのものに関して、確かにかなり消費してしまいました。

その事実は否定しませんが……オルファーナ嬢が仲間になった事を考えれば、むしろプラスだと考えるべきでしょう。

ウルベルト様の身を覆う氷が、間違いなく治療効果があるものであると言うお話をオルファーナ嬢に聞いて、安心いたしましたし。」

にこにこ笑いながら、指折り数えながら説明するパンドラズ・アクターの言葉は、この戦闘に関して前向きに考えていると言えるものだった。

確かに、彼の主張は正しいだろう。

ウルベルトもパンドラズ・アクターも、まだまだ圧倒的に情報量が少ないのだ。

彼女が、ウルベルトの本体を守る事を優先していた事は間違いないとは言え、全く他人との接触が無かった訳ではない。

例え古い情報だったとしても、彼女が「十三英雄」と直接対峙して、彼らの顔を知っていると話す話は割と無視出来る話ではないだろう。

彼らの中には、二百年過ぎた現在でも存命者もいると、オルファーナからの情報があるのだ。

他にも、彼女が覚えている事に関してきちんと話を聞く事が出来れば、今後の行動に役に立つ事があるだろうと、パンドラズ・アクターは言っているのである。

「ウルベルト様も既にお察しとは思いますが、私たちが知らない情報を持ち、戦闘能力が高いオルファーナ嬢が味方になるなら、色々と利点がございます。

私もウルベルト様も、様々な事情から本来の実力を出す事が出来ませんからね。

オルファーナ嬢がいれば、これからの行動に様々な幅を持たせる事も可能ですし。

さて……：そう言う訳ですので、予定通りこの氷を抉り取って、そのままそれごとウルベルト様の本体を私の中で封印してしましましょう。」

にこにここと、予定していた内容を口にするパンドラズ・アクターに対して、ウルベルトは少し迷う素振りを見せた。

オルファーナには申し訳ないが、この場でもう少しウルベルトの本体を護る役を頼んだとしても、彼女は嫌がらないだろ。

そう思うからこそ、パンドラズ・アクターのレベルを確実に下げる封印を、使用するのは躊躇われたのだ。

だが、そんなウルベルトの考えを読んだかのように、パンドラズ・アクターは困った顔をしながら、小さく首を振った。

「残念ながら……：この手の封印は、解除すれば何らかの反応が伝わるものが非常に多いのです。

実際に、警報系の罫が解除した魔法陣の中に中に組み込まれていたのを、この目で確認いたしました。

【十三英雄】の一部が存命だと、オルファーナ嬢の情報で知っていながら、ウルベルト様の本体をこの場に残しておくのは、危険極まりないですからね。

封印すると言っても、開封条件を「ウルベルト様の復活条件が揃うか、安全な場所に辿り着いた時」としておけば、自由度が上がる筈です。

まあ……その分、代償が少しばかり増えますが……他に選択肢は存在していませんし。

後の問題は、オルファーナ嬢の本体とも言うべきブローチを、どこに所持すべきかと言う点だけでしょうね。」

パンドラズ・アクターがそんな事を言い出したのは、ちゃんと理由があった。

オルファーナの本体は、現在はウルベルトが装備していたブローチである。

二百年前は、ウルベルトの本体が氷の中で閉ざされていたとしても、そこから力を使う事が出来た。

しかし、だ。

特殊な結界の中で、彼女は強制的に封印されていた事を考えると、パンドラズ・アクターの封印を受けたら、同じ様に封印されてしまう可能性が高い。

その問題をどうするか、パンドラズ・アクターは言っているのである。

今の段階なら、まだその対処をする事も可能だ。

一時的に、オルファーナに「治癒の氷」からウルベルトの本体を取り出して貰い、ブローチを取り外すのが一番だろう。

多少手間が掛かるが、オルファーナの自由行動を確保するつもりなら、それが一番確実な方法だ。

ウルベルトがそう考えていると、少しばかり考える素振りを見せたパンドラス・アクターが、控えめな口調でオルファーナに対して質問を口を開く。

「あの、オルファーナ嬢に二つお聞きしたい事があるのですが、宜しいでしょうか？」
まだ、何処か答えが纏まっていないのだろう。

少し迷う様子を見せながら、オルファーナの顔を見る。

彼女が、別に構わないと頷いたのを見て、漸くその質問を口にした。

「……もしかして、オルファーナ嬢が持つのが氷属性特化なら、氷の中から自分の本体を取り出せるのではありませんか？」

現時点でも、本体が氷の中からもその力を使ったので、もしかしたらと思ひまして。

もしそうなら、今の時点で取り出していただけですと、オルファーナ嬢にそれほどお手間を掛けずに済むと思ひ、こうしてお尋ねいたしました。」

「どうでしょうか？」と、首を傾げながら尋ねるパンドラス・アクターに、オルファーナは笑みを溢しながら頷いて同意した。

どうやら、オルファーナの持つ能力なら、氷の中から力を使うだけではなく、氷を透過する能力もあるらしい。

それを聞いて、にこにここと笑みを溢しながら嬉しそうに胸元に手を置くと、パンドラズ・アクターはウルベルトの顔を見る。

ここまで話を進めておきながら、それでも先程反対しかけたのを気にしているのか、改めて最終的にウルベルトの承諾が欲しいらしい。

そんなパンドラズ・アクターの姿に、少しだけ苦笑しながらウルベルトは口を開いた。「今は、この場にいる者でナザリックに無事に帰還する事が目標だからな。」

当然、安全第一で構わないさ。

パンドラが、オルファーナに対して隔意を抱いていないなら、その方法が一番間違いないだろうし。

後は……他に何かしておくべき事があるなら、早く済ませてここから移動した方がいいだろう。

パンドラが、確認した警報系の罫が発動して敵がこちらの存在を把握するまで、どれだけの猶予があるのかわからないからな。」

その言葉に、オルファーナがハツとした顔を見ると、慌ててウルベルトの本体がある場所よりも奥に手をつ込んだ。

もともと手を動かし、その場所から何かを取り出すと、そのままウルベルトへ向けて差し出しつつ、にっこりと笑った。

「……あの、ウルベルト様。

これは、二百年前に私がこの場で刈り取った冒険者たちの持ち物です。

私の力で、時間経過による劣化をしないように、丁寧に保存しておりましたので、現在も使用可能だと思われまます。

これを、私の為に多くのアイテムを消費する事になったあなた様に全て捧げますので、是非お納めください。

後……先程もお話ししましたが、二百年前に私が刈り取った冒険者の命は、今もウルベルト様の復活に有効だと思われまます。

そちらも、封印前にご確認いただけると宜しいかと。」

オルファーナから差し出されたのは、様々なレベルの低い装備が主だったが、中には何かの素材と思えるものも混じっていた。

多分、こちらの世界で採れる素材なのかもしれない。

そんな事を思いつつ、ウルベルトは改めて自分の本体に視線を向けた。

ただ見るだけでは、何も分からないかもしれないが、それでも確認したいと思ったからだ。

すると、ピコンツと小さな音と共に、ウルベルトの手の中に小さな指輪が出現した。

「な、何だ!？」

あまりに唐突な出現に、慌ててその指輪を確認すると、名前が「魂の指輪」と表示された。

更に確認すると、効果として表示されたのは二つ。

「ゴーレムに封じられた者へ、贄として捧げられた魂を本体へ転移すると同時に、その数を把握する」

「捧げられた魂を、必要な分だけ代価に支払えば、超位魔法を一回使用可能にする」

と言うものだった。

その効果を確認して、ウルベルトが手早く指輪を装着した瞬間、己の視界に本体へと注がれていく魂の光が見えた気がした。

同時に、指輪に填まった宝玉から空中に光が浮き上がり、そこに数字が表示される。

そこに浮かび上がった数字は、「1001」。

どうやら、オルファーナが二百年前に倒した冒険者は、全部でそれだけらしい。

横から覗き込んだパンドラズ・アクターが、少しホツとしたように胸を撫で下ろすと、につこりと笑った。

「これで、ウルベルト様の本体を封印しても、安心して贄を捧げる事が出来る術が出来ましたね。

ウルベルト様が、例え身に付けなくてもこの指輪を所持し続けている限り、指輪が持

つ効果は変わらないようですし、紛失しないようにアイテムボックスに収納しておけば安心かと思われませう。

さて……それでは、そろそろオルファーナ嬢にブローチを取り出していただき、ウルベルト様の本体の周囲の氷を切り出しましょうか。

移動は、まだ残っているアイテムの中に、「転移門ゲートのスクロールがございましたから、そちらを使うので問題ないといたしましても、時間が余り残っているとは言えないでしょうからね。」

笑顔で促すパンドラズ・アクターに、ウルベルトとオルファーナは頷いた。

確かに、予想よりも時間を掛けてしまったのは間違いないだろう。

そう判断すると、急いでこの場から移動する為に、オルファーナの本体のブローチを取り出し、ウルベルトの本体を切り出すべく動き出したのだった。

次章までの幕間

戦闘後のブレイクタイム

無事、ウルベルトの本体を周囲の氷ごと取り出す事が出来た所で、早急にこの場所から移動する事になった。

パンドラズ・アクターはもちろん、ウルベルトもMPは既に残り少なく、とても転移門を開く余裕がなくて、どうすべきか迷っていたら、ウルベルトから無言で差し出されたスクロール。

それは、ウルベルトが、MP不足になった時に使えるようにと、アイテムボックスの中に備えとして幾つか持っていた、転移門のスクロールらしい。

それを使って、パンドラズ・アクターたちはこの場から二日前にパンドラズ・アクターが使った、野営地の奥にある開けた場所へ素早く移動した。

とにかく、今の余力がない状態でウルベルトとオルファーナを開放した追手との戦闘になる事が、非常に怖かったからだ。

転移門を潜ると、速攻でそれを閉じながら周囲に追跡者が居ないか確認する。

この状況下で、パンドラズ・アクターがそこを移動先に選んだのは、追跡者がいた場

合の戦闘の可能性を視野に入れたからだ。

ここなら、ある程度まで森の木々で視野が塞がれる分、戦闘になっても再度転移門^{ゲート}を展開して逃げる事も可能だろう。

だが……それは無用の心配だったらしい。

どうやら、ウルベルトとオルファーナを封印していた相手は、こちらの動きに対応しきれていないらしく、暫く待っても何も変化はなかった。

「もしかしたら、こちらの世界では元々追跡や監視系の魔法の習得者が少ないのでは」と、パンドラズ・アクターは以前から推測していたのだが、どうやら間違いではないらしい。

元々、こちらの世界の住人の魔法詠唱者^{マジックキャスター}が使える魔法の位階が低い事もあり、この段階で追跡がなければ心配無用らしいと言うのが、オルファーナから得た情報の一つだった。

もちろん、彼女が現役だった二百年前に通用した常識だから、魔法詠唱者《マジックキャスター》のレベルに関しては多少の誤差はあるようだが、似たような感想をパンドラズ・アクターも情報収集時に感じたので、間違いではないだろう。

何はともあれ、あれだけの戦闘をした後と言うこともあり、一先ず全員が安心して休める場所を確保してしまいたかった。

《ウルベルト様は勿論ですが、私もいい加減MPの不足は否定出来ませんからね。

先ずは、この場所で使用していた「グリーン・シークレット・ハウス」を取り出して、そちらでウルベルト様にお食事と休息を取っていただかなくては。

ああ、忘れていました！

その前に、ウルベルト様用のお風呂を用意する必要がありますね。

今回は、MP的に道具作成は使えませんが、仮の物しかご用意出来ませんが……明日には、きちんと今の身体に合ったものを作成しないと、ご不便を掛けてしまいます。

オルファーナ嬢は、ウルベルト様との契約が復活した事で、既に回復済みとの事ですし、申し訳ないとは思いますが……今夜の見張り役をお願いする事にいたしました。

現状では、先ずMP回復が最優先事項ですからね。》

正直、オルファーナ一人に見張り役を任せる事に関しては、申し訳なさが先に立つのだが……今の自分ではMP不足で役に立たないのだから仕方がない。

今のオルファーナなら、見張り役を安心してまかせられるのだし、彼女もウルベルトの為に役に立つ事が出来るのを喜んでいるので、失敗はしないだろう。

それに、自分にはウルベルトに対して食事などを提供する等、身の回りの世話があるのだ。

適材適所だと思い切って、自分のやるべき事をするべきだろう。

そんな風に、パンドラズ・アクターが自分の予定を組み立てていると、ウルベルトが目の前に現れる。

今まで、ウルベルトは外の警戒の為に魔法を使うオルファーナの様子を、丁寧に観察しつつ時に注意を与えていたので、こちらに意識が向くとは思わず少し驚きながら、何か用かとウルベルトの言葉を待った。

「……そういや、俺の本体の封印はいつやるんだ？」

移動して安全を確保したら、すぐ封印するのかと思ってたんだが……違うんだな？」首を傾げて問うウルベルトに、パンドラズ・アクターは困ったように肩を竦めながら頷く。

確かに、その辺りの事情はまだ説明していなかった事を思い出したからだ。

ウルベルトの為に、急いで湯船となる物を探していたパンドラズ・アクターは、「グリーン・シークレット・ハウス」の中にあつた、大きな陶器の器を手に取るとウルベルトと見比べながら口を開いた。

「……残念ながら、現時点ではウルベルト様の封印は難しいですね。」

封印には、私の職業レベルを使用する必要がありますので、そちらの調整もしなくてはなりませんし。

一先ず、お風呂の準備をいたしますので、お互いに汚れを落として、お夜食を取って

一休みしてから、詳しい話をする事にいたしましたでしょうか。」

見たところ、ウルベルトの仮の湯船として使っても、大きさは問題なさそうな器は、深い藍色をした花器だった。

縁は、横に広がっているものの、底はどっしりと構えた安定した形で、ウルベルトが湯船として使っても転がる事はないだろう。

そう、手にした花器を見定めたパンドラズ・アクターの横にウルベルトは立つと、その手元の花器どうするつもりなのか覗き込んで中を見た。

かなり広く、自分がゆつたりと浸かれるサイズのそれの前に、パンドラズ・アクターが用意した意図を察したのである。

困ったように首を竦めると、文句を言う様子も見せずに支度を待つようだった。

「申し訳ございません、ウルベルト様。」

今夜のところは、こちらを仮の湯船として、お使いいただきたくお願い申し上げます。本来ならば、ウルベルト様に合わせてきちんとした物をご用意すべきなのでしょうが、今の私にはMPが不足しているためにそれも叶わず……

今回限りでございますので、どうかご了承下さいませ。」

ウルベルトに不便を掛けてしまう事に、パンドラズ・アクターは本気で申し訳なく思っているからそう告げる。

本音を言えば、花器をウルベルトの湯船として使うのは、パンドラズ・アクターの
は本当に不本意なのだ。

少しでもMPに余裕があれば、彼が気に入るデザインを試行錯誤して作り上げたいところだが、それが出来ないか代用品でもそれなりに見栄えがするものを探していたのである。

この花器を選んだ理由は、深みのある藍が重厚さを醸し出しながら、それでいて横に広がる渾は織細さを醸し出している所が、ウルベルトの仮初の湯船として相応しいと、パンドラズ・アクターの美意識に認められたからだ。

せめて、相応しい品を作る事が出来なくて代用品を用意するのならば、それなりの品を用意出来ないのは宝物殿を預かっていた宝物殿領域守護者の名折れだと、パンドラズ・アクターは考えたのである。

タオルなどの備品は、相応の品が元々ここに備え付けてあるので、それを使えば問題ないだろう。

着替えに関しても、以前聖遺物級レリツクになるように調整して作った、現在のウルベルトサイズでそれなりのデザインの物が、何故か手元に数点あったのでそれを使えば問題はない。

そもそも、今夜一晩やり過ぎればパンドラズ・アクターのMPが回復するので、一

晩限りの仮初の物なのだとはわかってはいるのだが、それでもやはり妥協するのが難しく
て。

「……なあ、一応最低限の安全は確保出来ているんだし、今夜はあり合わせでも構わない
ぞ？」

むしろ、お前だつて初めての犬掛かりな戦闘と死亡を経験した事でかなり疲れている
んだから、そこまで無理をしなくてもいい。

もし、どうしても俺のために何かをしたいつて思うなら、早くお互いに風呂を済ませ
て食事の支度にとりかかってくれないか？

パンドラが作る夜食がどんなものなのか、正直気になつて仕方がないんだ。」
そんな風に、ウルベルトから促された事で、漸く思い切る事が出来たのだ。

だつて、仕方がないだろう。

ナザリックの僕にとって、「至高の御方」に奉仕出来るのは最高の喜びなのだ。

特に、最初の時は時間の関係で余りきちんとした食事の支度が出来なかつたのだから、
【今出来る最高の物を】と、パンドラズ・アクターが張り切るのも当然の話だった。

とは言え、ウルベルトがお腹を空かしていると言うのなら、待たせるのも問題だろう。
ウルベルトに提供するものだから、当然調理する前から衛生面にも気を配る必要があ
る為、自分だつて身綺麗にする必要がある。

湯船そのものは、今用意した花器で代用する事を許されたから問題ないとして、だ。それ以外の部分では、色々と道具のサイズの意味合いでお手伝いする必要も踏まえるなら、一緒に入るのが合理的だろう。

素早くそう判断すると、これ以上ウルベルトを待たせない為にも、サクサクと準備を進めていくパンドラズ・アクターだった。

一先ず、お互いに風呂を使って身綺麗になったところで、ウルベルトに湯上りの一杯として希望されたコーヒー牛乳を提供した後、パンドラズ・アクターは夜食の準備に取り掛かる事にした。

簡単に出来て、それなりに腹持ちが良いものをと考えた結果、用意する事にしたのは手早く簡単に出来る卵と鳥団子の野菜のスープだ。

この「グリーン・シークレット・ハウス」にストックされていた料理素材の中に、鶏もも肉があったので、手早くミンチにしてみじん切りの玉ねぎとすり下ろしたニンジン混ぜ、塩コショウで味を調えて団子を作る。

野菜は三種類。

白菜と大根は、短冊にして笹に入れて水切りしつつ、じゃがいもは賽の目に切つてから、水に晒して灰汁抜きをしておくのを忘れない。

出汁は、昆布と鰹の合わせ出汁にするつもりで、まず昆布の出汁を取る準備を始める事にした。

鍋に水を張り、濡れ布巾で軽く拭った昆布を中に沈め、暫くそのまま置く間に、少し大きめの鰹節を取り出す。

削り箱で鰹節を丁寧に削り、少し多目に必要な分の削り節を確保した所で、鍋を中火で火に掛けて湯が沸騰する直前に昆布を取り出すと、用意した削り節を中にたっぷり掴んで放り込んでからひと煮立ち。

鰹節の分の出汁が取れた所で、それを布巾で丁寧に鰹節のカスが入らない様に濾し、合わせ出汁は完成した。

完成したばかりのまだ温かい出汁を、スープに使う分だけ鍋に入れてから火に掛け、まずはじやがいもから、大根、白菜の順番で野菜を投入していく。

それぞれの野菜が軽く煮えた所で、先程作った肉団子を崩れないように丁寧に入れ、浮き上がってくる灰汁を取りながら具材に火が通るように軽く煮立てる。

その間に出た灰汁を、全て丁寧に取ったところで塩と醤油で少し濃い目に味を整えるのを忘れない。

水で溶いた片栗粉を、そこにちよつとだけとろみがつく様に混ぜ、最後に軽く泡立てた卵を上から回し掛ける様に流し入れる。

その後、弱火で一分おけば具沢山の卵と鳥団子の野菜スープの完成だ。

そんな風には、テキパキと夜食の準備を進めていると、料理の様子が気になったのか、いつの間にかパンドラズ・アクターは邪魔にならない場所にウルベルトが陣取っていた。もしかしたら、出汁の良い匂いに釣られて来たのかもしれない。

そんな事を思いつつ、完成したスープを盛り付けようとしたところで、パンドラズ・アクターはふとある事を思い付いた。

「……あの、ウルベルト様に一つご提案があるのですが、宜しいでしょうか？」

何かと視線で問い掛けてくるウルベルトに対して、パンドラズ・アクターはにっこりと笑顔を浮かべながらアイテムボックスに手を伸ばし、そこから一つの指輪を取り出した。

「こちらのアイテムなのですが、「巨人の指輪」と言う、その名の通り一種の巨大化の効果を持っておりまして。

この指輪を付ければ、基本的に今の外見のままと言う条件は付きますが、五倍のサイズに一時的に姿を変える事が出来るという、一種のジョークアイテムなのです。

【基本的に】と申し上げましたのは、こちらのアイテムを併用する事が可能だからでございます。

こちらは、ウルベルト様もご存知かと思われませんが【人化の腕輪】でございます。

異形種から人間の姿に変化させる腕輪であり、外見年齢は異形種の外見年齢に合わせてると言うものです。

双方ともに連続使用可能時間は、約十二時間。

その後、冷却時間を同じく十二時間開ければまた使用可能と言う、今のウルベルト様にとっては結構便利なアイテムかと思われます。

ただ……今の外見の五倍になると言う事なので、どう頑張ったとしても知らない者が見れば五歳程度の幼児にしか見えませんが……お食事や、お風呂の関係でサイズの意味合いでご不便を掛ける事はなくなるのではないかと思ひまして。

……もし宜しければ、ご使用になられませんか？」

パンドラズ・アクターがこのアイテムを用意したのは、無理に今のサイズのウルベルト用の道具を揃える事を優先するより、こちらのアイテムを使った方がウルベルトとしても色々と自分の手持ちのアイテムを使用しやすいのではないかと、そう考えたからだ。

どうしても、手のひらサイズのゴーレムだと使用不能なアイテムが幾つも存在している。

だが、このアイテムを使用してウルベルトが五歳字程度の外見まで変化すれば、今まで使用可能なアイテムでも使える物が増えるのは間違いない。

何より、これから情報収集の為に人の街を訪れる度に、ウルベルトに鞆の中に隠れて貰う必要もなくなるだろう。

もちろん、状況によっては隠れて移動する必要も出てくるかもしれないが、それでもウルベルトの行動の自由の枠は確実に増やせるのは間違いない。

パンドラズ・アクターとしては、出来るだけウルベルトに不便を強いるのは避けたかった。

幸い、今の外見でそれなりに収入を得る手段は持っているのだし、ウルベルトが望む事を叶えられなくては、ナザリックの僕として失格だろう。

そう考えたからこそ、手持ちのアイテムの中で使えそうな物を思い出した時点で、速攻で提供してみる事にしたのだ。

どうやら、ウルベルトもこのアイテムの有効性は良く判っているらしい。

二つのアイテムを見た瞬間から、期待に満ちた目をしてアイテムの事を見ている。

だが、まだ使うのには幾つか気になる事があるらしく、少しばかり迷う素振りを見せた後で口を開いた。

「……使う前に、幾つか聞いても大丈夫か？」

流石に、色々と余裕が出来たからアイテム使用に関しても慎重になっっているらしい。

この手のアイテムの中には、使えば便利だがその代わりペナルティが存在している事

もある為、そこを確認したいのだろう。

最初の時点で、パンドラズ・アクター自身も【ジョークアイテム】と口にはしているから、余計に心配したのかもしれない。

そんな事を考えつつ、パンドラズ・アクターが素直に頷いて了承して見せると、気になつていた事を口にした。

「まずは、連続で使用しない場合は冷却時間がどうなるか、だ。

例えば、今から食事をするために使用した場合、そのまま強制的に十二時間使用になるとかだと、次に使いたいタイミングで使えない場合があるからな。

後は、ペナルティが発生するかってことも問題だ。

それこそ、強制連続使用の上にペナルティでレベルダウンなんて事になったら、オルファーナの時みたいな戦闘が発生した時に、完全に俺が役立たずになる可能性だってある。

そういう問題があるなら、使えないと判断せざるを得ないかならな。

……で、実際のところはどうかんだ？」

やはり、パンドラズ・アクターが考えたのと似たような点が気になつたらしい。

どの疑問ももつともなものばかりなので、一先ず完成した料理は保存状態にした上で、丁寧に答えていく。

「そうですね、どちらも連続使用しない場合の冷却時間は、使用した時間の半分でチャージ完了します。

つまり、今から食事などで一時間ほど使用した場合、使用を終了してから三十分時間を置けば、再び連続使用可能時間は十二時間に戻るといふ訳です。

ペナルティに關して上げるなら、お察しの通り「人化の腕輪」の使用中は異形種レベル分のレベルダウンになります。

ですが、腕輪を外して使用を中止さえすれば、元のレベルに戻りますのでそれほど問題はないかと。

「巨人の指輪」に關して言うなら、ただ外見が大きくなるだけでレベルも能力も強化されませんので、大きなペナルティは反射速度が三割減になる以外は大きなペナルティはありませんね。

こちらにも、指輪を外して使用を中止すれば、元に戻りますので特に問題はないかと思われます。

外見年齢的にも、五歳児の幼児があまり早く動けるのも逆に人目を引く事になりますので、むしろ三割減で動きが制限される方が、周囲の目を欺く意味でも都合が宜しいかと申し上げさせていただきます。

後、念の為に使用方法ですが、両方とも指輪をはめて念ずるだけで使用出来ます。

「人化の腕輪」の外見は、「プレイヤー」なら「リアル」の外見をモデルに、我々が使用する場合は、人間の外見に近いものはそれに合わせて変化しますが、それ以外の場合は性別以外を「ランダム」に設定するようです。」

一つずつ、丁寧に質問の内容に対して説明していけば、ウルベルトも納得がいったらしい。

それまでいた場所から、キッチンカウンターの側に下りると、パンドラズ・アクターが差し出した指輪と腕輪の二つとも手に取り、そのまま開いている指と手首に填めていく。

元々、手のひらサイズのゴーレムであるウルベルトの指には、指輪は填まっていなかった。

再会した際に、能力強化の意味でパンドラズ・アクターが提供したものと、先程までの戦闘中で使用したものを一つ合計二つ身に着けているだけだ。(リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンは、本体の指に填まっているので、今のウルベルトの指にはない) その為、今のウルベルトなら余裕をもって装備する事が可能だったからこそ、パンドラズ・アクターはこれを提供する事を決めたのである。

腕輪と指輪を填めてすぐ、ウルベルトの姿が五歳程度の黒髪の男の子へと変化するのを確認したパンドラズ・アクターは、ウルベルトが自分の姿が変化した事を確認出来る

ように姿見を取り出すと、そつと彼がいる側に置いた。

自分の側に姿見が置かれた事に気付いたウルベルトは、クルクルと器用に身体を動かしては、どこにも異常がないか確認してく。

暫く動き回り、漸くウルベルトは自分の状態に納得したらしい。

ニコニコと、今までで一番ご機嫌な様子でパンドラズ・アクターを見ると、そのまま笑顔全開でお礼の言葉を口にした。

「ありがとうな、パンドラ。」

今までより、格段に不便さが減ったわ。

やつぱり、身体が小さいと油断したら潰されそうで怖かったんだよな、うん。

後は、パンドラが作ってくれた夜食が、さつきみたいにちよつとだけしか食えないって事が無いのが嬉しいね。

という訳で、そろそろ夜食を食わないか？

さつきからずつと、匂いだけで減ってる腹が刺激されて仕方がないんだよ。」

お腹が空いて堪らないと、そんな様子でウルベルトに強請られたら、これ以上待たせるなんて真似はパンドラズ・アクターには出来なかつた。

「今すぐ盛り付けてお持ちしますので、あちらのダイニングテーブルにてお待ちいただけますか？」

そう慌てて告げると、急いで少し大きめのスープボールを戸棚から取り出し、鍋の中のスープをたっぷりと注いでいく。

熱々のスープは、野菜や鳥団子が沢山入った具沢山だし、溶き卵と片栗粉でとろみが付いていてお腹に溜まるから、夜食として食べるならこれだけで十分お腹は膨れるはずだ。

夕食として出すなら、量を少なくして他の副菜やご飯も用意したが、夜食と言う括りでは少し多すぎるだろう。

そんな事をつらつら考えつつ、具を取りやすいように箸と蓮華の両方を用意して膳の上に並べると、ウルベルトの元へと急いで運んで行った。

「お待たせいたしました、ウルベルト様。

調理の様子をご覧になっていらっしやったので、ご用意したものは判っていらっしやるかと思いますが……溶き卵と鳥団子の野菜スープでございます。

一応、蓮華とお箸をご用意させていただきましたが、お好きな方をお使いくください。後、片栗粉でとろみを付けましたので、中々冷めにくくなっております。

その点をご注意いただくと、美味しく召し上がっていただけるかと。」

丁寧にテーブルの上に載せながら、ウルベルトに対して料理の説明をし終えた所で、ふとバンドラズ・アクターはウルベルトの視線が低い事に気が付いた。

そして、すぐにその理由に思い当たる。

この「グリーン・シークレット・ハウス」にある家具は、基本的に成人向けだ。

当然だが、幼児サイズの今のウルベルトには大きすぎるし、大人用の椅子に幼児が普通に座ったら、高すぎて届かない部分があるのは当たり前だろう。

急いで配膳する事に気を取られ、その事をすっかり失念していた事に気付いたパンドラズ・アクターは、すぐに隣の部屋に移動してソファから幾つかクツションを手に取ると、素早く戻って来て隣の椅子へと積み上げていく。

ある程度の高さを確保し、これなら問題ないだろうと判断した所で、申し訳なさそうにウルベルトへと声を掛けた。

「……大変失礼いたしました、ウルベルト様。

お手数をお掛けいたしますが、こちらの席へ御移りいただけますでしょうか？」

あえて、それ以上言葉を重ねずにそう促せば、ウルベルトも無言で移動してくれたので、お互いにこの点に関しては深く追及しない方がいいのだろう。

お互いに、この問題点に気付かなかつたのだからと、お優しいウルベルト様は、暗黙の内にこの失態を見逃してくださいだったのだから。

改めて椅子に座ったウルベルトの前に、用意した膳を置くところにこやかに笑いながら、一声掛ける。

「……では、お召し上がりくださいませ。」

私は、食後の口直し用の水菓子を用意して参りますので。」

につこり笑顔で告げると、軽く頭を下げてからパンドラズ・アクターは再びキッチンへと戻る。

冷蔵庫から、既に頭の中で選んでいた果物を水菓子として取り出した。

パンドラズ・アクターが口直しに選んだのは、完熟したマンゴーである。

種を避けるように皮ごと三枚に切り、皮の内側の実を一口大の賽の目にカットして、皮から実を押し出すように裏返したら、大皿に盛る。

真ん中の種がある部分も、外側の皮を剥いておいた。

この部分は、種を避けながらかぶり付くのもありだと思っただからだ。

そこまで処理をした所で、こちらも同じ大皿に盛り付けて、鮮度よく保存出来るカバーをかけたなら、その大皿ごとウルベルトが待つダイニングへと向かった。

「お待たせいたしました、ウルベルト様。」

ウルベルトに声を掛けつつ、手にしていた大皿をテーブルの上に載せると、丁度器に盛り付けた分のスープを食べ終えた所だった。

まだ、蓮華を手にしたままで考えている様子を見ると、食べ足りないのかもしれない。

この後の予定は、お互いに疲れた身体を休めて、消耗したHPとMPの回復させる事

だったのだから、多少食べすぎる位なら構わないだろう。

むしろ、回復するのにもエネルギーが不足していて、その補充分として食事を欲しているのだとしたら、食べてもらわないと困る。

「……お代わり、なさいますか？」

首を傾げながら、パンドラズ・アクターが問い掛ければ、バツと勢い良くウルベルトの首が跳ね上がる。

「どうやら、お代わりを言い出せずにいたらしい。」

こちらから、お代わりを勧める声を掛けた事で、それは嬉しそうに笑うウルベルトの姿を見てしまえば、とても駄目だとは言えないだろう。

もちろん、パンドラズ・アクターには言う気もないが。

「……では、直ぐにお持ちしますね。」

膳ごとスープボールを持ち上げ、パンドラズ・アクターが奥に引つ込もうとした所で、ウルベルトから声がかかった。

「……その、次に持つてくる分は、パンドラも一緒に食べよう。」

一人で食べるのは、なんか……少し味気ないんだ。」

お菓子の時は、確かにパンドラズ・アクターもご相伴に預かったから、今回もそうだとウルベルトは思っ居てくれたのかもしれない。

だから、自分だけ先に食べさせるこの状況が、これから先はずっと続くのは嫌だと、そう考えたからこそ、今のウルベルトの言葉だと思うだけで、パンドラズ・アクターは嬉しかった。

彼がそう望むのなら、この旅の間はそれで通しても良いかもしれない。

もしかしたら、パンドラズ・アクターが甲斐甲斐しく側に控えて世話をしながら、ウルベルト一人で食べさせるよりも、二人で会話をしながら食事をする方が、楽しいと思われるかもしれないと、今までのやり取りから漠然とそう思った。

「では、今からお持ちする分は、私の分も一緒に持つて参りますね。」

ああ、そう言えば忘れておりました。

ウルベルト様にご用意する分は、先程と同じで宜しかったでしょうか？」

膳を手にしたままで問えば、嬉しそうに笑いながら頷くウルベルト。

どうやら、パンドラズ・アクターと一緒に食べる事も嬉しいが、また同じ量を食べれることも嬉しいらしい。

そんな風に、嬉しそうな顔をされてしまったら、パンドラズ・アクターにはこれから旅が終わるまで、ウルベルトと一緒に食事をする以外の選択肢は無くなってしまった。た。

《……これも、ウルベルト様から望まれ、喜ばれている事なのですからね。

誰からも、文句を言われる謂れはありませませんよね、うん。》
にここにこと笑いつつ、そんな事を考えながらウルベルトのお代わりと自分の分を用意
していく。パンドラズ・アクターだった。

食後の話し合い

パンドラズ・アクターが用意した料理と水菓子を、満足いくまで食べ尽したウルベルトは、大きくなったお腹をさすりながらカウチソファまで移動すると、行儀悪くゴロリとその上に横になった。

彼が横になっている間に、素早く食器を片付けたパンドラズ・アクターは、キッチンから戻って来るとその隣にあるソファに腰を下ろす。

本来なら、ウルベルトの許可を貰ってから腰を下ろすべきなのだろうが、その辺りの事は「一々確認を取る必要が無い」とウルベルトから言い渡されている為、同じ事を言われない為にも許可を取らなかつたのだ。

このパンドラズ・アクターの判断は、間違いではなかつたらしい。

勝手にパンドラズ・アクターが座つても、ウルベルトの機嫌は悪くなつていないのだから、この旅の間はこれで問題が無いのだろう。

そう思いつつ、パンドラズ・アクターは食後のお茶を用意した。

これから先は、どう考えても話が長くなるのだから、喉を潤すお茶は用意しておいた方が良いと判断したのだ。

もつとも、魔力を消耗しているウルベルトは、早めに休ませたいと思うのも、パンドラズ・アクターの本音である。

本来のウルベルトに比べ、今のウルベルトのMPはかなり少ない。

アイテムで補助している効果もあり、本来の八割まで総量は上がっているが、回復量まで上がった訳じゃないのだから、当然の話だった。

パンドラズ・アクター自身も、かなり消耗していたから少し休みたいと思ったのだ。

戦闘で消耗したMPは、アイテムでの回復手段はなく、時間を置かないと回復しない。一応、アイテムで疲労無効かとかは存在するが、戦闘で消耗したHPは、回復アイテムを使うか休むしかないのだから、休息を取るのは当然の判断だった。

アイテムを使う事は可能だが、手持ちの残りのアイテムとこれから先の事を考えるなら、余り大盤振る舞いする事は出来ないだろう。

なにせ、ここに来るまでのオルファーナとの戦闘で、それなりに消耗してしまっているのだから。

特に、即効性のある蘇生アイテムに関しては、ほぼ底が尽きてしまっている状態だ。

確かに、パンドラズ・アクターが保持している生産職としてのスキルを使えば、蘇生アイテムを作る事は可能だが、その為には素材が無ければ話にならない。

一応、ウルベルトが所持している素材アイテムと、パンドラズ・アクターが所持して

いる素材系のアイテムを組み合わせれば、復活時にHPを全回復出来る最高レベルの蘇生アイテムを一つ、復活時にHPが半分回復する中級レベルの蘇生アイテムが二つ作れる事は確認済みだが、それ以外には誰かが使わなければ蘇生が敵わない杖が一つしか残っていないと言う状況なのだ。

他の回復系のアイテムだって、使い処を考える必要があるのは当然だろう。

もし、回復系のアイテムが不足するような状況になれば、それこそパンドラズ・アクターの使う回復魔法以外に回復手段がなくなり、ウルベルトへのMP譲渡が出来なくなるのだから。

今のウルベルトが、万全とは言い難い状態である以上、パンドラズ・アクターはそれを避けるべきだった。

そんな事をつらつら考えつつ、パンドラズ・アクターはお茶を淹れ終わると、そつとウルベルトの前にあるテーブルへと置く。

次に自分の分も淹れると、改めて横になっているウルベルトに視線を向けた。

「……大変申し訳ありませんが、明日の予定をある程度まで決めてからお休みいただけますでしょうか、ウルベルト様。

色々ありましたし、お疲れとは思いますが……これからの予定を大枠で決めておいた方が宜しいかと。」

少しうとうとしているウルベルトの様子に、起こしてしまうのを忍びなく思うものの、今後の為にもぎっくりとした予定は決めてしまいたかった。

最終目的は、「ナザリックに戻る事」で間違いないだろうが、その道筋をどういう過程にするのか位は決めて置かないと、色々と困る可能性が高いだろう。

何せ、パンドラズ・アクター達がいる場所は、竜王国の外れ。

この国を襲う、ピーストマンの国との国境とは少し離れているが、その代わり異形種の排斥を主張する「スレイン法国」との国境からは、それほど離れていない場所なのだ。そんな場所にいる以上、パンドラズ・アクターが訪れた街で聞いた「スレイン法国の特殊部隊」と、うっかり顔を会わせてしまう可能性だつてあるだろう。

彼らの能力が、今の時点ではつきりしない以上、可能な限り接触は避ける方が危険は少なかった。

もしかしたら、噂に聞く「タレント」と言うこの世界特有能力の中に、「異形種の擬態を見抜く」と言うものもあるかもしれないのだから。

元々、パンドラズ・アクターもウルベルトも異形種で、オルファーナに至っては封印されていた状況から、確実に「魔人」として認識されている可能性が高い。

そう考えると、うっかり接触した時点で危険な状況に陥る可能性がある国と、自分たちがいる国が国境を接していると知って、対策を練らないのは下策だろう。

「……ああ、寝落ちしかけてた……悪い、な。

「……ただ、明日の予定って言われても、なあ……」

一応、パンドラの方で俺の本体を封印するのは確定だとして、他に何かする予定ってあったか？」

「本当の意味で、急ぎだったウルベルトの本体の確保が無事に済んだだけに、特に予定が思いつかないのだろう。」

確かに、ナザリツクの行方を探す事も帰還の為に必須事項ではあるが、それでも慌てて動き回っても情報が入るとは限らない。

逆に、焦って情報を集めようと無理な動きを見せる方が、悪目立ちしてしまいそうな心配すらする。

「これが、他国ならまだよかったのだろうか……：：：現在位置が【スレイン法国】と隣接した【竜王国】という場所が悪すぎた。」

「そうですね……ざつくりとした、旅の目的地を決めておく必要はあるかと。」

一応、大まかな予定でこの国から離れる方針は決まっておりますが、どちらの方面に移動するかまでは決めておりませんでした。

「この場所も、ウルベルト様の本体を取りに戻る前に決めていた隣街とは、別の方向に移動しておりますし。」

ウルベルトが、横になっていた身体を起こしたので、テーブルの上に乗せておいたお茶を手にとって渡せば、それを一口飲んでホッと小さく息を吐く。

多分、水分を取る事で眠気を飛ばしたのだろう。

パンドラズ・アクターが、申し訳なきように移動方向が違っていた事を言及すれば、苦笑して首を振った。

「あー……それに關しては、別に構わないさ。

どの方向に向かうかなんて、絶対に決まってる訳だし。

そもそも、ここは野営地から少し離れていて人目に付かない場所なんだろう？

なら、特に問題はないさ。

街に付く前の晩に泊まった、野営地側に戻ったこの状況なら、それこそ夜営の際に大切なものを落として探しに戻ったって理由も出来るからな。

あくまでも、俺がこのままだと問題があるかもと考えていたのは、どうして丸一日かけて移動出来ないか、うっかりこちらの顔を知っている奴に次の街で顔を合わせるような事態になった時、ちゃんと説明出来る状況が出来ているかどうかだったし。」

この状況なら、むしろちゃんといい訳も立つから問題はないと笑うウルベルトの言葉を聞いて、パンドラズ・アクターは胸を撫で下ろしていた。

現状では、ウルベルトを守る意味でも出来る限り人目を引く事はしたくない。

その為にも、色々と思案するべきことは多かった。

「そうですね、一先ず何かを無くして探しに戻ったと言うのは、無難な話だと思われる。す。

また、あの街に寄る必要はない訳ですし、通り過ぎて移動するのも問題はないでしょう。

一応路銀として必要な金銭も、まだそれなりに残りはありますし。」

実際、パンドラズ・アクターの手元に必要な路銀と言うのは、街に泊まったり旅人に見えるように旅準備などの買い込みしたりするのに必要な経費だけで、実際は装備などを一新する必要もなければ食材だって無理に買う必要はない。

しかし、それでは他人から不審に思われるから、最低限のアイテムを幾つか買い足す必要があるのだ。

そして、それも既に今日街を出立する前に済ませてあるから、もう一度街に寄り追加で買い足す必要はない。

あの街には、あまり良い思い出がないから、立ち寄りたとは思えないし、スルーする方向で問題ないだろう。

あの街で手に入れた簡単な周辺地図を広げながら、パンドラズ・アクターは現在位置を含めて、ウルベルトに説明を始めた。

「……今いる場所が、この辺りですね。

このマークが、私が今日の昼前に出立した街の場所を示しています。

そして、ここがウルベルト様にお会いするまでの私の次の目的地である、次の街になります。

距離的に、人の足で歩いて二日ほどの距離との事でしたし、最初の街よりもかなり大きな街との事でしたから、情報収集には向いているかと思われます。

何より……この街では、私ですらこの外見で色々と不快な思いをいたしました。

その様な愚か者が多い街に、あなた様をお連れするのは余り望ましくないと。」

地図を覗き込むウルベルトに、出来るだけ簡単に得た情報を説明していけば、少し考える素振りを見せる。

そして、パンドラズ・アクターが「不快な思いをした」と告げた街を指し示して、首を傾げた。

「お前が、その外見で不快な思いをしたと言ったが、大体どんな内容だった？」

モモンガさんに似て温和なお前が、そんな風に言うなんて余程だろう？」

そう、面と向かってウルベルトから指摘され、パンドラズ・アクターは困ったように眉を潜める。

あの時は、何故か体調が不良な状態で絡まれた事もあり、どちらかと言うと冷静さを

欠いていたのも間違いないからだ。

それでも、向けられた視線は実力を見抜けない者からの弱者に向けたもので、間違いなくパンドラズ・アクターは不快に感じたのである。

だが、それをウルベルトに説明するのも、また難しい。

この話をして、ウルベルトに不快な思いをさせるのは不本意だからだ。

とは言え、質問されたにも関わらず答えないのも、ウルベルトに対して不敬に当たるだろう。

だからこそ、どう答えたものなのか迷い、暫く思索したところでパンドラズ・アクターは口を開いた。

「……そうですね、簡単にお話しさせていただくなら、あの街の人間には不快な言動をする者が多かったと申し上げるべきでしょうか。

特に多かったのは、私の外見だけでまだ子供の範疇に収まる程度の、弱者と扱う者ですね。

その癖、装備はこの世界ではかなり高レベルの物を身に付けていたので、何人かは闘討ちなどで装備を奪う算段を取り付けていたようです。

ところが、冒険者組合で登録の際に絡まれた私が、生産系の優れたスキルを持つと知ると、集団で仲間に取り入れようといいました。

しかも、私よりもレベルが二十以上も下の相手から、生産能力の高い弱者としての認識されたまま、脅せば簡単に組み込めると見なした言動をされまして。

あまりにも滑稽な言動に、酷く苛立ちを感じました。

なので、こちらに攻撃してきた相手を軽く倒した上で、残りの仲間に対して殺気を浴びせかけて、全員の腰を抜かさせてやりましたが。」

その時の事を思い返してみたが、やはり彼らの言動は不快なものでしかなくて。

つい、パンドラズ・アクターは思い出した当時の内容に眉を潜めてしまっていたのだが、無意識だったので気付いてはいなかった。

むしろ、ウルベルトにそんな思いをさせないためにも、自分が受けた扱いをきちんと説明するべきだろうと、もう一つの内容も口にすることにした。

「……それ以外にも、不快だったのは冒険者組合の受付嬢でしょうか。

冒険者組合には、「冒険者に登録を希望する者は、その素性の一切を問わない」と言う不文律があるので。

それなのに、生産職として優れた能力があると知れた途端、冒険者ではなく生産職として街の生産者組合に登録させようと、冒険者組合の受付が言い出しまして。

あまりの不快さに、「他所の街で登録します」と私が言った途端、大きな声で人目を集めるように謝罪し始めて、どちらが悪者なのか分からない行動をし始めたのです。

彼女の、傍目を気にしない非常識な行動のせいで、かなり注目を集めてしまったのと、その後に先に話した相手から絡まれ殺気を浴びせかけ追い払った事もあって、あの街では行く先々で人目が煩わしくなっていました。」

一つ一つ、簡単でありながら判りやすくウルベルトに説明するために、自分が感じた感情も踏まえて説明していく。パンドラズ・アクターに対して、ウルベルトはそれらの情報を整理していく。

改めて、街での事を思い返した事によつて、不快さは変わらないものの、その時にとつた自分の対応の荒さについても、問題があつた事をパンドラズ・アクターは気付き、少しでも反省しながらそれに関しても口にした。

「……今から思えば、もう少し対応の仕方もあつたのではないかとも思わなくもありません。」

ですが……その時は、体調を急に崩した事もあって、色々と精神的に彼らの行動を受け流すだけの余裕がありませんした。

体調不良を自覚した時点で、無理をして冒険者登録をするのではなく、宿屋に移動して休むべきだったと、こうして冷静な状況下になれば気付けるのですが……何故か、あの時は無理でした。

「どうしてなのでしょう？」

どこか困惑したような、そんなパンドラズ・アクターの眩きを聞いて、ウルベルトは苦笑を浮かべる。

何か、自分の発言はかの方に苦笑をさせるような、そんな内容を含んでいたのだろうか？

そう思うだけで、後悔の念が浮かびそうになる。パンドラズ・アクターの心境を横に、ウルベルトは軽く手招きしてくる。

「どうやら、自分の座っているカウチソファの方に来いと言いたいらしい。」

その指示に素直に従い、それまで座っていたソファから立ち上がって移動すれば、ウルベルトに横に座れとその場所を手で叩かれる。

之にも素直に従い、大人しくウルベルトの横に座った途端、ソファの上で立ち上がったウルベルトに、その頭を撫でられていた。

「へあつっ!?!」

思わず、変な声が零れてしまった。パンドラズ・アクターのことなど気にする事無く、優しく頭を撫でてくるウルベルトに、どう対応したものかと困惑するしかない。

「だが……撫でられる度にウルベルトが労わる念が伝わってきて、心の中がポカポカとあたたかくなる気がした。」

「……色々、本当に頑張ったんだな、パンドラは。」

多分、その体調不良に関してだけ言うなら、「人酔い」したんだと思うぞ。

今まで、お前は俺達「アインズ・ウール・ゴウン」のメンバー以外、人が来ることもなければ他のNPCも居ない宝物殿で、一人守護者をしていたからな。

そんなお前が、急に人間が溢れ返るほどに居る街に赴いた事で、予想以上に精神的な負担がかかった結果、「人酔い」したんだよ。

実際、リアルでも「人酔い」は普通にある症例だからな。

これが、まだ異形種の街だったらマシだったかもしれないが、人間種だけだったのもストレス要因だったかもしれないぞ？

そんな状態で、敵意などを含む悪感情を向けられたら、そりゃ自制が効かなくなっても仕方がないさ。

むしろ、その程度の騒動で済ませたお前の理性に、俺は拍手したい位なんだぞ。

多分、これが他のナザリツクのもの……そうだな、階層守護者当たりだったら、確実にその街一つを壊滅させていた可能性だってあるんだ。

だから……お前はそんなに気にするな。

温和なお前が、そんな風に不快に感じる位には、相手の態度も問題があったと思っただ方が良い。

実際、お前の話を聞いた感想は、俺でも同じ行動をするだろうな、と言うものだった

しな。」

優しく頭を撫でるウルベルトから、更にそんな優しい言葉を掛けられてしまえば、思わず目が潤むのも当然の話だろう。

もちろん、そのまま泣いてウルベルトを困らせるつもりなど欠片もない。

何度も同じ事を繰り返すような、不出来な僕に成り下がるつもりはないからだ。

だが、……もし許されるなら、暫くはこのままでいさせて欲しかった。

暫くして、漸く自分が落ち着いた所で、ウルベルトに対して醜態を見せた事への謝罪を口にした。

「……申し訳ありませんでした、ウルベルト様。

それで、これからの予定なのですが、まずはウルベルト様がどのように動かれるおつもりなのかによって、対応が変わる事になりますね。

今のウルベルト様は、アイテムによって人間の五歳児程度の姿に変化させてますが、本来は手のひらサイズ。

私と共に街を見て歩くつもりなら、この姿を人前に出す必要があるでしょう。

その場合、同じアイテムを最低でも二つ用意して併用する必要が出てきます。

基本的には、一つだけで問題ないかとは思いますが、何らかの理由によって街の外を

移動する際に誰か同行者が出来た場合、同行者の目を誤魔化す為にもアイテムの併用は不可欠でしょうから。

逆に、街では一切姿を見せないと言うのでしたら、こちらを使用する必要はございません。

同行者がある場合のみ、同行者の目を誤魔化す関係上、色々とご不便を掛けてしまう事になりますが……

ウルベルト様は、どちらを選ばれますか？」

パンドラズ・アクターとしては、ウルベルトが希望するならどちらを選んででも全力で答える意思はある。

もし、ウルベルトが小さな姿で同行する事を選ぶのなら、予備を含めて三つ用意する準備があった。

完成品としてのアイテムは、現時点ではウルベルトが使えるように用意した使用中のものしかないが、手持ちの素材で十分あと二つを作成する事は可能なので、それ程問題はないだろう。

逆に、人前に今の子供の姿を曝すのが嫌だと言うのなら、それ以外でウルベルトが街を楽しめる方法を幾らでも考えるつもりだった。

ナザリックを探す旅の間、ウルベルトに窮屈な思いをさせる気など欠片も無いのだから

ら。

静かに返答を待つパンドラズ・アクターの前で、ウルベルトは全身が映る姿見を取り出すと自分の姿をきちんと確認し始めた。

今のウルベルトの姿は、後ろ髪を首に掛からない程度に短く切り揃えた少年らしい髪型をしていた。

前髪は、目には切らない程度の長さで、真ん中で二つに分けている。

特徴的なのは、左右のサイドだけは一房ずつ長くなっていて、肩に掛かっている姿を見ると、その愛らしい顔も踏まえて少女にも見えてしまいかねない。

どうやら、ウルベルトにも自覚があるらしく、少し悩むような素振りでも腕を組むと、うんうんと考え込み。

出した結論は、普段から同行者として一緒に行動すると言うものだった。

「……まあ、メリットとデメリットを考えるなら、割とデメリットの方が大きいんだかな。」

冒険者として、俺自身も登録するのも悪くはないかもしれないと考えたんだよ。

この外見は、遺跡発掘中に受けた呪いによるもので、一日に僅かな時間しか本来の姿に戻れない。

しかも、魔法を使い過ぎたり本人が消耗したりすると、呪いが一時的に悪化して最悪

の場合だと手のひらサイズの山羊の姿に変化するって事にしておけば、いざと言う時にも誤魔化しが利くだろう。

今は、共に旅していた仲間と転移の罫で別々の場所に飛ばされたので、その時の仲間を探している。

冒険者になる事にした理由は、この呪いの解呪と仲間の捜索のため。

パンドラの人間の擬態であるサーティ・ルウは、俺の旅の仲間で親友の息子。

沢山の仲間と、ここから遙か遠い違う大陸の遺跡発掘中の事故だつてことにしておけば、そこまで問題はないさ。

実際、姿が呪いで変化する魔法トラップその物は、「ユグドラシル」でもあったからな。」

つらつらと、ウルベルトが並べ立てていく設定は、自分が最初に接触した村の人々に話した部分を使って、さらに自分の設定を織り込んだもので、過不足ないものだよってよかった。

これなら、確かにうっかり人前で姿が掌サイズの山羊の悪魔の姿になったとしても、事前に呪いのせいだと伝える事でフォローが利くだろう。

【流石、ウルベルト様だ】と、パンドラズ・アクターは感心していた。

そんな事を考えているパンドラズ・アクターの前で、ウルベルトは更に考えをサクサ

クと自分の考えを口にしていく。

「あとは……そうだな。」

もう少しだけ、ある程度の周囲に対して話す設定を作っておく必要はあるか。

俺達が住んでいたのは、一族だけが住む遠い国の中にある隠れ里。

先ずはサーテイの立ち位置だが……一族の長の息子で、里で与えられていた役割は一族の道具や薬を賄う生産職の見習いであり、一族上げての祭事の際に歌を捧げる巫女の役割も担う吟遊詩人。

基本的に、師と仰ぐ人物や道具の生産に関わる里の大人の前以外、ほぼ人前が出る事が無かった為はその顔を知っているのは大人たちだけ。

箱入り息子で世間知らずだが、それぞれ師事した面々から色々な知識を得ているため、自分の身の回りの事は全部できる上に、単独でスケリトル・ドラゴンを討伐可能な実力の持ち主。

得意な獲物は、弓とショートソードだが、多彩な知識で魔法も使える。

今回の遺跡発掘に同行していたのは、サーテイの見習い卒業の試験として生産素材の採取が、遺跡の中にあるものを指定されたから。

……まあ、こんなもんだと思うんだが、どうだ？」

につこりと笑いながら尋ねてくるウルベルトに、パンドラズ・アクターは思わず拍手

してしまった。

まさか、自分が今まで旅した短い期間の行動や話を聞いて、ウルベルトがここまできっちりとした設定を作ってくれるなどとは、思いもしなかったからだ。

だが、こうしてお互いにどういう関係なのかと言う事を、きちんとした設定まで考えた上で打ち合わせておく方が、別行動をした際にどういう関係なのかなどと言う事を他人から聞かれた場合、口にした内容の矛盾が少なくて済むだろう。

名前として、「アクター」を名乗る役者である自分が、細かな設定を決めて打ち合わせた内容を間違える事はまずないし、ウルベルトが万が一間違えるような事態になったとしても「呪いのせい」で記憶が曖昧になっている部分がある」と言う事にしておけば、フォローするのは容易い。

なので、問題が無いと頷いて同意する。

「確かに、それならウルベルト様に対して敬語を使っても、何ら問題はないと思われません。」

箱入り息子なので、世間を知らないのは確かに間違いではありませんからね。

実際、宝物殿の管理者として必要な職務を含め、生産系の様々な技能は習得しておりますし、事実と差異が無い分問題が無いかと。

そうすると、ウルベルト様ご自身はどう設定されるつもりですか？」

パンドラズ・アクター自身は、与えられた設定には納得がいったものの、ウルベルトが自分自身に対してどんな設定を付けるつもりなのか、気になってそう尋ねる。

それに対して、少しだけ眠たそうな気配を漂わせながら、考えるように口元に手を置いたウルベルトは、サクサクと考えを纏めたようだった。

少し温くなったお茶で喉を潤した後、口を開く。

「あー……俺なあ。

一応、隠れ里一の魔法詠唱者で良いんじゃないか？

これに関しては、実際の話と矛盾しないし。

最初の設定部分に付け加えるなら、一緒に組んで行動していた仲間の一人の身代わりについて受けたって事にしておくか。

罠に掛けられた呪いが強力だった為、隠れ里一番の魔法詠唱者である俺以外が呪いを受けたら助かる可能性が低かったから咄嗟に引き受けた事にしておけば、この姿になっても生き延びている言い訳にもなるだろう。

他にも、これから先のナザリック探索を含めた行動を考えるなら、決めるべき内容はまだ沢山ありそうだが……悪い、もう眠くてまともに思考を巡らせている余裕がちよつと無い。

パンドラとしては、もつと細かな事まで決めておきたいと思うかもしれないが、こん

な状況で焦って考えたとしても、余り良い考えが出るとは思えないからな。

一旦ここで切りにして、お互いに少し寝た方が良いだろう。

実際、MPもHPも消耗がかなり激しい状態なんだからな。」

そう告げながら、ウルベルトは眠そうな目をこちらに向けると、座つてたソファから飛び降りた。

「どうやら、このまま寝に向かうつもりらしい。

「俺は、奥の部屋を使うから、パンドラは手前の部屋を使つてくれ。

それじゃ、おやすみ。」

それだけ言い残すと、フラフラとした足取りでウルベルトはそのまま奥の部屋へと移動していく。

本当は、部屋まで一緒に行きたい所だったが、ああ言われた時点で付き添いは不要だと言う事だと察し、大人しく見送る事にする。

「ウルベルト様、お休みなさいませ、良い夢を。」

ウルベルトが部屋の扉を潜る前、その声を掛けると軽く手を挙げて応えてくれた。

それを見届けてから、パンドラズ・アクターは自分も休むために、先ずはその場を片付けに向かったのだった。

第二章 パンドラズ・アクター&ウルベルト視点

翌朝の一幕と、ウルベルトの装備の見直し（パンドラズ・アクター視点）

翌朝、パンドラズ・アクターが目を覚めたのは、夜が明けてしばらく経った頃だった。

ぐっすりと寝たからか、しつかりHPもMPも回復している。

その状況にホッとしつつ、パンドラズ・アクターは部屋から出るとまず覗いたのはリビングフロアだった。

もし、自分よりも先にウルベルトが目を覚ましてリビングのカウチにいたら、寝坊してしまった事を謝罪するべきだと考えたからである。

この辺り、昨日寝る前に何時に起きる予定なのか聞いていなかったのは失敗だったと、頭の中で思わなくもないのだが、そこまで自分の思考が回らない位には疲れていたのだ。

それだけ、初めての死亡と蘇生を伴う戦闘は様々な点で消耗を強いられたのだと、パ

ンドラズ・アクターは苦笑するしかなかった。

《まあ……これもいい経験だと思うべきでしょう。》

もし、これを単独で経験していたのなら、もっと消耗は激しかったのは間違いありませんし、そう言う意味でも得難いものでした。

この経験を、これからの行動にどれだけ生かせるかと言う点の方が、むしろ私にとってもウルベルト様にとつても重要だと考えるべきでしょうし、ね。》

そんな事を考えつつ、次にパンドラズ・アクターが移動したのはキツチンだった。

寝室から出てくる様子が無い事から考えると、ウルベルトはまだ眠っているのか、眠っていないくても何らかの思惑があるのだろう。

だとすれば、そこに顔を出して邪魔をする方が迷惑を掛ける可能性もある。

こちらの世界で顔を合わせてから、今までのウルベルトの言動を考えた場合、必要以上干渉されるのを好まないような傾向が見て取れた。

そんなウルベルトの意思を優先するなら、過干渉は避けるべきだろう。

むしろ、今の内に朝食の支度を済ませておく方が、何となく喜ばれるような気がした。「昨日の夜食を召し上がられた様子から、それなりの量を用意しても問題なさそうな気がします。」

どちらかと言うと、美味しいものを沢山食べられる朝食の方が喜びそうな気がします。

し、食事に余り時間が割けない時の事も考えるならば、ある程度まで下拵えしたものをストツクするように準備しておくのも悪くない気がします。

これから先、街に行けば自動的に人に関わる事になる訳ですから、こんな風にのんびりとした時間があるとは限りませんからね。」

サクサク自分の行動を決めると、パンドラズ・アクターは朝食を含めた料理の支度にかかったのだった。

パンドラズ・アクターが用意した朝食は、ふわふわトロトロのスクランブルエッグにカリカリに焼いたベーコン、ボイルしたソーセージにコーンたっぷりのコーンスープと言った、洋食メニューだった。

主食となるパンは、サクサクとしたクロワツサンにもっちりとした触感が楽しめる白パンなどの他に、サンドイッチやフレンチトーストも作っておく。

どんなものが好みなのか、ウルベルトからきちんと聞くのを忘れていたので、思い付く限りの料理を用意してみたのだ。

スープも、今回はコーンスープを用意したのだが、五分以内に仕上げられる段階まで下拵えが済んだものとして、他にクラムチャウダーやミネストローネなどもすぐに出せるようにしておいたし、ジャガイモのビシソワーズなどの冷製のものも用意してある。

ウルベルトの好みが判らない以上、準備できる限りの支度はするべきだと、パンドラズ・アクターなりに判断した結果だった。

そこまで準備を済ませ、漸くウルベルトの元を訪ねて朝食の準備が出来たことを告げようとした所で、ウルベルトが寝ていた部屋の扉が開く音が耳に届く。

どうやら、ウルベルトはパンドラズ・アクターが呼びに行くまでもなく、自分で起き出していたらしい。

昨夜の疲労困憊振りから、未だに寝ている可能性すら考えて居たのだが、昨日から見せている食欲旺盛な様子を思えば、単純に空腹で目が覚めたのかも知れなかった。

「おはようございます、ウルベルト様。」

昨夜はよくお休みになりましたか？

丁度、朝食の支度が整いましたので、お部屋の方にお声を掛けさせていただこうと思っていたところです。」

姿を見せたウルベルトに、朝の挨拶と共に朝食が用意出来ている旨を告げると、まだ少し眠たげな様子だったウルベルトの目のはつきりと開くのが見えた。

その様子に、どことなくほほえましさを感じながら、パンドラズ・アクターは昨夜使ったダイニングテーブルに、用意した料理を本来よりも少な目の量で盛り付けた器を並べていく。

こうして、一つ一つの量を減らすことによつて、種類を沢山食べられる形にしたのだ。ゆつくりとした足取りで、ダイニングテーブルに歩きよつたウルベルトは、昨日時点でクッションを沢山乗せたウルベルト用の椅子に腰を下ろしたところで、改めてパンドラス・アクターの顔を見ると、にっこりと笑った。

「おはよう、パンドラ。」

今日の朝食も、目で見ただけでも美味しそうだ。

色々な料理を楽しめるように、考えて盛り付けされているのが判るしな。

全部、俺の為なんだろう？

ありがとうな。

それと、この料理のお代わりは出来るのか？

どれも旨そうだし、お代わりしたくなると思うからさ。」

そんなウルベルトの言葉に、同じ様になつこりと笑い返しつつ、パンドラス・アクターは用意しておいたコーンスープをウルベルトの前に並べた。

「ちゃんと、お代わりが可能なので遠慮なく召し上がってくださいませ。

後、スープはここに用意したコーンスープ以外にも、ミネストローネなどご用意があります。

ご希望なら、そちらも後でお持ちしますが、まずは用意したものを召し上がられてか

らの方が宜しいかと。」

にここにこと笑いながら告げれば、ウルベルトは納得したように頷く。

どうやら、ウルベルトも自分の食べる量に関して限界があることは理解しているようで、無理をして食べると言うつもりはないらしい。

出来る限り、ウルベルトには美味しく食べて欲しいので、納得してくれたことに安堵しつつ、自分も席に着いたのだった。

何だかんだで、満足するまで朝食を食べたウルベルトは、昨日と同じ様にリビングのカウチソファに座りながら、パンドラズ・アクターが用意した食後のお茶を飲んでいた。今後の事を考えて、大量の仕込みをしたらしいパンドラズ・アクターもそれらを保管用器に移し終えたのか、ウルベルトの向かい側に腰を下ろすと、自分の分のお茶をカッブへと注ぐ。

そうして、一息入れたところでウルベルトの顔を見ると、ゆっくりと口を開いた。

「当初の予定通り、この後にウルベルト様の本体を封印したいと考えております。

現在まで、ウルベルト様の本体を移動してから追手はない様子ですが、ここで油断をする訳にはいかないでしょう。

オルファーナ嬢の話から考えるに、「プレイヤー」は確実にこの世界に來ています。

敵対する可能性すらある彼らに、ウルベルト様の本体を押されられるような事態を避けるためにも、これは必須事案です。

ですが、封印には私のレベルを一時的に使用する以上、それによるレベルダウンと言うデメリットが発生するのも、また事実ですね。

そこを補う意味でも、ウルベルト様の装備はそれなりのものを用意する必要があります。

こちらの世界のアイテムや装備に関しては、使い物にならないと判断するべきですね。

それなりに発展している国……そうですね、「プレイヤー」の影がちらつくスレイン法
国か、それとも他にしつかりした発展を遂げているだろうこの国の隣国へ行けば、もし
かしたら使える装備があるかもしれませんが、あまり期待しない方が良いかと思われま
す。

そう言う意味でも、装備に関しては私とウルベルト様の手持ちの中から調整していく
のが一番かと。」

一旦そこで言葉を切ると、パンドラズ・アクターはウルベルトに視線を向けた。

現状から、一番いいだろうと考えた内容を口にしたが、もしかしたらウルベルトには
他の意見があるかもしれないと考えたからだ。

こういう話し合いの時は、それぞれ忌憚ない意見を口にすべきだろう。

ウルベルトは、こちらの意見を聞いたところで、少し思案するような素振りを見せているので、なにか別の意見があるのかもしれない。

街の姿勢を見せたパンドラズ・アクターに、ウルベルトは徐に口を開いた。

「そうだな……今の話で進める方向で問題はないだろうが、このまま装備の調整を済ませるまで、この場で留まるのはあまり良くないだろうな。

ココは、一応少し人が通る街道筋からは外れているとは言え、全く人が来ないと言う保証はない。

それこそ、何かを探し求めて彷徨いこんでくる連中や、パンドラの事を襲った盗賊のような存在がこの「グリーンシークレット・ハウス」が存在しているのを見付けたら、どういう反応を示すか想像が付くだろう？

幸い、この辺りに居る盗賊のレベルはパンドラの目から見てもそれほど高くはないらしいし、この外見に見合うざつくりとした衣装選択をしてくれれば、それで問題ない。」
ウルベルトからの指摘に、パンドラズ・アクターは確かにその通りだと予定を変更する事にした。

今まで、パンドラズ・アクターが見た事があるこちらの世界の住人は、パンドラズ・アクターやウルベルトに比べてかなりレベルが低い。

だが、下手な噂を立てた事によって噂が発生し、そこから「プレイヤー」やその関係者を招き寄せてしまう状況になってしまったら、それこそ最悪だと言っていていいだろう。

自分で「油断は出来ない」と口にしておきながら、実際の行動はそれが伴っていない状況を目の当たりにして、パンドラズ・アクターとしては思わず頭を抱えたくなくなってしまった。

これでは、確かに様々な意味で経験値が足りない状況だと言われても、仕方がないだろう。

頭の良し悪しだけではなく、絶対的に人と接する経験が足りなさすぎるのだ。

こればかりは、実際に経験を積む以外に伸ばす手段はないだろう。

それに関しては、ウルベルトも理解しているからこそ指摘しないでいてくれるのだろうと察しつつ、パンドラズ・アクターは一先ず目星を付けてあった装備を取り出した。

子供の姿になったウルベルトの為に、パンドラズ・アクターが用意したのは、ポンチョの様なローブだった。

一応、後ろの部分が長くなっていてウルベルトが着ているマントのような雰囲気に近い品だが、それでもポンチョはポンチョである。

若しくは、幼稚園児が着るスモッグと言えば伝わるだろうか？

頭からすっぽりとかぶって着るタイプではなく、前の合わせがあつてどちらかという
と花びらをイメージしたドレスローブ的なデザインのだが、どうしても子供向け。

前は、太腿までしか丈はないし、後ろ側だつてくるぶしに掛かる程度の長さで留めて
ある。

流石に、踏んで転ばれてしまったら困るからだ。

もちろん、ウルベルトがそんな「うっかり」をするとは思っていないのだが、こうい
う用心は幾らしたとしても、足りない事はない筈だ。

何せ、今のウルベルトは本来の姿ではないのだから。

こちらの意図を正確に読み取っているだろう、ウルベルトの表情は硬い。

一緒に用意した、膝丈までのズボンと子供サイズのショートブーツのセットを前に、
顔を引き攀らせていたのを見ているので、もしかしたらこのデザインは気に入らなかつ
たのかもしれない。

そうは思っても、パンドラズ・アクターとしてこの衣装を早々諦めるつもりはない。

何せ、今のウルベルトの外見で着こなせるという条件付きで、ある程度のレベルの装
備を探し出した結果がこれなのだ。

パンドラズ・アクターが、使用可能な品としてアイテムボックス内に収納してあつた
手持ちの聖遺物級装備の中でも伝説級に近い品であると明言した時点で、ウルベルト側

にもある程度は覚悟できているだろうが。

しかも、この装備セットには【魔法耐性上昇】と【物理攻撃態勢上昇】【氷属性耐性上昇】【光属性耐性上昇】【魔法攻撃力上昇】【物理回避上昇】など、今のウルベルトにとつてかなり助かる追加効果がついている。

これを前にして、【着たくない】とは流石にウルベルトも言えなかったのだろう。その分、苦虫を噛み潰したような凄い顔をしているのだが。

苦虫を噛み潰したような、そんな顔をしつつ諦めて袖を通したウルベルトだったが、実際に着た装備はどれも意外に着心地の良さを感じているようだった。

彼が来たところで、改めてチェックしてみると、内側の肌当たる部分が柔らかかなスパイダーシルク製になっていて、通気性などを含めて快適な状態になっているらしい。布全体も、柔らかさなどの着心地の良さではトップクラスの素材を使用し、縁飾りにミスリル銀を使用した刺繍を施す事で、先程上げた様々な追加効果の半分が組み込まれていた。

「……まあ、この着心地の良さを考えれば、多少のデザインの不満は我慢するべきか。付与されている効果とか考えたら、相当なものだからな。

むしろ、これよりいい品を探すのは難しいだろ。

伝説級の品々は、腕輪とか装飾品系で複数所持していない限り、封印してしまってい

るだろうし。

サイズの自動調節機能のお陰で、長すぎて裾を踏むと言う心配もなさそうだし、これに「人化の腕輪」と「妖術師の腕輪」の二個、「節制の指輪」に「巨大化の指輪」を付けて、後はオルファーナの「凍れる女王の心臓」を胸元に付ければOKだろ。

追加装備は……あー……「火竜の杖」はどうなりそうだ？」

昨日の戦闘で使い潰しかけた、現時点でお気に入りの杖の状況を確認してくるウルベルトに、パンドラズ・アクターはにつこりと笑いながらスツと手元から預かっていた品を取り出した。

どこをどう見ても、新品同様の状態の「火竜の杖」を前に、嬉し気な笑みを零すウルベルトにそれを手渡しながら、パンドラズ・アクターは状況を説明するべく口を開く。

「昨夜、休む前にお預かりしていたこちらの品の事を思い出しまして、手持ちの道具と素材で整備と調整をしておきました。

昨日の戦闘で、随分と無理をさせたのでそれ相応の修繕が必要かと心配していましたが、こちらの杖の基礎部分に使用されている素材が予想以上に頑丈で耐久性にも優れていたようです。

そのお陰で、こちらの杖は何力所かの補修整備と調整でほぼ元の状態に戻せたと、そう自負しております。

ただ……どうしてもこの手の武器は使用回数が重なれば重なる程、消耗が激しくなるのは避けられません。

出来れば、他にも属性魔法が使用可能な杖をお持ちの場合、そちらも併用された方が消耗する速度を下げられるかと。」

そう告げれば、ウルベルトは杖を優しく撫でながら納得したように頷いた。

【火竜の杖】のような、属性魔法が使用可能なものの場合、どうしてもそれを使用する核になる部分が消耗していく。

今回は、こちらの予想よりも消耗が少なくて補修整備と調整だけでほぼ元の状態に戻せたが、次も同じように元通りに修繕可能かは分からない。

そう言う意味でも、ウルベルトが気に入っているこの杖を使い潰さない為に、整備を請け負う側としての意見を添えておいたのである。

素直にこちらの意見に耳を傾けてくれたウルベルトは、アイテムボックスの中から何本かの杖を取り出してこちらに差し出し見せた。

最初の一本目は【氷竜の杖】という、【火竜の杖】とは正反対とも言うべき杖。

こちらは、氷属性持ちなら【氷球】を無制限で、それ以外なら【一日五十発までMP不要】という破格の杖。

実は【火竜の杖】にも同じ効果が付いていて、火属性以外は【一日五十発までMP不

要)だったのだ。

ただ、「火竜の杖」が「炎属性及び氷属性攻撃無効化」だったのに対し、「氷属性攻撃無効化＋氷属性攻撃威力増加」という差はあるが、性能的にはそこまで差はないだろう。と言っても、炎属性のウルベルトが使用するには少しばかり使い勝手が悪そうだが。

二本目は、「風竜の杖」という風属性の杖だった。

風属性持ちなら、「風の刃」という第三位階の魔法を無制限、それ以外なら「一日五十発までMP不要」という、こちらも破格の杖だと言っているだろう。

こちらの追加効果は……「飛行魔法のMP不要と風属性攻撃無効化」だから、どちらかというところらの杖の方がウルベルトとは相性が良いかもしれない。

三本目は、「雷竜の杖」という雷属性魔法の杖だ。

他の杖同様、雷属性持ちなら「電撃球」を無制限使用可能で、それ以外の場合「一日五十発までMP不要」である。

この杖の追加効果は、不思議な事に「永続光のMP不要＋雷属性攻撃威力増加」だった。

昨日の戦闘で、割と炎属性の次に雷属性魔法を使用していたから、三本の中では一番相性が良いかもしれないが、その代わり追加効果が微妙なラインだと言っているかもしれない。

「……一応、俺としては【雷竜の杖】が【火竜の杖】の次の候補だったんだが……追加効果微妙なラインだから、ちよつと迷つてな。

パンドラが手を加える事で、もうちよつと別の方向に変更出来るなら、迷う事無くこれを選ぶんだけ……」

どうやら、ウルベルトも同じ様な感じで見ていたらしい。

意見の一致を喜びつつ、パンドラズ・アクターは少しばかり思案する素振りを見せた。杖の追加効果を修正が可能かどうかという点だけなら、全く不可能じゃないと言えるだろう。

ただ、その為にはどうしても杖を強化する為の素材が必要になる訳で。

「正直、こちらの杖の能力を修正するより、新しいものを作った方が杖の強度的にも宜しいかと思われませぬ。

素材に関しては、手持ちの中に【雷竜の角】と【雷竜の鱗】等が少しばかりございませぬので、そちらを使用すれば【聖遺物級】までなら何とか作成可能ですね。

もし、ウルベルト様が別の素材をお持ちだと言うなら、もしかしたら限りなく【伝説級】に近づける事は可能かもしれません……」

そう告げると、少しばかり考えた後でウルベルトは軽く頷いた。

「一応、俺の方の手持ちの素材で杖を作るのに使えそうな物を挙げるなら使わなかった

「雷の結晶」が小さめの奴が幾つかと「火竜の鱗」、後はデミウルゴスの装備を作った後に残った「火竜の核」の欠片かな。

そこら辺を使つて、それなりに使える杖を作つてくれ。

それまでの繋ぎとしてなら、「火竜の杖」にこの三本をローテンションで使えば何とかなるだろ。」

ウルベルトから提示された素材と、手持ちの素材の組み合わせからどういう杖を作るのか、要望を聞いて実際にどこまで再現可能かなどを詰める必要があるだろうが、今日の段階ではそこまで急ぐ必要はないらしい。

最初から、モモンガやナザリックを探すのには長期戦になる覚悟を決めているだけに、これからウルベルトの為に作る「杖」は、手持ちの素材で可能な限り能力値も耐久値も上げる必要があるのだ。

その為にも、付け焼刃の即興で簡単に作る訳にはいかなかった。

当初の予定では、武器も含めて調整の予定だったのだが、下手に弄つて耐久性を下げた挙げ句、いざと言う時に大破する事態になると困るので、調整するのを諦めたとも言うが。

「では、武器に関してはその様に致しましょう。」

多少の時間は掛かりますが、その方が今の時点で使用可能な武器よりも性能が高いも

のをお渡しできますし。

さて……それでは、ウルベルト様の本体を私の中に封印することに致しましょうか。」
そう言いつつ、パンドラス・アクターは自分のアイテムボックスに手を伸ばしたの
だった。

レベルダウンと、パンドラズ・アクターの装備の見直し (パンドラズ・アクター視点)

ウルベルトの本体の封印は、無事に終わった。

元々、【道化師の請願】を使用した封印だから、問題になるのはパンドラズ・アクターのレベルダウンだけである。

それだって、本人が最初から覚悟を決めている問題なので、特に大きな問題じゃないとパンドラズ・アクターは考えていた。

封印解除の条件は、ウルベルトの希望に沿うように「ナザリックに戻るか、モモンガと合流する、又はウルベルトが元に戻る条件をクリアした時」だ。

どれか一つがクリアされれば、封印が解除されるという寸法である。

もちろん、封印の解除条件を満たしたからと言って、いきなりウルベルトの本体を外に放り出す訳じゃない。

条件クリア後、安全な場所を確保した上で解除可能になる設定にしたから、少なくともウルベルトが封印を解除すると同時に命を狙われる心配はないだろう。

その事だけでも、パンドラズ・アクターは安堵できる条件が増えたと言っていい。

今回の封印に、パンドラズ・アクターが使用したレベルは、全部で二。

つまり、封印する事によってレベルが四十九から四十七まで下がった事になる。

捧げたのは、職業レベルの中のクラフトマンとエキスパートからそれぞれ一レベルずつ。

他の職業レベルを下げると言う手もあつたが、どれも五レベルも無いものばかりだったので、削る訳にはいかなかった。

特に、料理人と吟遊詩人のレベルを下げるのは今後の事を考えると得策ではないので、可能な限り残すつもりだ。

《……流石に、今のレベルより料理人としての腕を下げる訳には行きませんからね。

私だけならまだしも、ウルベルト様が一緒に旅をしている訳ですし。》

現状において、料理出来る者が自分しかいないのだから、必然的に料理人のレベルは残すのは当然の選択だと言っていていいだろう。

吟遊詩人も、表の顔として今後も使用し続ける以上、技量上がる事はあつても下がるのはおかしいと思われるきつかけになるかもしれない為、レベルを落とす訳にはいかなかった。

何が切つ掛けで、「プレイヤー」を含めた強敵を呼び込むか判らない以上、冒険者として登録した職種の維持は必須選択なのだ。

とは言え、高レベルで残してあるクラフトマンやエキスパートなら、幾らでもレベルを下げて良いかと問われれば、それは違うと言えるだろう。

ウルベルトの為に、この後作成する予定の品以外に武器や装備を作る必要が出来た際、それらのレベルが下がってしまったが故に作れるレベルまで下がってしまったら、それこそ目も当てられない事態になりかねないからだ。

「一先ず、無事に封印が出来たのは良かったんだが……レベルダウンによるHPとMPのダウンの影響とかは出ていないか？

少しでも具合が悪いなら、少しでも休んでから移動でも構わないんだぞ。どうせ、ここから先は長いんだ。

無理をする必要はないからな、パンドラ。」

心配そうに覗き込むウルベルトに、パンドラズ・アクターはにつこりと笑うと安心させるように頷いた。

こんな風に、ウルベルトに心配を掛けるのは、僕として失格だろう。

とは言え、現状ではお互いにお互いしか頼れる存在はいないのだから、心配するなど言う方が無理なのかもしれないが。

レベルダウンによる、HPとMPダウンの様子を見る為にこの場に留まるのなら、ついでに自分の装備も見直すべきだろうと、パンドラズ・アクターは考えた。

今までの装備は、遺産級を主に置いておいたのだが、もう少しだけレベルを上げる方が良いかもしれない。

その上で、認識障害の魔法で装備のレベルを偽装しておけば、そう簡単に見破れないだろう。

この世界の住人が使う鑑定レベルなら、それでほぼ偽装が出来るはずだ。

そんなことを考えつつ、自分用の装備を取り出していく。

魔法詠唱者であるウルベルトとは違い、今の自分の装備の範囲はそれなりに広い。

ローブ等以外にも、軽鎧系の防具も着用可能で、武器の選択肢もそれなりにある。

見た目を考え、そこまで重装備を選択するつもりはないが、それでも防御を厚くする必要はあるだろう。

これからも、ウルベルトの盾役をする事まで視野に入れるなら、絶対的に防御を上げる必要があるからだ。

一応、人がいない場所での戦闘に関しては、オルファーナが全面的に盾役を請け負う予定だが、人がいる場所には呼び出し難いだろう。

どうやって召喚したのか、その辺りが問題になるからだ。

いざとなれば、ウルベルトの一族の先祖伝来の秘宝の守護精霊とでも誤魔化すつもりはあるが、出来れば余り使いたくない手ではない。

人目を引く行為は、出来るだけ避けたいのだから。

《そう言う意味では、冒険者登録をした街での私の言動は失敗でした……》

どう考えても、この世界でこのレベルの装備ですら作れるものは破格の存在です。

欲に満ちた者なら、その腕を持つ私の身柄を押さえるためにつけ狙いたくなるのは、ある意味当たり前ですからね。

これから先は、もう少し押さえ目にしたしましょう。

もう、私一人だけの旅路ではないのですから。》

そう心の中で呟きつつ、用意したのは革のベスト。

一見、普通のベストにしか見えないが、繊維状にしたオリハルコンを裏打ちし、硬度を上げた逸品だ。

これで、弓矢や弱い魔法程度なら凌げるだろう。

ベストに合わせて用意したのは、ロングブーツ。

こちらも、ベストと同じように内側に繊維状にしたオリハルコンを裏打ちしてある、強化済みの品だ。

ちゃんと、長時間履いたまま歩く事を考えて、更にその上に柔らかな布を張つてある。

しかも、その布によって脱いだブーツを見られても、簡単にはオリハルコンが裏打ちされているとは気付かれないで済む為、良い事尽くしたと言つてよかつた。

それらの装備の上に纏うのは、今まで使用して来たフード付きの紺のマントだ。

一応、最初から使用する事を選んだこれも遺産級の品ではあるのだが、そこまで特別な効果がある訳じゃない。

【水属性耐性】と【雷属性耐性】が付いているだけなので、正直言つて旅の途中で雨が降り出した時用の雨具替わりだったのだ。

パンドラズ・アクターは、宝物殿から出た事が無いので【雨】に実際に降られたらどうなるのかと言うのは、あくまでも知識でしか知らないのだが、服を着たまま全身が水に濡れるのは不快だろうと予測し、それでこれを用意した。

これは、装備作成の初期の頃の作品で、属性付与の仕方を確認した際に作ったものだから、別の効果を付与していない品のである。

だからこそ、これ位なら使用しても問題ないだろうと、選んだ品である。

もつとも、使用した素材がつかるとした水を弾くタイプのものだったからか、【汚れにくい】と言う特性まで知らない内におまけで付いていたのだが。

「……へえ、どちらかと言うと防御を重視した装備に変更するのかわ？」

パンドラズ・アクターが用意していた装備を見て、ウルベルトが興味深げな様子で問い掛けてくる。

どうやら、パンドラズ・アクターが装備を変えるのは意外だったらしい。

と言っても、最初に身に付けていた装備は既に昨夜の戦闘で駄目にしていて、今着ているのは最後に来ていた別装備だから、どちらにしても装備変更はやむを得ない状況だったのだが。

そんなウルベルトの問いに対して、パンドラズ・アクターはにつこりと笑いながら頷いた。

「はい、ウルベルト様。

昨日の戦闘で、私はもう少しだけ物理と魔法の防御を上げるべきだと身をもつて感じました。

魔法職であるウルベルト様は、あのクラスの敵との戦いにはどうしても壁役が必要ですからね。

今の時点では、それ程の脅威になる存在とは出会っていませんが、今後も出会わないとは限りません。

特に、たつた今私はレベルダウンをした状況ですから、それを補う意味でもそれ相応の防御力アツプは必要かと。

今回用意した品々は、「魔法攻撃耐性」と「物理攻撃耐性」がそれぞれついていますが、第三位階に相当する魔法及び物理攻撃程度なら、ある程度まで耐えられるでしょう。

それに、ブーツの方には「回避率上昇」もついていますから、式式遠雷様の能力も併

せてかなりの回避能力が上昇しますし。

後は、装飾品関連でMPとHPを上昇させる品を探します。

手持ちの中に、ウルベルト様にお渡しした「妖術師の腕輪」には劣りますが、それを10%上昇させるものがあつたはずですから。」

変更した装備の事を説明しつつ、バンドラズ・アクターは自分のアイテムボックスの中を軽く漁った。

アイテムボックスの中から取り出したのは、二の腕に付けるタイプのバングル。

その名を「加護の腕輪」と言い、先程ウルベルトに告げた通りMPとHPを最大値の10%プラスする効果がある品だった。

高々、10%と言うなかれ。

レベルダウンした事で下がったHPとMPよりも、このバングルを付ける事で上昇するHPとMPの総量の方が多いだ。

居もあの状況下において、このバングルの効果は大きい。

もつと上の効果がある品があればよかつたのだが、使用出来る手持ちの中でこの手の効果がある品はこれだけしかないのだ。

他に選択肢がなければ、これを選ぶのは当然の話だった。

それに、もし他に似たような効果がある品が見付かつたとしても、それがHPかMP

のどちらかしか上昇しない品だったとしたら、パンドラズ・アクターはそちらよりこのバングルを選ぶ。

・裝飾品が身に着けられる数は、限られている。

この縛りは、「ユグドラシル」から転移する前と変わっていない事など、既に確認済みだった。

正確に言うなら、身に着ける事は出来るかもしれないのだが、その効果を発揮しているのは最初に身に着けた物から決まっている最大限の数まで。

それ以上は、身に着けても効果を発揮していなかったのだから、身に着けるだけ逆に邪魔になるだろう。

裝飾品にしても、自分の使用する武器や装備にしても、それらを身に着けていると言ふ事は、逆にそれだけの重さを身に課すと言ふ事なのだから。

テキパキと、用意した品々を身に着けていくパンドラズ・アクターに対して、ウルベルトは口元に手を当てて何かを考えている様子だった。

何か、問題がある品でもあったのだろうか、そう気になったパンドラズ・アクターが口を開き掛けた瞬間、ウルベルトは最後に取り出したバングルを指差し。

それまで、考えていただろう事を口にした。

「なあ……魔法職で後衛の俺よりも、壁役のつもりのお前の方が「妖術師の腕輪」を付け

の方が良いんじゃないか？

MPに関しては、オルファーナの「凍れる女王の心臓」があるから、問題がないと言えど問題がないし。

そりゃ、HPは元の数字だと心配だつていうパンドラの主張も判るけど、それこそその腕輪を借りるか、他の装飾品系のアイテムを借り受けると言う手もあるからな。

壁役なら、幾らHPがあつても困らないんだし、出来れば俺としてはパンドラの戦力アップの意味も込めてこつちを付けて貰いたいんだが……」

そう言いながら、自分の腕に着けていた「妖術師の腕輪」を外そうとする。

しかし、それを押し留めるように手で触れると、パンドラズ・アクターはにっこりと笑って首を振った。

もちろん、ウルベルトの心遣いはとても嬉しい。

だが、そちらを選ばない理由は他にもあつた。「申し訳ありません、ウルベルト様。」

お気持ちは大変うれしいのですが、そちらの品はそのままウルベルト様がお使いになられるべきです。

ちやんと、その理由もございます。

一つは、片方の手首に腕輪を付けた状態ですと、戦闘時の咄嗟の投擲の際に邪魔にな

る事がございます。

何分、私は前衛職としてはまだ不慣れな部分がございますので、そう言う動きを阻害する部分がある品は避けたいかと。

二つ目は、私はその手の品を身に着けていると、どうしても人目を引いてしまいます。吟遊詩人として、人前で謡う場合がそうですね。

こちらの世界でも、見る者が見ればそれらの品がどういう品なのか、解ってしまうでしょう。

そうなると、色々と面倒事を引き寄せかねません。

その点、こちらのバングルでしたら衣装の下に隠せますので、人目を引く事はないでしょう。

今挙げた理由から、私的にはこちらの品の方が色々と都合が良いのですよ、ウルベルト様。」

つらつらと理由を上げていけば、ウルベルトは苦笑しながらも納得してくれた様子だった。

流石に、これ以上人目を引き過ぎると面倒になる事は、彼も理解してくれているのだろう。

確かに、見えない場所に装備出来るのなら、そちらの方が面倒事に巻き込まれる可能

性が、どう考えても少ないのだから。

一通りの装備などの見直しは済んだ所で、パンドラズ・アクターは手持ちのアイテムを確認し始めた。

昨日の戦闘で、消耗した分の残りがどれだけあるか、この語の予定を組むためにも確認が必要だったからだ。

元々、昨日の戦闘時に使用する限界として、パンドラズ・アクターが見込んだ数は手持ちの半分。

蘇生アイテムに関しては、即効性があるものはほぼ使用してしまう覚悟で挑んで消費してしまっただが、ウルベルトの手持ちの素材と自分の手持ちの素材を合わせれば、一つか二つはまた作成できる予定なので、この件に関してはそれ程問題ではない。

回復系アイテムに関しては、ウルベルトに渡した分は既に無く、自分の手持ちも残す分として取り分けた分にも手を付けている事から、予定よりも消費しているのはかなり痛いと言っているだろう。

だが、これから先の旅でここまで危険な戦闘になるのは少ないだろうと、オルファーナの話を聞いた時点で、パンドラズ・アクターは考えていた。

それ位、この世界の住人のレベルは低いのだ。

パンドラズ・アクター自身、この世界に来てから二度盗賊に遭遇しているが、どちら

もレベルは最高で二十程度しかなく、レベルダウンしている状況でもそれこそ片手で倒せる位のレベルの低さだった。

今まで、街で出会った冒険者や国の兵士などと言う戦闘力がそれなりにある者たちも、平均して十以下と言うお粗末さだ。

この状況下で、彼らよりも高位のレベルだと言うオリハルコンやアダマンタイト級で「どれくらいレベルがあるのだろうか?」と、そう考えてしまいう程度には弱い。

もちろん、「プレイヤー」やスレイン法国などの例外はあるだろうが、基本的に人間種は弱いのだ。

これは、種族レベルを持つ異形種だからこそそのステータスの伸びからくる身体能力差もある為、まず覆せるものではないだろう。

それが顕著に出ているのが、この国を襲っている隣国のビーストマンとの戦闘だろうか。

彼らとの身体能力性、そのまま戦場での戦闘結果に結びついていて、この国は多くの国民の被害を出しながらぎりぎり生き延びているのが現状だ。

これは、初めて滞在した村や街で見聞きしたただけで入ってきた情報なので、実際はもつと深刻なのかもしれない。

それはさておき。

装備も整い、パンドラズ・アクター自身もある程度回復してきたので、そろそろここから移動を始めるべきだろう。

幾ら街道から離れているとは言え、ウルベルトが言った通りこの場所に何時までも「グリーンシークレット・ハウス」を展開しておくのは、あまり得策ではないだろう。

パンドラズ・アクターたちの手元に、こういう便利アイテムがある事をこの世界の住人達が知れば、それを手に入れようと何かしてくる可能性があるからだ。

もちろん、実力的には何の問題もなく退けられるだろうが、そこから面倒事に発展行くのは目に見えているし、最悪国まで関わってくるかもしれない。

そんな状況を避ける意味でも、人前でこの「グリーンシークレット・ハウス」を展開する訳にはいかなかった。

つまり、だ。

これからの旅路は、「至高の御方」と仰ぐウルベルトにも、野宿をしてもらう必要性が出てくる訳で。

本音を言うなら、そんな事態は絶対に避けたい案件だった。

必要なら、小さな姿のまま心地よく過ごせるように、肩掛けタイプの「無限の背負い袋」の内装を一部弄って、ウルベルトの為の心地よい空間を作り、そこで旅の間は寝泊まりして貰う事も辞さないつもりだったのだが、当のウルベルトがそれを望まなかった

のだ。

むしろ、「自分の足でこの世界を感じながら、モモンガさん達を探す旅をしたい」と願われてしまえば、パンドラズ・アクターにはそれを叶えるために最大限の手を打つ必要があった。

それは、ウルベルトや自分の手持ちの装備だけじゃない。

この先の旅路で、誰かと同行するような事態になった際に、ある程度誤魔化しが効く道具を用意して、出来る限りウルベルトが快適に旅を出来るようにする必要があるだろう。

食事関連は、特にウルベルトが興味を示している案件だけに、こちらの世界の材料でもある程度味を再現した調理が出来る状態にするべく、色々と気を配る必要があった。

☒その為にも、色々とこちらの素材や道具を使って、同じ味が再現できるか試してみるのは必要はあるでしょうね。

他にも、こちらの素材でどれくらいのアイテムが作成可能か、色々と確認する必要があるでしょうし。

これらに関して、次の街まで移動した後で材料を仕入れた上で考える事に致しましょうか。☒

つらつら、次の街でやる事を頭の中で組み立てつつ、パンドラズ・アクターはそれま

で座っていたソファから立ち上がった。

「そろそろ、ここから移動を開始しましたでしょうか、ウルベルト様。」

私の方は、もう十分休ませていただきましたので回復いたしましたし、装備なども一新させる事が出来ました。

ですので、せめて昨日合流した地点位までは、今日中移動したく思います。

それこそ先が見えない旅だからこそ、進める時は進んでおくべきかと。」

そう、ウルベルトに対して出立を促すように告げれば、納得してくれたのか同じ様にソファから立ち上がると、そのままウルベルト用に用意した「無限の背負い袋」を手に取り、そのまま肩に掛けた。

着ていたドレスローブについていたフードを被り、旅支度を終えたウルベルト視線を受ける、パンドラズ・アクターも自分用の「無限の背負い袋」を身に着けてマントを纏い、フードを被る。

お互い、旅支度を終えたのを確認して忘れ物がないか点検した後、二人揃ってお安全だった「グリーンシークレット・ハウス」から外へと出ると、オルファーナへ呼び掛けて彼女をブローチの中へと戻す。

最後に、今まで使っていた「グリーンシークレット・ハウス」を片付けてアイテムボックスへとしまうと、そのままゆっくり街道へ向けて歩き出したのだった。

盗賊との遭遇（パンドラズ・アクター視点）

街道に戻り、そのまま街の横を通り過ぎて進む事半日。

そろそろ日も暮れるので、夜営の準備に入る事にした。

二人とも、この程度の移動なら休息など取る必要はないのだが、人間の振りをしながら旅するのに慣れる意味合いもあって、日が完全に暮れる前に夜営の準備をする事にしたのだ。

前回、フレッド達と一緒に夜営の下準備をした事で、普通の人間が夜営をするのに必要な手順は全部覚えていたし、「グリーンシークレット・ハウス」以外の夜営向きのアイテムなら、幾つか使用していいとウルベルトからも許可を貰っている。

食事の支度も、自家製のパン以外はこちらの世界の携帯食を使ってみる事にした。

誰か一緒になった時のことを考えて、それなりに材料を仕入れて置いて良かったと思うべきだろう。

一応、購入時に鑑定をしてどんな材料なのかは確認済みだったので、どんな料理に向いているかは分かっているから、少し手間は掛かるがそれなりの料理が作れる自信はあった。

それにしても……気が付いたら、昨日から食事の支度をしている時間の割合がかなり高い気がする。

昨日の戦闘時間も、合計すると前半後半のインターバルや準備時間も全部ひつくるめて、一時間も戦っていない。

あれだけ激しい戦闘だったのにも拘らず、それ位の時間しか戦っていないのだ。

裏を返せば、それだけ濃い戦闘内容だったと言う事になるのだが、同時に短期決戦以外に勝ち目がなかったとも言わべきなのだろう。

☒……当然、ですね。

自分が満足で戦える状況でない上に、パートナーはほぼ初陣同然の戦闘経験しか持たない、レベル五十にも満たない今の私です。

ウルベルト様が、短期決戦を考えるのはむしろ当然の事でしょう。

これで、まだ味方の援軍が期待出来る状況でしたら、話は変わったんでしようが……今回の場合、結果的には倒し切ってしまわずに済んで良かったのですし、今後は私がウルベルト様の足を引っ張らない様に、今回の経験を元に気を付けないといけませんね。☒

手早く細かく刻んだ干した肉を、水を入れた鍋に突っ込んで火に掛けて出しを取るべく煮込んでいく。

その間に、日持ちする野菜を取り出して刻んで鍋に入れると、夜営の準備を始めると同時に水に漬けておいたレンズ豆の水を切り、これだけは昨夜のうちに作っておいたトマトピューレと一緒に鍋に投入。

そこから暫く煮込んでから、塩コショウなどで味を調えれば、今日のスープは完成だ。まず、持ち込んだパンを同じ厚さになる様に半分に切り、隠し味として持参したマヨネーズを薄く塗った後、その上にトマトペーストをたっぷり塗る。

そこへ、薄く削いで刻んだ干し肉とチーズを散らし、金網の上に乗せて遠火で炙る様に焼けば、簡単ピザトーストの完成である。

そこに、追加でフライパンで半熟にした目玉焼きを乗せれば、少しだけ豪華な感じになった。

後は、食事前のお茶を添えれば今日の夕食は完成である。

ウルベルトはどうしているかと言えば、食事の支度を始めた頃からそわそわと目の前に座って、手際よくパンドラズ・アクターが料理を作る様子を見ていたのだが、どうやらそろそろ待ちきれない雰囲気が出てきた。

まあ、これだけチーズとトマトの良い匂いが漂っていたら、お腹が空いて我慢が出来なくなるだろう。

飲食をしなくても大丈夫な種族とは言え、これだけ良い匂いがしていればそれに反応

するのは当たり前だった。

それに、今は人間に擬態しているのだから、食欲にはこの辺りも関係してくるだろう。「ウルベルト様、今、スープの方もご用意しますので、宜しければ先にピザトーストの方をお召し上がりくださいませ。」

「こちらは、冷めてしまうと味が落ちてしまいますので。」

焼き立て熱々のピザトーストを、手持ちの携帯皿に乗せて手渡しつつ、そう言つて先に食べるように勧めれば、キラキラと目を輝かせながら受け取つた皿からピザトーストを手取る。

まだ焼きたてなので、手に取つて食べるには結構熱い筈なのだが、ウルベルトは気にする事無くそのまま口元へと運ぶと、ガブリと一口。

「~~~~~!!!」

はふはふと、口の中の熱を逃がすように口を動かしつつ、パンを口元から離せば、そのままトロリと伸びるチーズ。

うっかり下に落ちそうなそれを、口を動かして巻き上げるように全部食べ切ると、ほうつと満足げな息を小さく漏らす。

そんな風に、ウルベルトがピザトーストを食べている横で、パンドラズ・アクターはスープを掬つて器に盛ると、そつとウルベルトの前にある皿の横に並べた。

皿を乗せるように、地面に敷いたランチョンマットの上には、他にスプーンやフォークが並べてある。

「ホント、何を食べても美味しいな、パンドラの料理は！

このピザトーストも、凄く美味しい！

チーズもトロトロだし、干し肉が良い味のアクセントを出してるし、トマトペーストも凄く美味しい。

卵は、まだ端っこの白身しか食べてないけど、これもまた美味しい！」

ニコニコと花を飛ばしながら、もぐもぐはふはふと食べるウルベルトはとても満足そうだ。

自分の分のスープを盛り付け、焼き上がったピザトーストを手にとると、パンドラズ・アクターは片手にフォークを取ってにっこりと笑った。

そのまま、軽くフォークで半熟卵の黄身の部分を軽く突き、トロリと流れ出す黄身を器用にピザトーストの上に広げた所で、パクリと一口。

こちらの様子を、じっと見つめていたウルベルトに向けて、口の中のものを全部飲み込んだ所でのっこりと笑ってこう言った。

「こうして、黄身を潰して広げて食べると、また黄身の美味しさも加わってさらにおいしくなるんですよ？」

笑顔で告げたこちらの言葉を聞いて、ウルベルトが迷わずそれを実行したのはすぐ後の事だった。

食事も済み、その後始末も全て済ませた所で、二人はお互いに顔を見合わせると、小さく溜息を吐いた。

このままのんびりと、夜空を見ながら野営を楽しむ予定だったのだが、どうやらそうも言っていないらなくなったらしい。

この場所で夜営すると決めた時点で、ウルベルトが丁寧に張り巡らせた警戒のための結界に、悪意を持った存在が感知されたからだ。

まるで、取り囲むように近寄って来る所から判断して、パンドラズ・アクターを数日前に襲ったような盗賊の類なのだろう。

「……ウルベルト様、いかがいたしますか？」

正直、こちらへと近付いてくる気配はどれも弱々しく、どれだけ数が居てもあつさりと倒してしまう事は簡単だろう。

向こうが突け狙ってくるのだから、そのまま返り討ちにするのは当然だとして、だ。

パンドラズ・アクターが聞いているのは、このまま向かってくる全員の命を無造作に

刈り取って終わりにするか、それともまだ残っているものが居るかを聞き出した上で、全部根絶やしにするかと言う点だった。

夜の帳の中で、こちらの身に着けている装備を見抜けるとは思えない。

だからこそ、彼らがこうして自分達を狙ったのは偶然の産物でしかなく、それも【行き掛けの駄賃】程度の認識だったのだろう。

この時間帯だから、どこかの商隊を襲った帰りに夜営している親子連れか兄弟を見付けたので、ついでに獲物として狙った程度の感覚でしかない筈だ。

そう、パンドラズ・アクターが考えている横で、幾つか呪文を口にしてぎつくりと敵の様子をウルベルトが確認している。

「んー……どうやら、こっちに向かつて来ているのは十人程度、だな。

だとすれば、確実に別動隊は存在しているだろう。

どうせ糧にするなら、こいつらの本体も全部刈り取っておくべきだろ。

少しでも多くの糧が必要なんだし、盜賊たちが相手ならそれ程面倒な事にならなくても済むだろう。

出来れば、小さな村くらいの規模の盜賊団だと、これの糧が増えて助かるんだがな。」

自分の指に納まっている、【魂の指輪】を軽く突きながらそう呟くウルベルトに、パンドラズ・アクターも心から同意しなくなつた。

確かに、普通の村人を糧にすると色々問題はあるので可能な限り避けたい案件だが、盗賊団なら誰にも咎められる心配もなく、好きに指輪の糧にして問題ない存在だろう。

まだ、この【魂の指輪】の贄になるのが人間だけなのか、それともモンスターなどの命も対象なのか、きちんと確認していないこの状況下で確実に糧になる存在の命を刈り取れるのは、かなり良い案件だと言っている。

「……何も知らず、こちらを弱者だと思って周囲を囲んでいる哀れな盗賊たちには、そのままウルベルト様の糧になっていただくといたしまして。」

もし……襲われた商隊の生き残りが居た場合は、どう対応いたしますか？」

確認を取るように問うと、ウルベルトは少しだけ顔を顰めたものの、口元に手を当てたまま少し考えた後、はっきりと答えを口にした。

「……可哀想だが、その生き残りも一緒に糧になって貰うでしょう。」

本来なら、助けてやりたい所ではあるが、俺が盗賊たちを指輪の糧にするところを見られる可能性がある。

魔法を使えば、記憶の操作をする事も出来るだろうが、今の俺のMPと魔法に対する消費量を考えると、割が合わん。

それに……生き残りが女性だった場合、確実に盗賊たちの餌食になって散々弄ばれた

後だろう。

だとしたら、このまま死んだ方が幸せな場合もあるからな。

……さて、そろそろ来るぞ？」

前回の様に、忍び寄って刈り取るのではなく、ウルベルトと共に待ち構えて刈り取る事を選択していた。

その為、パンドラズ・アクターは「無限の背負い袋」からレイピアを取り出すと、鞘を腰に差してスラリとレイピアを抜く。

もう少しで、この場に到着するだろう彼らと対峙するべく、少しだけ警戒心を上げたのだった。

盗賊相手の戦闘は、予想通りあっけなく片が付いた。

当然だろう。

今回の盗賊のレベルは最高でも十二しかなかったのだ。

そんな相手に、パンドラズ・アクターとウルベルトの二人と言う過剰戦力で負ける筈がなかった。

襲ってきた盗賊の数は、全部で十三人。

一人だけ残して、一瞬の内にその場でパンドラズ・アクターが行動不能状態に持ち込

み、ウルベルトがMP節約の為に杖で撲殺していくと言う手段を取った後、残した一人に対してパンドラズ・アクターがモモンガの姿にごく僅かな時間だけ変化し、【支配】の魔法を掛ける。

何故、モモンガの姿になるのを僅かな時間だけに留めたのかと言えば、夜営した場所が一応街道沿いだったからだ。

十分警戒はしているが、それでもこちらの世界には「タレント」と言う特殊能力がある。

こちらの意図しない形で、パンドラズ・アクターが姿をかえる様を見られる可能性もあり、姿を変えている時間を短くしたのだ。

それなら、姿を変えなければ良いと思うかもしれないが、ウルベルトのMPの節約の意味でも、【支配】の魔法はパンドラズ・アクターが受け持ったのである。

何せ、この後には盗賊団の本拠地の襲撃が待っているのだ。

パンドラズ・アクターが盗賊を倒しても、ウルベルトの【魂の指輪】にカウントされるか判らない分、出来るだけウルベルトの手で盗賊たちの命を刈り取る必要があった。

「んー、ちゃんと全員回収出来たな。

何せ、この指輪を手にした状態で何かの命を刈り取るのは、今回のこいつらが初めてだったから、無事に回収出来るか心配だったんだよ。

これで、命を刈り取ればこの「魂の指輪」に回収されるのは確認出来た。

後は、パンドラやオルファーナの刈り取った命もその対象になるのか、その辺りの検証がしたい所だな。

そうだな……こいつに本拠地まで案内させた後、パンドラに止めを刺して貰うとするか。

もし、パンドラが止めを刺したら指輪に回収されなかったとしても、こいつ一人分だけで済むし。

それで、構わないか？」

ウルベルトがも、パンドラズ・アクターと似たような事を考えていたらしい。

そう問われ、確認するべき案件なので素直に頷いて同意すると、何かを思い付いたらしいウルベルトは軽く手を叩いた。

「こいつら笑顔のまま、一つの提案を口にする。

「こいつらの本拠地まで、移動中はパンドラのマントのフードの中に居させてもらっても良いか？」

どうも、小さい身体だと動くだけで体力の消耗が激しい感じがするんだよ。

それなら、移動中は小さくなってパンドラのマントのフードの中に居た方が、余程楽な気がする。

だから、パンドラさえ良ければそうしたいんだが……駄目か？」

少しでも、体力温存と言わんばかりにそう告げるウルベルトに、パンドラズ・アクターは反対するつもりはない。

ウルベルトには、少しでもHPやMPの消費を避けて欲しかったので、そう言つて貰えて助かった所だ。

もし、その提案をして貰えなければ、申し訳ないがパンドラズ・アクターはウルベルトの事を抱っこして移動するつもりだったのだから。

「ええ、どうぞ。」

私のマントのフードの中で宜しければ、幾らでもウルベルト様のお好きにご利用くださいませ。

それで、盗賊たちの本拠地までの移動の途中、もしこの盗賊たちの本体を発見いたしましたら、その時は先程と同じように行動不能になる様に仕掛けようかと思ひます。

その際は、ウルベルト様は別の場所……そう、出来れば盗賊団の頭上辺りでお待ちいただくのが宜しいかと。

その位置からなら、盗賊たちを一度に殲滅可能ですからね。

もし、それでウルベルト様にご了承いただけるのでしたら、そろそろこの盗賊に本拠地まで案内させようと思ひますが、宜しいでしょうか？」

ウルベルトの提案に同意しつつ、これから向かう目的地までの道中で遭遇する可能性がある目の前の盜賊の仲間たちへの対処を提案すれば、ウルベルトはうっそりと笑う。どうやら、この提案は間違いではなかったらしい。

ウルベルトは、素早く周囲に誰も居ないか確認した後、スツとそれまで指に填めていた「巨大化の指輪」を外し、今の身体の本来大きさである手のひらサイズに戻ると、そのままパンドラズ・アクターのマントのフードに潜り込んだ。

パンドラズ・アクターは、目的地まで移動する手段として飛行ではなく式式炎雷の「隠密」の特殊技能と魔法の「加速」を併用したものを選択した。

理由は幾つかあるが、一番は「飛行」で移動するには森の中は木が邪魔であり、それを避ける為には森の上を通る事になる為、逆には目立つからだ。

もちろん、上手く森の木々の頭上ギリギリを移動すれば、目立つのは避けられるかもしれないが、今度は森の中を移動している可能性がある盜賊たちを見逃す可能性があった。

今回、彼らは全てウルベルトが元に戻る為に必要な「贄」の一部にすると決めた以上、回収漏れがあっては困る。

何より、こちらの姿を下手に目撃されたまま逃げられでもしたら、後が面倒な事に発

展するだろう。

向こうは盗賊でありこちらは冒険者なので、「野営中に襲われた事もあり、危険な存在を排除する事を目的として討伐に当たった」と言えば、それが理由として通用するのは間違いない。

実際、彼らに襲われている商隊も存在するのだから、ここで盗賊たちを討伐する事は問題ないのだ。

問題なのは、ウルベルトの今の姿を誰かに目撃される事だろう。

幾らなんでも、掌サイズの人間など存在している筈がないのだから。

もし、うっかり彼らに目撃されたとしても、ウルベルトの事を人形だと判断してくれば問題はない。

相手が気付く前に、行動不能にして仕留めてしまえばいいだけだ。

しかし、もし何らかのタレントによってその存在を気付けなかったり、遠距離からの目視をされていたとしたら、話が変わってくる。

もし、目撃された情報を他の誰かに漏らされただけで、こちらの行動は制限される事になるのだ。

その場合、最悪の状況にまで発展すれば、せつかく作つたこの外見すら放棄する必要が出てくるだろう。

出来れば、そんな事態は避けたかった。

その為にも、【支配】の魔法によってこちらの支配下に置いた盜賊を先行させ、本拠地まで誘導させつつ囚役も引き受けさせているのだ。

仲間の一人が、単独で本拠地を目指している状況を別行動の盜賊たちが目撃すれば、その理由を確認する為に寄ってくるだろう。

そこで、彼らに偽の情報を持たせて誘き寄せ、一網打尽にすればこちらの消耗は少なくて済む。

この程度の雑魚なら、どれだけ居てもそれ程手間を掛けずに片付けられる自信はあるが、それこそ誰が来るか判らない様なこんな場所ですっかり戦闘を長引かせ、下手な強敵を招き寄せるような事態になる事の方が怖かった。

そんな状況にならない為にも、この程度の相手なら一撃必殺で片を付けられる状況を作り出す必要がある。

☒さて……すぐに見つかつてくれると助かるんですけど、ね。☒

レベルダウンの影響からか、前回よりも自分の索敵能力が落ちていている事に気付いた。パンドラズ・アクターは、次からはより早く敵の位置を確認する意味でも【千里眼】を必ず使用する事を考えつつ、盜賊の後ろを誰にも気付かれないように進んでいくのだった。

盗賊の罫（ねぐら）までの道程（パンドラズ・アクター 視点）

パンドラズ・アクターの予想通り、別行動してたらしい盗賊の本隊を見付ける事が出来た。

盗賊の数は、総勢三十人。

数日前、パンドラズ・アクターがフレッド達と夜営している時に襲ってきた数より多い事から考えて、それ相応の規模の盗賊団なのだろう。

『……ほう、これは思ったよりも多くの魂が狩れそうだな？』

伝言でそう伝えてくるウルベルトに、パンドラズ・アクターも同意しつつ盗賊たちに気付かれない様に、気を配りながら更に探索の範囲を広げた。

そこで引つ掛かったのが、盗賊たちが運んでいる荷馬車の中に転がされている存在だ。

『ウルベルト様、どうやら彼らが運ぶ荷台の中に襲われた者の生き残りが居るようです。

数は、全部で五人でしょうか。

ただ……その殆どが虫の息ですので、もう事切れる寸前かと思われまます。

後、入り口までの遮蔽物の有無は判りませんが、ここから少し進んだ先に洞窟があり、そこに更に三十人ほどの人間が密集している場所を感知いたしました。

多分、そこが彼らの本拠地なのでしょう。

そこへ、この本隊から離れた一人が駆け込んだのも感知いたしましたので、斥候が獲物を刈り取った報告に向かったのだと思われまます。

……他に、この辺り一帯には人間の反応はございませんので……目の前の獲物を狩りに掛かりますか？』

盗賊に関する追加情報を伝えつつ、これからどうするのかウルベルトの指示を伺えば、返って来たのはゴーサインだった。

『そうだな、荷台の中の被害者の生き残りが事切れる寸前だと言うなら、早く仕掛けて一緒に狩ってしまったわないと、間に合わずにカウントされない可能性があるからな。』

既に、俺たちの間では被害者を助けない事で合意しているんだ。

助けないなら、助けないで俺の糧になって貰わないと勿体ないだろう？

という訳で、サクサク行ってくれ。』

それだけ告げると、ウルベルトはフードの中からするりと抜け出て、盗賊たちの視界に入らない上空で待機するべく飛行を使う。

ウルベルトが移動し始めたのを確認し、パンドラズ・アクターも行動に映る事にした。

この場で手にしたのは、麻痺効果が付いている苦無である。

レイピアを片手に、彼らに特攻して県による接近戦を仕掛けるよりも、高速移動しながら麻痺効果の苦無を投げ付ける方が、足止めだけなら短時間で事を動かせると判断したからだ。

敵に悟らせる事なく至近距離まで移動し、高速で移動しながら苦無を手や足などに命中させる事でその場にいたほぼ全員を麻痺させると、その場から下がりながらウルベルトへと合図を送る。

それを受け、ウルベルトは頭上から「風竜の杖」を翳すと、そのままその杖の特殊効果を発揮し、幾つもの「風の刃」を盗賊たちが居る場所目掛けて放った。

可能な限り、効率良く盗賊たちの命を狩り取る様に範囲を限定した状態で放たれたそれは、幾重にも重なり彼らの命を散らしていく。

数秒後、ウルベルトが放った「風の刃」は、その場にあつたあらゆるものを切り裂いたらしく、何もかもがズタズタな状態で。

そこで生きている者は、ウルベルトとパンドラズ・アクター以外にはいなかった。

ウルベルトは、盗賊たちが居た方向に指輪をかざし、その場にある死者の魂を全て回収していく。

そう……その場にいた盗賊たちだけではなく、彼らの被害者である死にかけていた者

たちも、全て指輪の中に魂を差し出させていたのだ。

この場で死亡した人数は、全部で盜賊の被害者被害者も合わせて三十五人。

先ほどのものも合わせたら、四十八人の魂をここ十数分で回収できたことになる。

こうして「盜賊を狩る」と言う手段は、指輪に命を集めるには割と効率が良い方だと、そう考えて良いのかもしれない。

少なくとも、盜賊は後残り三十人位いる計算なので、この盜賊団と被害者でざっくり八十人位は確保できるだろう。

今回は、あくまでも襲撃されてから返り討ちにしただけなので、この状況は存外悪くなかった。

ついでに、彼らが襲撃して奪ったと思われる商隊の品々を簡単に確認したが、その荷の大半は食料品だった。

しかも、ウルベルトが殲滅すさせる為に放った魔法の余波を受けていた為、あちらこちらに傷付いた事による品質の劣化はどうしようもなく、自分達が食べる分として使用するのには傷付き過ぎていて躊躇われ、どう考えても廃棄品にするしかない状態だったのである。

「……これは、どう見てもシュレッター送りするしかありませんね。

多分、ここまで損傷を受けていたら、まともな金額にはならないでしょうが……それ

でもこのまま放置する位なら、シユレットダーで金貨にした方が、より有効な使い方だと思われます。

それに、ここで襲われた商隊の品々が無くなってしまう方が、丁度良い証拠隠滅になる可能性が高いと言えるでしょう。

元々、盗賊団の遺体も何もかも、全て処分する方向で考えましたからね。

この盗賊団は、この仕事を最後に今の根城を何一つ残さず引き払い移動した。

誰の目から見ても、そう見えるように処理をさせていただこうかと考えております。

それで、宜しいですかウルベルト様？」

パンドラズ・アクターの問いに、ウルベルトは苦笑しながら頷いた。

確かに、この状況ではそれが一番だろう。

この提案は、他者に遺体を調べられない為に考えられた、この後も行う必要な処置だ。自分たちがしたという証拠は残せないのだから、そのためにも処分できるものは処分しておく必要がある。

ついでに、必要なものをこの場や盗賊の場で回収しても、多分気付かれないだろう。

いや、絶対に気付かれない。

何故なら、最後の後始末の方法に「暗黒孔」を使用するのだ。

「あらゆるものを吸い込む」と言うこの魔法を使えば、跡形残らず消し去れるだろう。

ほんの数分前まで、他人に見らえる事を極力避ける行動を取っていたパンドラズ・アクターが、こんな派手な魔法を使用する事を躊躇わないのは、ウルベルトから「伝言」で提案されたからだ。

☒いっそ、アイテムか何かを使用して、それを可能にしておると見せる事は出来ないか？☒と。

その言葉で、彼が思い至ったのが「魔封じの水晶」だった。

これなら、使い切りアイテムで魔法を使用しているように見えるだろうし、直接「魔封じの水晶」に触れて解析されない限り封じられている魔法がどんなものなのかとか、調べられる心配はない。

それで偽装して、盗賊の遺体を始末したとしても、邪魔だったから掃除したと言えば文句は言われまいだろう。

実際に、街道沿いの夜営地に転がっていた遺体は髪の毛一本、血の一滴も残さず吸い込ませ、その上で綺麗に痕跡を消して元の夜営地に戻しておいた。

これで、誰か目撃者が居たとしてもその痕跡を探し出すのは難しいだろう。

と言うか、盗賊に襲われた時点で夜営地の焚火は消してあったから、暗闇でものが見える状態でない限り、こちらの顔を確認する事も出来ない筈。

むしろ、それよりも前にこちらを監視していたような存在はいなかった筈だから、こ

こまですれば誰にも気付かれないだろうと言うのが、ウルベルトと二人で話し合った結論だった。

出来れば、彼らがこちらの世界の貨幣を持っていると、こちらも資金面でそれなりに助かるのだが、盗賊たちにそれを期待するのは難しいかもしれない。

商人達を襲って得た収入など、さくさくとあぶく銭として使ってしまったている可能性が高いからだ。

まあ、将来の事を考えてそれなりに溜め込んでいる、割りと堅実な連中も中にはいるだろう。

盗賊との遭遇は、元々自分たちの旅の予定にない事でもあり、なければそれでそこまでするものでもない。

どちらかと言うと、現時点で自分達にとって重要なのは、こいつらの命そのものの方なんだから。

「……それにしても」とパンドラズ・アクターは、小さくひとりごちた。

これだけ、ウルベルトが今の状況で苦勞するのは、手のひらサイズのゴーレムを作った自分のせいでもあるが、タブラがそのゴーレムに仕掛けたトラップのせいでもある。

しかもこれが【至高の御方々】全員だと言うのなら、今後こちらの世界にやってくるだろう【至高の御方々】は、この姿でお戻りになるのだろうか？

だとしたら……それは大変面倒なことになるのではないかと、少しだけ不安になる。

ウルベルト一人だけで、これだけ苦労していると云うのに、何人も同時に帰還したらそれこそ元に戻るのに必要な「膨大な数の命」をどう得るか、誰から先に戻るかと言う点で揉めそうな気がするからだ。

そんな、パンドラズ・アクターの心配を横に、ウルベルトはうつそりと笑った。

「深く考えても、今の状況では仕方がないからな。

前にも言った気がするんだが……なってしまったものは、仕方がないさ。

むしろ、こうして生きていくだけでも、俺は運が良いと思っているからな。

それに……俺が出来ない部分は、お前が助けてくれるんだろう？」

そんな風に、大丈夫だと言わんばかりに笑われたら、助けずにはいられないだろう。

信用と信頼を、全部向けてくれているウルベルトに対して、全力で答える事が今の自分に出来る事なのだ。

それに、今は考え事をしているよりも、もっとやるべきことがあった。

ひとまず、盗賊たちの罅まで彼らの仲間を残さず狩りながら辿り着き、そのまま彼らを殲滅ことだ。

その為には、先程から一人残している盗賊に、このまま道案内させる必要があるだろう。

今回の襲撃で、ウルベルトの魔法の威力を目の当たりにしたその男は、すっかり腰を抜かしてその場に座り込んでいる。

パンドラズ・アクターの指示により、ウルベルトが使った魔法の効果範囲から外れていたもので、自分の身には危害を受けていないものの、その半端ではない力を目の当たりにした事で恐怖に駆られているのだろう。

その様子から察するに、多分この盗賊はこれ程までの魔法の力を初めて目にしたのであるが、この程度で腰を抜かして動けなくなつて貰つては非常に困る。

【支配】の魔法によつて、口頭で罫までの道を説明させると言う手もあるが、それだとこの森の中では判り難いからこそ、こうして直接案内させているのだから。

最も、この男が無事に生きていられるのは、罫まで案内した所までの予定だ。

先程の打ち合わせで、既にこの男は実験も兼ねて処分する事が決まっている。

その事に関して、パンドラズ・アクターの中には躊躇いはなかった。

自分やウルベルトに対して、敵対行動を取つた時点で殲滅対象だからだ。

それに、今のウルベルトの状況を早く脱却する為に必要な命を集めるのに、盗賊の類は格好な相手だと言つていいだろう。

自分から獲物の方がやってきたのだから、そのまますべて狩つたとしても問題はない筈だ。

それでなくても、この国はビーストマンに襲撃されていて、細かな部分まで守りが薄くなっている状況である。

商人たちを狙う事から、どこの街でも頭痛の種となり掛けているだろう、盗賊の類を勝手に狩っていったとしても、非難される謂れはない筈だった。

ついでと言わんばかりに、パンドラズ・アクターはウルベルトが使った先程の魔法について、少しだけ思考を巡らせた。

今回は、「風竜の杖」の中に封じられた魔法の威力の確認の為に、普通に魔法を使うのではなく杖の力を開放する事で魔法を放ったのだが、予想よりも威力は大きかったと言っただろう。

これに関しては、後で確認する必要があるかもしれないが、ウルベルトが装備している別のアイテムの効果が影響している可能性もあった。

杖でMPの使用なく使える魔法は、第三位階まで。

今のウルベルトにとって、この程度の魔法など幾らでも扱える代物でしかなく、それこそ小手先の技でしかない。

彼の本領は、持ち前の膨大な魔力を大量に消費して使用する、ナザリック最大火力とも言える殲滅魔法なのだから。

それでも、ウルベルトは小手先の技とも言うべき低位の魔法にも十分精通していた。

理由は、ボス戦などの戦闘時のヘイト管理の都合上、ただ火力の高い魔法を放つだけが攻撃系魔法職の役割ではないかららしい。

オルファーナとの戦闘でも、ウルベルトは基本的に使用していたのは低位の魔法である【火球】だった。

もちろん、【火竜の杖】の効果でMPなしで使用出来る魔法が【火球】だったからと言うのも理由になるだろうが、それ以上にこれよりも高位の魔法を使用してしまえば、あの時点でヘイトが集中してたはずのパンドラズ・アクターからウルベルトにヘイトが移動し、戦場のコントロールが効かなくなる可能性があったからだろう。

やはり、そういう事を踏まえて実戦を交えながらウルベルトから何かを学ぶ機会が得られたこの状況は、とても自分にとってとても贅沢な状況なのだ。

つらつらと、そんなことを考えながらパンドラズ・アクターは、盗賊の男を隠れていた木陰から引きずり出した。

この先、この男の案内で彼らの罫まで向かう予定だが、このままでは腰を抜かして使い物にならないだろう。

それが分かっているから、パンドラズ・アクターは素早く彼の状態を元のように歩けるものへとアイテムを使い素早く戻す。

この程度のアイテムなら、それこそ掃いて捨てるほど残っているので、ここで使つて

も問題ないだろう。

わざわざ、こうして手間を掛けてまで彼を案内役にするのは、盗賊に対する囿の意味もあつた。

別に、この男を案内役にせずにこのまま先に進んでも、本当は問題ない。

森の中を風潰しに当たっていけば、多少の時間は掛かっても盗賊の罅を見付け出す事は出来るだろう。

それでも、出来るだけ無駄なMPの消耗を避ける意味で、この男を案内役として戦闘を歩かせているのだ。

正直、ウルベルトやパンドラズ・アクターがその気になれば、この程度の相手なら幾らでも簡単に倒すことはできるだろう。

しかし、確実に敵対してくる相手に会う度に戦闘しては、幾らMPがあつたとしても足りないだろうし、何より勿体ない。

それが分かつているからこそ、細かい戦闘を避ける方向で動いているのだ。

何せ、パンドラズ・アクターもウルベルトも、こちらの世界に来てまだ日が浅い。

今回の盗賊たちの対応を見る限り、現地人だけのそれこそ芥のような存在でしかないが、もしその陰に「プレイヤー」が隠れていたりしたら、とんでもない状況になりかねないだろう。

まあ、最悪の場合はウルベルトにMPを譲渡して戦闘に入れば問題ないのだが、それはあくまでも最後の手段なので出来る限りしたくはない所だ。

そんな事を考えていると、それまで上空で様子を伺っていたウルベルトが降りてきて合流したので、そのまま男に先導させて先へ進む。

すると、視界の先に人の手が加えられたと考えられる洞窟を発見した。

どうやら、ここが目的の場所らしい

ウルベルトも、パンドラズ・アクター同じ事を考えたらしく、すつと目を細める。

盗賊の噂を見付けたからと言って、このままその洞窟の中へ一気に突入するつもりはない。

当初の予定通り、案内役として今まで先導させていた盗賊を相手に、突入する前にある事を確認する必要があるからだ。

「……ウルベルト様、それでは予定通りこの男を私の手で殺しても指輪で回収できるか確認したいと思います。

私が手を下したとしても、【魂の指輪】としての機能が有効かどうか、ウルベルト様のみで確認ください。」

その言葉に、ウルベルトが頷いたのを確認した上で、パンドラズ・アクターは目の前にいる盗賊の首を、それこそ草でも刈り取る様にさくりと刈り取った。

ここまでに關しては、最初の予定通りと言っていいだろう。

その様子を、静かに見つめていたウルベルトは、スツと指輪を天に翳して力を込める。すると、指輪はその動きに応える様に緩やかに輝き、パンドラズ・アクターの手で刈り取られた盗賊の命を、そのまま何の問題もなく吸い取った。

指輪によって、どれだけ命を集めたのかカウンントされている数字が増えたのを確認し、ウルベルトはほつと息をつく。

流石に、彼もパンドラズ・アクターの手には掛かった命が指輪で吸い取れたことを確認するまで、どこか緊張していたらしい。

その姿を見つつ、パンドラズ・アクターは刈り取った盗賊の首を地面に落とす。

何時までも、殺した相手の首を持っている理由が無かったからだ。

これで、ウルベルトの側にいる時ならば、パンドラズ・アクターが相手の命を刈り取ったとしても、指輪でその魂を回収出来ると言う事が確定した。

少なくとも、これで大量にオルフアーナが敵対した相手を倒したとしても、ウルベルトが指輪を使用して回収できるのはほぼ間違いないだろう。

これから先は、ウルベルトが元の姿に戻る為に三人で獲物となる相手を狩る事も出来るようになった。

そう考えると、ずいぶん大きな進歩だと言っていいだろう。

三人で協力すれば、多くの敵をまとめて刈り取ることも容易くなったからだ。好都合な事に、この国にはビーストマンと言う侵略者たちがいる。

彼らを倒すことで、この国に対して防衛面での利益をもたらしつつ、そうして刈り取った命をウルベルトの指輪に注げば、こちらにも有益な状況で旅路を進める事が出来ると言っている。

ついでに、冒険者としての報酬も得られるなら、尚良い話だ。

もちろん、そう都合こちらのよく話が進むとも限らないが、ウルベルトの為にも勝手に狩り取って問題のない存在がいるのは、本気でありがたい話だった。

「……これで、私たちが敵を倒してもウルベルト様の指輪に無事回収が可能だと、確定致しましたね。」

一々、ウルベルト様にお手間を掛ける事なく、安心して敵に対する事が出来るようになったと申し上げて宜しいでしょう。

私やオルファーナが、これから先の旅路で積極的に戦闘に参加すれば、刈り取れる数も着実に増やせる筈です。

今は、とにかくその指輪を満たすことが優先でしょう。

その為にも、ウルベルト様は存分に私たちの事を使い回してくださいませ。」
心の底からそう告げると、ウルベルトはどこか困った様な笑みを浮かべた。

仲間に対して、とても心優しい彼としては、できるだけパンドラズ・アクター達に負担をかけたくはないのだろう。

ただ、現時点ではとてもそんな考えが許されない状況だから、素直に頼ってくれているだけで、多分……自力でなんとか出来る案件ならば、自分だけで何とかしてしまう気がした。

「……それじゃ、そろそろ本命を狩りに行くか。」

この先は、洞窟の中だ。

場所によって、戦い方が変わる事は前回の戦闘で理解しただろうか？

自分で、先ずはどう動くべきなのか考えてみると良い。

あー……俺もついだから、杖を別のものに変えることにしよう。

風属性よりも、氷属性の方が狭い洞窟では有効だからな。」

そう言いながら、ウルベルトは手にしていた杖をアイテムボックスに収納し、別の杖を取り出した。

宣言通り、「氷竜の杖」である。

パンドラズ・アクターも、自分が手にしている得物をレイピアから接近戦用のショートソードに持ち変えると、スツと腰を落とす。

こちらの意図を理解したウルベルトが、パンドラズ・アクターのフードの中に潜り込

んだのを確認し、パンドラズ・アクターはそのまま盗賊の罅である洞窟へと、足に向け
たのだった。

盗賊の罅（ねぐら）での戦闘（パンドラズ・アクター視点）

盗賊の罅のすぐ目の前まで移動すると、見張り役が二人立っていた。

彼らが、出入りのチエックと周囲の警戒をしているのだろう。

きちんと役割分担が出来ている辺り、それ相応の人数で構成されている盗賊団だといわれた。

少なくとも、彼らの中できちんとした役割分担が出来ているのだとしたら、かなりの規模が想定される。

つまり、この罅にいる以外にも盗賊の仲間が、外に出ているかもしれない。

もし、こちらの予想通りだった場合、別行動をしていた盗賊の生き残りは、何がなんでもこちらを血眼になって探し回るだろう。

彼らからすれば、仲間の仇を取らずにいる方が、面子に拘わる可能性があるからだ。

もしかしたら、この世界の盗賊の繋がりはおもう少し彼らは緩い感じかもしれないが、どちらにせよ裏社会の住人である。

面倒事に発展する前に、その根っこを断ってしまう方が間違いない筈だった。

下手に残す位なら、最初から【贄】として全て捕らえて食らう方が、よりその命を有

効活用していると、そう思えるからだ。

この手合いは、放置しただけ周囲へと害を撒き散らすだけだろう。

それなら、それを避けるべくさつきり回収する方が世のためでもある。

彼らは、パンドラズ・アクターやウルベルトがこのまま放置したとして、もいずれ同じ人間からの討伐対象になるだけなのだ。

だとすれば、こちらがどのような扱いをしたとしても、問題ない存在だろう。

つらつらそんな事を考えながら、パンドラズ・アクターは、サクサクと特殊技能を使つて目視で確認した見張り役の他に、目視出来ない場所にいるかもしれない見張り役が居ないか、可能性がある場所を確認していく。

一応、念の為程度の認識で確認したつもりだったのだが、その考えはは当たりだったらしい。

入り口から、少し先に入った外から見えないが中からは外が見えると言うギリギリの場所で、別の見張りが存在していたのだ。

次に、盗賊たちと思しき生命反応がある場所まで、それなりに離れていることから考えても、外の二人を合わせて彼らが一組の見張り役なのだろう。

目立つ位置に立つ身や利益の他に、入り口から見えにくい位置にもう一人の見張り役を置いているのは、目立つ位置にいる見張り役が囷の役目も兼ねているからだ。

彼らの姿が見つつ、外からは見えにくい位置に配置された見張り役こそ、本命の見張り役だと言っているだろう。

それこそ、パンドラズ・アクターの様に隠密技能を持つ者が、最初の門番と言わば見張り役を気付かれずに昏倒させたとしても、その奥に居る見張り役が隠れるように門番たちを見ているのなら、彼らに起きた異常事態を察知して敵襲の知らせを送る事は可能だからだ。

そして、その存在の事を外の門番役の見張りは知らないのだろう。

現に、奥に隠れている見張り役は下位の隠密行動を使用する事によって、門番役の見張りに気付かれないうように息を潜めているような気配すらあった。

あくまでも推測ではないが、入り口に立つものはまだまだ下つ端の門番役であり、入り口の奥に気配を消して潜む見張り役は下つ端よりも上の立場なんじゃないだろうか。

隠密行動が出来る位に実力があり、身の安全を確保しながら見張り役をするものが居る様な盗賊団としたら、やはり規模はかなり大きいのだろう。

だとしたら……きちんと気を引き締めた方が良くもしいれない。

そう判断したパンドラズ・アクターは、まず入り口の見張りよりも先に奥で構える見張りを速攻で潰す事にした。

もちろん、下位とは言え隠密行動が出来る相手にそれを悟られないために、特殊技能かアイテムで音を立てずに近付き、一気に潰す必要がある。

その対策は、アイテムを使用せずとも式式炎雷の隠密行動の特殊技能を使えば、それほど難しくないだろう。

仲間に対して、隠れた場所に居る見張り役が奥に居る仲間へ警戒を呼び掛ける前に、素早く相手の喉を潰せば良いのだから。

その為にも、手前に居る門番役に気付かれないよう、素早くその横を通り過ぎて隠れているの見張りを、物音を出るだけ立てない様に仕留める必要がある。

奥に居る盗賊たちは、多少の音を立てたとしても気付かないだろうが、手前に居る門番たちには気付かれる可能性があるからだ。

状況的に、使えるアイテムや魔法は幾つかあるが、これから先の事を考えると、この段階で余り無駄なことはしたくない。

やはり、今のレベルと本来のレベルを比べて考えると、どうしても使える手がかなり少なくなっているのが痛いと思うべきだろう。

「……そんなに悩むなら、いつそ俺が簡単な防音の魔法を使つてやろうか？」

そう、フードの中から囁くウルベルトに、パンドラズ・アクターは小さく首をすくめた。

確かに、その方が手っ取り早いかもしれないと思わなくもないが、今はMPを節約すべきウルベルトにこんな所で魔法を使わせてしまったら、それこそ本末転倒ではないだろうか？

そんな風に、提案されたことに躊躇いを感じていたら、小さな手で軽く肩を叩かれたのを感じた。

「あのなあ……確かに、俺の事を考えてくれている事は判るが、それでも少し位は俺を頼れよ。

幾らなんでも、今は助け合えるのは俺達二人しかいないんだから、必要に応じて役割を分担はすべきだろう？

日付が変わった事で、昨日消耗した分のMPはすっかり回復しているし、ここまで来るのにだって杖の力を使ったりしているから、殆ど魔法は使っていないんだぞ？

この状況なら、今の俺が多少の魔法を使ったとしても、ほぼ問題はない。

むしろ、杖を介さずに使用する魔法の威力とMPの消耗度合を、この機会に確認しておくべきだ。

昨日の戦闘は、火力と戦術を重視していたから、細かな魔法の威力とか色々な面での魔法はまだ詳しく確認していないだろう？

それなら、多少非道な事をしてもらって程問題がなさそうなこの盗賊の罅を、魔法の実

験と確認場として使うと考えるべきだな。

多分、この先にこんな風に変験が出来る場が幾つもあるとは限らないんだ。

そう考えれば、ここで多少の魔法を使用するのも悪くない話だからな。」

ウルベルトにそう諭され、いつの間にか自分が一人で動いている感覚になっていた事に、パンドラズ・アクターは漸く気が付いた。

確かに、ねんどういどゴレム化した事が原因で弱体化しているウルベルトのMPは、可能な限り温存すべき部分が多いだろう。

だが……ウルベルトのことを考えるなら、可能な限り何もさせないまま守ろうとする事が、そもそもまた間違っているのだ。

ウルベルトに頼ることなく、パンドラズ・アクターが一人だけで何もかもしていったら、いざという時に何らかの理由で動けなくなってしまう可能性もある。

特に、今のウルベルトの外見を考えれば、人が側にいる場所でパンドラズ・アクターが行動不能になってしまったら、それこそ致命的な問題を生む可能性もあった。

そこまで考えが至らなかったのは、パンドラズ・アクターの方に問題があるだろう。

これもまた、経験が足りない上に「僕として至高の御方を守る」と言う、一種の脅迫観念にも近い意識がそうさせてしまったのだが、それを言い訳にするつもりもパンドラズ・アクターにはない。

ただ、申し訳なきように視線を向けると、こちらの様子を見ていた事で大体の事を察したのか、ウルベルトは苦笑を浮かべた。

「……まあ、そう考えることはないさ。」

まだまだパンドラは、色んな意味で経験が足りないからな。

俺が側にいる分、どうしても「僕として」俺の事を「守りたい」と言う考えに偏るのは仕方がない。

こればかりは、【NPCとしての存在意義】に近いものだろうって言うのは、前回の戦いぶりでも何となく理解出来た。

だとしたら、つい身体が動いてしまう本能のような代物だろうし、そうなると頭が良いつか関係ないからな。

それを踏まえた上で、こうしてまだまだ楽に攻略出来る場所で色々と経験しながら、自分の行動に関してどうするのが一番いいのか考えていくと言う経験しておくのは、お互いにとって悪くない話だぞ。

なにも、最初から全部できる必要はない。

一つ一つ、何が最適なのか状況に合わせて判断出来る様に、自分の感覚で覚えていけば良いさ。」

そう、笑って言うウルベルトの言葉に頷きつつ、パンドラズ・アクターは自分の至ら

なさを反省する。

無意識のうちに、小さな姿のウルベルトの事を守る事を最優先に置き過ぎたのだ。

これでは、自分に背中を預けてくれるウルベルトに対して、申し訳が立たないだろう。一度注意された以上、同じ事を繰り返さない様に肝に命じつつ、パンドラズ・アクターはこれからの行動を考え始めた。

ここで、ウルベルトから言われたように防音魔法を使って貰うのなら、それはどちらに対してどのタイミングが一番効率的なのか、それを考える必要があるだろう。

対象となる相手は、二組。

手前側の門番二人に対して使うか、それとも奥に隠れている見張り役に対して使うか。

手前側に掛ければ、隠れた場所に居る見張り役を攻撃した直後に、彼らに気付かれるかもしれない。

逆に、隠れている見張りに掛けるとなると、こちらの攻撃を目撃される事になる。

防音魔法の効果で、見張り役の周囲の音は遮断されるかもしれないが、異常事態に彼が奥に駆け込むような状態になってしまつては意味がない。

だとすれば、正解は……魔法の効果強化して範囲を広げた防音魔法を双方に同時に仕掛けた上で、門番役から隠れている見張り役まで一気に殲滅する、だ。

その答えを導き出すまで、パンドラズ・アクターが掛けた時間は約一秒。

ウルベルトを待たせている為、より高速に回転した頭脳によつて素早く答えが導き出されたのだ。

むしろ、こんな単純な答えで本当に良かったのかと思いつつ、パンドラズ・アクターは自分が出した答えをウルベルトに対して口にした。

「それでは、ウルベルト様にお願ひ申し上げます。

魔法効果範囲拡大を使用して、防音魔法の効果範囲を門番役と奥に隠れている見張り役まで拡大していただけますでしょうか？

それで、彼らが騒ぎ立てようとしたとしても一瞬で終わらせる事が出来る上、更に奥に居るだろう盗賊に気付かれる事なく中に侵入が出来ます。

中に入り込んでしまえば、後は盗賊たちを刈り取つていくだけです、それ程面倒はないでしょう。

そうですね……オルファーナ嬢にお願ひしてこの罅全体に「フリージング・クリスタル」を発動していただければ、かなりの数が一気に刈り取れるかと思えます。」

最初から、この罅に居る者は盗賊であろうとなかろうと全て刈り取る方向で話を進めている為、パンドラズ・アクターは纏めて敵を倒せるならば手段を選ぶつもりはない。

一応、この罅自体を破壊する方向で話を進めないのは、この中に盗賊が溜め込んでい

この先のことを考えるなら、殲滅戦の手段の一つとしてオルファーナの能力を組み込むのは、確かに正しい。

そして、「それがどれだけ有効なのか試す」と言う意味では、この罅の中に居る盗賊程度の相手は、丁度良い存在だと言う事だな。

今は、出来るだけ俺が復活するための贅を、面倒事になりかねない人間たちから咎められない形で手に入れたいと考えている以上、こう言う盗賊の類を一網打尽に出来る手段は、少しでも多く確保しておくべきだ。

では、今から魔法を使うから、その先の事は任せてもいいか、パンドラ。」

出来る限り声を潜めて、それでも楽し気な口調でウルベルトからそう告げられ、パンドラズ・アクターの心は浮き立った。

自分の提案が、ウルベルトから「良い提案だ」と褒められたからだ。

その言葉によって、今まで以上にやる気が湧いてくる。

「我に仇成す者たちに、静かなる滅びの時を与えよ！

ワイデンマジック、ファイルド・サイレンス
魔法効果範囲拡大、静寂の空間！」

小さな声で唱えられたのは、「静寂の空間」だ。

これは、敵対する相手の魔法詠唱や特殊技能の発動を短時間封じる事が出来る、補助系範囲魔法である。

取得するのに必要な種族と職業構成があり、同じ魔法職でありながらモモンガは必要条件を満たせず、取得出来なかったものだ。

まあ、普通に考えれば取得条件の中にある「過去現在を含め種族に悪魔を持ち、幾つかの魔法詠唱者の上級職を取得する事」なんて、面倒な構成など普通はしない。

これは全て、魔法攻撃特化を選択したウルベルトだから、「アインズ・ウール・ゴウン」の中でただ一人満たせた条件だったと、パンドラズ・アクターは記憶している。

そして、面倒な方法でしか取得できない割に消費MPが他の補助魔法よりも多く、その癖使用しても対象効果範囲が狭かった事から、実際には「使えない魔法」だと言う烙印が押されていた筈だ。

無理してこの魔法を使う位なら、第九位階の攻撃魔法を使用した方が余程効果的だと考えられていたから。

今回は、基本的には「大災厄」のような魔法を使用するような敵ではないから、こんな風に上手く使って敵に気付かれずに殲滅する為の手段として使用する事も出来る。

効果範囲を広げた事で、もしかしたら罫の中にまで影響が出ているかもしれないが、盗賊たちの中に自分の罫で魔法や特殊技能を使用する者がいるとは思えない。

と言うよりも、第一位階程度なら使える者もいるだろうが、それ以上の魔法を使える者が盗賊になっているとは思えなかった。

それだけの実力があれば、盗賊になど身を落とさずとも食べていく手段はこの国ならあるからだ。

つらつらそんな事を考えつつ、パンドラズ・アクターは気配を一気に消すと隠形の特殊技能を発動して一気に奥の見張りへと迫る。

自分に気付く様子がない見張りの首を、手にしていたショートソードで一気に刈り取ると、そのまま取って返して門番の首も同じ様にさっくりと切り落とした。

パンドラズ・アクターが、三人の首を刈り取るまで掛けた時間は、僅か三秒。

まだまだ、ウルベルトが掛けた「静寂の空間」（フィールド・サイレンス）の効果が継続中なので、そのままウルベルトにオルファーナを召喚して貰い、最初の予定通り盗賊を殲滅する事にした。

二段構えの見張りなど、自分たちの罅の周囲への警戒がしつかりしている盗賊団なら、今中に居る人数だけではなくまだ別動隊が居る可能性も出てくるからだ。

「それでは、中の盗賊の方はお願いしますね、オルファーナ嬢。

私は、ここの後始末と外に出ている盗賊の仲間が戻って来た時のことを考え、少しばかり細工をしておきたいと思えますので。

ウルベルト様は、オルファーナ嬢と共に中へ進み、盗賊団の魂の回収をお願いいたします。

今回の一番の目的は、そちらなのですから。」

こちらの言葉に頷き、召喚したオルファーナと共に奥へ進んでいくウルベルトを見ると、パンドラズ・アクターは手早く首を刈り取った三人の盗賊たちから衣装を剥ぎ取った。

そのまま、用済みの遺体を入り口付近で見付けた落とし穴に落としてぎつくり埋めた後、るし☆ふあーの「ゴーレムクラフター」の能力で手早く作り出したのは、先程埋めた三人の盗賊そっくりのゴーレムだ。

もちろん、遠目で見れば似ている程度のレベルでしか作っていない。

あくまでも、まだ外に盗賊たちの別動隊が残っていた時、彼らに警戒されない程度に見てくれと行動をしてくれればいいのだから。

そのゴーレムたちに、外から人間が近付いてきたらこちらに知らせる様に指示を出し、最後に一つの仕掛けをした所で、パンドラズ・アクターはウルベルト達の後を追った。

ここに居る盗賊たちは、絶対に一人として生き残りを出す訳にはいかない。

うっかり生き残りを出して、オルファーナやウルベルトの情報はもちろん、自分の外見などの情報を残す訳にはいかないのだ。

その為にも、オルファーナが見落とした相手が居ないか、パンドラズ・アクターは一つ一つ確認しながら奥へと進んで行った。

数十分後、オルファーナが見落とした盗賊たちを全て刈り取りウルベルトと合流したパンドラズ・アクターは、入り口に置いておいたゴーレムからの合図を受けたので、急いで【遠隔視】^{リモート・ビューイング}を発動した。

この方法なら、外に居る盗賊たちに気付かれずに様子を伺えるからだ。

ウルベルト達にも見えるように、【水晶の画面】^{クリスタルモニタ}を【遠隔視】^{リモート・ビューイング}と同時に発動させると、そこに映っていたのはパンドラズ・アクターがゴーレムに仕掛けた罠に嵌り、その場で凍り付いた盗賊たちの集団だった。

念の為に、周囲にこの罠を逃れた生き残りが居ないか確認してみたが、発見する事が出来なかった事を考えると、全員罠に嵌める事が出来たのだろう。

そう、パンドラズ・アクターがゴーレムに罠として仕掛けておいたのは、その効果範囲に全員が入った所で発動するアイスブレスだ。

もし、本当に盗賊たちに別動隊が居た場合、この罠に彼らを引っ掛ける事が出来れば、面倒が減る程度の考えだったのだが、予想以上に効果があったようだ。

この方法なら、万が一罠から逃げられた者がいたとしても、自身の安全を優先して逃げだす可能性の方が高い。

仲間を全員、一瞬で凍らせられる様な罠を簡単に仕掛ける様な相手に、身の危険を冒

してまで立ち向かう勇氣があるなら、盗賊などに身を落としていないだろう。

「それじゃ、仕上げにあの盗賊たちを凍らせた氷像を全部壊すでしょうか。」

【遠隔視リモートビューイング】に映し出された光景を見て、軽く口笛を吹いたウルベルトはそう口にする
と、ゆつくりと入り口の方へと移動していく。

その後を急いで追いながら、パンドラズ・アクターは今回最終的に得られたらう魂の数を頭に思い浮かべ、小さく口元に笑みを浮かべた。

『……入り口の盗賊の数を合わせると、今回回収出来た魂の総数は百十五ですか。

まだまだ先は長いですが、それでも今回は予定外の事でしたし、悪くないと思うべき
でしょう。』

そうして、ウルベルトが【風竜の杖】の【風の刃】で氷像を全て砕き、魂の回収作業をしたのだが……パンドラズ・アクターが予想していた数と、実際に回収出来た魂の数が違っていたのだ。

実際に回収出来たのは、全部で百二十三。

盗賊たちや、彼らの被害者たちを全て合わせた数と八も誤差が発生したのである。

【一体どうして?】と、周囲を改めて確認した所、その原因はすぐに判った。

盗賊たちが使用していた、荷馬車に繋がれていた馬や洞窟の側にいたらしい鳥たちが死んでいた数が、全部合わせて八体分あったのである。

つまり、動物もウルベルトの指輪の魂の回収カウントの対象になると言う事だった。「……これは、もしかしたら召喚した悪魔も本当に回収の対象になるかも……」

いっそ、この場で簡単に確認してみるのも悪くないか。」

そう呟くウルベルトに、まだ暫くまだこの場に居る必要がありそうだと、パンドラズ・アクターは理解する。

一応、盗賊に襲われた時点で後始末をしてあるが、あの夜営地に戻るのは暫く先の話になる以上、誰かが居た痕跡は消してくるべきだったかと小さく反省の念を抱いていた。

もつとも、あの場所は少し街道沿いから離れているので、夜が明ける前までにあの場所に戻る事が出来れば、夜遅くに無理をして先を進む者などそうそう居ないだろうし、多分誰にも気付かれないだろうが。

その為にも、出来るだけ早く実験が終わる様、パンドラズ・アクターは急いでウルベルトの手伝いを始めたのだった。

ウルベルトによる、現状への考察（ウルベルト視点）

そして……ウルベルトとパンドラズ・アクターにとって、色々と都合が良く……彼らに手を出したが故に盗賊団にとって最悪の結末を迎えただろう、惨劇の夜が明けた。

昨夜の一件は、間違いなくウルベルトにとって、一つの最良の答えを齎したと言っているだろうか。

一応、周囲を警戒しつつある程度の確認を兼ねた実験を済ませた所で、ウルベルトはパンドラズ・アクターとオルファーナを伴って最初に夜営していた場所に戻る。

そして、オルファーナを見張りとして仮眠を取るべく指示を出したものの、色々と判明した事が多すぎて、気分が高揚して暫く眠れなかった程だ。

そう、昨日の盗賊の罫ねぐらでの実験結果は実に有意義なもので、どの実験もこちらの予想は外れていなかった。

どうやら、ウルベルトだけでなくパンドラズ・アクターが召喚したものも含め、悪魔達は十分ウルベルトが復活する為の贄として使えるらしい。

ただし、召喚したからと言っても全ての悪魔が魂を回収する指輪の効力の対象ではなかったのだ。

ある程度予想していた事だが、悪魔の中でも実体を持たないシャドウデーモンたちは、指輪の効力の対象外になるらしい。

時間的に、全ての悪魔に対して確認した訳ではないのではつきりとは言えないが、もしかしたら他の悪魔でも同じような存在は、指輪の効果対象外になる可能性も出てきたのだ。

この辺り、どういう判定なのか微妙に考えてしまうのだが、彼らが指輪の効力の対象外と認識された以上、これを覆すのは無理だと考えるべきだと、そこは納得するしかないだろう。

シャドウデーモンで駄目なら、アンデッド系はほぼ全部が駄目だと考えた方が間違いない。

もちろん、本音を言えばそちらの検証もしておきたかったのだが、その為にパンドラズ・アクターにモモンガさんの姿になって貰うのも躊躇われ、今回は検証するのを見送った。

多分、ウルベルトが言えばすぐに協力してくれただろうが、何となく最初から駄目だと思われるアンデッドを、贄の対象として考える気は流石に起きなかつたし、何より現状でパンドラズ・アクターの魔力を無駄使いさせる気にはならなかつたのである。

それにしても……と、昨夜の状況を思い返したウルベルトは、一つだけ気になる事が

あった。

自分自身、昨夜の一件でここまでしておいてなんだか、割とパンドラス・アクターたちが敵に対して容赦なかった様にウルベルトは感じていたのだ。

元々、温和な性格で物腰も柔らかい筈のパンドラス・アクターが、ここまで戦闘面で過激な程の行動を示すのは、ウルベルトを守る事に終始しているからだろうと、何となく察するものの……微妙に彼らしくない気がした。

だが……その理由が前回の戦闘のからの絡みから来ているのだらうと、ウルベルトも何となく察している。

本人に直接言った訳ではないが、ウルベルトの攻撃能力が著しく落ちている事は、オルファーナとの戦闘時の「大災厄」の威力によって察しているのは間違いない。

だからこそ、可能な限り自分の手で戦場をコントロールし、ウルベルトの負担を軽減する点だけを考えた戦場を作る事に終始したんだろう。

確かに、今回は前回よりもかなり楽に戦えたと言っている。

元の戦力差を考えれば、特に何もせずともこれ位の余裕はあつて当然なのだが、それでも様々な点でウルベルトの魔力を温存する様に采配をしてくれたのは、間違いなくパンドラス・アクターだ。

流石は、指揮官系の能力も持たされている上に、ナザリックでも一二を争う頭脳の持

ち主だけはある。

残念だが、現在は「道化師の請願」によるレベルダウンの為に、その職業種そのものは封印されてしまっているようだが、元々設定されていた頭の良さそのものは変わらないから、俺の状況を考えて戦闘を組み立ててくれたのだろう。

それに関しては、パンドラス・アクターに対して本当に感謝するしかない。

そして今回、色々と有意義な実験がこの場で実行出来たのも、パンドラス・アクターによる細かい気配りがあったからだ。

多分、ウルベルトだけではここまで色々な実験を実行するのは、かなり難しかっただろう。

MPとかそういう問題だけじゃなく、手持ちのアイテムやら何やら様々な点でウルベルトは多くの問題を抱えている状況である。

多分、ウルベルト以外のギルメンでも、今のウルベルトと同じ状況になっていたら、かなり苦労する事になっていた筈だ。

それら問題点を踏まえ、現時点で選べる最上の手段で全てフォローしたのが、合流する事が出来たパンドラス・アクターである。

やはり、サポート役を必要とした自分が探し出せた相手が、パンドラス・アクターで良かったと思わせるのは、こういう時だろう。

下手に、戦士職でも戦闘系に偏っているシャルティアやコキュートスが合流相手だったとしたら、ウルベルトは今回の実験でここまでの事を出来なかったと思う。

直接的な戦闘と言う意味で頼りになっても、サポート系のスキルはどうしても戦闘よりの彼らに期待する事は難しいからだ。

アウラやマーレだったら、サポート役としてもそれなりに優れているだろうが、二人とも先の事まで細かく考えるのには、性格的にあまり向いていない。

そもそも、昨夜のオルファーナの一件が発生した際に、パンドラズ・アクター以外のNPCがサポート役では勝ち切ることは出来なかった可能性が高いのだ。

間違いなく、あれはギルメンの能力を与えられ、一部だけでも使いこなせる万能型のパンドラズ・アクターだからこそ、なし得た勝利だと思う。

これだけは、例え自分が手塩に掛けて作り出したデミウルゴスでも、不可能だったと考えていた。

元々、デミウルゴスは参謀型の頭脳タイプであり、MPを譲渡したりできる回復薬でもなければ、戦闘向きのタイプでもないのが理由だ。

あの戦いでは、物理等の直接攻撃をしつつウルベルトの盾役をこなし、ポジションや装備などの物資の補給やMPの回復など、それこそ幾つもの能力がどれ一つ欠けていたとしても、あの段階まで持つて行けなかった。

だから、パンドラズ・アクターのNPCなら、最低でも盾役とMPの回復役の二人は必要だっただろう。

そもそも、「MPの譲渡」をする事が出来るNPCは早々居ない。

消費したMPの回復方法が、急速による自然回復以外はMPの譲渡以外ない時点で、ウルベルトに「大災厄」を二度撃たせられると言う条件を満たした上で戦闘可能なNPCなど、パンドラズ・アクター以外に居なかった。

多分、他のNPCたちが味方だった場合、ウルベルトは一度しか放てない「大災厄」を射てないまま、全滅していた可能性があっただろう。

オルファナーの前身であるフリーズに勝つには、かつてのギルメンたちが一緒だった時でも、前衛の戦士職や後衛の魔法職だけでなく補助魔法によるサポートなど、チームワークが必要不可欠だったのだ。

流星に、いきなりNPCに同じレベルを求めるのがどれだけ無謀な事なのかは、ウルベルトにも理解できている。

むしろ、パンドラズ・アクターがあそこまでこちらの要求に即対応出来た事の方が、正直「凄い」と言っても良いだろう。

もし、フリーズとの闘いが起きなかったとしても、パンドラズ・アクターが今のウルベルトにとって必須の能力を持っているのは、ほぼ間違いなかった。

小さなねんどろいどゴーレムの姿になったウルベルトは、レベルこそ百のままと言う事になっているものの、実質の能力値はかなりダウンしている。

それを出来る限り補正しつつ、あらゆる面でサポート出来ているのも、現在レベルダウンしているパンドラズ・アクターがギルメン全員の能力を一部とはいえ使用可能なく、自身の生産職系の能力をある程度残していたからだと言っている。

もし、パンドラズ・アクターと同じ条件でレベルダウンしている状態なら、多分他のNPCではウルベルトをフォローする処か、自分自身の能力が仕えない事を忘れて行動して、そこから大きな失敗を起こしていた可能性すらあるのだ。

それこそ、NPCにとって自分の能力は呼吸をするのと同じ位、使えて当たり前前の状態の筈だ。

彼らにとつて、特殊技能や魔法が戦闘などの使用回数限度で使えなくなるのは常識でも、レベルダウンと共に最初から能力が使用出来なくなるなど、まずあり得ない。

だから、もしその状態になった場合、その場では「情報の一つ」として理解したとしても、実際に戦闘になれば無意識に行使しようとする筈だ。

ぎりぎり、デミウルゴスやアルベドと言った頭脳明晰な二人ならその状況に対応出来るかもしれないが、他のNPCには難しいだろう。

どちらにせよ、パンドラズ・アクターと同じ状態になったNPCでは、彼ほどのサポー

トが出来るとは、とても思えなかった。

彼が、ここまでのサポートを出来る要因は、彼の立場も関係しているだろう。

そう ……パンドラズ・アクターは、どの階層よりも豊富なアイテムなどの物資を抱えている、宝物殿の領域守護者だ。

もちろん、勝手に自分の守護する領域のアイテムを使用している訳じゃないが、アイテムに関する知識がNPCの中で一番豊富なのもまた、最初から設定で☑アイテムフェチである☑定められている、パンドラズ・アクターで間違いないだろう。

戦士系ガチビルドのシャルティアやコキュートスは、戦闘方面に関しての情報やアイテム等は与えられていたとしても、それ程豊富ではない筈だ。

そもそも、拠点防衛用のNPCである彼らには、回復や蘇生系アイテムはギルド防衛戦の都合で多少与えられていたとしても、それは自分の回復に使用出来る程度の数しかないだろうし、弱体化しているウルベルトのフォローが出来るとは思えない。

これは他のNPCでも同じだろうし、ウルベルトの手によって生み出されたデミウルゴスですら、パンドラズ・アクター程のアイテムの種類の豊富さはなかった。

デミウルゴスの場合、自室があるエリアにはそれなりに彼の為に作った装備はあるが、それでもウルベルトに一番必要な【MP増幅】や【MP消費量カット】などの補助

系装備は殆どおいていない。

それらの装備は、デミウルゴスには不要だったからだ。

ウルベルトは、デミウルゴスの為に幾つもの装備を用意するのに腐心したが、あくまでもそれは彼の能力に合わせた品物が中心であり、アイテムだった。

故に、今のウルベルトの状況に必要な類のアイテムその他装備は、ほぼ彼の所持品として用意していない。

本音を言えば、自分の意思で動いているデミウルゴスの姿をこの目で見たいと思わなくもないが、こうして弱体化している自分の姿を彼に見せる気にはとてもなれなかった。

そう言う意味でも、パンドラズ・アクターと合流出来たのは、ウルベルトにとって都合だったのである。

一先ず、盗賊の場で予想以上の実験が出来たお陰で、夜が明けるまでに合計五百前後の魂が指輪に収められたのは、かなり僥倖だったと言っても過言じゃないだろう。

彼らが溜め込んでいた金品等は、盗賊団の大きさに比べて予想よりも少ないものだったが、自分達に仕掛けてきたのが商隊を襲った直後だった状況から考えても、資金が乏しくなっていたと考えれば納得がいく話だった。

アイテムボックス等を上手く利用し、二人で使えそうな物はすべて回収した後できつ

ちりと後始末をしたから、もし万が一誰かがこの辺り一帯を探ったとしても、盗賊が罫を移動したと認識してくれるはずだ。

まあ……万が一、盗賊たちの罫が何者かの襲撃を受けて壊滅したと知られても、その犯人が自分達だとバレなければ問題ないのだが。

とにかく、盗賊相手に予定していた必要事項は確認出来たし、それなりの資金を調達出来た。

だが、それに胡座を掻く訳にはいかないだろう。

旅の冒険者が、依頼などで何も稼がずに旅を続けるのは、周囲に違和感を感じさせるのは間違いない。

それを避ける意味で、パンドラズ・アクターは何らかの方法で収入を得る必要があるだろう。

ここで、ウルベルトが自分も稼ぐと言わないのは、もちろん理由がある。

今の五歳児と言う外見で派手に稼いだら、流石にパンドラズ・アクターの立場がなくなるからだ。

この辺りに関しては、パンドラズ・アクターの意見も聞いた上で、どうするのか決めるべきだろう。

今までの言動から考えると、ウルベルトの事を☒仕えるべき主の一人☒として認識し

ているようだし、主に稼がせるのは僕としての矜持に関わるかもしれないので、この件に関しては話し合う必要があった。

あくまでも、今回の盗賊の一件は予定外の出来事であり、そこから発生した臨時収入はいざと言う時の為に手を付けるべきではないだろう。

むしろ、出来れば金貨等の貨幣以外は一度パンドラズ・アクターに鑑定させた後、本来に貴重なもの以外は一通りアイテムボックス送りにしても構わないと、そうウルベルト自身は考えていた。

出来れば、より多くのアイテム等を手に入れて、シユレッダーに放り込んでユグドラシル金貨に変えておきたいのが、ウルベルトの本音である。

現在、パンドラズ・アクターが宝物殿から一部のアイテムと共に分断された影響が、ナザリックにどのような影響を与えているか判らないのだ。

それに対する修繕費等は、出来るだけ稼いでおきたいと考えるのは、ある意味当然の話だろう。

もちろん、これに関してウルベルトはもちろんパンドラズ・アクターにも非がある訳ではないが、少しでもギルド長のモモンガの負担を減らせるのなら、折角手持ちのアイテムにシユレッダーがあるのだし、それ位の事はしておくべきだろうと、ウルベルトは考えていた。

多分、ナザリックがどんな状況であったとしても、モモンガがギルド長としても、手段を講じて維持しているのはほぼ間違いない。

それなら、偶然にも外でこうして臨時収入が得られ分は、必要経費を残しておいて渡せるようにしておくのは、ギルメンとして当然の行動だった。

ナザリックの維持費が、ユグドラシル金貨で賄われるのは変わらないシステムだろうし、金は幾ら有っても困らないのだから。

☒ どちらにせよ……朝食の際に互いの認識の擦り合わせと、これから向かう街での行動などを決める必要があるだろうな。

一応、パンドラ自身は「サーティ・ルウ」と言う名前で冒険者として登録したらしいが、街での依頼を受けるよりも吟遊詩人として歌わせた方が、下手に時間を取られずに稼げそうな気がするし。

まあ……現在の目的地である王都方面に行く商隊の護衛とかがあれば、それを受けると言う手もあるが……何となく、逆に面倒事を引き寄せそうで怖いし。

面倒事に巻き込まれる位なら、無理に依頼を受けずにさくさく二人だけで旅を進める方が、お互いにとつても余程楽だろうし、パンドラの冒険者の資格の有効期限が切れそうにならない限り、その方向で進めるとするか ☒

実際、商隊の護衛の依頼を受けてしまった場合、オルファーナを表に出すのは問題が

あるので出来なくなる。

万が一、人目に触れさせなくてはならなくなった場合、周囲に対しては☒代々一族で受け継がれる秘宝の召喚獣☒と告げるつもりではあるものの、その存在を知ったものからどんな噂が立つか判らなかつた。

もしかしたら、この国の王侯貴族からオルファーナが宿るブローチを引き渡すように要求されたり、ウルベルトの身柄をこの国に押し留めようとしたりするかもしれない。そんな状況になったら、それこそ厄介なんて話で済まされないだろう。

ウルベルトは、かつて仲間と苦労して手にしたドロップアイテムであり、こちらの世界でこうして再会してからは自分にとって娘の様な家族同然のオルファーナを、人手に渡すつもりなど欠片もない。

そもそも、オルファーナがウルベルト以外に従うなど、それこそ世界級アイテムでも使用されない限りあり得ない話なのである。

大体、だ。

オルファーナを……☒憂氷と凍結の女帝フリーズ☒を召喚する為の契約を結ぶ為には、最低でも種族と職業を合わせたレベルが九十以上必要な、高レベルモンスターである。

今までパンドラズ・アクターから聞いた話から考えても、こちらの世界で契約を交わ

して召喚できるだけのレベルを持つ存在は早々居ないのだ。

暴走どころか、呼び出して契約を交わせるだけの実力がない相手に、現在最高値を誇る「MP最大値の三割アップ」と言う破格のアイテムを渡すなど、もはや愚か者のする事だろう。

そんな事態を引き起こさない為にも、基本的にはウルベルトはこの世界の住人と共に行動をすると言う選択をつもりは、欠片も持っていないかった。

もちろん、状況によつてはそんな事も言っている余裕もなくなるかもしれないが、今の時点では不確定要素が多すぎてまだ危険すぎて出来ないと言うべきだろう。

少なくとも、ウルベルトとパンドラズ・アクターがある程度この世界での慣れ、アイテムを問題なく使いこなして人の中で擬態したまま生活出来る様になるまでは、とてもそんな危険な真似は出来なかった。

現時点で、ウルベルト達がいる国は「ビーストマン」と言う亜人種の襲撃と言う脅威に晒されている以上、自分達がそれよりも強力な力を持つ異形種だとバレたら、確実にお互いに不幸になる道しか思いつかないのだから。

つらつらと、ウルベルトが思考を巡らせている間にも、パンドラズ・アクターが簡単に設えた竈で朝ご飯の支度を進めていく。

昨夜もそうだったが、これからは野営も定期的に行う予定なので、普通に料理してい

るのは野外での調理になれる一環なのだろう。

万が一、現地の冒険者なり商隊なりと野営地が一緒になった場合、アイテムボックスの中から作り置き料理を取り出すという訳にはいかないからだ。

出来るだけ、普通の冒険者と同じ方法で調理している様に思われるべく、色々と思考錯誤をしているパンドラズ・アクターの様子を見つつ、朝ご飯が完成するのを待つウルベルトだった。

街へ到着、まずは冒険者組合へ（ウルベルト視点）

朝食を食べつつ、これから移動する街や昨夜接触した盗賊が襲っただろう、商隊に関して冒険者組合に報告するのか、ぎっくりと話し合って決めた所で、野營の後片付けなど出立する準備を済ませていく。

昨夜、生き残りが居ても助けられないを選択した時点で、自動的に報告する理由がなくなっていたのだ。

ここで、冒険者組合に対して下手に中途半端な報告する方が、後々面倒事を招くだろうと言う事で意見が一致したのも、報告をしないと決めた理由の一つではあるのだが。そもそも、昨夜の実験の後にはっきり遺体を全て綺麗に始末して消してしまっている時点で、報告しようにもそれを証明する手立てがない。

一応、彼らが残した装備やアイテム、盗賊が奪っただろう商隊の荷は残っているが、大半が何らかの理由で商品にはならない状態だったので、そんなものを持って行ってもあちらも困るだけだろう。

むしろ、下手に冒険者組合に対して報告した結果、その商隊の雇い主側である商人側から「火事場泥棒的な事をした」といちゃもんを付けられても困るのだ。

こちらとしては、行き掛けの駄賃と言わんばかりに襲ってきた盗賊を返り討ちにして、ついでに実験を兼ねて彼らの罠を壊滅させただけ。

その際に、一緒に居ただろう商隊の生き残りはほぼ虫の息で、パンドラズ・アクターが知っている限りのこの世界のアイテムや使用可能な魔法では、ほぼ助からなかったレベルである。

ウルベルト達はその気になれば、もちろん手持ちの回復アイテムやパンドラズ・アクターの回復魔法で何とか出来たかもしれないが、そこまでしてやらなければならぬ義理はない。

選んだ選択肢は☑出来るだけ自分達からは関わらない☒と言うものだった。

まあ：どちらにしても、冒険者組合には行く必要はあるのだが、それでも盗賊団を含めて報告はするつもりはない。

今回、冒険者組合へ行くのは、ウルベルト自身の冒険者登録の為だった。

何と言っても、今回の街で冒険者登録しておかないと、街に入る度に支払うお金とか、色々面倒なのである。

それに、魔法詠唱者として冒険者登録しておけば、第三位階まで魔法を使用しても問題なくなるだろう。

身分証代わりとして、冒険者の証のプレートがあれば街の出入りが楽になる事も考え

れば、ウルベルトの事を冒険者登録しない方が損なのだ。

もしかしたら、ウルベルトの外見年齢的な事で登録を渋られるかもしれないが、今回ばかりは使用出来る魔法が第三位階に達している事などを理由に、強引にでも押し通すつもりだった。

そもそも、冒険者は基本的に自己責任なのだから、強力な魔法が仕える事を盾に二人だけでチームを組んで動くなら、問題はない筈である。

あまり煩い様なら、「幼い頃に、死病の治療と引き換えに、呪いを受けて幼生固定されているだけで、成人済みだ」と言ってもいい。

実際、中身はそろそろ三十に手が届こうと言う位のおっさんだと言う自覚があるウルベルトなので、それで通した方が色々と面倒がないかもしれないなかった。

いっそ、オルファーナを「死病を抑える代わりに幼生固定の呪いを齎した、一子相伝の召喚獣」と言う位置付けにしても良いかもしれない。

☒ それなら、オルファーナが俺に契約の名の下に憑いていると言う名目で、外に出す事も可能だからな。

まあ……どちらにしても、冒険者組合での反応次第といった所か。

ただ、その場合だとオルファーナは使役獣枠で登録する必要がある可能性が高いから、あまり嬉しくないんだよなあ……

俺にとって可愛い娘のオルファーナを、何が悲しくて使役獣として登録しなきゃいけないんだよ……

☒

だが、やはり娘の様なオルファーナが他人から使役獣扱いされるのは、どうしてもウルベルト的に納得がいかないのです、可能な限り表に出すつもりはないのだが。

その辺りは、パンドラズ・アクターも分かっているらしく、無理にそれを勧めて来ない。

ウルベルトとしては、そんな小さな気遣いが出来るパンドラズ・アクターと一緒に、本当に気が楽だった。

本当に、まるでずっと一緒に旅をしているかのように、気心知れた扱いをしながらそれでいてさりげなく気を遣う所など、本当に彼の創造主であるモモンガそっくりだと言っているんじゃないだろうか？

つらつらとそんな事を考えつつ、ウルベルト達は漸く目的地だった次の街へと到達した。

街に入る為には、どうしても入り口の検問で検査を受けて通行料を払う必要がある。

冒険者であるパンドラズ・アクターは、通教両その他検問を通る時も面倒な検査は不要だが、まだ何も登録していないウルベルトは街に入るだけでお金が掛かるし、色々と検問で確認される案件も多い。

特に、身に着けている装備等のアイテムが一般の物よりも遥かに上等な聖遺物級だと知られたら、色々と煩い気がするのだ。

なので、ウルベルトが身に着けている装備には全て偽装工作済みで、第三位階が使えただけでも凄腕と認識されるこの世界の魔法詠唱者では、早々簡単にそれを見抜く事が出来ないよう仕様になっている。

普通に、少しだけ上質な服程度に認識されるように、だ。

この辺りの細工は、ウルベルトが盗賊の癖で色々と検証をしている間に、パンドラズ・アクターが素早く済ませてくれたものだったりする。

本当に、細かな気配りまで出来る頼りがいがある相手と一緒に、本当に助かったというのがウルベルトの偽らざる本音だった。

パンドラズ・アクターが、事前に色々と考えた上でウルベルトの装備に対してこの処置をしてくれたお陰で、街へ入る際の検問もそれ程問題なく済ませる事が出来るだろう。

こういう細工に関して、少なくともウルベルトが自分でするよりも、パンドラズ・アクターに任せておいた方が間違いない事は、今までの経験で判っているのだ。

そして、予想通りそれ程面倒な事もなく検問を通る事が出来た。

パンドラズ・アクター自身は、既に冒険者「サーティ・ルウ」として登録していたし、

前の街では「アイテム作成能力で自分の装備を自作した」と言う事を口にしてしまっているのです、どうやら冒険者プレートの方にそれとなく情報が記載されていたらしい。

前に街では、色々と冒険者組合を始めとして嫌な思いでしかないと言っていたが、冒険者組合側としては生産職系能力もある冒険者はとても貴重なのだ。

うっかり、何も情報を登録せずに下手に装備関連で揉めて本当にサクツと他の国へ行かれてしまったのは、この国の状況的に考えてもかなり困るので、その情報を載せる事で検問での無駄な問答を回避出来る様に手配をしたのだろう。

冒険者登録の前に、対応のミスで悪い印象しか与えていないのだから、当然の判断だった。

「……思っていた以上に、今回はスムーズに検問を通れましたので、このままルベル様の冒険者登録する為に冒険者組合へ向かうべきだと思いますが……」

丁度昼下がりと言った時間ですし、街に居る間に登録を済ませればいいのですから、今日は冒険者登録するのは止めておいて、一先ず宿を取りに向かいますか？」

パンドラズ・アクターが呼んだ「ルベル」と言うのは、俺が冒険者として登録する為に考えた「ルベル・レン・オール」と言う偽名だ。

流石に、「ウルベルト・アレイン・オードル」と名乗る訳にはいかないからな。

名前の一部を使って、即興的に考えた名前ではあるが、それ程悪くない名前だと思う。

他にも、幾つか偽名の候補はあったのだが、出来るだけ響きが似ている名前の方が呼ばれた時に反応しそびれる事が少ないというのが、この名前にした理由だった。

自分の名前なのに、呼ばれて反応出来ない和不審がられる可能性があるからな。

とにかく、今の自分たちの状況を考えれば、出来るだけ怪しまれる行動をしない方が良いと言う事は、ウルベルト自身もよく理解していた。

それを言うなら、冒険者としての登録だつてこの外見年齢でするのは色々問題はあるといふ突つ込みが着そうな気もするが、最低でも第三位階を使用することを前提に置いている都合上、冒険者登録をしてしまった方が色々話が早いのだ。

この世界では、魔法詠唱者として第三位階を複数使える時点で、白金級の能力があると思倣されるといふ話もある事を考えると、冒険者として登録しておいた方が色々な面で面倒がないと判断したのである。

それなら、いつそ魔術師協会に登録すればと良いのではないかと考えるかもしれないが、意外とそちらの方が面倒な気がするのだ。

最低でも、第三位階を複数使える様な魔法詠唱者は、どこの国でも希少な存在の筈だから、下手に魔術師組合に登録した場合、その街から動く事が出来なく可能性がある。

あくまでも、冒険者として登録する理由が旅を楽しむ為と言うものである以上、街

に拘束される様な組織に所属するのは本末転倒だと言っている。

だから、例え能力的には初球の銅級として扱われるとしても、冒険者の方が色々都合が良いのだ。

そんな事をつらつらと考えつつ、ウルベルトはパンドラズ・アクターの方を見た。

時間的に、まだ昼を過ぎた辺りだろうこの時間帯から、宿屋を撮って休憩する必要がある程、体力がない訳じゃない。

どちらかと言うと、人酔いの症状を見せたというパンドラズ・アクターの方こそ休むべきなのじゃないかと思うのだが、本人の様子をこうして目視で確認してみても至って元気で、どう見ても人酔いを起こしている様子はなかった。

多分、今回はウルベルトと一緒に居る事によって、精神的に安定している事が症状を引き起こすのを留めているのだろう。

そんな風に、現状に関してぎっくりとあたりを付けると、ウルベルトはゆっくりと口を開いた。

「あー……そうだな。

まだお昼を食べてない事だし、どこか美味しそうな屋台で買ったものを食べて昼を簡単に済ませたら、冒険者組合へ登録しに行こうか。

ついでに、簡単に済ませられる依頼が無いか確認しておきたいし、情報収集だってし

ておきたいだろ？

そう考えるなら、やっぱり冒険者組合に顔を出して俺の冒険者登録とか面倒な手続きをするとか言うのは、早いうちに済ませておいた方が良い。

サティが、まずは一旦休みたいって言うなら、宿屋を取る方を選ぶけど……」

「どうする？」と、ウルベルトが首を傾げて問えば、にこりと笑いながらパンドラズ・アクターは口を開いた。

「ルベル様さえ良ければ、おっしやった予定で動けば宜しいかと思えます。

これから先の路銀の事を考えれば、何かこの街でそれなりに収入がありそうな仕事をする必要があるのは、間違いありませんからね。」

実際には、盗賊の噂で手に入れた臨時収入があるので、この街で無理に稼ぐ必要はない。
い。

しかし、だ。

余り、冒険者としての仕事を請け負わないままでは、後が面倒な事になりそうな心配がしているので、適当な仕事を探そうと考えたのである。

とは言え、銅級では碌な仕事もないというのがパンドラズ・アクターの見解だったから、別の方法で稼ぐ手段を考えるべきかもしれないが。

「まあ……余り目ぼしい仕事が無ければ、お前が街角に立って歌うというのも一つの手

だとは思うけどな。

それこそ、吟遊詩人としての本領発揮だろう？」

くすくすと笑いながらそう告げると、パンドラズ・アクターはどこか嬉しそうな笑みを浮かべながら頷いた。

「どうやら、言葉の中に含まれていた「演技者として、それ位は出来るだろう？」と言う、こちらの意図を理解してくれたらしい。

多分、パンドラズ・アクターにとつて一番の得意分野である演技者としての技能の一つを使い、街角で叙事詩を歌い上げる事で金銭を得るとするのは、それ程抵抗を覚えな
い行為なのだろう。

もちろん、一番その腕前を披露したいのは自分達に……いや、パンドラズ・アクターの創造主であるモモンガに対してなのだろうが、こればかりはこの場にモモンガ本人がない以上仕方がない。

最初に訪れた村で、既に吟遊詩人として人前で叙事詩を披露しているのも、それで金銭を稼ぐことに抵抗がない理由の一つなのだろう。

とにかく、後方支援が受けられる状態ではないのだから、きつちり稼ぎを得る手段として「街に寄ったら叙事詩を歌う」という方法を確立しておくのは、決して悪い話ではなかった。

もしかしたら、自分達とは違うルートで旅する者たちから、自分達の話がそれぞれの街へ広がる事で、それなりに稼ぎを得られる状態になるかもしれない。

そう言う意味でも、どちらかと言うと人が多そうなのこの街でパンドラズ・アクターが歌うのは、本当に悪くない話だった。

「では、まずは冒険者組合の場所を誰かに尋ねて向かいましょう。

本当に、丁度良い感じの仕事がないようでしたら、街角のどこで歌えばいいのか組合の方に尋ねるのも一つの手だと思いますし。」

そう言うのと、パンドラズ・アクターはウルベルトに手を差し伸べてきた。

予想より、活気があるこの街は人も多く、小さなウルベルトが人混みに紛れて逸れてしまう事を防ぐためだろうが、本音を言えばかなり恥ずかしい。

とは言っても、この外見では他人から変な目で見られる事もないだろうし、状況的に仕方がないと思い直してウルベルトはその手を取ったのだった。

そうして、街の人に尋ねながら訪れた冒険者組合だったのだが……やはり、ウルベルトが冒険者登録を言った途端、割と奇異の目を向けられる事になった。

一応、冒険者組合の受付の女性に尋ねた限りでは、ウルベルトよりももう少しだけ年齢が上の十歳くらいの子供ならば、冒険者として登録した記録もあるそうなのだが、

流石に五歳児の外見での登録と言うのはなかったらしい。

その為、対応に困った受付の女性がどう対応するべきか上司に確認しに行っている間に、周囲からかなり奇異な目を向けられたのだ。

幾ら、その経歴を問われない冒険者であったとしても、やはり幼過ぎる子供が相手では依頼人への信頼問題に関わると言いたいのだろう。

流石に、子供相手に大人げないという意識も働くから、奇異な視線を向けられるだけで誰からも直接何も言われないが、その視線こそがウルベルトの存在に対する不満を十二分に語っていた、

ウルベルトはもちろん、本来ならばウルベルトにこんな視線が向けられているという事実だけで暴れてもおかしくない筈のパンドラズ・アクターも、その視線を綺麗に無視している。

元々、他の冒険者から向けられるだろうこの反応は二人にとって想定内であり、直接手を出されなければ無視する方向で話し合えば済んでいたから、普通に気にする事なく受付の女性が戻って来るのを待つ事が出来ているのだ。

こういう部分も、冷静な判断が出来るパンドラズ・アクターで良かったと、本気で思う。

多分、他のNPC達が一緒だったとしたら、ウルベルトに対して嘲りや様々な負の感

情を見せているだけで、この場に居る面々はただでは済まない可能性の方が高かった。もちろん、ウルベルトによる制止あれば事を荒立てずに済ませるだろうが、それだけで表向きだけ。

ウルベルトの予想では、いずれ召喚したモンスターなどを利用して、この場に居る冒険者たちが依頼に失敗したように見せかけて殺す可能性はかなり高かった。

元々、人間種に対して彼らは幾らでも無慈悲で残酷になれる存在なのだから、当然の話だろう。

出来るだけ、隠密活動をしつつナザリックを探したいこの状況では、そんな面々が一緒では色々面倒な事になる状況しか思い浮かばないが、現状では関係ない事なのであまり考えないようにして、だ。

ひとまず、こちら側としては面倒な話に進展しない内に、出来るだけサクサクと冒険者登録を済ませてしまいたかった。

その為なら、ちょっと位の實力の披露はしても構わないと考えている。

まあ、もし仮に實力を見せる事になったとしても、実際には本来よりも威力を落とした第三位階魔法を幾つか使う程度で納めるつもりだが。

とにかく、冒険者として登録する為に必要な行動を選択するにしても、その手続きをしてくれる組合の人間が来なければ話にならない。

どうも、お役所仕事に手間が掛かるのはこの世界も変わらないのだと思いつつ、ウルベルトが大人しくパンドラズ・アクターの横で待っていると、外へ繋がる扉が開き大柄の男達が数人連なって入ってきた。

多分、依頼を終えて戻ってきた冒険者チームの面々なのだろう。

この街まで来る間に、それこそ何度も戦闘をしてきたのか、彼らが纏っている空気はどこか殺気混じりで。

正直言つて、かなり不快な雰囲気を漂わせている相手に関わるつもりなど、パンドラズ・アクターにもウルベルト自身にも欠片も存在していなかった。

しかし、だ。

そう考えていたのは、あくまでもこちら側だけだったらしい。

むしろ、ウルベルトの姿を見た途端、まるで☒獲物を見付けた☒と言わんばかりに目を細めている。

ウルベルトにとって、あの手の目をした相手など「ユグドラシル」でも「リアル」でも腐る程見ていただけに、この先相手が起こすだろう面倒な行動など、それこそ簡単に予想出来てしまっていた。

☒ あー……、こういう手合いは、本当に厄介なんだよな。

相手の実力が、これから行う行動に対して伴っているなら、まあ☒そう言う主張もあ

るだろう☒って流せるだろうけど……相手は、どう高く見積もってもレベル十五以下しかない。

胸のプレートも白金だから、どうやら相手の推定レベルは間違つてなさそうだ。

こいつら全体の雰囲気的に見て、冒険者としての依頼こそ失敗していないが、予想外の被害が出て苛立っているといった所か。

苛立ってたところに、冒険者組合の中に幼い子供なんて不似合いなモンを見付けたから、丁度良い八つ当たりの対象がいたと、そう考えた訳だ？ ☒

ほぼ間違いない、こちらに絡んでくるだろうと予想が付いて、ウルベルトは心の中で大きくため息を吐いた。

ここに居るのが、パンドラズ・アクターで良かったと、本当に思わずにはいられない。確実に、他のNPCでは目の前の相手を殺してしまう未来しか思い付かないからだ。

いや、今のパンドラズ・アクターの身に纏う気配も、結構ヤバイ気がするのには気のせい……じゃないな。

多分、ウルベルトが本来の能力を維持した状態で彼自身も本来のレベルであれば、もう少し余裕があったかも知れないのだが、今はそうじゃない。

今の自分達は、全面的にバックアップしてくれる拠点もなく、頼れるのは召喚獣のオルファーナまで含めても三人だけ。

この状況で、普段よりも余計に彼の警戒心が上がってしまったとしても仕方ない事など、ウルベルトもちゃんと理解していた。

とは言え、こういう手合いの相手はパンドラズ・アクターではなく、ウルベルト自身がすべきだろう。

少なくとも、つい数日前までナザリックのNPCの中でも特に宝物殿と言う箱入りだった彼に任せるよりも、ユグドラシルでもリアルでもこういう手合いを相手した事がある自分の方が、冷静に対応出来るからだ。

そんな事をつらつら考えつつ、相手がちよつかいを出して来ないのが一番良いと思った瞬間、あろう事か大男が数人でこちらの前に並ぶと、にやにやと笑いながら頭の前から爪先まで舐めるように見てから屈み込む。

その不躰な視線に、ちよつとした苛立ちをウルベルトが感じた瞬間、目の前の男はある意味言つてはならない言葉を口にした。

「なあ、そこにちよつこいお嬢ちゃんは、こんな所で迷子でちゆか？

もしパパともママがいなくなっちゃったんなら、お兄ちゃんたちがお世話しつつ遊んであげるよお？

お兄ちゃんのお腹の上で、お馬さんごっことかどう？

そつちのお嬢ちゃん？ 僕？ も、そつちのお嬢ちゃんと一緒に俺達が遊んでやるから、

大人しくついてこいよ。

なあと、この街じゃトップクラスの白金級冒険者チーム「ブラックサンダー」が、わざわざお子様のお前らの面倒見てやるって言ってるんだ。

……断つたりしねえよな？」

中の一人が、そんな風に猫なで声で声を掛ければ、周囲からげらげらと笑い声が上がリヤジが飛ぶ。

元々、冒険者になるものは気の荒い者が多いらしいから、この場に居る冒険者にとつてこの男達が取った行動は、丁度良い暇潰しの見世物的な感覚で見られているのだろう。

まだ、幼さが残る外見のパンドラズ・アクターが冒険者を名乗るだけじゃなく、どう見ても幼児にしか見えないウルベルトが冒険者になろうとしている事自体、彼らにとつて気に入らなかったのかもしれない。

だから、こんな風に絡む男達にどう対処するのかを見たかったのだろうし、もし本当にこの大男たちに弄ばれる事になったとしても、自業自得だと笑って済ませるつもりなのだろう。

どうやら、大男たちはそれなりに有名な冒険者集団で、そのメンバー全員と言う大人数でこちらが逃げられない様に取り囲みつつ、名前を出して立場でも逆らえないようす

るつもりなんだろうが……うん、こいつら馬鹿だ。

そもそも、小さな外見の子供がこんな所にいるって事は、普通に考えれば依頼人の子供だろう。

ウルベルトが着ている服は、レベルを落としてもここに居る面々よりも遥かに質が良いものをきているし、身綺麗な子供がここに居る時点でそれ相応の良家の子供とみるのが、この世界での当たり前前の思考の筈。

まあ、いた場所が冒険者の登録カウンターの前だった事から、依頼人だと判断しなかったのかもしれないが、それにしても短絡的だ。

チームの中には、ある程度の目利きが出来そうな盗賊の職を持つメンバーも居そうなのに、こっちの装備の価値とそれを所有出来る立場とか推察する事が出来ないだろうか？

もしかしたら、その辺りも全部分かっていて、金持ちそうな子供をいたぶりつつ金品を巻き上げるとかそんな下種な事を考えているのだとしたら……相手が悪かったな、こいつら。

先程から、この男達の発言やからかいの声を耳にして、心の底から不快そうな気配を漂わせているパンドラズ・アクターを抑えると、ウルベルトは目の前に屈み込んだ男の前に一歩足を進め。

次の瞬間、電撃を纏わせた指をその鼻面に突き付けた。

「……全く、相手の実力も判らない癖に、喧嘩を売るとは上等ですね。

この街で、トップクラスと自称するあなたたち白金級冒険者がこの実力なら、それよりも下だという他の方々がどの程度なのか、大体想像が出来ます。

その程度の実力で、この俺に喧嘩を売るなんて……身の程を知るべきでしょう。」

あくまでも、無詠唱で形成した電撃そのものは放つ事なく、指先をスリりと相手の鼻へと近付けてやれば、電撃から周囲へと放たれる放電が鼻の頭を掠めたのか、思い切り目の前から後ろへと慌てて逃げる。

その様子を平然と眺めながら、ウルベルトは電撃を纏ったままの指で空をなぞり、ゆっくりと放電による軌跡を残しながら美しい魔法陣を手で描いていく。

ウルベルトの指の動きに合わせ、周囲が思わず後退っていくのを視界に収めながら、にっこりと笑って見せ。

「魔法詠唱者が、見た目通りの年齢だと思うのは、かなり早計だと思いますよ？

我々が極めようとする、魔術の深淵とは実に奥深いもの。

時として、誰もが想像出来ない様な要因によって姿と年齢が合わない事など、幾らでもあり得る話なのですから。」

「分かりますか？」と念を押すように言えば、この外見で詠唱もせず第三位階魔法「電

撃」を指先に構築している事を理解したらしい、冒険者チーム「ブラックサンダー」の面々は蒼白になりながらウルベルト達から距離を取っていく。

まるで、子供の遊びの様に無詠唱で第三位階を扱うさまを見て、漸く自分達がちよつかいを出した相手が単なる子供ではなく、「手を出してはいけない存在」だと認識したの
だろう。

今まで、こちらの外見を見ただけで侮っていたのだろう、冒険者組合の中で屯っていた冒険者たちまで息を飲む音が聞こえた。

そんな彼らの事など気にする事なく、ウルベルトはスツと視線を後方にあるカウンターへと向ける。

「……さて、そこで黙ったままこちらの様子を窺っているだろう冒険者組合の方、この場合はどちらが悪い事になりますか？

俺としては、大した実力もない上に相手の実力も判らず、自分達の勝手な思惑でちよつかいを出してきた相手を軽くないなした程度の認識ですが……問題、ありましたかね。」

ウルベルトが、「そこで止めもせずに見ていた事に気付いているぞ」と言わんばかりに笑い掛ければ、カウンターの奥から出て来たのは自分たちの周囲にいる連中よりも温和そうで、それでいて確実に格上だと判る様な初老に入る位の男性だった。

何処かバツが悪そうな様子のその人物は、自分の頭を手で軽く頭を掻きまわした後、一つ溜め息を溢し。

「……いや、今回の事に関して言うなら、君たち側は自衛しただけだろう。

君の言う通り、相手の実力を見極めもせずになちよっかいを出した、彼ら【ブラックサンダー】の方が悪いと言っている。

絡まれて困っている君たちに対して、冒険者組合の組合長として助け船を出さずに済まなかった。

君が本当に、冒険者として登録しても大丈夫なのか確認する為とは言え、本当に申し訳ない。

本来なら、この場ではなくギルド長たる私の部屋で詳しい話をするべきなんだろうが……今回ばかりは密室で話す方が、君たちがまた彼らの様に侮った相手に絡まれる可能性もあるので、敢えてこの場で話させて貰う。

見た所、先程彼らを往なす為に君が使っていたのは第三位階魔法【電撃】だと思っただが……間違いないかね？」

ギルド長を名乗る初老の男性の質問に、ウルベルトが頷いて同意を示した途端、周囲からどよめきの声が上がったのだった。

パンドラ、吟遊詩人として街角で謡う（ウルベルト視点）

そこから先は、割と話が早かった。

冒険者組合の組合長の指示で、組合の裏手にある試験場での魔法の試し打ちを披露する事によって、無事にウルベルトは白金級に登録され、同じ様に試し打ちをして見せたパンドラズ・アクターも白金級へとランクアップする事が出来たのである。

ただ、どうして最初の冒険者組合で魔法を披露しなかったのかと、パンドラズ・アクターは問われる事になったのだが、それに対して

「前の街で登録する際、色々あつてどうも体調不良気味だった上に苛立つ事があつて精神的に不安定でしたので、下手に魔法を使い暴走させてしまうと迷惑を掛けると判断しました。」

それに、切り札の一つとして魔法が使える事を申請しなくても、問題はないとも考えましたし。」

と、さつくりと答えて済ませてしまっている辺り、色々と思う部分があるのだろう。

合流した時にも話していたが、パンドラズ・アクターが冒険者登録をした街の冒険者組合は、結構面倒な部類だったらしいからな。

そう考えると、先程の冒険者チームに絡まれた事に関しては面倒ではあったものの、その後の組合長との話がサクサク進んだ分、良かったと考えるべきなのだろう。

少なくとも、冒険者に対して自分とパンドラズ・アクターの实力を簡単に示せた事で、向こうから実力に対して何か難癖を付けるのは難しくなった筈。

もちろん、急に台頭してきた冒険者を警戒する者もいるかもしれないが、この街に残らず旅を続ける相手と解れば、自分達のライバルにならない事も直ぐに理解出来る筈だ。

それさえ理解すれば、下手にちよつかいを掛けた方が自分達の評価を下げるだけと直ぐに気付けるだろう。

まあ、そう言う頭の良い相手ばかりが冒険者とは言わないが、相手から喧嘩を売られる前にこの街を出て行けば良い。

この街での目的は、ウルベルトの冒険者登録が出来た既にほぼ達成しているのだから、無理にこの街に居座る必要はないのだ。

ただ、全く収入がないまま旅を続けているとおかしく思われるだろうと判断したからこそ、出来れば人目に解る様にちよつと小金を稼いでおきたいと言う位しか、この街でやっておきたい事もない。

むしろ、面倒事に巻き込まれる可能性があるならば、ウルベルト的にはサクサクこの

街を出ていつでも構わないと思っただけだ。

そうは思うのだが、街を出立するにはちよつとばかり時間的に考えても遅い時間帯になつてしまつていた。

そろそろ、日が傾こうという時間帯にわざわざ街を出ると言うのは、【ビーストマンの侵略】を受けているこの国では基本的にありえないと考えるべきだろう。

昨夜立ち寄った野营地があるのだから、旅人や商隊が街の外での野宿をする事はもちろんあるだろうが、それでも日があるうちに安全な街に辿り着いておきながら、それを無理に出立するという選択肢は「狂気の沙汰」と思われる可能性の方が高かつた。

なので、無理を押し通して街を出るのでも、冒険者としての依頼を受けるのでもなく、この街で一つしておける事はないかと考えていたウルベルトの横で、パンドラズ・アクターが受け取った白金級のプレートと銅級のプレートを交換しながら、受付に声を掛ける。

「あの……この時間帯から依頼を受けるのは、街に来たばかりで何も知らない私達には少し難しいので、出来れば代わりに路銀を稼ぐ為に吟遊詩人が歌つてもいい場所とか、どこありませんかね？」

これでも、私の本職は吟遊詩人なので、出来ればそちらの腕を鈍らせない為にもご迷惑にならず、更に稼げる状態になると嬉しいのですが。」

控えめな様子で問うパンドラズ・アクターに、ギルドの受付嬢は少し考える素振りをした後、ざっくりと街の案内図の様なものを取り出した。

それを、パンドラズ・アクターのいるカウンターテーブルの上に置くと、簡単に説明し始める。

「この街では、吟遊詩人が歌や叙事詩を披露出来る場所は少ないですね。

ですが、商人たちが露店を広げる市場の端寄り……そう、この広場のこの辺りを役場で正式に借り受けて、そこで商品を売る代わりに歌を歌う言う形をとられれば、誰からも文句は言われないかともいます。

きちんと、正式な手続きで場所を借り受けている訳ですから、むしろそこで文句を言ってくる相手がいたとすれば、それだけあなたの吟遊詩人としての力量が不足していて、周囲を不快にさせた時だけだと思われまます。

ご自身の技量に自信がないとおっしゃるのなら、あまりお勧めしない方法ではありませんが……最初から路銀を稼ぐ為とおっしゃっていた訳ですし、その方法で問題ないのではないかと思われまます。」

この街の地図で広場の場所や、役場の場所などを示しながら説明してくれた受付嬢の提案は、割と悪くない話だった。

場所を借りる為には、役場で市場の空いている場所を確認して、その場所代を払う

必要があるものの、それは思っていたよりも高くない。

場所代を高くして、一時的に街の収入を上げるよりも、露店を開く者がいなくなる方が街の住人の生活に影響する事から、多少は安価にしているのだろう。

そんな事を思いつつ、ウルベルトが細かな事を聞くパンドラズ・アクターの様子をのんびりと見守っていたら、どうやらある程度まで話を聞き出せたらしい。

笑顔を浮かべたまま、パンドラズ・アクターがこちらを向いたので、もしかしたら予想以上にいい話が聞けたのかも知れなかった。

「お待たせいたしました、ルベル様。

それでは、まずは役場へと向かいましょうか。

歌を披露するにも、きちんと場所を借り受けずに勝手に歌った場合、それで得た収入は役人に一旦全部没収され、半分以下しか返して貰えないとお話でしたので、損しかしませんからね。

これは、酒場などで歌う場合も似た事になるそうです。

酒場の場合は、店主の許可を得てからなら問題ないのですが、それ以外の場合だとほぼ全額没収される事になるそうなので、特に要注意だと言っているでしょう。

まあ、これはどこの街でも変わらないとお話でしたので、これから先にも十分役立てられる情報ですし、良い事を聞いたと思っております。」

ニコニコと笑うパンドラズ・アクターの様子に、他にも色々聞き出せたんだろうなと思いつつ、この場で声に出して直接聞いたりはしない。

誰に聞かれているかもわからない状況で、下手にこの手の話を振る方が危険なのはウルベルトも重々承知しているからだ。

なので、サクッと使用したのは伝言である。

『……それで、何か有用な情報は得られたのか？』

ウルベルトが、小さな外見を利用して自分からパンドラズ・アクターへと手を伸ばしその手を握れば、ちよつとだけ驚いた様な反応を僅かに返しつつ、それでも何食わぬ顔をしてそのまま冒険者組合の中を外へ向けて移動していく。

何気ない素振りや、周囲に対して気付かれない様に額に手を当てずに伝言をやり取りする為、わざと手を握る事で接触したのだが、こちらの意図をパンドラズ・アクターは気付いてくれたらしい。

握り返した手は、ちよつとだけ困惑した様子であったものの、きちんとした返事が返つて来たのだから流石だと思う。

『そうですね……いくつかありますが、特に注目するべきは街の構造でしょうか。』

先程の受付嬢から受けた説明を纏めると、この辺りにある街の構造が似ている事が判りました。

この辺りは、特にビーストマンの国に隣接している都合上、彼らからの襲撃に備える為にもどうしてもそうならざるを得ないのだとか。

それ以外にも、我々の様な移動が多い冒険者が利用し易い手頃な宿の場所や、この街で手に入る諸々の品々に関する説明も簡単にしていただけました。

どうやら、この近辺は鉱石系が特に産出される地域らしく、それらを我々が持つユグドラシル産の物と比較する事で、現地の素材から作れる装備やアイテムなどの推測が出来るかと。

他にも、この国で一般的な冒険者のランクや使える魔法などの種類も聞き出せましたので、今後人前で魔法等を使用する際の参考に出来ると思います。

詳しい事は、宿で部屋を取った後ですべてお話ししますので、その際に今後の行動への修正を加えられても宜しいのではないのでしょうか？』

パンドラズ・アクターからの返事は、この街で過ごすだけじゃなくこれから行く先々でも使えるような情報が得られたと言う事だった。

割と嬉しいのが、この街の近辺で取れるという鉱石系だろうか？

一応、ユグドラシル産の遺産級の杖を幾つか所持しているし、パンドラズ・アクター自身もそれなりの装備を所持してはいるが、今までの状況から現地のレベルが低そうな相手に対して、素材などの関係で整備が難しくなりそうな貴重な装備を使いたいとは、

とても思えなかった。

そう言う点では、現地の素材でそれなりの装備が作り出せるのなら、そちらに一時的に持ち替える事で、貴重な装備をいざという時の切り札として取っておく事が出来るだろう。

もちろん、街の中にあるだろう武器屋等を見て回って、それなりに見るものがあればそちらを使用して構わないとは考えているものの、現地産の装備で使えそうな物があるとはとても思えなかった。

元々、装備する現地人のレベルが低いことから、それに合わせて装備や武器のレベルが低くなるのは仕方がないのかもしれないが。

どちらにせよ、まずはパンドラズ・アクターに稼いで貰ってからじゃないと、状況的に冒険者組合で話した内容と話が食い違うので、今日は露店を冷やかす程度しか出来ないだろうと思いつつ、伝言でパンドラの問いに対する同意の返事をしたのだった。

冒険者組合で教えられた通り、役場で露店が並ぶ広場の一角を無事に借り受ける事が出来た。パンドラズ・アクターと共に、ウルベルトはその場所へとゆつくりと歩いていく。

この時間帯では、もしかしたら借りれる場所はないのではないかと、そんな考えがチラリと頭をよぎったのだが……役場ですんなりと話を付いた理由は、昔に比べて露店を

開く者が少なくなってきたからだった。

どうやら、この辺りにもピーストマンの影がちらつき始めているらしく、今まで定期的に露店を開いていた商人が姿を見せなくなるなんて事も、ごく普通にあるらしい。

更に、最近では盗賊も出没しているという噂を聞いた瞬間、ウルベルトの頭の中に半日ほど前に自分達が殲滅した盗賊団の存在が過る。

もしかしたら、彼らがあの場所を根城にした事によって、この街に出入り出来る商隊が減ってしまった、こうして露店を開く場所に空気が出来たのかもしれない。

そう、漠然と思いはしたものの、その盗賊たちがもう存在していないなどとご丁寧に教えてやるつもりは、ウルベルトには欠片も存在していなかった。

下手に冒険者組合側に教えて、どうしてその事を知っているのか理由を聞かれても、正直困るからだ。

多分、この辺りをかなり荒していただろうあの盗賊たちを全部二人で始末したと言っても、ほぼ確実に信じて貰うのは難しいだろう。

つつい、自分達を基準にして物事を考えがちだが、先程冒険者組合で絡んできた奴らや冒険者組合の組合長程度の存在が、この街の冒険者のトップクラスだと想定すると、それより若干下がるレベルだと推測しているこの街を守る兵士たちで、漸く何とか対処可能なレベルと数だった。

だからこそ、あの盗賊の罅にはあれだけのモノがあつたのだろうから。

そう考えると、ここは間違いなく沈黙を守るべきだろう。

何より、あの盗賊の罅で色々と実験してそのまま放置という訳にはいかなかった為、パンドラズ・アクターと二人で可能な限りの盗賊がこの地を去つた様な隠蔽工作をしてきたのに、自分からその意味を無くす様な発言をするなど、愚か者のする事だと言つていい。

少なくとも、ウルベルトは自分から面倒事を招くつもりなど、欠片もするつもりはなかった。

多分、こちらの考えなどパンドラズ・アクターも察しているのだろう。

サクサク、噂を聞かせてくれた相手に礼を言おうと、借り受けた場所に簡単に敷物を引いて荷を置く場所を作り、更に小さめの箱を自分と敷地の境界線の間で幾つか等間隔で置いてから、今度は自分の準備に入る。

とは言つても、それまで着ていたマントと上着を脱ぎ、ベストを着てネクタイを締めた所で、腰に吟遊詩人として歌う際に使用する衣装の為に用意していた大判のシヨールを巻き付けてだけだが。

どんな準備をするのか、ちよつとだけ興味深げに見ていた視線に気付いたのか、パンドラズ・アクターは小さく首を竦めた。

「そんなに見つめられても、それ程特別な装いをする訳ではないのですが。流石に、こんな人前ですべてを着替える訳にはいきませんし。」

今の状況では、メイン衣装は無理なのでこうしてそれ以外の装飾品を纏う事で、それなりに吟遊詩人として見られる格好をする程度しか出来ませんから。」

そう言いながらも、鞆から弾き語りをする為のリユートを取り出し、最後に羽根飾りのついた大きく膨らんだ鍔無しの帽子を取り出してゆったりと被る。

本人的には、きちんと準備している吟遊詩人としての装束を切れない事に不満がある様だが、十二分に格好は付いていると、ウルベルトには思えた。

それ位、彼の様子はいつの間にか吟遊詩人としてのものへと切り替わっているらしい。

何度かリユートを鳴らし、弦を締めたりして音に調整をした後、パンドラズ・アクターは立ち上がった。

「それでは、そろそろ始めましょうか。」

ルベル様は、私が歌っている間はどうぞされますか？

もし、お一人で露店を見て回られるのであれば、こちらをお持ち下さいませ。」

そう言つて、そつと差し出されたのは小さな銀貨と銅貨の入った小袋である。

パンドラズ・アクターは、ウルベルトが手持ちの金を持っていない事に気付いて、使つ

でも良い金を渡してくれたのだろう。

こう言う気配りも、抜かりなく出来るのもモモンガさん譲りなのだ、本当にそう思えた。

差し出された小袋を受け取ると、素早く懐にしまいながら少し考える。

このまま、露店を見て回るのも悪くないと思うが、出来ればパンドラズ・アクターがどんな叙事詩を語るつもりなのか聞いてみたい気がするのだ。

なので、ある意味では特等席とも言えるべきパンドラズ・アクターが荷を置いた場所に座ると、そこから彼を見上げつつにつこりと笑いかける。

「せっかくだからな、俺もここで聴かせて貰うさ。

サティが、ここでどんな叙事詩を披露してくれるのか、凄く気になるし。」

そう告げてやれば、パンドラズ・アクターはとても嬉しそうな笑みを零し。

次の瞬間、手にしていたリユートをゆっくりと爪弾き始めた。

ポロポロと柔らかく音を爪弾きつつ、緩やかに周囲へと視線を巡らせる。

先程から、こちらの様子を窺っていた市場の客たちも、リユートの音に惹かれるかの様に視線をこちらへ向けてきたのを察したのか、奏でる音を大きくして更に彼らの視線を引き込んでいく。

周囲の視線を集め終えたと思った所で、パンドラズ・アクターはゆっくりと口を開い

た。

彼が語れる、最大の叙事詩を歌い上げる為に。

☒ それははるか遠き日の物語

やがて、誰もが知らぬものが居ない程、世に名を轟かせるだろう偉大なる人々の物

語

その、始まりはく 名もなき一人の青年の旅立ち

いまだ己の運命を何も知らぬ、穏やかで優しい青年

ただ一つ、まだ目覚めたばかりの魔法の才だけ持つ優しい青年だった

彼は、己の運命に出会うく

始まりの旅路、まだ力なき青年

己の欲に飲まれ、力に溺れた愚かな者たちに襲われ

命を奪われ掛けた所を、聖銀の騎士に救われる

その出会いこそ始まり、偉大な旅路の始まり

かの騎士に導かれ、青年は自分を救いし騎士の仲間へと加わった

そうして、導かれるまま八人の仲間と出会い

九人目となった青年は、彼らと共に当て所無き旅に出るく

☒ 丁寧にリユートを爪弾きながら、高らかにその一節を歌い上げるパンドラズ・アク

ターの声に聞き入りながら、ウルベルトはモモンガから聞かされた話を振り返る。

今の一節は、それこそギルメンなら誰もが知るモモンガとたつちの出会いの場面だ。実際の種族とか、その辺りを完全に伏せて叙事詩として歌い上げるのなら、確かにこんな感じになるのだろう。

ちよつとだけ納得しつつ、スツと視線を巡らせて周囲を見れば、すっかりパンドラズ・アクターの語りに引き込まれている様子だった。

元々、役者として設定されているだけあつて、張りがあり良く通る声だからこそ、余計に周囲に対して訴えかけるものがあるのだろう。

そんな事を思いながらも、更に語られるだろう続きへと意識を向けた。

☒ 青年が仲間との旅路の先に出会ったのは、朗らかで明るい弓兵

明るい金の髪を靡かせ、弓を射れば外す事はない

後に偉大なる弓の名手として、誰もが知る程にその名を轟かせるが

今は、ただのお調子者♪

青年と気が合う彼が仲間に加わり、仲間の旅路は賑やかになる

次に彼らが出会우는、恐ろしくも美しい魔法を極めた悪を嘯く魔法詠唱者

幾重にも重ねて放つその技は、誰もが目を見張る美しさ

己の中にある美学、譲れぬ思いを抱いて

魔法詠唱者は、青年の中にかつての自分を見出したのか

青年は、彼に導かれる事によって己の中に眠っていた魔法の才を目覚めさせる
苦難が多い、この旅路

時に共に喜びを、時に共に痛みを分かち合い

先に出会った弓兵とかの魔法詠唱者、そして青年の間には深き友情が芽生える

共に旅路を行く者として、彼らが己に課したのは己の目指す未来の姿

お互いに競い合い、共にそれぞれの技を磨き、己にとつての一番の高みを目指して
仲良く旅路を進む度に、その三人は様々な経験を共に過ごし互いに仲良く笑い合う

♪ ☒

パンドラズ・アクターが歌い上げる内容を聞いて、思わず懐かしくて目を細める。

確かに、ほんの少しの差だったのだが、ウルベルトよりもペロロンチーノの方が先に
仲間に加わっていたし、その後にはモモンガへ魔法の使い方の講義をした事も覚えてい
る。

あの頃は、本当に色々と経験してみないと判らない事も沢山あって、みんな楽しんで
いたんだよな。

三人で、「無課金同盟」を組んだのもあの頃だった。

本当に楽しくて……あんな事にならなければ、もっと良かったのに。

そう、当時の事を振り返りウルベルトが胸の中で溜息を吐く間にも、パンドラは曲調をととも明るいものに変え、モモンガとウルベルト、ペロロンチーノの三人を中心に、克蘭の時の冒険譚を面白おかしく語っていく。

彼の語り振りは実に見事で、これを聞いて引き込まれない人間はいないだろう。

実際、既に周囲に出来た人が来は二重に三重に重なり合っていたし、今も視線の先ではパンドラズ・アクターの語りに引き込まれて、足を止めている人の姿が見えた。

明るく、楽しい口調で歌い上げられるパンドラズ・アクターの語りを聞く事で、城壁の外に広がる現実を一時的にでも忘れたいのもかもしれない。

☒ 更に仲間と共に進む旅路で、出会ったのは聖銀の騎士に連れられた美しき女戦士
彼女は、姿に似合わず確かな腕で旅の仲間一番の壁役を担う事に

守りの硬さは、他の仲間の中でも素晴らしく、その声は麗しい

彼女が、すぐに旅の仲間へと溶け込む中、明るき弓兵のみが距離を置く

青年が不審に思い、尋ねてみれば彼女は弓兵の姉なのだという

彼らが兄弟だと判った後は、何かある度に弓兵は姉にやり込められて

そうして、時折姉に泣かされる弓兵を宥める仲間は、その度にただただ苦笑い ☒

この話も、実に懐かしいものだった。

ペロロンチーノの姉であるぶくぶく茶釜は、何かと言うとアイツの事を姉の立場で

「黙れ弟」って一括してた事も多く、周囲も苦笑しか浮かべられない事も多々あったのだ。

もちろん、彼女の言動にはペロロンチーノの方にも原因があったものの、べっこべこにへこまされるアイツの相手は大変だったと言っていていいだろう。

主に、相手をしていたのはモモンガで、たまに助けていたのはウルベルトだったが。次々と語られる内容は、ギルメンやモモンガの楽しくも苦勞に満ちた冒険譚だった。

その中には、たっちと自分の意見が対立していた事なども混じっていて、正直苦笑するしかない。

確かに、あの頃のウルベルトとたっちの意見が対立すると、それはもう盛大な嫌味の応酬になっていたのは間違いないが、まさかそこまで語られるとは思っていなかったのだ。

そうして、様々な事が語られていったのだが……そろそろ終わりが近付いてきたらしい。

リユートを爪弾く指が、緩やかなものへと変わり、パンドラズ・アクターの語り口調が変わっていく。

「……そうして、同じ志を持つ沢山の仲間たちが彼らの元に集まりました。

沢山の仲間を得た彼らは、その絆を高めるべくそれまでのクランを解散し、新たにギ

ルドを立ち上げる事となったのです。

彼らは、この後も素晴らしい冒険と活躍を続けるのですが……今日、私が語る物語はここまで。

皆様、ご清聴ありがとうございました。」

リユートを奏でるのを止め、帽子を片手に取って軽く頭を下げるパンドラズ・アクターに対して、それまで周囲で聞いていた人たちは手を叩きつつ手持ちの銅貨を先にパンドラズ・アクターが置いておいた箱へ目掛けて投げ込んでいく。

中には、箱に入らずに手前や横に逸れてしまう銅貨もあったが、それでもどんどん周囲から投げ込まれていく様子を見て、ウルベルトは思わず胸の中で感嘆の声を上げてしまっていた。

あれだけの語りを聞けば、それ相応に観客となった街の人たちがその対価としての銅貨を投げ入れてくるとは思っていたが、まさかここまでの拍手と銅貨が投げ込まれるとは思っていなかったからだ。

逆に、当事者であるパンドラズ・アクターはと言えば、あちこちから投げ込まれる銅貨に対して感謝の意を示す為に何度もお辞儀をしてみせる。

その姿を見ていると、パンドラズ・アクターが実際に吟遊詩人として人前で二度目だとは、ウルベルトにはとても思えない程堂々としたものだと感じするしかない。

たった一曲歌い上げただけで、これだけの銅かが投げ込まれる状況を前にしつつ、自分の方まで飛んできた銅貨をそれとなく拾い集めてやるウルベルトだった。